

---

# 君のままに美しく

そら

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

君のままに美しく

### 【Nコード】

N4660Q

### 【作者名】

そら

### 【あらすじ】

齋賀透子が信じるのは自分自身と、自分を救ってくれたあの人とその仲間だけ。

自分の世界にはそれだけでいい。

そのはずなのに、そう単純にはいかなくて。

初めての愛と全てを一瞬で壊された透子の、ある意味、唯我独尊、修復のストーリー。

## プロローグ（前書き）

現代版です。

読んでくれたら、とても励みになります。

## プロローグ

どこまでも綺麗な雲一つない青空に、大きく両手を広げ大きく息を吸って、なんて自分を取り巻く世界は素敵なんだろうと、目に見える全てに、その存在の一つ一つに大きく感動した自分がいた。

ちょっと照れくさいけど、本当に見るもの全てが美しく感じたその日、そばを通り過ぎる友人たちに、からかわれながらも、私は急に学校側の都合で、年にお盆と正月、それも二日ずつしかない休み以外、バスケ三昧の日々に訪れた突然のサプライズといえる今日の部活中止に、部活仲間の誘いを断り、自慢の脚力を思い切り披露し、自宅までの十五分の距離を、制服のスカートを翻しながら、一気に駆け抜けた。

私、斉木透子14歳の初夏は、小さいころから後をついて回った、大好きで憧れていた隣の家の3歳年上のお兄ちゃん、私の小、中を通してミニバスの、そしてバスケ部の先輩で、もちろん私がバスケを始めたのは、そのお兄ちゃんの影響で、とうとうこの春、お兄ちゃんに決死の覚悟で告白し、お兄ちゃんからも「好きだったよ。」と言われ、初々しく付き合い始めてた初めての夏だった。

そして、昨夜はじめてのファーストキスを、いつも部活の帰りに待ち合わせる近所の象さん公園で、お兄ちゃんがそつとしてくれた。

私も震えていたけれど、お兄ちゃんの私を抱く手も震えていた。

お兄ちゃんは中学でも、今通う高校でも生徒会長をしていた、とても人気のある人だから、ちょっと不安だけど、お兄ちゃんを、物心ついた時から追いかけていた私には、自分がまだ14だから、とい

うブレーキはなかった。

急いで家に帰り、今年のお兄ちゃんの誕生日までに、イニシャル入りの刺繍のカード入れを作るため、頑張るぞ！と鞆に入っている親友の良子からガメた手作りキットを持って、本当に風のように走った。

今なら記録会でいい数値でるんじゃない、そう思いながらくすくす笑って家のドアをあけた。

玄関の鍵を開けて、二階の自分の部屋に行く。

その途中お姉ちゃんの部屋の前を通った。

あれ、お姉ちゃん帰ってる？お姉ちゃんのドアの前のプレートが綺麗な青いお花がかかっていた。

お姉ちゃんの部屋はプレートで、いろいろ主張するのだ。

いないよ〜という赤い花のかかれたプレート、黄色い花の場合、超絶機嫌悪し！そして、青い花は機嫌も良く部屋にいるよ〜、という合図。

今日お姉ちゃん、早いつていつてたかなあ？

私はお姉ちゃんの部屋のドアを開けた。

そこでみたのは、私のお姉ちゃん斎賀碧と、私の大好きな隣のお兄ちゃん平塚洋介が、全裸で愛し合っている姿だった。

私が茫然としていると、二人もこちらに気づきこちらを見た。

私は何かわめいている、何をわめいているのかわからない。

耳にその声もはいつてきてないから、二人の声も姿も聞こえない、見えない。

ただ自分がいろいろな物を投げつけ、あばれたらしいのは、仕事から帰った母に取り押さえられるまで気が付かなかった。

そして今、リビングで父と母、姉、私が出た。

遠い世界の出来事のように糸の切れたあやつり人形のように、暴れるだけ暴れた私は力ない瞳を目の前にむけている。

あれから時間がたっているようだ、父がいるし、あの人は……いないようだ。

何の話をしているんだろう？ やつと人の声が、優しい父と母の声が聞こえてきた。

姉の碧ちゃんはみれない。

父は黙っている。

母は私に、

「今回の事は、私からも碧には言っておくわ。透子ちゃんには、本当に驚いて悲しかったでしょう。まさか碧ちゃんと洋介君が……」

「

「でもね、大丈夫よ、透子ちゃんはまだ中学生でしょ。透子ちゃんなら、わかってくれる、そう信じているわ。」

何をわかって言うの？私は母の顔を凝視してしまった。

はじめてしゃんと意識がその言葉で覚醒する。

お兄ちゃんに告白したいけど、どうしよう、そう家族の前で恥ずかしいけど相談したのは、つい何か月の前だ。

あの時お母さんは、はじめての告白を頑張れ！って応援してくれたじゃない！

碧ちゃんは、当たって砕ける！ふられたら慰めてくれるって言ったじゃない！

お父さんは、うちの透子を振る奴なんて許さない！そう笑って肩を撫でてくれたわ。

お父さん、何とか言って、もっともっとひどい事だわ！

けれど・・・皆何も言ってくれなかった。

碧ちゃんは、反対に私をにらみつける、その肩をお母さんが撫でて何か言っていた。

私は無言で席を立ち、自分の部屋に閉じこもり、じっと天井を見つめ続けていた。

自分の心がパラパラと砕け散る音を聞きながら。

斎賀透子14の初夏は、それまでの斎賀透子を形作った全てが壊れた、そういう夏の始まりだった。



## 第1話（前書き）

お気に入りありがとうございます。  
では、これから、しっかり更新していきます。  
読んで下さる方に感謝を。

## 第1話

透子は、あれからバスケも止め、朝は誰より早く起き、学校へいき、そして家に帰るのは本当にギリギリまで遅らせて帰るようになった。

家族とは口を聞くどころか、顔も見ないような生活をしているが、成績を下げたわけでも素行に問題があるわけでなく、何一つ文句は言わせないようにしてきた。

あの時パラパラと崩れたのは、私を形作っていた全てで、それには勿論家族の存在もあった。

確かに少しの間は、一人になると、泣き暮らしてしまっただけど、心臓ってこんなに、ずきずき痛いものかってくらい痛くて、本当に痛くて……。

けれど死ぬほど痛くて、死ぬほど泣いて泣いて、それでも目に見えない傷など私のどこにもなくて、こんなに苦しく痛くても人は生きていくんだな、って不思議に思って、時間の感覚はなくなっていたけど、夏服が冬服に変わりマフラーをするようになったころ、それはおこった。

お風呂に夜中に入り、寝ようとした時、その姿見に映る昏い表情のやつれた人間が誰なのか、ぎょっとして見ると、だんだんそれが自分だと認識した時、初めて悲しみではなく、とてつもない怒りが私に沸き起こった。

歯をギリギリならし、手を思い切り握りしめ、私は鏡に映る自分を見つめながら、自分に激怒した。

何？ナンなの！私！私が悪いの！いいえ、違うわ！！そうでしょう？姉だった女と、つきあいはじめた男が裸でからまっていたのは、決して私のせいじゃないわ。

あの二人が自分たちで選んだことじゃない！私って馬鹿？何で何でこんなことになってるの！！

父が母が選んだのもそう、何もなかったふり。

私は思い切り鏡をにらみつけながら、自分の頬をビンタした、何度も何度も。

そして、そこには強い強い凛とした眼差しをした頬を真っ赤にはらしてはいても、その揺るがないプライドを取り戻したやつれてはいても、驚くほどの昏い鮮やかさを身にまとった一人の少女がそこにはいた。

## 第2話

透子は中学3年になった。

新しいクラスで、去年の透子の陥った闇を知る者は親友の良子以外いない。

今の透子はもの静かで少し大人びた、時々いたずらめいた視線を無防備に投げかけ、異性はもちろん同性であるクラスメートをドキドキさせる少女になっていた。

バスケットを止めたのも、少し体を壊して、という理由が本人があずかり知らぬ所で落ち着いている。

そのため、皆遠慮のような気おくれを抱え、積極的に透子にかかわるものはいなかった。

それまでの透子は小、中と続けているバスケット仲間が自然、目立っているせいで、その一角である透子もまた、まぶしいほどの生き生きとした存在感で学校では目立つ存在だった。

それが急にバスケットも止め、どんどん痩せていくのに小学校からの仲間たちも顧問の先生も、いろいろ透子に声をかけてき

たが、全て打ち明けられた良子が防波堤となって、あの子の虚ろな透子を守ってくれていた。

透子は毎日のように学校から出ると、何時間もふらふらと散策をするのが日課になっていた。

これが、とてもおもしろいのだ。

繁華街の裏路地は、まだその本領を発揮する夜を待つまで、炭酸の抜けたコーラのように色のない様相を呈していて、そこがデンジャラスな牙をむく夜半まで静かに横たわっていた。

そこを透子は毎日通いつめ、その迷路のような路地の津々浦を猫のように自由に行き来できるようになっていた。

また、ある時はデパートの探訪にあけくれ同じようにそこを自由に誰よりもこぎみよく闊歩した。

そして現在の透子の興味は、電車で1時間近くかかるこの埋立地の堤防だった。

ここは堤防と呼ぶにはおこがましい小さな海辺に突出するコンクリートの塊だったが、毎日透子はここにきて、じっと座って海をみたり、本を読んだりして、潮風の寒さに身を震わせつつ過ごしていた。

そして自分と同じように、毎日ここに釣りをしている人がいた。

フードつきのジャンパーが毎回同じなので、同じ人かな思うくらいに関心しかないが。

あの出来事から、あまり人間に興味を持たなくなった透子が気付いたのには訳がある。

何せそのジャンバーがそれはあくどいピンクの色で、毎日ここにきて2週間になるが、ここ何日かやっと、その視界の暴力のようなピンクが自分の目に入るようになり、ここにきて、そのピンクを一度は確認するようになった。

またいた。

そう思っても透子は気にせず、自分の定位置、そのコンクリートの少し座りやすいそこに腰かけ、今日は海を眺めるでもなく見ながら、ぼくっとしていた。

そして、ふとピンクの人、透子はピンクの人と勝手に呼んでいるが、その人の竿が上下に揺れているのを、何気に目の端に捕らえた。

透子が竿が揺れるのを見るのは何度かあったが、ピンクの人は一度もその竿をあげようとした事がない。

その竿の上下に揺れるのをみながら、透子はそのピンクの人の所まで初めて近づいた。

それは透子ですら自身を驚く行動だった。

ピンクの人の傍まで行ってしゃがみこみ、透子は声をかけた。

「ねえ、それって魚がかかってんじゃないの？」

そう言う透子に、初めてそのピンクの人がこちらを向いた。

ピンクの人はまだ若い20代後半くらいの、肩までかかるフードか

ら見える茶髪に金の混じった髪をした男だった。

彼は透子を見て、ほっこり、そうほっこりとしか言えない表情のまま軽く笑い、眉を少し上げ、透子にその竿を手渡してきた。

あわてた透子がそのままビタンと座り込み、何故か目で促されながら、その竿、とても重く感じるそれを慣れないながら必死にあげると、海面から上がってきたそれは大きなビニールのようなゴミの塊で、それを見た透子がどうしたらいいかわからず、ピンク男を見ると、おかしそうにこちらを見ているので、思わず透子は、その竿を前にぐいっと差出し、ピンク男にかえした。

クスクスと笑う男に透子はむっとしたが、ピンク男が、どこか遠くをみるように、

「この海は死んでるよ。もっと遠くじゃなきゃね。」

「見た目は変わらないけど、ここは枯れた海だからね。」  
そう言った。

そうして何故かこの日から、透子が先にここにいれば、当たり前のように横に座るようになったピンク男、もとい青井陽二33才と15才になる透子はまるで寄り添うように、この海で雨の日以外は時間を共に過ごすようになった。

やがて陽二と携帯のナンバーを交換し、不思議な男と透子は時間があれば海であったり、携帯で話したりメールのやりとりをしたりと、まるでお互いがぴったりとくっついてるのが当たり前のように過ごし始めた。

もうじき暑い夏を迎える頃、その海に他にも人がいるようになったのを嫌だと感じた二人は、陽二のすむ豪華なマンションにその場所を自然にかえていた。

そこには、5人のいわゆる普通にみえない男達が出入りをしていたが、透子がかもと陽二以外に関心がないのと、その男達の持つ雰囲気や陽二の匂いを感じ全然平気なので、彼らともすぐに名前を呼び合う仲になっていった。

こうして透子の散策という放浪も、陽二という安全な巣を見つけ終わりを迎えた。



第3話（前書き）

陽一視点。

### 第3話

夏休みに入ってから、都心にある高級マンションの陽二の部屋に朝から晩までいりびたる透子がいた。

ここは自分を傷つけない安全な場所として透子に認識されたい。

私の巢、そう言う透子の言葉に、陽二は本当に狂喜し、自分でも驚くほど、蕩けるほどに透子を甘やかした。

ここに入れ替わり立ち代りやってくる5人の男達は、初めそんな陽二に目を丸くし、絶句し、やがて、それをそのままに受け止め、陽二の監視のもと徐々に透子に、そつと手を伸ばし、その体温をお互い警戒しつつもなじむ様子に、お前らは野良猫かと笑ってやった。

陽二はあの透子いわく普通じゃないこの男達を確かに拾い育てた感がある。

けれど透子の場合、まるで欠けたピースが埋まるように、まるでこれは自身の一部のように、二人でいると、境目がなくどこまでも溶け合うような感じを味わう。

この奇跡の出会いで救われたのは、拾われたのは自分だという自覚がある。

これは百戦練磨の自分がいうのだから間違いなく、恋愛なんてものよりたちが悪い。

けれど、酸いも甘いもかみ分けた自分だから、こうしてバンザイと

手をあげ降参して、透子に全てをゆだねてしまえる。

透子は自分が依存していると思っただけだ、それは間違いで、それを言っても理解できぬだろうし、今さらお互い離れる事などできないのだからどうでもいいかと思ったりする。

問題はこいつらで、今もでかい図体を晒し、俺達の昼飯に乱入してきた五人の男だ。

透子は知らないまま、この私を付き従え、その足元に結果、五人の男達を侍らせた。

一人目は私の同胞で、いわゆる暴力団といわれる集団を率いる高津巖。

二人目はクラブやキャバクラをグループとして経営する夜の帝王宍倉禎夫。

三人目は誰でも名前を知っている一流企業の若き次期総帥神林礼司。

四人目は日本屈指の大病院の後継者、林幸弘。

五人目は若いヤンチャどもをまとめあげる夜の街の王、橋爪恭弥。

こいつらも、自分が拾っただけあって、今や出会った時間などものともせず、私の透子の保護者きどりだ。

自分やこの男達のように、何か欠けた男には透子は甘い毒だ。

透子はその欠けた所にぴたっと合わさり、かといってそれを自己主

張ることなく、ただ淡々と包んで傍にいてくれる。

本当に好いた晴れたの恋愛よりも濃厚でひどい毒だ。

一度でもそのかけらを味わえば、もう二度と離れることなど考えるだけで狂うほど恐ろしい。

まだ15の透子には気の毒だが、もはや俺以外、いやあの野良たちもいれて、俺達以外、他の人間を傍に寄せ付けるわけにはいかない。

万が一それで透子がいなくなるのには耐えられないだろうから。

そう、思えば力だけは俺達にはある。

これを有効に使って何が悪いというのか。

生まれてはじめて自分にそんな強い感情があったのかと驚いたが、そんな自分も悪くないと思う陽二だった。

ここに透子を中心とした、透子は中心は私だと思っている節があるが、桁違いの力を持つ一つの群れがひっそりと音もなく歪を飲み込み全てを内包し、けれど溢れるほどのお互いへの愛情の元、自分たち以外は全て敵として誕生した。

## 第4話（前書き）

群れその1の視点です。

## 第4話

自分でいうのもなんだが、俺達は順番は別として、皆陽二に拾われ、そしてここにいる。

陽二は10数年前であった時から、ひょうひょうとして不可思議な男だった。

まだ12の俺は、しがたないスナックのホステスをしていたオフクロが客の男を銜え込むたび、アパートを追い出されて、ストリートで生きていた。

学校なんざいったこともなかったな。

けれどこんな場末に転がる奴のなかにゃあ、学があり、ついでにお人よしもいて、俺はそんな連中から読み書きを教わった。

まあ、そいつらはその甘さで、この場末よりもっとひでえ所に墜ちていつちまうがな。

おふくろの新しい男は菓中のチンピラ上がりで、結局おふくろはどここかに売り飛ばされたらしく、俺は真正正銘のホームレスに12の年になった。

こんな俺の体でも欲しがる女や男に安い金で、毬つころみたいにあつちにポーン、こつちにポーンと投げられながら生きていた俺だが、12の寒い冬いゆるインフルエンザらしき風邪にやられフラフラしてるところを、どこぞの制服をきたお坊ちゃん方がホームレス狩りをしているところに出くわし、そのとばっちりを受けて、俺も

ギタギタにされて、その公園の裏でぶつたおれていた。

さすが、もうダメかと別に何の感慨もなくじっとしていると、人の気配がする。

見やる気力もないので、ほっといたら、声がした。

「生きたいか？」と。

俺はあまりのバカらしさに、返事もせずしばらくとしていた。

生きるの死ぬのなんちゃあ、まともに暮らしている奴の台詞だ、そんな甘い台詞を吐く奴なんざ知ったことか。

俺が無視していても、その気配は動かなかった。

俺は一人できちつと死にたかった、俺の望みなんて、そんなものだった。

いつまでたっても動かない気配に、俺の初めて持った望みを邪魔する奴に、とうとう俺は自分でも動かすことが辛い顔をやっとあげ、そいつをにらんだ。

その後俺が気が付くと、俺は綺麗な部屋のベッドの上で腕に点滴をされ、しっかりと生きていた。

警戒する俺に陽二は決して必要以上に近づくことをせず、やがて1年を過ぎる頃には、俺は陽二から教育を受け、その後、俺の父親の迎えと称する奴が現れるまで陽二から生きるノウハウをきちつと叩き込まれた。

父親というのは、日本を2つに分ける暴力団の一つに属する中堅どころの組をまかされていた男だったが、こいつも極道らしく、あまたそこらへんにいる自分の子供らしき奴らから、一番まともな、まともっていつてもやくざのまともだ、おってはかるべし！だな、そんな中から俺を選んだ。

そして俺は天分ともいえるこの世界を、若干30にして、本部の総長の覚えも良く今やその大きな組織の幹部として、おやじから受け継いだ高津組組長として、ここにいる。

俺と同じような穴倉の奴も幸弘の奴も陽二に拾われた口だし、礼司の奴はお家騒動のごたごたで妾腹の礼司が、子供で何の力も味方もいない中で体も心も壊したのを、自分の病院で幸弘が拾い、陽二がやはり生きるノウハウを叩き込み育て上げ、今あいつは次期総帥の地位を得ている。

実際あいつはそんなもの欲しちゃあいないが、嫌いな奴らが地団太踏むのがおもしれえって理由で次期総帥の座を手に入れやがった。

まあ、恭弥は俺が拾って、陽二が育てた口だ。

いずれヤンチャどもとの遊びに飽きたら、俺の右腕として高津組に入ってもらうつもりだがな。

陽二が誰でも拾うかっていったら、全然ちげえ。

3歳くらいから年いったやつまで同じようにぶったおれてるのに遭遇しても、綺麗に無視しやがる。



まあ俺達もだがな。

そんな陽二の所に子供、それも女の子がいると恭弥に聞いてはじめ俺達はまた陽二が拾ったか、ぐらいにしか思わなかった。

けれど嬢ちゃんと陽二の様子をみて、それが違つとすぐわかった。

あんな陽二は初めてで、俺が初対面の時、脅すつもりはなかったが、ちよつど血なまぐさい仕事をちよいと片付けた後なんで、それが俺に濃厚にしみついていていた。

嬢ちゃんが怯えをみせた時、俺は初めて陽二の冷たい怒りを浴びた。

そんな時はとつと退散したが、俺達は、そんな初めての陽二の様子が気になって暇さえあれば陽二のマンションに押し掛けた。

そして、徐々に嬢ちゃんが俺達に慣れ俺達も嬢ちゃんに慣れ始めた時それはおこつた。

あれは全員そろつて昼食の時だった。

嬢ちゃんが初めて俺達の名前を聞き、一人一人の名前を小さく繰り返しながら、そつとそれを呼ばれた時、何ていうんだろつな、やつと目を合わせて笑つてくれた時、そう、満たされた、つて感じたんだ。

俺のいや俺達が生きてきて初めて「満たされる」つて奴を知つた瞬間だ。

嬢ちゃんが帰つたあと、その感覚に酔つた俺達に陽二の奴が言った。

「たまんないだろ？ 凄い毒だろ、俺達みたいのには。 . . . でも、もうなしでは生きてられない。」

俺達は目を合わせ、この群れの女王に乾杯をした。

## 第5話

親が何も言わずに仕事忙しいふりをしている事に、私は心で別々いいのに、と笑った。

いつものように、朝起きたらテーブルの上にはお金がおいてあった。今はもう散策活動をやめてしまっているし、この夏休みは毎日陽子のマンションで好き勝手に過ごしているので、もう以前ほどお金は使わなくなった。

両親は私の目をみず話す、だから私もよそを見る。

そして、毎日お金をこっそりおいておく。

まるで、そのお金を渡すことで、親であることを確認するかのよう

に。  
勿論、私も話すことをしないのが悪いのかもしれないけど。

はたから見れば、ただの甘えた、そのくせスネてるくせに、親のすねかばつちりで。

馬鹿な子供にしか見えないその行為に、親は自分が悪くない、そう安心する為の、人に愚痴をこぼすための行為。

まあ、それほど当初の私は最悪だったんだろう、そう思って溜息をつく。

けれどただか14の恋なんて言われなくなかった。

私には初めての本気の恋だった、初めて人を本気で好きになったのだから、言わせたくなかった。

だから母があの時、姉の肩を撫でながら、

「透子、あなたはまだ中学生でしょ、そんなのまだ早いし、ね、大丈夫よ。」

そう言った時、何もかもがわからなく、真っ白になっていた私に言った言葉は許せなかった。

娘の寝室で及んでいた行為は、あの時誰も触れなかった。

何もなかった、そう両親がしたがっていたけど、あの時私をにらむ姉の碧だけはちゃんと現実を私に教えてくれていた。

私も高校受験だけど、姉の碧も大学受験だ、最近顔をみないが、予備校とかで大変なんだろう。

姉は、うん、わからないけど以前にもましてトゲトゲしい、まあ私の人生には関係ない代表のような人だから、今さらどうでもいいんだけど。

おかしい事に、この家族は私がもう平気になった、あの出来事に未だ囚われている。

バカだ、としか言えない、時間は過ぎる、本当に容赦なく、いい意味でも悪い意味でも。

私は若く、本当に柔軟だ。

陽二のおかげで、この手に私が生きられる世界を取り戻したから大丈夫だ。

もちろん砕けた以前の私は思い出せないくらい遠い人になった。

時々アルバムをみて、これは誰だと自分でも思うくらいだ。

私は陽二達が私以上に、高校についてあくでもない、こゝでもない、とやっているんで、傍らでゲームをしたり、漫画を読んだり、ちゃんと勉強もしたりと自由に生きて過ごしていた。

そして何より、彼ら誰がみても大人で魅力あふれる彼らが、私に愛情を与えてくれていた。

本当にひっきりなしに紡がれる愛情に嘘はなく、私はその海に浸り切り、あの部屋に漂っている。

彼らは、私といると幸せだと笑う。

本当に、まるで一つの生き物なのだ、私達は。

1日中おしゃべりをせずに、静かに過ごす日もあるし、何やら馬鹿騒ぎをしちゃう日もある。

ゲームの対戦で、あんな大金かけるなんて、馬鹿じゃないかと言ったら、ガンちゃんが、

「あのなあ、透子、俺たちみてえな男にはな、はったりが大事なんだ。」

そう訳の分からないこと言って、見たこともないような大金をかける。

でもね、スマッシュブラザーズの対戦じゃあ、いろいろな意味で痛い、と思う私だ。

ガンちゃん達は私に何も隠さず、必要とあれば、この部屋で仕事をかたずける。

ガンちゃんとテイちゃんのおかげで、暗い昏いそちらの世界の片鱗を垣間見る女子中学生ってどうなんだろう？

少なくとも私は、キャッチや諸々にひっかかる事はないと思うよ、おかげでね。

特にテイちゃんとの話はえぐい。

そうか、水商売に入る女の人にもいろいろあるわけねえ、なんていらん知識もたつぷり。

キョーちゃんは、早々と彼の信頼する人間を、ここに連れてきて私に紹介した。

ちょうどガンちゃんがいたものだから、彼らがすごく体も大きくてむき出しの首や肩に入ってるチームのタトゥもかっこいいのに、ひどく小さくなっているのには悪いけど爆笑したな。

それで結局私が話してもいい人、何かお願いしても大丈夫な人が、  
そうやって次から次へ彼らから紹介されていった。

でもね、ガンちゃんとその若頭さんや補佐さんなんて、どうして私  
が知らなきゃいけないんだろう、理解できないよ。

そんな感じで瞬く間に中学最後の夏休みが終わるころ、課題の忘れ  
物をした私が、それを取りにヨウちゃんに車で送られて家にもどる  
時、それが見えた。

いつも帰りが遅いせいで、危ないからと家まで堂々と車で送っても  
らうんだけど、いつものように車で来たとき、うちの家の傍で、姉  
の碧と、大学入学とともに家を離れたと、聞きたくもないけど学校  
の噂で聞いた、隣のあの人と一緒にいるのをみた。

何か話しているようだったけど、あの裸でお姉ちゃんといった、あ  
れ以来見た事もみたくも思わなかった人を目にした途端、私は急  
に体が固まってしまった。

何なんだろう？これは。

もう何とも思っていないはずの、いや、それどころか目に入れるのも、  
自分の人生から追い出したはずの男なのに、何故姿をみただけでこ  
んなになるのか、と心が荒れ狂った。

そんな私をいぶかしげに見たヨウちゃんが、すぐさま車をそのまま  
走らせ、マンションまで戻ってくれた。

笑わなきゃ、話さなきゃ、そう思うのに心が、体がいう事を聞か  
ない。

悔しくて悔しくて、もう1年以上たっているのに、私を無様にするこの感情が許せなくて、自分の手を爪でぎゅっとして、それでもダメで混乱する私を、マンションのソファに座らせ、ヨウちゃんがガンちゃんがテイちゃんがキョーちゃんがかわるがわる抱きしめてくれる。

それでも強張ったままの私を、顔色の悪いだろう私を心配して、病院で診療中のユキちゃんを呼んだらしい。

それこそ白衣のままユキちゃんが心配そうに私の脈拍や目の色をみてくれた。

私はヨウちゃんに小さな声で、あのピンクのジャンバーが欲しい、って頼んだ。

急いでクローゼットから出してくれた、あのけばけばしいジャンバーを抱きしめて、私はソファーに寝転がった。

なんで、なんで！こんなの嫌、絶対いや、なんで私は逃げたんだろう、逃げるなんていや！

きつとみんなにも聞こえるだろう唸り声をあげて私は自分にひどく怒っていた。



## 第6話

初めてその日は家に帰らなかった。

母にメールを、友人の所に泊まります、と一応礼儀として入れた。

私も一言だけど、母も、わかりました、だけだった。

この日の私は、激しく激しくふてくされたように皆に甘えた。

夜遅く仕事をそれでも早く終わらせてきたレイちゃんが出て、

「うちのお姫様、ご機嫌はいかが？」

そうやって有名デパート限定のスイーツを私に差し出す。

私は何も言わず口を開けて、クスクス笑うレイちゃんに食べさせてもらう。

みんなでゴロゴロしながら、もう日付も変わるころ、私はそれまでしゃべらなかつたけど、やっと声を出して、

「悔しい、こんな私は嫌。」

そうやって彼らの前ではじめて泣いた。

彼らは、そんな私を、むかつくことに、子供のよつにドロドロに甘やかし、そして初めて見せた弱さを喜んだ。

私のこの、「こんな私じゃ嫌」宣言に、彼らは自分たちには、これほどない最高の女だと、いろいろ言ってきたが、私がじっとみるので、じゃあ透子のしたいままに、俺達が助ける、そういう話にいつのまにかまとまった。

そしてその日以来、私はそのまま家に帰らずヨウちゃんのマンションで暮らしはじめた。

私の親との話は、私が知らないところで硬軟とりまぜて行われた。

勿論、硬はガンちゃん担当で、軟はレイちゃん担当だったらしい。

きつとうちの親は、驚いたに違いない。

引越しの荷物は制服と中学校の教科書だけで、あとは皆新しく揃えた。

一月になってからは、中学校に通うのも休み休みになった。

最後の卒業式は良子やみんなに心からありがとうを言って別れた、大泣きしたけどみんな。

高校は自分たち以外の男のいるところなんて、というバカバカしい理由で、私立の超金持ち女子高に決まった。

いわゆる学費も高いが、それに合わせて自由度も高い、という女子高だ。

呆れたことに、私は入学試験さえ受けず書類選考と面接のみ、それも電話……。

お金って怖いなあと思ったよ、春から通うのに、ちょっと心配だ、基本自分に甘いから。

それから変わったことは、あれから、本当にみんなの教育というのを受けている。

私をもっと私の価値を知るべきだ、だそうで。

まず、レイちゃんからは「淑女」なるものの教育を受けている。

きちんとした歩き方から目線、手の動き、食事のマナー……。

あきれほど毎日毎日、レイちゃんがない時は、花池流のとても厳しいけど、背筋も一本綺麗に通っている60代と思える女の先生が教えてくれる。

うん、この人に教わるのは大好き、自分に活が入るから。

女もはったりだなあ、と、それをみるガンちゃんからの一言は余計だと思う。

そして護身術、これにはさんざんだ。

まずヨウちゃんがすぐ夏の終わりに中国から廖さんという先生を呼んだ。

とても裏の世界では有名なしいが、とても気のいいオジイサンにしか見えないのだけど、女の私にも最適という合気道に似た古武術を教えてくれている。

運動神経に自信があった私だけど、これはホント別ものだった。

何とかオサワリの部分だけでも身につけるのに5か月かかって、現在もボロボロだ。

寥さんに言わせれば、片言の日本語で、筋はいいって褒めてくれるけど、ちよつとかすられるだけで青あざができちゃう。

それに黙っていないのは、ガンちゃんとキョーちゃんのコンビ。

街中で物を言うのは実践しかない！と二人でタッグを組み、街中の喧嘩の仕方を私に教えてくれる。

でもね、基本間違ってるよね、私は絶対歩いてるだけで喧嘩売る人になる気ないもの。

そこから間違ってるんじゃない、あ、と言っても人の話聞かない、聞かない。

うん、いろいろ教わったけど、金的蹴りなんて、まじぞつとしたよ。

目つぶしとかの方が私的にはライライだった、うん、でもそれも何か微妙だよ……。

私の練習台になる人達には本当に気の毒だった、だって髪の毛一つ私にかすめたら、どうやら後できついおしおきが待ってるらしいの。

みんな、それぞれ幹部クラスの人達らしいけど、下っ端に私を合わせるなんて考えられないそうだ。

ホントにごめんなさいの世界だわ。

だから、そんな過保護な二人は寥先生が私に青あざつけるのを歯ざしりして見てる。

そんななら見なきゃいいのに、見ないのも心配でダメらしい。

そして現在皆の怒りを一身に浴びているのがテイちゃん。

男のあしらいかたを私に教えてくれているから。

これはどの面子をみても誰でも先生になれるだろうに、テイちゃん曰く、人間を食い物にするにかけては誰にも負けない！との事。

レイちゃんは只の芸のない鬼畜。

ガンちゃんは女の扱いを知らぬ只の獣。

キョーちゃんは、まだまだ女の奥底の怖さを知らぬガキ。

ユキちゃんはマッドサイエンストで危険なので問題外。

ヨウちゃんはジョーカーだから参戦なし。

という理由で、ホストクラブやクラブ、キャバクラなどをいくつも経営し、人を誑し込むのを天職としている自分しかいないじゃないか！と皆に宣言し、現在にいたる。

確かにテイちゃんの授業は、その半端ない色気にびっくりする。

心からだそうだけど私をくどいてくるから、それに我慢できない見ている誰かも大体その授業に乱入してくるものだから、私的には、一般の男の人が万が一私を好きだと言ってきてても、毛ほどに感じないだろうとのいらぬ自信があった。

もうじき高校の入学式を控えた私は、なんだかんだと彼らの手の上で、溺愛されながら踊らされている。

私はもう決して誰にも屈しない、逃げない。

彼らの唯我独尊の女王様でいようと誓った春だった。

## 第7話（前書き）

現在編になります。

## 第7話

聖桜女子学園の入学式は、無駄に大きい横文字のつく瀟洒な講堂で行われた。

普通、行事って体育館じゃないの？と、公立育ちの私は思ったが、正門をくぐった時に校舎まで続く芝生と噴水といるいろなオブジェを見ていた私は、これがこの学校の大金がかかる理由かと納得もした。

ふうん、学校もはったりが必要なわけかと思いつながら、理事長以下の面倒な話を、秘儀聞いてるふりを発動させ綺麗にスルーした。

周りの新生は、皆かわいい子猫ちゃんばかりで、自由な校風はどこ？と思つたが、二階席に陣取る先輩のお姉さま方をチラッとみて納得。

それはそれはカラフルな花が咲いたような髪ばかりだった。

最後にカメラアメンバーズと呼ばれるこの学園の生徒自治組織が十数名壇上に上がり紹介された。

このカメラアメンバーズと言うのは、他の学校でいう生徒会やら風紀委員会やらの仕事をする組織で、それなりの力を持っているとの説明、そして仰々しい自己紹介にあくびをかみころす。

私には皆同じ顔にしか見えないけど、一人だけ綺麗なミルクブラウンに真紅のメッシュを入れた人が目にとまった。



ふぐん、いい感じ、そう思ったのがこの退屈な入学式での唯一の印象だった。

そのままクラスに入り担任の紹介と、クラス全員の簡単な自己紹介があった。

クラス委員になった子は、元気いっぱいな子で中等部からの持ち上がりで、井上素子と言った。

陸上部でそこそこの成績を残しているらしく、各クラス十名ほどの外部生にも早く慣れてもらおうと、それはそれは面倒なことに私にも接触してくる。

新入生歓迎会から始まって、あげくに校外研修まで同じグループ、その度に話しかけてくるは、友人を紹介してくるは、しまいに部活の世話までしようとする。

五月の中旬、私はついに彼女にきれた、大人しくいようとする私に何の恨みがあつて、まわりつくんだ、この女。

誰が見ても迷惑ですオーラを、そこはかたなく漂わせてるのに、馬鹿か、馬鹿なのか？

ついに彼女の家でのパジャマパーティーの面倒なお誘いに、断つても誘うそれに、私はキツとにらんで言っただけだった。

猫かぶりはどうした？今さら、それなに？よね。

「いい加減にして下さらない？私は私のスタンスで生きているの、誰であれ、どんな理由があろうと、私の邪魔はしないで、目障り以

外ないわ。」

「それでも私の前をちよろちよろするなら・・・覚悟することね。」  
教室は一気に静かになり、井上さんをガンちゃん譲りの俺様視線できつく睨み据える。

この学費が馬鹿高くて有名な学校に通うくらいだから、それなりのお嬢さま育ちだろう彼女を、そしてクラスの皆を不機嫌さを隠そうともせず、最早猫かぶりを止めてゆつくりと、自分でもさぞ冷たい表情になっているんだろうと思いつつ見渡す。

すると、彼女はワナワナ震えて悲鳴を？いや、なんで嬌声？？甲高い声を一声あげてノンストップでしゃべりはじめた。

「す、素敵です！透子様。私は、いえ、私達3組は透子様についていきます！これから透子様と3年間同じクラスなんて、何という幸運でしょう。ずっとずっと思っていましたのよ。信じていたかいがございました。ええ、私達小さいころからの付属組はいつか、いつか素敵なお姉さまにめぐり合うに違いないって！ええ、信じていましたも！やはり、夢はかなうのですわね。」

そう言ってあまりのことに????の私の手を取ると、私の前に額つき恭しく頭を下げた。

それに同じように黄色い声をあげて他のクラスメート達と同じように続く。

何か言っただろうと口を開こうとしたが、そのキラキラした眼差しに一気に力が抜けた。

なんだ？この子たち・・・わけがわからないんだけど、えっ、私今怒ったんだよね？うん、怒ったはず、間違いない。

啞然としてこちらを見つめる高校からの入学組に助けを求め視線をむけると、何か見てはならぬもののように視線を、つっとそらされた。

私だけ？この馬鹿みたいなのにさらされるのは。

ふふ、甘い！そんなのこの私が許すわけじゃないじゃない、蜘蛛の糸は最初から、きちっと補修して離さないタイプよ、私は。

私は委員長であった、最早意味のわからない人間と化した井上さんに、逃げ腰の残りの外部生を指し示し、

「あの方たちともお話するべきじゃないかしら。」

と言ってやった。

「そうですね、さすが透子様、同じ仲間として、優しく皆で迎え入れなくてわ。ね、皆さん。」

そう言って振り返った委員長の井上さんが彼女らの元に向かうのを、「嘘でしょ！」という目をして私をみつめる彼女たちに、ヒラヒラと手を振ることで答えた。

私だけなんて甘いわよ、逃がすわけじゃないじゃない。

もう、こんなわけわからないの知るか！普通怖がって泣くとか、泣

くとか、泣くとかじゃないの？

毒を食らわば皿までよ。

こういう状態にはじめは、あのね、そのね、といろいろ説明をしようとしたのよ、やめてほしくてね。

けれど、だけれも私の話しを聞かないし、うるうるしては、ついていきます！ばっか。

いいわよ、いいわよ！きっちりやってやるっじゃないの、このクラスの女王様、ふん！。

開き直った私は、残りの外部生とおぼしき輩が委員長たちに取り囲まれるのを、次の授業の用意をしながら見ていた。

家に帰ってヨウちゃんに話したら大爆笑、皆にメールしながら、また気付くと笑っていた。

夜中に帰ってきたガンちゃんは、私の部屋に酒臭い息で入ってきて、ベッドに寝てる私を起こして、

「さすが俺の透子だ、ん、ご褒美に何が欲しい？」と私を抱きしめて上機嫌だ。

「私、明日学校なんだから、もう邪魔！」

そう言っても放してくれず、結局この日は一緒に寝た。

次の日の朝、ユキちゃんが私を起こしにきて怒っていた。

寝不足はビタミンなんたらを壊し、ましてや一番成長ホルモンの活発になる時間帯を起こすなど言語道断だと。

ガンちゃん、あなたユキちゃんの報復は一番怖いからね、なんせいろんな薬使い放題だもん。

いい気味だわ。

入学して早々、私はクラスの裏ボス? になった。

いや堂々と皆が透子様、透子様ってやってるから、裏、というカテゴリーには入らないな。

うちの委員長の声掛けで一年独自の組織が立ち上がり、何故か私はその代表になっている。

各学年がそれぞれ組織作りをするのは将来を見込んでの勉強として認められており、伝統的にいろいろなグループがその派閥ごと沢山作られてきたらしいが、人が関心なくほおっておいたのをいいことに、1年は数十年ぶりに一つの大きな組織「黒ユリ会」というのが出来上がっていた。

・・・私は「黒ユリ様」と2つ名がついた、そう知らぬうちに代表

だ。

これをうっかり話したら、テイちゃんとガンちゃんが私の下着から何もかも身に着けるものを一新し、それぞれ小さい黒ユリの刺繍のついたものをプレゼントしてくれた。

これって誰が注文したんだろ、ハンドメイドの綺麗な刺繍を見て、私が遠い目になるのは仕方ないと思う。

実は、5月の連休に皆で九州に旅行にいったんだけど、帰ってきたら、ヨウちゃんのマンションの両隣りはうちのものになっていて、壁をぶちぬきリフォームされていた。

すごい突貫工事にも驚いたけど、両隣りの人は住んでたはずで、どうなったのかは不明なままだ。

とりあえずみんなの帰る家は一緒になって、私的には楽しく暮らしている。

そして、レイちゃんが、黒ユリ会発足を聞いて、さっそく手はじめに1学年の子たちの相関図を作ってくれた。

さすが半端な金持ちじゃ入れない学校らしく、皆そつそつたるお嬢様が多かった。

特に委員長のところは有名な日本を代表する企業、井上テクニクスの一人娘で、それがなぜあんなわけのわからない人間になるのか不思議だった。

お金の超かかることでも有名で、とりあえず一流のはしっこに何とか

ぶらさがろうとしているこの高校にいる理由も、だって選択肢は沢山あっただろうしね。

彼女らの一部はいずれある程度の力ある人間になる、とレイちゃんと言った。

そして、操ってなんぼだ、ってテイちゃんがいい、ガンちゃんはきちっと弱いところを握る、といった。

キョーちゃんは、遊ばれんな、遊んでやれと言って、ユキちゃんは面倒な子供がいれば、黙らせるいい薬を用意するという。

私はそんなみんなにわかってる、と笑って答えた。

彼女たちが見たままの姿じゃないことも知っているぞ。

第8話（前書き）

透子の一日。



## 第8話

私の毎日は結構ハードだと思うんだ、何だろ、これ？自分でも不思議だ。

まず朝は日の出前に起きて、寥先生からの朝練をこなし、体がほぐれた所で大好きなジャグジーで汗を流す。

そして、しゃん、とした所で、そのまま新しく設置されたエステ室に直行する。

初めはちゃんとした高級エステサロンにいったんだけど、そこに通う叔母様方の視線が痛い、痛い。

そりゃそうよね、子供の分際で高級エステは毎日ないわ、あたしもそう思うもの。

浮かない顔の私の為に、ならば、とエステを勉強するといったヨウちゃんは、エステを短期間で極めた、と豪語するだけあって、その極上のマッサージュや、お肌や髪のお手入れは決して付け焼刃に見えない。

毎回1時間ほど丹念に受けるエステは、もう本当に天国だとしか言えない、いつもウトウトしちゃう。

最高だよ、ヨウちゃん、グッジョブだ。

その後は、だいたい徹夜のままが多いテイちゃんやガンちゃん、キョーちゃんの気怠そうな大人の男、って感じの色気を一身に浴びて、

いらぬ甘い言葉も受けつつ、めざめのお茶をいただく。

運がよければ、いつつも忙しいレイちゃんを見送るなんてオプシヨ  
ンがつく時もある。

本当に二十四時間戦つ男だよ、レイちゃんは。

それに引き替えテイちゃんは、趣味の悪いとしかいえない本人納得  
のゴージャスらしいアクセサリーをじゃらじゃらさせて、夜の匂い  
をいつもぶんぶんさせている・・・馬鹿かもしれない。

そして、食事には一切の妥協を許さない、ユキちゃん特製の朝食を  
食べて、ユキちゃんが病院に出勤するのに合わせて、ユキちゃんの  
車で学校まで送ってもらつ。

もちろん、入れ代わりに眠るみんなに、お休みなさいの挨拶をして  
ね。

登校すれば1学年が、短期間で驚くほどの一枚岩の組織を作り上げ  
たものだから、いらん注目が私にふりそそぐ。

そして、一番重要なのは、ここ。

私が普通の家庭出身なので、いらぬ火の粉がおもしろいほど飛んで  
くる、飛んでくる、最初のうちの大騒ぎをホント見せたかったよ。

それを委員長を中心に、我が黒ユリ会のメンバーが、これでもかと  
いうくらい私におかまいなく勝手に返していく。

本当に只者じゃないよね、黒ユリ会の執行部は。

その一連の動きをみると、これが今になって準備されたもんじゃないことぐらいわかるってもんよ。

要は頭の飾りを待っていた状態だったわけね。

私をていのいいお飾りにするつもりだったのかは知らないけれど、残念ながら現在ぼうぼうと燃える火の粉は、綺麗に委員長たち黒ユリ執行部に丸投げしてやった。

私はキョーちゃんじゃないけど遊ばれるつもりは全然ないから、私にケンカを売る先輩方には、庶民の秘儀ちやぶ台返しできつちりと倍返して答えているし、その、私の相手の一番痛い所をつくやり方は、えげつないなあと、ガンちゃんからおほめに預かるほどだ。

ぶつちやけ成績も悪くないし、運動もお手の物、だってこの人たち、まともな運動してるのってレベルで、毎日未だ青あざ作って鍛えてる私の敵じゃない。

そついう単純な所での事は鵜の目鷹の目の先輩方に、綺麗なルージュを塗った嘴でつつつかれるような隙は絶対つくらない。

そのネチネチ大会では今の所、1年が優勢、それでも黙れないお馬鹿な先輩は、1年の力の結束、別名、親の力で黙らせている。

そりゃあ親の仕事がらみになれば黙らざるをえないよね。

まっ、私といえ、とりあえず直接こない人間のものはスルースキ

ルを絶賛発動中。

私の関知しない所で動くそれらを、レイちゃんが緻密に作成してくれた、各学年の相関図、更に学校全体の相関図をみながら、なるほどなあ、こつくるか、って感じで寝る前に確認して、つぶれた先輩方の名前にバツケをつけるのも今の私の密かな楽しみの一つになっている。

リアルパワーゲームだもの、斜め横から見分には面白いよね。

そしてそのパワーゲームが大きく行われはじめた私の通う高校が、いわゆる上流社会でも注目を浴びつつあるのをレイちゃんから教えてもらった。

注目を浴びる理由が、黒ユリ会にあまりに執拗に攻撃をかけた幾人かのお姉さま方の親の会社が、あつという間に綺麗につぶされたのも原因かもしれない。

犯人は聞かないし、考えない。

詳しく話してないのにどこで私の高校の情報を得ているのか不思議だ。

私に懲りずに突っかかる人が一人、二人と消えていくんだもの私だつて、あれっ？って気が付いた。

それを興味深々でみている周りが気が付かないわけないよね。

私的には面倒な人が学園から去ってくれて楽ちんだし、実際彼女やその会社がどうなるうと知ったことじゃないから、それはそれは綺麗

麗に笑って知らないふりをしてる。

一般家庭の私に何もできるはずがないから、私をかつぎあげた黒ユリ会メンバーたちが、それはそれは恐れられはじめている。

ふふっ、いい気味よね、これで仲間同士、疑心暗鬼でつぶれてくれても、おもしろいかも。

現在我が黒ユリ会の特に執行部の人間は、見せものパンダ状態。

こんな感じで学校では前代未聞のパワーゲームがぼうぼうと燃え上がっている。

失敗すれば、自分も親もパー、凄いゲームよね。

今はそれに黙ってられぬとばかりに、学園の安寧を揺さぶるとは何事かと、カメラアメンバーズの動きも活発になってきた。

実際現状では、わずか入学して数か月で、黒ユリ会の勢いが凄い事になっているから、微妙なバランスでカメラアとの対峙の姿勢はどう転んでいくのかわからない。

夜組が仕事にいく前なんて、最近みんなでノリノリで、このVSカメラアメンバーズとのシュミレートで一緒に遊ぶようになった。

彼らの言うてくることは相変わらず物騒だけど、本気でまさかちよつかいかける気じゃあないよね、遊びだよ、これっ！て何度も疑いの眼差しを向ける私に、一番ノリノリで攻撃をしかけるのは、何と以外にもレイちゃんだったりする。

今我が家ではパソコンを使った手作りの本格的シミュレーションゲームが、実名いりのね、これ大事！が、はやっている。

私がそんな状況の学校から帰ると、まずレイちゃんからの宿題がたんまりある。

華道、香道、日舞と日替わりでこなし、それらに加え毎日例によって歩き方やら何やらも先生がきて厳しいチェックが入る。

そして、待ち構えてる寥先生との護身訓練。

そこに時々、絶対いらぬ例の実戦訓練も混じる。

汗を一度流してから学校の予習、復習、意地でもこれも毎日やる、女の見栄は凄いつてことね。

そして、いる人間だけで一緒に夕食を取るのが九時くらい。

ちよつと皆で軽く遊んで、夜組のガンちゃんたちの見送りをする。

やつとゆつくりお風呂につかり、寝る前のエステの時間。

この合間合間に、構え構えと騒ぐみんなの相手もそれぞれ入ってくる。

そりゃあ、夜寝る前のエステ中にいつのまにかいつも寝ちやう私は悪くないよね。

今はまだはじまったばかりの学園のパワーゲームを茶番として楽しみはじめたって所かな。

おもしろい遊び場所だって喜ぶ私を、特にレイちゃんがいる資料という名の各人の弱みや、その会社の弱みを嬉々として差し出すのは、どうなんだろう？

レイちゃん、本気でカメラメンバーズ潰す気かしら？。

まだどうなるかわからないのに、って私があきれて言ったら、透子の前にある邪魔なものはきちつと潰すのは俺たちの仕事だ、当たり前だろ、とガンちゃんが、こわ〜い目をして言った。

こんな感じで私の一日は過ぎていく。

## 第九話

学園側も1学年の大組織である黒ユリ会を無視するわけにはいかず、専用の活動室の認可を次の月を待たずに認可され、別館の旧ホールが黒ユリ会に与えられた。

古い洋館風の建物をそのまま生かし、委員長やそれぞれの親の会社の援助を受け、その内装はシンプルとはいえ置かれた幾つものソファースェットや、誰が引くのやらピアノまで運ばれ、品の良い巨大なサロンのような雰囲気には出来上がっていった。

2階には幹部室と、私専用の代表室があり、それも各個人負担で好きなようにリフォームされていた。

私の部屋は大きな窓がある十畳と六畳の部屋で、シャワー室とダイニングもある部屋だった。

私はその内装をユキちゃんとレイちゃんにお願いし、続きの部屋はワンフロアーへとリフォームされた。

さすが二人が整えてくれた部屋は、レイちゃんどこにあったという年代もののヨーロッパの机などが中心におかれて、ひどくシックでそのくせ「高いです。」臭はそこはかたなく漂っている部屋になった。

カウチやウォーターベッドなどは最新の人間工学に基づいたものがおかれ、私はもっぱらそれらで、学校であった時間はこの自室でゴロゴロしているのがお気に入りになっていた。



私はダイニングの片隅に梱包されたままの大きな荷物をできるだけ考えないようにしながら、いつまでも現実逃避はいけな、と反省はしてみる。

それらは、ガンちゃんから送られてきたトラのはく製や、そのままの形の北極熊の毛皮の飾り。

テイちゃんから送られてきた金ぴかゴールドの置物、確かフクロウとか大時計とかだった。

それに忘れちゃいけない、キョーちゃんからの飾り刀、それにチームの印入りとかの品の数々にため息をつく。

内装の願いを彼らに頼まなくて正解よね、けどお祝いだと本気で送られてきた品を返すのもしのびないし。

結局こうして部屋の雰囲気壊す荷物の数々をどうすべきか、仕方がない、委員長にでも相談するか？とため息をつく。

委員長とは私のちゃぶ台返し攻撃の合い間、きちっと、一度さしで話しをした、これ、大事だよな。

あまり面倒なただの黒い子なら、私はとっとと新しい高校へいくつもりでいた。

彼女は私がこの学園に何の思い入れもないことを信じられないように見た。

本当に驚いていた、私に目的を話せないなら、ご破算だと言われた時に。

それに彼女は怒りと言う素の顔を見せ、やがてそれに気づいた委員長は顔を両手で覆いながら、笑うなら笑えと、自嘲気味にぼつりぼつりと話し出した。

小さな頃から大企業の一族当主の娘である事を誇りにせよ、とそう言い聞かされて育ってきたこと、  
けれど2つ年上の従姉妹には、容姿や能力、何をやってもかなわなかったこと。

父方のその従姉妹の親より、自分の親の方が立場は上で、まして母は従姉妹より数歩遅れる自分をプライドゆえに気が付かないふり、いや本当にそう思い込んでいたのかもしれないが、自分の娘の方が優れていると信じ込んでいた。

自分の傍にくる大人は必ず従姉妹ではなく自分を褒める。

五才のピアノの発表会で、自分は月並みの演奏しかできなかったのに、やはり褒められた。

心が苦しくて苦しくて、下を向いていた時、何気に従姉妹に目をやれば、彼女は自分を見て口元を少しゆがめて笑っていた。

それは完璧に見下していた笑いだった。

従姉妹はこうして自分を嘲笑していたのか、今までも。

それ以来、その従姉妹は自分を縛り付ける枷になった。

激しい自己中毒症におちいって入院するまでになった幼い自分が、

自分の親の決めた婚約者であったが、その子との婚約が今回の入院騒ぎで命の危機も、との噂にあっさり破棄され、従姉妹の婚約者になったというのを乳母から聞き、退院した足でもう一度その従姉妹と戦うために、この学園に従姉妹を追って入学した、と昏く笑った。

「勘違いしないで、すきとかじゃなく自分の物だと言われてたのが無くなった、そんな感じなの。」

そう言った彼女は、それにね私がこうやって復帰したら、またぞろこちらについて打診あったらしいけど、母の怒りの前にパ・になつて、私もその時ばかりは母を好きかもって思ったと話した。

学園で少しずつ少しずつ着実に組織を陰で作ってきたけど、それを率いるリーダーになる人間が育たなくて、これは、と期待しても時間と共に、魅力的な力の闇に飲み込まれていってしまったてダメだった。

そういう人間は、さっさと退場してもらって、ここまできたけど最早残された時間は少ないとあせっていた時に透子が入学してきた。

今回もまた半分はあきらめていたが、透子のスタンスにブレがなく、最悪、今回は飾りとしてはいいんじゃないかと思っていたのだと聞き直って答える。

「馬鹿みたい？いいわよ、笑えばいいわ。あなたに知ってもらおうとは思わないわ。」

そう言って暗い表情でこちらを見据える委員長に、透子は一こり笑って自分から初めて手を差し出した。

「あたし、ドロドロ好きかもね。たっぷりのドロドロは引くけど、このくらいなら許容範囲よ。」

「で、私はお人形にはならない、そのところは理解して頂戴。オツケー？わかった？」

そう言うと委員長は不思議にこちらをぼーっとして見て、理解するやいなや、首を上下に何度も振り、私の手を恐る恐る取った。

まあ、それからお互い言いたい事は隠さないようになった。

ただし委員長いわく、他の人間には、何枚かきっちり猫を被るようにとのお願いという名の命令があり、私の部屋以外はちゃんと黒ユリ様の偶像にきちっとなっているつもりだ。

世の中ギブ&テイクだものね、この私室は最高だもの。

そんなものだから、委員長をよんでこのトラの剥せいやらの相談も問題なし。

あとでちゃんと相談しようと、美術の二時間ぶっ続けの授業をここでさぼっていた私は下に降りた。

同じようにさぼってるクラスメートはわかるけど、他のクラスの子らも優雅にお茶タイムしてる。

何の授業？ま、いいか、関係ないし。

私がおりにいくと、どちらへと声がすかさずかかる。

「昼食をとり、」と思ひまして。」

と私が素直に答えると、少しお待ちくださいと言って携帯で何やらやっている。

前に一度無視してやったんだけど、これがこれが超しつこい。

にこやかに笑い続けて何度でも聞いてくる。

めんどくさがりを自認する私は2度とやらない。

お待たせして申し訳ありません、と階段の方で声がした。

幹部室から委員長はじめ主だった人間が降りてくる。

私は頭の中では相変わらずめんどくさっ！と思ひながらも、彼女たちを待ち、我が学園名物の中等部、高等部の全員が入れる巨大カフェテリアに進路を定める。

進路？不思議に思うかもしれないが、最早これは進路の類なのだ。

ほとんどユキちゃん特製のお弁当を持参な私だが、ユキちゃん出張の時などはこうしてカフェテリアを使う。

別館から、これまた別館のカフェテリアに向かうのに私を先頭として続いて委員長たち、その後ろに他の黒ユリメンバー、ぶっちゃけただ一年生の大団体がカフェテリアに向かうだけだけど、私がカフェテリアに向かう時のみ、こういう物凄い大移動になって進むことになる。

あんなたち全員がお弁当ないってわけないよね、一度聞いてみたいものだ。

カメラアメンバーズとその取り巻きさえ30から40くらいの人数の移動なのに、どよ、これ？数的には凄いことになってる。

こりゃあ、学園側が黒ユリ会をカメラア同様優遇はじめるのは納得だよな。

はじめてこの大行進の話をしたら、みんな大爆笑してるのに、ガンちゃんとキョーちゃんだけは、

「良くやった！透子！」

とひしと抱きしめ、二人で感動しあってた。

はい、はい、女もはったりね……。

次に二人の言う言葉をわかっている私はため息をついた。

最近テイちゃんが、そろそろ俺らも進化を遂げていいはずだ、って言ってスマッシュブラザーズを卒業して、モンハンをこの3人で、しかもオンラインではじめた。

えらそうに、

「ほら、透子、こうやって入るときはお辞儀をしてだな。」

とかいろいろ私をその腕に抱き込んで、説明してくれるんだけど、

黒にあつという間にやられちゃったりしたら、凄い内輪もめがはじまるんだ。

「お前の援護がひでえ。」から始まって

「あの魔法はねえだろよ、おい！」

って感じで、見事に迫力あるメンチをきりつけあう。

まあ、仲間内ならまだいいけど、絶対今対戦してる人、素性を甘い言葉に騙されて明かしちゃだめだよ！と何度思ったことが。

リアル暴力団の組長とかチームのトップとか夜の王様たちの、怨念こもったダダ漏れのそれは背筋を凍らせる言葉のオンパレードで、まじモンハンのせいで内臓とられたり力二漁とかに売り飛ばされたらかわいそうだと思う。

海の魚食べるのやめようかとも思った、いろいろな意味で怖くてね。

大の大人が、とは思うけどヨウちゃんも毎日のようにムーミンのアニメをみてる。

本当に毎日だ。

どうやらあの海で釣り糸を垂れてたのは、尊敬するスナフキンを見習ってだ、と教えてくれた。

テイちゃんが、いつぞやどこで調べたのかミイとスナフキンは異母兄弟だと話をふり、

「どつやってそれぞれの母親とやったんかな、想像つかねーな、おい。」

と言った時、文字通りその場の空気が凍った。

ちよつど、めそめそが画面に登場して本来は癒される場面なはずが、聞こえるフローレンの声も最早地獄と化したその部屋でむなしく響くだけだった。

ヨウちゃんの恐ろしさを初めて知ったよ、私は、うん・・・みんなの拾い主件おとーさんなだけある。

土下座して謝るテイちゃんが許されたのは、貴重な岸田版のアニメを綺麗に全巻揃えて献上した時だった。

いろいろ現実逃避して余計な事考える私だが、相変わらず、このモーゼの十戒のようなこの現象に恥ずかしくなる。

何せ私の進む道は昼食に向かう人間で混んでいるにもかかわらず、綺麗に人並みがあく。

列の最後には次々と校舎にいた1年が誇らしげに合流して6人くらいの並びの列を更に増やしていく。

・・・何だろ、この恥ずいの。

ムーミンに出てくる冬の生き物モランの孤独に毎回毎回それを見ては必ず涙を流すヨウちゃんくらい、はたから見れば恥ずかしい気がする。

それでも、教えられた通りの最上の歩き方、姿勢に目線で、私は優



雅に先頭をきる。

かかっておいで、子猫ちゃん！的な流し目を時折混ぜて。

もうじき試験、それさえ終われば自由登校に夏休み突入、それを思い浮かべ全てを切り捨てる勢いで私はカフェテリアに向かった。

## 第10話(前書き)

黒ユリメンバーズその1からの視点です。

## 第10話

私達一年生は、とても仲がいい。

べつたりとくつついてる訳ではないが、小等部の中学年頃には、しつかりと井上さんをリーダーとして、小さな仲良しグループや、親関係の仕事のグループだったりと分かれていた私達は、一つ一つまとめあげられ、それらを上級生にはわからないように、確か小さな時は「秘密ごっこ」という遊びのカテゴリーの名のもとに、私達は密やかに一つの集団となっていた。

もちろん中等部の中ごろには、何か大きな目的があるらしいのは、皆わかっていたと思う。

その頃には、それぞれの小さなグループと、その小さなグループとというのは学園内で表だって行動していて、いわゆる誰が見てもよくある仲良しグループにしかみえないのだけど、それらのグループの幾つかを一つとして、上級生や学園側にわからないよう花の名前のついた更に上のグループが作り上げられていた。

そのグループ内で問題が起きると、大体それほど大きいことがあるわけじゃなかったけど、たとえばテストの成績を何とかしたいとか、どうしても欲しいのに手に入らないレアグッズが何とか手に入らないか、とかそんな事ばかりだったけど。

でも、それらの笑っちゃうような一つ一つが、なおさら私達の結束と、確たる安心感を、人は信じてはならぬ、人を使えと教えられてきた人間の方が多い私達を、家族ですらあまり顔をみないのが当たり前の子供だった私達を支えてくれた。

そのおかげで私達の学年は担任団も驚くような、いわゆる良くできた学年になった。

どういう風に機能していたかと言えば、そんな問題が、あるグループでおきると、皆に一齐にメールがくる。

たとえば私の班はミモザという名前なんだけど、件名に「ミモザが咲いた。」と入る。

そして、レアグッズとかが欲しいという内容だったら、「〇〇のバッグ」とどうでもいい話の内容に、そのバッグが盛り込まれる。

大体これで、心当たりのあるものや、持ってるから譲ろうか、とかの答えがミモザのリーダーの所にきて、解決だ。

一度だけ、とても大きな問題が中等部の三年の夏に起こった。

それはスミレと呼ばれるメンバーの一人の家の問題で東南アジアの現地工場で大量の製造部品の粗悪品が出て、当然、現地スタッフ幹部の処分を行ったところ、幹部主導のストライキがおきて、各企業へ納付する部品の調達がこのままでは間に合わず、最悪不渡りも覚悟しなければならぬという切羽詰まったものだった。

これにはさすが、すぐさま全員での話し合いが持たれた。

3学年の自主的勉強会を学園所有の研修所で行うという理由をつけて。

時間がさし迫っているので、この時はまず製造部品を作れる工場を

親が持っているという人を募った。

工場持ちの彼女らを中心に話し合いがおこなわれ、それには親が流通会社を持つ私も加わった。

結局、同じ東南アジアに幾つかの工場を持つ井上さんのお父様の所に納期の問題もあり、協力をお願いした。

私の父の会社が、ストライキ中の工場から機械を全て運びだし、井上さんの工場に設置した。

それから業種は違うが同じような部品を作っていた別の班の親の協力で、優秀な技術者が大量に派遣され、何とか納期ギリギリに間に合った。

東南アジアからのチャーター便にはさすが父の会社は大きいのだ、と私も認識をあらたにした。

それはやり遂げた私達も凄く自信が付き、もちろん私達の親は、この組織の可能性に一齐にそろばんをはじいた。

と、同時に自然の流れで、我が子たちが密かに固めている組織を見守ろう、という理由で親たちも交流を深めはじめた。

私の父いわく、皆願ってもない状況に喜んでいるとの事だった。

だから今回正式にベールを脱いで「黒ユリ会」が発足した時、黒ユリ館のリフォームにも親たちは積極的に協力してくれた。

それと、親たちが娘である私達に、仕事上の話も、この黒ユリ会発

足にあわせて、より内実までざつくばらんに話してくれるようになった。

そして、そう、話はもどるけど我らが盟主黒ユリ様のことだ。

あれだけのカリスマ性は一般人が持つ物じゃないし、所作の一つ一つが優美かつもの凄く華麗だ。

私達の親はもちろん黒ユリ様について、それぞれ真つ先に調べ上げたが、確かに一般の家庭出身だった。

役所勤めの両親と大学に通う姉の4人家族だというありきたりのものだった。

それ以上何も出てこない、家を出ていて、現在どこに住んでいるかも不明。

学園も裏からの問い合わせに条例をたてに、それを漏らさない、今までにない事だった。

専門の業者にそれぞれの親は調査を依頼したらしいがそれでも何も出ず、しつこく調べ上げようとした日本有数のリサーチ会社の親の所は、チームを作って本腰をいれたそうだが、それに対しての答えは、急激な株価下落とともに会社の乗っ取りがあればよあれよという間に持ち上がり、例によって私達の所に救援メールがきたときには最早助けが入る余地もなく、その子だけでなく私達も私たちの親でさえも、そのありえないスピードに愕然とした。

その騒動の渦中に「透子様に対して含みのある行動は慎むように」との連絡が弁護士を通して、そのリサーチ会社に来て、それを了承

した事で、まるであんな騒ぎはなかったかのように状況はまた一気に沈静化した。

親たちが大騒ぎしてわかったのは、手を出すな！の答えだった。

アジア屈指の流通会社を経営している父も私に、その騒動の後、

「おもしろい子が上に立ったね。本当におもしろい。扱い方を間違えたら大変なことになりそうだが、井上さんとこのお嬢さんなら大丈夫かな？」

そう笑っているのに、母は心配そうに、兄たちは興味津々で私を見てた。

それらの事もあって私達は親もだけど黒ユリ様を只の人なんて、これっぽっちも考えていない。

表舞台に駆け上がった私達はその親も含めて、身のうちに急速に何か熱いものが期待と共に時間をおって膨れ上がっていった。

それにしても、この間黒ユリ様を先頭にカフェテリアに入った時の情景を思いだし、私はまたもやうつとりとっていた。

だって私達が入っていくと騒がしかったカフェテリアが一瞬でシーンとして、時間割の関係で出ていく中等部の子は憧れの眼差しでこちらをみて、同じ1年生の子は静かに立ち上がり軽く礼をして迎えてくれた。

2年生達は戸惑いながら私達を伺い、そして三年生とカメラアメンバーズは憎々しげにこちらをみてきた。

それを黒ユリ様は全て歯牙にもかけず、その視線をばっさり見事に切り捨てられた。

はあく、本当に素敵だったな、そう思い返し、次回のおでましはいつになるんだらうと、ぼおーっと学園の購買部でノートを私は選んでいた。

そんな私に3年のカメラメンバーズの会計職についている山田先輩が近づいてきた。

日本有数の戦国時代にまでさかのぼるといっ生け花の一大流派の後継者である先輩に、私は綺麗に挨拶をする。

すると、その取り巻き達と私のすぐ傍まできた山田先輩は、私を意味ありげに見た後、

「何か匂いませんか?」

と、取り巻きに向かって聞いた。

「そういえば、この間テレビで梁間グループの特集やっておりましてわね。」

「ちょうど、母と私もみていましたのよ。」

「母がとても感動しておりましたわ。裸一貫、トラック一台からはじまったなんて凄いですもの。」

そう言ってクスクス笑う。



そう、私の父は大学も貧しくていけず、奨学金をもらったとしても日々の暮らしはできぬと、すっぱり進学をあきらめトラックの運転手の助手をしながら、やっと大型の免許をとり、はじめは勤め先のトラックを借りて、やがて一台の自分のトラックを手に入れ、独立して請け負うようになり、やがてアジア有数の流通会社を一代で築きあげた。

兄などは、かすかに父のトラックに母と共に乗せられ遠距離運送の仕事に共にについていったことを今でも覚えている。

山田先輩の話にクスクス笑う取り巻きたち、そして馬鹿にしたように私を見る山田先輩。

山田先輩とその取り巻きたちは、皆古い家柄を持って誇りとしている。

噂では超一流の付属を落ちてここに入学したらしい。

まあ、挫折を知らぬ分、ここに通うのが屈辱だと言ってはばからない人だ。

「本当に何の匂いかしら？臭いわねえ。」

そう言って私をみて笑う山田先輩に私は大好きな父を馬鹿にされて、でも何も言えず下を向いて涙をこらえた。

でも最初の一滴がぼろっと流れ始めたら、もうダメだった。

うつむいて泣いていたらと、凜とした声が聞こえた。

「本当にエランの香水は、確かにきついわね、委員長。」

「つける人間によって、ひどく安っぽくて、最悪なものの一つになりうるってわかったわ。」

その声には顔を上げると、黒ユリ様が山田先輩たちの後ろに立っていた。

隣に、委員長と声をかけられた井上さんもいる。

臭いというのを自分のつけている香水だと言われて山田先輩と取り巻き達は激昂した。

ただし、トップの黒ユリ様にはさすが彼女たちも表面切って文句を言えず、その矛先を私に向けてきた。

私が1年の癖に生意気だ、から始まっている罵詈雑言を浴びせる彼女達が、黒ユリ様のひたつと見すえる凍えた眼差しに、やがて息を飲むのがわかった。

私も驚いたせいで意識が黒ユリ様に向かっていたので、今、彼女たちに言われた言葉の一つもちゃんと頭に入らないし、涙も止まっていた。

ただ徐々に冷えゆく黒ユリ様のその気配に茫然と見ている私も背筋がちよつと震えてくる。

その気配を直接叩きつけられた先輩方も気のせいではなく顔色が悪い。

「この子は私の所の子なのご存じかしら？ああ、もしかしたら、そのおつむじゃ覚えておくには限度があるのかしら？ね、委員長どう思う？」

案に山田先輩の受験失敗のトラウマを馬鹿にしてくる黒ユリ様。

「ねえ、これは黒ユリ会に対するカメラリアメンバーズの挑発ととってもいいかしら？」

山田先輩が何か言おうと口を開く前に、黒ユリ様はそれを手で制した。

「いえ、答えて下さらなくて結構よ、私の貴重な時間を無駄にする権利は、あなた達にはあげないわ。」

「さあ、いくわよ、委員長、梁間さん。」

きびすを返す透子様にあわてて私はついていき、井上さんも後をついて数歩一緒に歩きながら、思い出したとばかりに止まると、後ろを少し振り返り、何がどうしたかまだ混乱している先輩方に言った。

「黒ユリ会よりカメラリアメンバーズ全員のリコールをここに請求します。」

「このくらいなら覚えて、カメラリアの皆さまにお伝えできますよね？」

「後程正式な書類を学園側とカメラリア館にお届けにあがりますわ。」

それではごきげんようと井上さんは綺麗に笑って先輩方を見渡した。購買からの帰り道、一緒に教室に帰る時、涙が止まらず泣き続ける私に、黒ユリ様は私をきつく見すえておっしゃった。

「泣くな、みつともない！」と。

その乱暴な口調に、ああ、嫌われてしまったのかと、座り込みわんわん号泣する私に、ため息をついて、黒ユリ様は優しい手つきでポンポンと私の頭を撫でられた。

「いい、女はね、これぞという時のはったり、そうねプライドと言ってもいいわ。それが大事な。泣きたいなら後で一人で思う存分泣きなさい。誰にも本気の涙はみせちゃダメよ。泣いた痕も気取られちゃダメ。ちゃんと自信を持ちなさい、あなたがあなたである為にね！」

「見せる涙は別にいいのよ。これってという時の武器に使いなさい、偽の涙はね、女の七つ道具だもの。」

そう綺麗に笑って私を見るとハンカチをあげるから涙を拭いて、と私にそれをくださった。

ちなみにそのハンカチは黒ユリの綺麗な刺繍の入ったもので、これ以降何か役立ったもの達に、そのハンカチが渡される慣習になり、その1号である私はそれから黒ユリ様のお側に侍らせてもらうようになった。

このハンカチの下賜は、私に下さったハンカチを見た井上さんのアイデアだそうだけど、さすがだわ、乙女のツボを知ってらっしゃ

ると、とても感心した。

この日以降夏休み明けに行われるカメラアメンバーズに対してのリアル投票の動きと反黒ユリ会の動きが水面下で着実に進行していた。

それと同時に黒ユリ様主催で、メンバーに対する教育が徹底的に時間があればサロンで行われるようになった。

「私の名の元にある人間が二度と無様に泣くななんて許せない！」

とのお言葉のもと、皆黒ユリ様直々の教育が楽しくてならない。

まともなものとしては経済問題からはじまって、護身術、ダンスなどがある。

突飛なものでは、黒い会話術、これは初級編からはじまってスキルに合わせて上級編に行く。

井上さんは上級編にさっさといくだろうと思っていたけど、意外に無口で大人しいグループと思われる藤の全員がさっさと初級編をクリアし、中でもリーダーの桜井さんが一番で上級編にスキルアップした事には皆驚いた。

私達1年生の黒ユリ会は、カメラアメンバーズ打倒に向けてこうして大きく動き出した。

それに伴って、切ってもきれないその親たちも必然的に動きだし、

またもやこの学園は、知る者ぞ知るの大注目が集まっていた。

## 第11話

「おい、透子、ほれ、これやる。」

そう言つてキョーちゃんが、例によつて、ムーミンを幸せそうに見てるヨウちゃんの傍でおいしいホットワインをチビチビ飲んでる私の所に来て、細い筒の箱を渡してきた。

何これ？嫌な予感をひしひしと感じながら、キョーちゃんを見るとすでに夜の街バージョンに真つ黒くろすけに着替えていたキョーちゃんは、ニコニコと得意げに私を期待のこもった目で見つめていた。

こんな時頼りになるヨウちゃんはムーミンを見ている時は、別人28号なのであきらめた。

気が乗らないが、これを開けねば下まで迎えに来ているであろうチームの人にも待たせてしまつて悪い。

その細い赤いリボンでラッピングされていた箱の中には、銀の竜と金の竜がデン！と上下に尾でからまるよう書かれていて、その2つの体に黒ユリが幾つも巻き付いているという大きな四角い布地が入っていた。

100センチ四方以上はあるだろうそれを立って広げてみせると、それはそれは嬉しそうにキョーちゃんは私を見てくる。

チラッと助けを求めるべく状況を確認するため大型ハイビジョンのテレビをみると、スニフがビビッているという場面だった。

私も自然毎日付き合わされてるので、これは内容的に、まだあと1話半あると計算し、ストッパーとしてのヨウちゃんはその段階であきらめた。

「え〜と、これってもしかして旗？」

私が思い切り引きながら聞くと、

「おうよ！透子、お前でつかい喧嘩ン時はなあ、旗持ちも大事なんだよ、お前知らないだろうからな、俺がついてんだ、抜かりはねえ！透子、で、旗持ちは決まったのか？どんな奴だ？」

そう聞いてくる。

いや、キョーちゃん、あのね、うちの学校、あれでも超金持ちお嬢様校だから、きつとこんな大きな旗持てる人いないと思うの・・・。

「その旗持ちの衣装に合わせてポールは決めてえんだ。わかんדר？な。」

そう真剣にこちらを見てブツブツ黒なら渋銀もいいんだがなあ、とか言うキョーちゃんがいた。

私はキョーちゃんに、ほら迎え待たせちゃだめでしょ、と言って珍しく手を取って玄関で頼っぺにチュウまでして送り出した。

ご機嫌よく出ていくキョーちゃんの頭の中は、最早旗持ちのかわりに、私一色に違いない。

ふっ、ちよろいよ、キョーちゃん。



これで当分思い出さないうてくれるといいんだけど、旗。

そして、はっと気が付いた。

メールで夜寝ないで待つてろって言っていたガンちゃんを思いだした。

キョーちゃんのフルバージョンアップ版のガンちゃんだもの、同じような思考か、いや同じに違いない！と確信する。

これはやばい！

うん、ムーミンもあと1話で終わるはず。

ちょうどステインキーの所だ、おし！今日はヨウちゃんと寝ちゃおう、それがいい。

キョーちゃんの攻撃で守備力大幅ダウンの私に、続けてガンちゃんの攻撃じゃ、あつという間にHPも0になってしまう。

明日もまだテストがあるのに、さすがの私もそれはきつい。

我が家のラスボス、ヨウちゃんから離れまい、そう誓う私の思いは、私の作戦など当に見こした、帰ってきたガンちゃんが姑息にもおみやげと言う名の元、渡されたガーデンライトのニョロニョロに見事粉碎された。

ヨウちゃんはそれを見るなり、家じゅうどこにそれを置くのかで悩み始め、しまいにはそのニョロニョロが順番でまたたく様子に魂を

とられてしまった。

ガンちゃんが寝ないで待っている、と言ってまで私に渡したのは、うちの黒ユリ会全員にいきわたる数のスタンガンやら何やらで、それも威力が半端ない非正規品の数々。

それ使ったらお嬢様達確実に死にますから、マジで。

「とりあえず簡単なものから揃えた。透子、待ってる！至急密輸船したてで、もつといいもんそろえてやるからな！」

「喧嘩はな、数も経験も同じようなら、持ってる得物で勝負が決まる事もあるんだ。」

「ふっ、この俺に喧嘩ア売るたあ、いい度胸だ！なあ、透子。」

と、きつくどこかを見据えて黒く笑うガンちゃん。

えっと、ガンちゃん、あのね、だけれもガンちゃんには喧嘩うってないと思うの。

それにね、この限度なさそうな威力のスタンガンや先っぽにトゲトゲがついてる警棒みたいなもの以上にもつと凄いものって何かな？

まさかピで始まってルで終わるもんじゃないよね？

密輸船ってどこから仕立てるの？

いろいろ疑問は尽きないけど、とりあえず、なんだ、まずお互いわかるような日本語で話そうね、ガンちゃん。

「ガンちゃん、ありがとう、でもね、これって黒ユリの子全員に持たせても、えっと何ていうのかな、扱いきれないっていうか、万が一相手が、ほら、ね、間違えて死んじゃったら大変だと思うんだ。」

そう言う私にガンちゃんはたちの悪い笑みを浮かべながら、こう言った。

「大丈夫だ、透子、それこそが俺の得意とするところだ！」

と胸をはる。

うん、わかった、わかったよガンちゃん。

これ黒ユリ館の私のダイニングのところに、トラのはく製達と一緒に眠ってもらおうね。

あそこが片付くのはいつになるやら、そうため息をつく私にまたしても信じられない言葉が聞こえた。

部下の若頭補佐の石井さんに宅急便の指示をしながら、

「実地の訓練をガキどもにさせなきゃなんねえな。食い詰めの人間、山谷にでも買って明日の朝でも買ってこい！善は急げっ！って言うしな。」

・・・善って何？ガンちゃん・・・。

私もヨウちゃんみたいに、ニヨロニヨロの所にいつて魂飛ばしたいけど、げんに今、魂が口から出てる気がするけど、ここで止めなき

や、明日の午後は学園内はとんでもないことになる。

黒ユリ館の前で強面のお兄さんたちに連れられてくる、ガンちゃんいわく、食い詰めさん達の姿を想像して、ブルブル頭をふった私は、ガンちゃん骨抜き大作戦に打って出た。

これがよくきくって経験上知ってるからね。

私はおもむろにガンちゃんの膝に乗っかって、甘えながらわがままを言いはじめた。

あれが欲しい、これが欲しい、ついでに、あまり綺麗なお姉さんのとこで遊ぶのは嫌だ、とか。

それでその合間に、食い詰めさん達の事を連れてきちゃ嫌だとお願  
いする、これ、大事！これぞ命よ！

乙女としての何かを犠牲にして、何とか食い詰めさんに関しては、ガンちゃんを阻止した私は、寝不足のままテストを受けに家を出る時、いつも通り見送るヨウちゃんに、昨晚思いつきり役立たずだったヨウちゃんに、あっかんべーをして家をでた。

## 第12話

試験も終わると、連日黒ユリ館につめる日が多くなった。

私の望んでいた自由登校、そのまま夏休み入るぞ！プランは、対力メリア戦勃発によって、消えていった。

いや、委員長達は、私が無理にここにいる必要はない、と言ってくれているんだけど、何せ彼女たちの燃え具合が半端ない。

苦節十年！なめんなよ！！的な世界なのだ。

さすがの私も最初の火をつけた責任あるものねえ、下にいく元気はないけど、代表室くらいには、と、こうして登校している。

この黒ユリ館1階はテスト終了日には、どこの選挙本部だっていう状況に急ピッチで整えられていった。

2学年、3学年の各自の名前やら親の職業、家族構成まで書かれた大判の紙がそのクラス毎に張り出され、そこにいろいろな情報を皆で調べ書き足していった。

リコールの鍵になる2年生に関しては、より詳しい情報をと、みなそれぞれのコネを駆使し特に細心な注意を払って集めていた。

親の会社が東洋リサーチという子が持つてくるそれは、大変事細かに集められたもので、その情報を主に黒ユリ会側に取り込もうと、大量に用意された携帯を片手に、皆どここの勧誘員かというくらい、はじめは電話を、というか留守電を通して2年に接触をはかっている

る。

中には3年の先輩が自分の婚約者とよろしくやってる、なんていう、いらぬものまで発覚して余計1年生を燃え上がらせていた。

名前の前に黒い花がついているのは、1年についたもの。

灰色はその色通りに、中途半端でいる者たち。

真っ赤にバツツケされてる者はカメラリア会支持。

今はいかにその灰色を黒くするかと、皆で熱く語り合っているところだ。

金持ちのやり方は、カメラリアもうちも、えげつない。

親の会社の力関係、取引の有無とその上下関係、それらがはっきりと黒と赤のバツツケの違いになる。

灰色の者は純粹にその影響を受けぬ者たちだった。

ただ、その灰色の多くがカメラリアメンバーズの庶務をしている結城古都先輩に対しては一目置いているという状況だった。

私が入学式で一人だけ意識したあの先輩だ。

カメラリアでも立ち位置が特殊らしく、カメラリアメンバーズがほとんど一緒に行動しているのが多いのに対して、いつも一緒にいるとは限らないらしい。

また、1年が2年生に接触してわかったのは、カメリアメンバーに、2年取り込みの動きが未だ見えない事実だった。

よほどの学園代表としての意識があるのか、それとも何か策があるのか、これも皆で思案中だ。

何はともあれ、おとーさんバージョンのヨウちゃんを発動し、あの最凶おバカコンビを押し回してもらっているの、現在私は、気楽に子供の喧嘩を落ち着いてやっていられる。

ヨウちゃん、万歳だ。

「もうムーミン一緒に見ないからね！」攻撃は確かにきいたな。

そりゃあ、それぞれの親が後ろに控えているのが事実だとしても、命のやりとりよりマシだと思っただ。

今の所はうちが優勢だけど、どう灰色が転ぶかなあ、そう呑気に差し入れのケーキをおいしくいただきながら考えてた所に、固い表情で委員長がお客を連れてきた。

なんと、くだんの結城先輩だった。

委員長には残ってもらって、さて、敵の本陣にわざわざ来る御用は、と挨拶もなしに話を振る。

座れ、なんても言っただけ、この人は敵だもの。

結城先輩は、今回のリコール騒ぎ以来、3年生の、特にカメリアメンバーズ関係の親の所が大変になっている、と私達をみつめた。

ちらつと委員長をみると、

「確かに私達の親が手助けしてくれているのは事実ですが、カメラア関係全部に影響を与えるほどの事ではありません。」

「悔しいですけど、せいぜいの所うちの井上でも数家が限度です。ですから、何がおっしゃりたくて、ここにいらしたかは、わかりませんけど答えられるとは思いませんが。」

そう答えた。

それに対して、つらつらと結城先輩は話していく。

まずカメラア代表の柏原家では、トップの交代劇がおき、代表の柏原孝子さんの本家一族が失脚、分家の一つによりその地位を追われ、更に横領の罪で告訴準備がなされている。

副代表の相馬順子さんの所は常務取締役の長男の不倫認知騒動がおき、それを発端にいろいろな事が明るみに出て、それを外に漏らさぬため上へ下への大騒ぎ状態。

そう言って、他にも事例を挙げて、これだけ一斉に悪い方に動いていけば、自然、目はこちらに向けるのは当たり前じゃないかしら？とにっこり笑って言う。

委員長も初耳らしく、じつと私を見る、え？なんで。

私は頭の中で、今回やけに静かだったレイちゃん達を思い浮かべた、うん、了解です。



まあ、とりあえず、帰ってもらおうかな、もう一つケーキ食べたいからね、邪魔なもの。

「何がいいいたいのかしら？少なくともうちで困るような事は、その話を聞いてても何一つないわね。」

「まさか、会社やそこに働く人たちを考えると、だとか言うおつもり？ 私たちに関係ない人が、学園を去ろうが、路頭に迷おうが知ったことではないわね。おわかりかしら？」

「少なくともあなたの方の親は私を調べたはずよ、それに私が突つかかる子猫ちゃんに、きっちりちやぶ台返しをした事も知らないはずないわね。」

「それなのに、私をはじめて表面からリコールを求めた時に、娘たちに引く事をさせなかったのは愚か以外ないわ。」

「・・・私、弱肉強食って好きよ。私の足でも舐めてみる？」

そう言った私に、なんと結城先輩はクスクスと笑いはじめた。

「違う違う、悪いね、ちょっと確認したかっただけ。」

「うちはね、おかげさまで輸入玩具の卸会社が倒産しそうなもの、まあ、時間の問題ね。」

「それでお礼を言いに来たの。私に自由をくれてありがとう、って。」

どうやら結城先輩は妾腹の子で、美しく育ちつつあると確認すると、  
ていのいい会社の駒として生きる事を求められ、それだけの為に引  
き取られた。

弟がいるためいいなりになっていくしかないのかと生きてきたのに  
今回の騒ぎがおきた。

自分はこの学園を去るが、弟と二人母方の祖母の元に数年ぶりに帰  
ることができる。

自分の力で自由に生きることができ感謝を言いに来ただけだと綺  
麗に笑って帰っていった。

「私も自分と自分の大事なもの以外興味がないんだ。」

そう颯爽と帰っていった。

その後、どういふ事だと委員長に絞られたが、結局、短期決戦は最  
良の道だと、黒ユリの勝ちだと下の階に報告にいった。

ドアを閉める時、靴を舐めましょうか？、と馬鹿にしたように笑う  
ので、手でしっしと追い払ってやった。

何はともあれ夏休みを待たずにカメラアメンバースは自主的にその  
座を降り、夏休み明けに新カメラアメンバースの選定投票が行われ  
る事が決定し、それまで1年ではあるが、しっかりした組織である  
黒ユリ会が代行を務める事に決まった。

最初に喧嘩を売ってきた山田先輩の流派は、この件が広く知れ渡る  
と門人離れが急速に進み、この先一気に経営が傾くことになる。

また委員長の従姉妹である書記の吾妻女史は同じく転校を余儀なくされた。

この二人はあの購買での騒ぎの翌日直接委員長が従姉妹のクラスにまで赴き、大層な喧嘩を売って最後に委員長が高笑いをしたらしいが、内容を教えてと言っても黒く笑って教えてくれない。

結局私の望みの自由登校を数日で取り戻し、私は念願の夏休みに突入した。

ちなみに伏兵のレイちゃんに何をしたのか聞いてみたが、それぞれ得意の分野で人間を幾人かたぶらかしただけ、だそうだ。

それを聞いてガンちゃんとキョーちゃんが地団太踏んで悔しかったのは言うまでもない。

二人がこんなに爽やかに見えるなんて・・・だから大人組は！そう思った透子がいた。

### 第13話

夏休みに入ってすぐ委員長からメールがきて、学校関係者じゃ委員長のみしか教えてないそれに、あれから委員長のお父さんにおもねる人間が極端に増えたという事や自分もあちこちのパーティーに連帯責任だと連れまわされる機会が増えてやってられないとの近況が入っていた。

それと例の従姉妹の家は業績不振を理由に、井上グループからの離脱が経営陣の辞任を正式に突き付けられ、どうやら総辞任で落ち着くそうだ。

従姉妹の所は兄である委員長のお父さんの所に、新しい役職か次の仕事の紹介をお願いにきたらしいが、委員長いわく時々好きかも、と思う母親に、次期当主となる娘に対して、敬意どころか立場もわかまえず我が娘の頭を踏みつけておいて、よくものこのこと顔を出せたものだと門前払いになったそうで、虎視眈眈と昔から狙っていた当主の座はおろか、実質この先どこも拾ってくれる所はあらわれないだろうと、ニヤリと笑う黒さ満開の絵文字でそれも知らせてきた。

私にとってどうでもいいそれを送ってきたというのは、本人も何かはじめみたいな感じで送ってきたのだろうと思う。

私を道具として使う、この根性、どこが上に立つ人間じゃないよねえ、はっ、笑うしかないわ。

委員長はとても早い頭の回転や臨機応変の柔軟さ、清濁もきっちりとしてる子だ。

そして濁でさえ使うことにためらわない、なおかつ人望も半端ない。それでなきや10年以上いくらお嬢様方だからといって、これだけの数を脱落者、まあ裏切り者と言ってもいいけど、それらを出さずまとめてこれる訳がない。

けれど幼い時からの従姉妹へのトラウマで、どこか自分から上に浮き上がるのを恐れているふうがあった。

その重石が外れた今、きつと彼女は大化けするに違いない。

私は姉と、かの男を思い浮かべ自分は今どうなんだろうと思った。

もう無様に逃げださずにいられるだろうか、とじつとあの逃げた場面を思い返し考えていた。

集中エステを受けながらぼつっと考えていた私にヨウちゃんは、足の裏のツボを痛いほど押してきて、ついその痛さに涙目になってしまった。

「い、痛いよ、ヨウちゃん。」

すると、

「透子、不細工になるような考え事は禁止だ。何を考えてた？」

と私を見る。

エスパーモードだ、まずい。

「冗談でしょ。」

って私は思い切りそれを鼻で笑ってやる。

ヨウちゃんは、それで正解とばかりに、また丁寧にマッサージを再開してくれた。

「で、透子、お前あいつに何おねだりしたんだ？あいつの事務所すげー事になってるらしいぞ。キョーから聞いたが覚悟といたほうがよさそうだぞ。」

「うそ？マジで？それより何で事務所？え〜。」

「馬鹿か、お前、そりゃあここに入りきれないからに決まってる。事務所で図体がでかい強面たちと、あーでもない、こーでもないって選んでるらしいぞ、お前に渡すの。」

あちゃあ、そうだった、何とか実地訓練をあきらめてもらおうと、ガンちゃんにおねだり攻撃発動したんだっけ、すっかり忘れてた！止めないと。

「ね、入りきれないって何で？何してんのさ。」

ヨウちゃんにガバッと起きて聞くと、

「だからお前は抜けてるっていうんだ。透子お前何もブランド指定しないで、洋服やらバックやらおねだりしたろ？」

「あいつが、お前に対してだけは宇宙バカになるってことを覚えて

おけよなあ。」

そう言っつて私をあきれたように見る。

だつてさ、一般庶民の私がブランドに明るいわけないじゃんねえ。

みんなが用意するもの、そのままなんだよ、基本、私。

突発的におねだり攻撃したんだもの、無理、ブランド指定なんてハ  
ードル高すぎよ。

私は急いでエステを終了してもらい、ガンちゃんの部屋にあわてて  
突入した。

遮光カーテンのせいで、真っ暗な部屋の寝室に未だ寝ているガンち  
ゃんに、ガンちゃん、ガンちゃんてば、ちょっと起きてよ〜、とベ  
ッドに屈みこみ一生懸命声をかける。

う〜ん、とまだ眠りの淵にいるガンちゃんの声は低くかすれていて  
とんでもなくセクシーだった。

ちよつと、もう、何なのよ。

ガンちゃんは私をかすかに開いた目でとらえると、そのままヒョイ  
と持ち上げ布団の中に私を抱き込む。

ガンちゃんは自分の胸にすっぽり入るようにガサゴソ私を抱え直す  
と、また眠る体勢に入っていく。

もう、違っつて、ダメだこれ、今は無謀だったか、よし！撤退は潔

くだ。

ちゃんと起きてからにしよう、そう思ってガンちゃんの腕から脱出を試みようとは何度も抜け出そうとするが、これが全然ビクともしない。

鍛えてる女子高生をなめるなよ、そう思って劉先生直伝の寝技から抜け出す体の動きを試みるが、ガンちゃんは綺麗に私の動きを躲して、更に抱き込んでくる。

ね、ねえ本当に寝てんの、おかしいよ、これ。

私これ先生から合格もらった数少ない自信がある技なのに。

私は中国五千年の技をきつぱりすつぱり諦め、王道の技にかえった。

ガンちゃん、ガンちゃん、そう声をかけ頬をぺちぺち叩く。

ガンちゃんはチラッと目を開けて私を見ると、それはそれは蕩けそうに笑い更に私を深く抱え込む。

……諦めた。

あと2時間もすれば起きる時間だし、運がよければ誰かが私が戻らないのに気付कि奪還を試みてくれるに違いない。

先ほどまで一緒だったヨウちゃんはダメだ。

あの時ガンちゃんから貰ったニヨロニヨロで目覚め、ムーミンのガードンライトシリーズにほれ込み、午後から届くはずのヨウちゃん



の心の師、スナフキンのライトが届くのを今か今かと見えない尻尾をパタパタふって玄関から一步も動いてないに違いないから。

そのせいで私の恒例のエステも今日は夜の分を中止したのだ。

私はあきらめて、ガンちゃんの胸に素直に顔を埋め、この暗闇の中でなら、姉と彼との事をもう一度ちゃんと考える事もできるだろうと、今まで触れようとしなかったそれに、暗闇の中ではじめて向き合った。

あの時逃げなければ……。

何がどうしてああなったのかを知るべきだったのか……。

それで理由がわかったからといって何かかわったのだろうか？

と深く考え、それでも私はどんな理由でも、私とつきあいはじめたからには、やはりそれらを受け入れる事はできなかつたらうと思っ

た。  
終わったことだと、本当に本当に今ようやく考え、真に彼らと決別した瞬間だった。

## 第14話(前書き)

ちょっと短いです。

## 第14話

何やかんやと私とヨウちゃん以外忙しい男どもを横目に、まあ夏休み最後に設定されている1週間の休暇に向けて、みんな頑張ってるからなんだけど、寥先生が中国に帰ったかわりにきた劉先生も一度帰国というので、私はお稽古事以外は日がな1日エステ三昧になり、もう又べーっとお前はカタツムリかっけてくらないな状態だった。

私、必要がない限り全然外に出ない生活がオツケーみたいで、何故か皆それを喜んでいる。

ゴロゴロしていると、それぞれ何これ？的な濃いちょっかいをかけてくるのがうざいけど。

まあ、例のファーストキスは鎖をかけて重石もつけて深い深い奥底に沈めてある、というか忘れたつもり。

それが、何故かセカンドを練習と称してテイちゃんにされた時から、最早当たり前に皆キスをしてくるから、キスすることに驚いてる訳じゃないけど、ゴロゴロ状態の上からかぶさって甘い顔と声で、どこの新婚さんかって事してくるのは、ちょっとねえ、いただけない。

「貞操の危機を感じる！」

と今朝の食事の席で皆をびしっつと糾弾してみたが、綺麗にスルーされた。

彼氏もいないのに、何かいろいろと慣れるなんて、ないない。

だってそうでしょう？

私の理想の交際相手は、誠実で私以外は絶対見ない人で、お互いが初めての相手がいい、と本気で夢見ているのに、キスとか、ほら・  
・いろいろに慣れてるのなんか、絶対違う気がするもの。

そう私と言えばテイちゃんが、ニヤリと笑い、だから仕事明けの大人組のエロさ半端ないんだって、それでゆったりとけだるそうに私の傍まできて椅子ごと背中から抱きしめて、そして耳元で優しく囁くのは反則だと思うんだよね。

「なあ、透子、俺達はお前以外見ないのは知ってたんだろ、俺達が相手で何が不足だ？俺達はお前に夢中なんだよ。」

そして耳にキスを何度もする。

それをみて、ユキちゃんがエプロンを外して、いつてきますの挨拶がわりにキスをしてくる、そして、

「透子、はじめて同志じゃ性の深淵を極めるどころか、下手したらスプラッタで全然よくないんだ。統計でもはつきりしてる。昔はともかく、今の俺達ほど透子一途のキレイイ男はいないだろ？何の不足りないよな。」

そうにつこり笑って私の頬をその外科手術で神の手と言われる繊細な指でツツつと撫で上げる。

何なの、この前提ぶり、見回すとヨウちゃんを筆頭に雲行きが怪しくなりそんな気配なので、空気を読める子の私は両手を上げてギブアップした。

私、深淵なるもの苦手宣言してもいいかな？いらなくない？ありえなくない？

そりゃあ、キスとか体中にされるキスとか・・・慣れたけど、深淵  
いらぬ。

私の初恋は悲惨なものだったけど、だからこそ夢見るセカンドラブ  
は私の目標なのに。

この私の身内のせいで、もしや難しいのではと、はたと今気が付い  
た。

えっと、夢見る王子様〓誠実な純情ボーイね。

その王子様に敵対してくるのが、暴力団のトップ＋水商売の神様＋  
経済界のトップ＋大病院の後継者＋やんちゃの王様、それに全てを  
牛耳るおとーさん・・・。

うん・・・、未来の私の純情ボーイにはちょっと無理かもしれぬ、  
というか無理だわ、これ。

どーすんの透子！まだみぬ王子様の為にも、何とかせねば、私にセ  
カンドラブは来ぬいの決定だ。

けれどこの私に打てる手が無いはずはない！と従順に手を上にあげ  
ながら「皆に逆らいませんよ」とアピールしつつ、心の中ではあ  
れこれ未来の夢の王子様の為の方法はないかと考える透子だった。

## 第15話

委員長からメールが来た。

この夏休み、聖桜学園への学校見学が半端ないものになっていると。カメラメンバーズやその取り巻きが転校や留学といった形であわただしく学園を去ったが、それをあまりある甘い蜜現象がおき、学園に嬉しい悲鳴を上げさせているらしい。

いつの世にも、目先の明るい人間はいて、騒ぎの元凶だった私的にはまあよかつたね、って感じ。

大量に抜けた3年生と2年制の欠員を募集するに違いないとの憶測と、例年通りの高校からの受験希望生で今までにない人間が学校訪問に集まっているらしい。

だけど、そんなバカな話でメールが来たわけじゃなく、夏休み明けにすぐ動きだす学園祭の実行委員会を黒ユリ会に打診がきたそうので、それを受けるがいいか、とのメールだった。

10月にある学園祭か、めんどそう。

まあ委員長たちに丸投げして、準備はともかく当日はばっくれてもいいかと思いい、それにはすぐ了解の返事を送る。

それより問題なのが続いて委員長からきたもう一つのメール。

委員長の井上テクニクスグループ本社主催で毎年行われる夏祭りに、

正式に黒ユリ会メンバーズを招待したいと思うがどうか、とのメール。

この夏祭りには黒ユリ会の子達の親の所も協賛という形でここ2年ほど参加しているとの事だった。

うーん、これってぶっちゃけうちらを使った示威行為だよね、誰が見ても。

私がつーん、とメールを睨んでるとヨウちゃんが私から携帯を取り上げメールを読むと、そのまま出勤前の夜組みに回していく。

そこにちょうど珍しく早く帰ってきたレイちゃんが最後にそれをみて、私の所まで携帯を戻してくれた。

まったく私のプライベートはどこ？っていう話だよね。

唆すように、からかうように私を見るレイちゃんに、オツケイ、わかってるわよ、ため息をつきつつ委員長に参加了解の返事を送る。

ニヤニヤする夜組みをジロっとにらみつけ、早くとっとと稼いで来い！と仕事へ送り出す。

戻ると、お茶を飲みながらレイちゃんが筆頭秘書の前島さんに今年も自分も参加するから調整するよう言い渡していた。

え、なんで？やめてよねえ。

私何か言ってるうと口を開いた時、ちょうどタイミング悪く私の携帯に電話が入った。

それは今送り出したばかりのテイちゃんからで、何事かと思えば俺も招待状今ゲットしたぜ、との電話。

私は声も出さず、そのまま電話をブチっと切ってやった。

嫌な予感に、チラリとユキちゃんを見れば、やはり自分の携帯で何やら話しをしながら私にVサインをだしてくる。

そして、元凶のヨウちゃんはテーブルで何やら書いている、よく見れば出席しますに○をつけてる。

それか、それが委員長とこの招待状か！お願い、マジやめて、ほんとやめて。

涙目でこんなのもってありなの、そんなに簡単に招待状ってゲットできるの？と委員長の会社をふざけるなと思いつつ、この分ではガンちゃん、キョーちゃんコンビも手に入れ乗り込んでくるな、と確信する私。

私の初めてのドキドキ学外デビューは、こうして厄介な保護者監視つきのものに決定した。

ありえない、恥ずかしすぎる！



第16話(前書き)

初学外です。

## 第16話

透子は機嫌が悪かった。

それはもう、顔にも動作にも出さないが、夕方から都内某一流ホテルのガーデン続きの大ホールを借り受け大々的に行われる「納涼祭・感謝のつどい」なる、どこの町内会だつていうイベントに、例のバカバカしい黒ユリ様として、一番見せたくないし絶対笑う気満々のまあ2名ほどは若干、いや、あきらかに感性が違うのもいるけど、その保護者達が待ち構えるそれに、何の因果か、いるのを承知で参加しなければならぬ自分に恥ずかしさのあまりしばらく途方にくれていた。

しかし当日を迎え、徐々にテンションが妙な具合になり、しまいは低く温度さえ感じさせないくらいの怒りの感情が奥底にわきあがってきた。

委員長たち幹部やメンバーが待ちうけていたホテルのロビーに姿をあらわした透子は、保護者達の渾身こめたオーダーメイドの上品な黄紗のカクテルドレスに身を包んで現れた。

その長い黒髪を綺麗に結び上げ所々にピンでさされた本真珠の大粒の輝きが、そこからわざと垂らされた黒髪でさえ、息をつめるほどの美しい少女がそこにいた。

そこだけ違うその存在の稀さを周囲に放って、今か今かと待っていたメンバーの前に堂々と現れた。

美しい女性などいくらでもいろいろな場所で見慣れていた委員長た

ちでさえ、底に氷点下の怒りを溜めて凜と前をみすえる透子にその瞬間圧倒されていた。

決してゴテゴテと飾り立てていているわけでもないのに、そこに現れた透子の凝縮されたかのような苛烈な、しかし鮮やかなオーラに、美しいとしかいえない、他に言葉など思い浮かばないそれに、存在に皆は自然と頭を下げた出迎えていた。

ホテルのロビーに30分以上前から綺麗に華やかなパーティードレスに身を包んだ100人以上の見るからなきらびやかなお嬢さんたちがいるのは、ここが一流ホテルとはいえ、ひどくめだっていた。

上品ないかにも令嬢然とした彼女たちは、それだけの数がいるにもかかわらず、うるさく感じるものではなく華やかさでもってここにいた人間を楽しませていた。

このロビーの喫茶室などで商談の打ち合わせや、同じように待ち合わせしている大勢の人間たちの関心をそれとなく一身に集めていた。時々いかにもな上流階級の人間たちと会えば上品に挨拶をかわしたりしている所を見ると、やはりそれなりの娘たちなのだ、好奇心にまかせてチラチラと見ていたものたちは思っていた。

頭の中で、しかし何事なのだろうと思いつつ。

そこにボーイに案内されて新たにロビーに足を踏み入れた一人の鮮やかな少女が姿を見せると、そのキラキラしい少女達が腰をかがめ、一斉に頭を軽く下げて挨拶した。

その壮麗さに、100人以上いる色とりどりのドレスに包まれた少

女たちの一糸乱れぬ優雅な礼は、それとなく注目していたもの達が思い切りまじまじと不躰と承知で見ってしまうほど美しいものだった。すると、挨拶がすむや、その少女の傍に幾人かが近寄り、そのまま並んで歩き出す。

それに続いて整然とロビーにいた少女たちが、次々と続いて去って行った。

白昼夢のようなそれに、思わず商談の相手ともども、手を止めてまじまじとその後ろ姿を見てしまった男は後程、それが最近噂に聞く件の集団だと商談相手から聞くのだった。

委員長から途中ゲストとしての挨拶が欲しい、と恐る恐る言われ、もうここまでできたら何でもやってやろうじゃないの！と思うのと、珍しくあの、そう、もう一度言うけど、あの！委員長が控えめなので、どうしたのさ？という目でみてやる。

委員長はそのいつもの私の様子に、ほっとした目を瞬間したので、すぐ表情を隠したけどね、あちゃあ、八つ当たりしてた？ごめん、とちゃんと謝った。

意思の疎通は大事なものね、特に戦うことを前提としてる集団わね。委員長は違うから、とぶんぶん首をふったので、私は今日は頼りにしてるわ、とにっこり笑って握手した。

うちの保護者たちを見ても、力がある大人なんてろくなもんじゃな  
いって知ってるからね。

「もうここまでできたんだから、要望があればどうぞ。」

別名開き直りともいうけどね、そう言っただけで後ろを振り返り皆にも声  
をかけると、何故か皆赤い顔をして私をウルウルみているだけ。

ふっ、珍獣か、私ってば珍獣扱いか？

それならそれで、私は待ち構えているだろう動物園の中に、優雅に  
けれど誰より強かに入っただけでやろうじゃないの。

動物園じゃ珍獣こそが王様だわ、牙のとれた猛獣なんて目じゃない  
わ。

人気者〓力でもあるもの。

珍獣結構よ！

黒ユリメンバーズが、初めて見る私服、それも正装姿も麗しい黒ユ  
リ様に、ただ魂を奪われていただけなんて、少しもわからない透子  
は、ここで奥底の冷えた怒りにプラスして女王様化まで発動し、よ  
り一層の鮮やかさをまとうて会場入りした。

私の前には私以外許さない！そうきつく前を見据えて会場に入って  
いく透子をさすがの委員長も見惚れていた。

## 第17話

広い会場に委員長に案内されて入っていくと、すかさず委員長の「両親がきて、それはもう丁寧に挨拶を受けた。」

私は初対面の同級生の親に会った場合のスキル、それも意図せず無理やりとも言う今回のその首謀者に、これしかないよね、ときちつと慇懃無礼という技でお返しをした。

夏の週末らしく、大勢の人間がざわつく集まりの現在進行形で注目を浴びているのは、顔寄せパンダ役の自分だと認識している私は、委員長の父親と握手しながら、こいつが元凶その1かと、にこやかに微笑みながらも必要以上に馴れ合う気はないかね、ときちつと態度で答えられたと思う。

さすが元凶その1は、うちの保護者同様食わせないやつで、自分は何も知りません臭を私に返してきた。

だから大人って嫌いよ、できる大人はね。

まあ、会場に入ってまだ数分しかたっていない状況だもの、ここは様子見ね。

もし子供と違ってかかってくるようなら返り討ちにしてやるわ、機嫌が悪い時の私は、うちの保護者ズもお手上げなんだから。

けれど、とりあえず大人しく1時間はここにいることを目標としている私は、委員長の父上と軽くジョブをかわしながらも、一応無難に次々といろいろな方に紹介されていた。

・・・委員長達黒ユリメンバーズを引き連れて・・・、ここ重要！  
なんで？なんでぞろぞろとついてくんの？あんたたち、おかしくない？ここで学園同様ついてくる必要がある？ない、ない、ないから！  
絶対ない！

私がすぐそばにいる委員長にそれとなく訴えかけても、綺麗にスルーする、それは上品に知らんぷり。

やはり腐っても委員長、さっきのロビーでの姿は幻かってほど生き生きと知らんぷり。

私の訴えをスルーしてオジサマ方とご挨拶。

絶賛ボーイさんたちのすんごい邪魔中だよ、これ。

会場を優雅に泳いでいる彼らはきつと、このバカガキども、邪魔だ！って絶対思ってるよね。

私のせい？私のせい？

外からみたらどういふ状態で見えているのか考えたくもないんだけど。

ぞろぞろとアリの行列みたいに、それよりひどいか、軍隊アリだ、そう、通った後何も残さないやつ。

私が紹介され皆で移動した後は、群れがあいた分、人のいないむなし空間になっっているはずよ。

もう、あんたたちは、ここは得意のお嬢様スキル発動させて、いろいろお話とかお話とか、ついでに大人同様うさんくさい怪しいスキルも会場のあちこちで発動させるとこじゃないの？

それなのに、それなのに、なぜついてくる？

私嫌がつてるよね。

私相手に舞い上がってるように見せかけてるけど、こつこつとこで黒さバレバレだっていうのよ、まったく。

まだまだ甘いよ。

・・・絶対うちの保護者ども、これみて腹抱えて笑ってる、間違いない！

ちんたらと顔合わせしているうちに終わらせてやる、そう思っていた私だが、予想もしていなかった恐るべし伏兵にこつしてがんじがらめになってしまってる。

誰かこのおバカな黒い子猫ども何とかしてよ。

委員長のお父上に目をやると、さすが親猫、完璧なスルーをみせてくれた、チツ！使えない。

真つ黒子猫は、自分の親のそばにきた時にはその子が前に出て嬉しそうに紹介してくれる。

うん、あんたたち邪気がないアピールね、怒りゃしないわよ、今さ



ら。

私は今日だけは早く家に帰りたくないなあと思い、海、海にいいかなあ、山は、山もいいかもなあ」と現実逃避していた。

そこに、梁間さんがすつと前に出て、私の家族です、と自分の家族を紹介しはじめた。

この梁間さんに馬鹿な女がつかかかったせいで、端を発した学期末の騒動なので、この時は会場が水を打ったかのようにシーンとして、わざとらしくたざワメキのめっきがはがれた。

私は播磨さんの父親、母親、兄たちを紹介されながら、何でもないことのように聞いてきた播磨さんの父親の言葉に心の中で眉をしかめた。

いけない、いけない化けの皮どころか慇懃無礼の笑顔もはがれかけたよ。

梁間さんの父親はこう聞いてきた、それこそここにいる人間がもっとも聞きたい事を直球で。

「子供の他愛ない喧嘩なのに、親の私が言つのも何なんだけれど、うちの娘を助けてくれてありがとう。」

「それから遅くなったけれど黒ユリ会発足にお祝いをいわせてもらっよ。」

「これから先も娘たちは楽しく学園生活をおくれると思ってもいいのかな？少し不安だね。」

「いや、なにに、いくら親とはいえ学園までは目が届かなくてね。いつまでも私達は親バカばかりだと、今も皆さんと笑って話したばかりだね。」

そう言つて次々と矢継ぎ早に軽い感じで話しかけてくるが私を見るその目は真剣でちつとも笑っていなかった。

ここで直球なん？え？

そんな私の疑問は井上さんのお父さんの言葉で納得いった。

「今この時間は黒ユリ会のメンバーの家族と信頼する部下しかいなくてね。」

「外部の方たちは招待時間を少し遅い時間に設定してあるんだよ。」

私は周りを見渡し、それでも大勢いるとしか思えない内部だと言う人間を、こちらを見つめる人間達を確認した。

ほんとだ、やった！うちの保護者いないじゃん、これで笑われずにすむ！と心の中で歓喜の涙を流し、少しぐらいならいいかと素直に答えてやった。

私はクスクス笑つて、後ろにいる子猫ちゃんたちを見て言った。

「私一人では無理ですけど、とても素敵な仲良しグループになりましたって、はじまったばかりですけど、そう思っていますの。誰ひとり欠けることないよう。・・・勿論欠けさせるつもりもありませんけど。」

「この先大学とかはどうしても分かれてしまいますでしょう？その後もいずれ結婚とか……。」

そう言つて、ちよつとため息をつく。

「そんなのとても楽しいグループがせつかくできたのに寂しすぎますわ。そう思いませんか？」

「それでね、私思つたんです。この黒ユリ会は学園だけでなく、卒業してもその後も皆の楽しい仲良しグループとして続けていきたいなつて。」

「いずれ結婚もするだろうけど、その時は旦那様にもぜひご協力いただければ素敵だと思いますか？」

そう仔猫ちゃんたちを真似して邪気もなく言つて笑う。

「そうよ、子猫ちゃんたちの爪は弱いけど、いずれそれも磨かれて強くなるわ。」

親の成獣はちゃんと磨かれた爪も牙もあるし現在使えるわ。

親たちの損得合わせたつながりは子供への愛以上に強いはずよ。

黒ユリ会を、一流やそれに連なるいろいろな業種の一つの巨大企業ととらえてもいいですよ。

これだけまとまつてるんだもんね、少なくとも娘たちはね。

幼い時からのお互いを通しての意図せぬ刷り込みは、一種の狂信だわ。

これからすりよってくるだろう人間や男どもも、この黒い子猫ちゃん達のつながりを絶つことなんて、裏切らせる事なんてまず無理だと思う。

まあ、テイちゃんみたいなプロにかかればどうなるかわからないけど、いいとこのボンボンにはそれはできない技よねえ。

「持つてるもんは使つてなんぼ。」

これ、ガンちゃんのわかりやすい教えの一つね。

お互いの会社に必要以上の足は踏み入れないけど、強固につながり、それを通してお互い潤っていけば、いずれ娘たちの時代には裏切りの心配もない一大集団になる。

ふふっ、みなさん今気が付いたみたいね、これから先よ、おもしろいのは。

ほらほら目の色変わってるわよ、大人ってやーね。

女性は太陽だった、って昔書いた人がいるけど、女が世の中少しぐらい動かしたって罰はあたらないと思うの。

ドンパチ戦争する前にちょっとかしこい女たちにまかせたら、お茶を飲みながら解決できることだって少しはあるんじゃないか、と思うわけ。

井上さん、梁間さんのお父さんは、私の話を聞いて改めて私に手を差し出した。

もちろん、私は今度は心からの握手をした。

私達の、いえ、私のいしずえをきっちりやっついてよね、との思いを込めて。

それからは次から次へと本気の握手。

最初の決意は、馴れ合わないよ、という決意は、保護者ズがないので機嫌いい私はどこか遠くに放り投げてしまったようで、外部招待者がくるまで残りの時間、ホテルの人間も追いだした中、親たちと私達の、いや、私とのざっくばらんな話し合いが、どこの修学旅行の夜のノリかって具合に行われた。

何ができて、何に気を付けるべきか、ここにいる貴方方の他の娘、息子はどう考えてるのかしっかりと確認をとった。

「信じる者は救われる。」

「されば求めよ、与えられん。」

けだし名言だわ、ただし私に対してのみ有効で。

第18話(前書き)

ちよつと短いかな。

## 第18話

外部招待者が続々やってくる中、私に追隨する黒ユリメンバー達とともに、氷柱花がそこかしこにおかれ、緑の陰から送られてくるドライアイスからの風にそれほど暑さを感じない庭園に急きよベンチを増設してもらい、座る者はすわり、私はゆったりとすわってる口だけど、宵闇の時間を楽しんで、大人の所から、会う必要もない外部招待者から避難していた。

私を囲むように大勢でいるには違いないけど、さっきの軍隊アリ状態より全然ましよね、というか、とても優雅なしつらえの庭園で、色とりどりの氷柱花にあてられた幻想的な照明もとても素敵で、なおかつそこで軽くつまむサンドイッチやクラッカーがとてもおいしくて、何ていうの、私的には「よきにはからえ」状態よ。

素敵な庭園、ムードもばっちり、その上邪魔者はここに入れない。

どうよ、これ。

親たちも、あのざつくばらんの話の後、力の及ぶ限り守ると誓ってくれたし。

現在進行形で、ここって黒ユリ館屋外バージョン、それもゴージャス版よねえ。

おいしい軽食つまみながら、目の前ではプロのカルテットが幻想的な氷柱花の中、庭園で皆のリクエストに答えて生演奏をしてくれている。

ふふ〜ん、これって極楽、極楽って状態だね。

このマンガーとキウイのジュースもおいしいし。

のんびりと皆でくつろいで楽しんでいると、続きのホールが少し騒がしくなった。

まったく演奏の邪魔はしないでよねと、ちらつと眉をしかめると、すぐさま数人の子猫ちゃんが見に行ってくれた。

ツーといえばカーですな、と、委員長を見ると目で当たり前でしょ、ふふん、と答えてきた。

はいはい、そーでございますか、皆さん優秀ですこと、と私も目で返す。

ところが、私が呑気にまったりと楽しんでいたのは、ここまでだった。

すぐに戻ってきた仔猫ちゃんが顔を上気させて報告するには、

「あの神林コンツェルンの若き次期総帥が代理ではなくご本人がいらっしゃった。それで、それに気付いた人間達の間で騒ぎになっている。」

というものだった。

その超VIPの出現に年頃の娘を持つ者も勿論、直接名刺交換もできたならと皆目の色を変えて、少しでもお近づきになりたい一心での大騒ぎだという。



・・・きたな、とうとう。

レイちゃんがいるなら皆もそろっているはず。

こっちにくるなよ、私は関係ないはずよ、との祈りを込めて、

私はおかわりのマンガーとキウイのジュースをちゃっかり頼みながら、カルテットの皆さんに初めて今宵曲のリクエストをした。

クラシックなんてあまり知らんもん、保護者ズの出方をあれこれ考えながら、スターウォーズのダースベイダーのテーマを頼んだよ。

さすがこんなところで演奏するカルテットの皆さんは、そのリクエストに何の表情もかえず、あのヴィバルディの流麗な演奏の後に、ダースベイダーのテーマソングを見事に演奏してくれた。

ダン・ダン・ダ・ダダ、と。

お行儀のいい子猫ちゃんたちはヴィバルディ同様優雅に表情も変えず聞いている。

ひととき大きな音が出た時に、それに合わせたかのように、ホールからは先ほど以上の不穏な空気がダダ漏れになって庭園まで漂ってきた。

続いてFFのセフィロスの片翼の天使リクエストだな、と思い、保護者ズが現在大金をかけて対戦してるマリオ&ルイージのラスボスも演奏できるか聞いてみようかと暗くなった空を見上げて私は思った。

第19話(前書き)

礼司視点です。

## 第19話

透子の学外初デビューの今日は一切の予定は入れず、透子のドレスも髪型も化粧でさえも、自分たちで整えた。

陽二のエステを今日は特に念入りに受けて出てきた透子の軽くはおつていたローブを、禎夫が近づき、するつと脱がせた。

その一糸まとわぬ透子の姿を皆で髪の毛ひとすじ見逃さず堪能する。

風呂上りの透子にパジャマを着せるのも、朝、制服をきせるのも、いつも手の空いている誰かがやっている。

はじめはありえない！恥ずかしすぎる！これはない！と騒いでいた透子も、これが男に、それも一流の男にみられる事がどれほど女を美しくさせるか、それが透子の自信にもつながる一つだと教えてからは、抵抗もせず受け入れている。

もちろん、俺達限定だと、しっかり念を押しているが。

誰がついたため息だか、それを合図にするように、禎夫がそのままシルクの下着から透子に着せていく。

ドレスは私の意見を大幅にとりいれた薄黄がかったカクテルドレスにした。

とても上品にカットされたそれは、透子の瑞々しい若さや、その美しいラインをあますことなく伝えるもので、透子に関してうるさい皆も納得のいく仕上がりだった。

ストッキングは、片方ずつ高津と恭弥が跪きそつとそつと優しくはかせていく。

髪は幸弘がその神と呼ばれるその手で器用に結び上げていく。

今回ドレスと共に用意した本真珠のピンをとどこどこに刺し、そこから少しずつ髪を綺麗に垂らしていく。

外科医でなくてもやっていけそうな腕前だと皆に褒められてまんざらでもなさそうだ。

透子のドレスを邪魔するものでなく、しかしその一度も染めたことのない黒髪の美しさを、きっちり主張した素晴らしいものだった。

最後には私が化粧を担当した。

口紅は皆がつけたがったので、紅筆で皆で交代でつけていったが、すぐ紅をつけてはそのままキスをしてしまうので、なかなか進まず、機嫌がよくない透子を余計機嫌悪くさせてしまった。

透子が待ち合わせもあり先に出かけていってしまったので、俺達は着替えをしながら、ゆっくりと透子の本日の隠し撮りのビデオを見つつ、軽く酒を楽しんでいた。

夏休みに入って透子がいるので、今まで透子がない時に設けられていた鑑賞会は中止になっていた。

その分、おのおの各自の仕事場の自室に、その映像が転送されており、こうして揃ってみるのが久しぶりの為、つい、いつもの自室で

の癖が出てしまったらしい陽二が、さきほど直接見れなかった全裸の透子の背中から太ももにかけての曲線の美しさに、さすが中国古武術は凄い体を作るだろうと言いながら、大型テレビに映る透子の背中を指で撫でまわし、その為陽二で隠されてしまった透子の姿に皆で大ブーイングだった。

もちろん透子は自分の姿が24時間とられていることなど知らない。

学園の黒ユリ館の私室から、もちろん教室も、家のも、全てこの隠し部屋にマスター映像が送られてきている。

我々が知らぬ透子はあつてはならぬと確か巖がはじめ言いだして、それはそうだと、学園は入学と共に、黒ユリ館はリフォームと共にカメラが密かに据え付けられていた。

巖は俺のベンガル虎のはく製や熊の毛皮の何が嫌なのか、と箱詰めされたままのそれが時たま映像に流れてくるのをみて哀しそうな顔をする。

禎夫の金ムクの大時計やふくろうは、1階のスペースに飾られて落ち着いたのに、何で俺の虎や熊はダメなんだ？と毎回みるたび大騒ぎする。

それを聞く私達は金ムクの置物ならまだカワイイものだが、本物の虎や熊は子供の、まして女の子じゃあ無理だろうよ、と冷たくみやる。

夕陽沈む中や暗い中、ましてや古い洋館で、本物の虎や熊がおかれたならば、さぞや不気味に違いない。

まして恭弥のチーム入りのあれこれなど、考えるだけ無駄な品々で、さすがの巖もあれない、馬鹿だといっていた。

恭弥自身はしまわれたままのそれらに、透子が関心ないのなら自分もないとばかりに我関せずでいる、というか最早忘れてに違いない。

皆それぞれが透子をつまみにし、うまい酒を楽しみつつ迎えの車を待つ間、透子にこれから万が一近づく害虫が出たら、との話が出てきた。

可能性を考えるだけで、我々の感情は奥底まで冷え切り、結局それぞれが、それぞれのしたいように対処すればいいだろうと落ち着いた。

「透子に近づこうとする奴は地獄をみせてやる。」

とは、巖が歯を食いしめて低く腹の底から宣言した言葉だが、それなら私は巖以上の地獄を用意してやろうと思う。

ホテルに入ると入口に支配人が待ち構えていて、その案内で会場の近くまで来たが、主催者である井上テクニクス社長である井上治也氏たちが入口に出迎えていたので軽く挨拶をする。

初めての参加を何やら言っで喜んでいようだが、透子がいなければ、この程度の会社のパーティーなど誰がくるか、意味がない。

筆頭秘書の前島がさりげなく井上社長を遮り、そのまま会場入りした私はすぐさま愛しい透子を探した。

巖と恭弥の二人はすでに来ていたらしく、その傍には、危うい男の色気にやられたバカ女がすでに群がっていたが、ことごとく一睨みで蹴散らされていた。

それでも遠巻きにしてるとは、厭きたものだ。

私が出たのをめざとく見つけた者達が私にたかりだすのを前島達秘書が素早くブロックをかける。

幾人かそれでも秘書を通して巖選された人間の挨拶を適当に受けているうち、前島が私にメモを渡してきた。

透子様は庭園の方で他のお嬢様方と一緒におられます。

井上社長達が庭園をブロックして、誰も通していない状況だ、と。

ほお、私は私についたままの井上社長に目をやり、微笑んだ。

私が微笑んだのをみた会場の人間達が息を呑んだ。

失礼な、私とて人間だ、冷酷だの悪魔だのと好き勝手に私を呼ぶが、大事な女に気を使ってもらえれば感謝ぐらいはする。

禎夫が幸弘と共に、やはり群がる女を避けて、こちらにやってきたので、メモを他の人間にわからぬように渡した。

幸弘は比較的知られているが禎夫は一部にしか知られぬ夜に属する人間だ。

その禎夫が私と気軽に話したので、何を勘違いしたのか、与党の政治家が図々しく寄ってきた。

井上社長に挨拶しながら、秘書がさりげなく止めるのを無視して私に声をかけてくる。

「いやいや、このような所でお会いできるとは、光栄ですな。しかしさすがこの名だたる不況下でも神林コンツェルンの業績はとどまるところを知りませんな。」

「世界でも5本の指に入る企業の若き次期総裁にこんな所でお会いできるのも何かの縁として、それでですな、これはうちの長男です、いずれ私の跡をと思っております。」

そう言いながら勝手に息子を紹介してくる。

ふん、面倒な！前島に視界の邪魔だ、早くどかせと目で促す。

前島がその親子をそれとなく引きはがそうとした時、そのバカな政治家が井上社長に声をまたかけた。

「そういえば一人娘のお嬢さんが、おもしろいコミュニティーを作られたとか？噂で聞きましたよ。」

「普通の娘をトップにしたてて、ご自分は後ろに控えるなど、さすが井上さんの所のお嬢さんですなあ。」

いろいろ黒ユリ会について知ったかぶりで井上社長に取り入るべくほめたたえる。



どこで耳にはさんだかしらないが、私の透子を私の前で侮辱するとは……。

私がどうしてやろうと考えていると、驚いたことに、私の前にいち早く井上社長が不快感をあらわにした。

「いえいえ、とんでもない、素晴らしい御嬢さんでしてね。うちの娘など足元にも及びません。」

ねえ、皆さん、そう言っただけで他の親にも声をかける。

黒ユリ会メンバーの親たちは、うちもまだまだ、リーダーの子が素晴らしいので、ただついて行っているだけです、などと口々に言う。

バカな政治家は旗色が微妙に違うのは感じたくせに、何故普通の娘をかばうのかという顔をして、後ろについている自分のイエスマンである腰ぎんちゃくの人間達に話をふる。

「いやいや、話題の娘さん方の親御さんたちは、さすが腰が低いですな。」

と言って、たいぎょうに笑う。

「そういえば今日はお嬢様方が参加していると聞きましたが？」

と空気も読まず聞いてきた。

井上社長が、

「子供は子供同士、一緒に庭園で涼んでおりますよ。我々も邪魔はするなど、大人は立ち入り禁止だそうです。」

そう言つて暗に邪魔はするなと言つてきた。

それもわからぬ愚かな政治家は、

「それはそれは、けれど折角の良い機会じゃありませんか。頼もしい娘さんの将来の為にもぜひご紹介いただきたいものですな。不肖ながら私も何かあれば力になりますよ。」

「いやいや、うちの息子もこの通り、まだ独り身でしてねえ、是非とも自慢のお嬢さま方をご紹介いただけたら、俄然仕事のやる気もおきるといふものですよ。」

そう言つてガハハと笑う。

後ろの腰ぎんちゃくどもや、好奇心で見たいと思つていた招待客の間からも、是非に、との声がたくさんあがる。

その騒ぎに、異質な何やらひんやりした空気が会場に溢れてきた。

見るとこの騒ぎを聞いた巖と恭弥がこちらにゆつたりと歩み寄つてくるのがみえた。

そしてどこに隠れていたのか姿が見当たらなかつた陽二まで、仕立ての良いスーツのポケットに手をつ突っ込んでこちらに来る。

ほお、久しぶりに怒ってるな、あれは。

自分たちは自慢ではないが透子に関しては沸点が低い、というかない。

我々の透子を舐めた発言をしたこの男にはきつちりちようどいい、透子の初デビューに合わせて無様に踊ってもらおう。

透子の後ろにいる自分たちの怖さをしつかりと周知のものとして、この際覚えてもらうのも一興、幕開けは華やかにかつ残酷に！だ。

やがて、騒がしかった声も、ここに近づいてくる剣呑な雰囲気の方達の歩みに合わせて、次第に場は静まり返っていく。

そしてその男達が神林コンツェルンの若き次期総帥、いや父親が入院し復帰も絶望な今、実質総裁である神林礼司の元に並び、自分たちを苛烈ににらみつけてきた。

政治家は、たかぴしやに

「君たちは何なんだ、私を誰だと思っている。勝手に近づいて何の用だ！無礼な！」

とその剣呑な暴力の匂いのする男達に向かって声をあらげる。

ところがそれに対して意外な所から声がかかった。

神林次期総裁だ。

無視できないそれに、政治家はその勢いをそがれるも、いつそ見事なほど低姿勢になる。

「さきほどあなたがおっしゃった、息子さんへ顔をみせろ、というのは、あなたのおっしゃるところの普通の娘である代表の子も含まれるのかお聞きしてもよろしいか？」と。

ぜひともつなぎをとっておきたい神林次期総裁の言葉に、何でそんな事を聞くのか一瞬、虚をつかれた形になった政治家は、とりあえず目の前の極上なそれにすぐさま食いついた。

「いえ、いえ、やはり、何と言いますか、やはりつり合いというものがねえ、うちだけでなくここにおられる皆さま方どこもそうでしょうが、勿論言うまでもない事でしょうけどねえ。」

そう言っつて小さく笑うと、それに賛同するかのようにクスクス笑い声が続つても聞こえる。

それを最後まで聞かず、礼司は前島に声をかける。

「前島、今笑ったもの、顔を見せろと言ったものたちのリストを至急私に上げる。」

「我がグループとの取引きがあればただいまを持って中止、他に對する処置はお前に一任し明日の夜までには、2度と私の前にその名前がでないようにしろ。」

そう言っつてくるりと振り返つて庭園へ向かう。

そこに何のことかわからぬ政治家がぼかんとしてるのに、声を荒げて先ほど政治家に怒鳴られた巖がはじめて口を開く。

「俺の名前は当仁会の高津組組長、高津巖だ。・・・夜にはせいぜ

い気をつけた方がいいんじゃないか。」

そう言つて政治家とその後ろの人間をきつく見すえて礼司の後に続く。

「うちは怖い者ないんだよなあ、若いって素晴らしいだろ。そう思わねえ？」

巖の後に続きながら、恭弥が言った。

「俺は？サザンロード？つてチームやつてる。覚えとけ。」

俺は忘れねえけどな、そう低く声を出しホールを去っていく。

幸弘がみんな怒ってるなあ、といいながら、政治家たちをみやる。

「何があつたとしても、うちのグループにはこないで下さいね。医療ミスは少ないのが自慢なんです。」

そう、林グループの病院にはくるなど、来たら命の保証をしないと暗に釘をさして出ていく。

禎夫は、政治家とその取り巻きの顔を見ながら、女の名前を幾つかぼつりぼつりとこぼしていく。

「どこの週刊誌がいいかなあ、いいネタだらけだ。」

そうニヤリと笑い、その女の名前に心当たりがあるものは、まさかと顔色を悪くする。

最後にポケットに手を突っ込んだままの陽二が庭園に向かう為背を向けながら、彼らに一度だけ振り向いて言った。

陽二に見られた者が息もできないほどの凶悪さを醸し出しながら、

「海外にはいかない方がいい。」とぼつり。

「黒幡は世界中どこにもいるから。」とぼつり。

黒幡とは中国から生まれた世界最大の犯罪組織だ。

その名前がどうしてここに出てくる？と、どこからささやく声が聞こえた。

しかしここにいる人間の今一番の関心は、今日の前で神林コンツェルンに切り捨てられたものたちへ向けたものだった。

ところが、その当事者である彼らはいまだ事態をきちんと理解していなかった。

一体何がどうしたんだ？それだけだった。

しかし主催者である井上社長がそれを破るような大きな声を出した。

「原田先生も、峰山社長も、それから皆さんも余裕ですね。」

「私など聞いていて恐ろしくなりました。筆頭秘書の前島さんの姿が見えませんか、既に皆さま方の会社への処理がどうやら始まっているみたいですよ。」と。

その言葉に、やっと何が何だかわからぬなりに、急いで会社に戻らねば、と慌ただしく会場を皆挨拶もそこそこに去っていく。

庭園に去った次期総帥にもう一度接触を、と頭の回るものもいたが、秘書たちにはばまれ、それが無理と知ると、ここにいるよりも、と自衛策を探りに足早に顔色をかえて出ていく。

彼らを見つめる主催者である井上の傍に梁間やその他の黒ユリ会の娘たちの保護者が、外部招待客の三分の一ほどいなくなったホールを見渡しながら近づいてきた。

彼らもまた顔色が悪かった。

自分もまた顔色が悪いかもしいれないと思ひ、かたわらで心配そうに見上げる妻の肩を震える腕でそつと抱いて、娘たちのいる庭園をみつめた。

## 第20話

やはり名前からしてダサかった、うん、そのせいかも知れない、そうしよう。

納涼、感謝・・・やっぱあれないよなあ、透子は帰りの車の中でそう思った。

レイちゃん達が、セフィロスのテーマの流れる中、庭園に「もう帰るよ」と迎えにきた時、委員長をはじめ皆固まってしまった、そりゃそう、噂のお方に普通じゃない風ダダ漏れのお人達だもの。

そして、ホールに戻り委員長のお父上に帰るためご挨拶をしたが、その視線は私を通り越して、私の後方に向かったままだった、これもそりゃそう。

しかし、あのホールの雰囲気の微妙な事ったらなかったし、せつかくの修学旅行の夜の宿舎のノリだったのに台無しになっていた。

ある意味本当に寒すぎて、見事に納涼だったよ、そういう意味じゃ納涼は成功だったな、うん。

ホールで何があったか知らないし、知るつもりもないけど、一度自分の立ち位置を確認するためにも、私の保護者ズと話し合わなきゃな、って思った。

私はマンションに帰りゆっくりお風呂につきり、今日のお風呂には甘いバナラとオレンジのバスボムを入れて、癒しタイムを満喫した。



そのままヨウちゃんのエステに直行し、ゆったりとしたパジャマに着替えてリビングに向かった。

テイちゃんがピラピラレースつきの着替えを用意してたけど、無視よ無視、残念でした。

さてと、真面目にお話といこうかな。

お酒を楽しんでいるみんなの顔をみながら、

「私ね、黒ユリ様で当分、行くつもりなの、今のところ。」

おお、スルーとね。

「で、結構、自由に動きたいときもあると思うんだ、というか動くつもり。」

お、注目成功！

「だからね、そんな時に自由がないとか困るんだよね、絶対。」

「はい、ガンちゃん、代表でどうぞ」

みんなあきれた風なので、私から指名して話をふつてみた。

ガンちゃんは、律儀に手を上げて、それから話し出す。

「バカか、透子。俺らは敵も多い、？はい、どうぞ？何て言っわけねえだろーが、お前わかってんだろ。」

「お前は俺達の唯一だ。理解していると思っていたが、まだ足りなかったか？」

と、レイちゃんが話にならぬとため息をつく。

いやいや、いつぱいですとも。

私は手を上げて、はい、確認です、と保護者ズを見渡した。

そして、ちゃんと言いたい事を言った。

私にはみんなしかいないし、みんなしかいない。

みんなもそうだって勿論わかってる。

委員長をはじめ、たくさん人間とのつながりが出来はじめたけど、それは私の生きる流れの中に生まれたシャボン玉みたいなものなの。

シャボンの膜を通してみている世界は、楽しく綺麗でも、私とは隔てた所に存在するものでしかない。

私がいつかそれを壊したくないって思う時が来るかもしれないけど、今はそれが別に壊れて消えてもかまわないと思ってる。

私の存在の認知の埒外のあるこれの一つでしかない。

私の中で大事なものは、既に皆でいつぱいで、増えようがない。

ねえ、何をあせってるの？私達は一つの生き物でしょう、違う？

どう周りが増化しようと、私達は私達以外いらないでしょ。

私は私以外、みんなが大切なものを作ったらなんて考えるだけでも嫌！

そう言って思い切りヨウちゃんに抱きつくと、

「透子が初めて外に開いて出ていったんで、ちよつとあせつたし、恐れもした。ざまあないな、俺たちもカワイイもんだろ？」

ヨウちゃんが私を抱き返して笑う。

私はフッフと笑って、

「まさか私がちよつと動くのもダメなんて情けない力しかないの？縛り付けなきゃならないほど。」

そう聞いた。

するとみんなは、とてもおつても怖い笑顔で「それはない！」と断言してくれた。

一人、わからないようにやるか、つて言っただけど・・・、うん、聞かないふり、聞いてない、聞いてない。

とりあえず、これで自由は確保！

私の前に立っつて全てを見えなくされるのは嫌だもの、ちゃんと知っつていたい、何があるうともね。

今日はこのままゲーム大会に突入して、朝までここで皆でゴロゴロ遊ぶことにした。

ユキちゃんは午前中診療があるけど、休診するって連絡してる。

何故か皆ウキウキしたまま何だかいい感じ。

私はもうあの時のように一人で泣くつもりもないし、誰にも決して泣かされるつもりもない。

それでもまだまだ子供で、だからじゃれあいながら、朝までゴロゴロして甘えまくり、波乱気味の一日を締めくくった。

## 第21話

外はすごい猛暑だけど、私は習い事関係も休みに入り、このまま9月まで古武術の朝練がきつちりあるのみで、これもマンションでやってるので、私ってばもしかしてマンションから一歩も出てないじゃん、そう気が付いたのが今日、既に8月も半ば、私ってどれだけ？

でもね、しょうがないよね、だって面白そうな本も続きの漫画も、楽しそうなゲームも、みくんなすぐ買ってきてくれるので、外出する必要ないんだもん、今のとこ。

私の好物、私以上に知ってるよね、凄くない？

夏休みの課題のレポートに終了って喜んで日付けを入れて、えっ？って今気が付いたわけ、もうこんなって。

あれだけ自由って言ったわりには、これじゃあみんなが機嫌よく毎日おみやげを買って帰るわけだ。

でも、これといって外出したい理由ないしなあ、私はヨウちゃんが途中でほおつたままのクロスワードを、いそいそとやりはじめた。

昼組みのレイちゃん、ユキちゃんは仕事中だし、夜組みのテイちゃん、ガンちゃん、キョーちゃんはスヤスヤ就寝中。

どっちつかず組のヨウちゃんとノンベンダラリと昼は過ごすことが多いんだけど、ヨウちゃんは珍しくさつき電話がきて、ただ今外出中。

それで一人で勉強も終わった私は、手持無沙汰にクロスワードの手つかずの3ページ目を解いてる途中に、久しぶりに委員長からメールがきた。

バッチシのタイミングだね、相変わらずやればできる子だよ、委員長。

今夜早めの夕食を兼ねて、黒ユリの幹部の子達と集まるけど来ないか、って。

あの納涼祭から2週間以上たってる。

このメールを送ってくるまでの期間は委員長たちの覚悟の時間だったのだろうと思う。

それが良きにつけ悪しきつけね。

ほお、根性あるじゃん、さすが真っ黒子猫ちゃん、そういつとこ好きだね。

私はすぐさま「いく〜?」と返事をした。

そうと決まれば、まずお風呂。

洋服はこの間ドレスと一緒に作ってくれたフェミニンなワンピースが幾つもある、バッチコイ!よ。

ふふふ、やっときたわ、一人でお出かけ。

夏仕様のワンピースの数々を頭に浮かべ、おしゃれ おしゃれ と声に

だし歌いながら、夜組みにはテーブルに手紙を置いて、昼組みには後でメールを入れよう、そうしようと思った、だって面倒だし、いろいろとね。

問題はちよつと出てくると外出したヨウちゃん、まだ帰るなよ、帰っちゃやーよ。

私は5分でシャワーを浴び、出かける準備をささつとすませ、委員長からのメールを受けてからわずか30分で支度を終えた。

淡いピンクのウエストをきゅっと絞った華やかなフレアーの膝丈のワンピースに繊細なヨーロッパ刺繍のボレロを合わせ、髪はアップにして、これも本真珠のちりばめられたバレットでささつと止めて、おそろいのネックレスをつけ、ちよつとす化粧にピンクのリップ。

どうよ、お嬢様のいっちょあがりだわ。

バックにはお財布、携帯、よし完璧。

昼組みが帰る前に、夜組みが起きる前に、ヨウちゃんが帰ってくる前にすたこらさつさと退散せねば。

待ち合わせのホテルのラウンジまでの時間、待ち合わせにホテルつてどうよ、と思うけど、まあ、私の関与する事じゃあないからいいけど、それまでの時間は久しぶりに本屋ウォッチングでもしようつと。

これで軽く1時間はつぶせるし、その後ゆっくりプラプラしながらで待ち合わせ場所までいけばいいわね。

久しぶりの一人、燃えてきたあ。

私はルンロンとマンションを出て、そして外の熱さに一瞬でノックアウトされた。

ここって日本だよなあ、何、知らないうちにこの暑さ。

マンションのロビーにすごすご戻り、マンションの係りの方にタクシーを呼んでもらった。

うん、体は鍛えてるけどな、精神の軟弱ぶりは鍛えられなかった、そういうことだよな。

本屋さんの入ってるデパートまでタクシーで乗り付け、ここのデパートはちゃんと係りの人がドアあけてくれるのよ、何気にセレブ気分？ってやつ。

私は本屋さんに入ると、ゆっくり平積みの本の間を流れ、新刊コーナーの海に溺れ、そうよ、これ、やっぱりたまには、この空間を楽しまなきゃあ、と思いながら、あの放浪の時期に探検したデパートの配置がもう少し変わっている事に、デパートをプラプラして気が付き、あの時から時間は流れているのかと、少しセンチな気分になった。

ここから待ち合わせのホテルは近いので、陽は沈んだことだしちゃんと歩いていくことにしたんだけど、何気にバックに仕舞い込んでいる携帯を確認するとヨウちゃんからのメール、着信がたくさんきた。

おっ、夜組み、昼組みからもきてる、ほほう、ヨウちゃん逆ギレし



て夜組み叩き起こしたな。

私は代表でヨウちゃんに電話をかけ、書置きにあるように委員長たちと黒ユリの女子会やるから、と話して、夕飯は今日いらさないからね、とユキちゃんに言っというて頼んだ。

ヨウちゃんに21時には迎えの車に乗って帰る事を約束して何とか電話を切ってもらった。

そして、ちゃんと携帯には出る、他に移動する度に連絡する事も約束した。

暑いのに委員長たちの待つホテルまでヨウちゃんと電話してるうちについちゃったよ。

それにしてもヨウちゃん声に元気なかつたなあ、後ろで騒いでる声も、あれって唸り声聞こえた気がする・・・うう、ダメダメ、考えちゃ、これからも慣れてもらわなきゃ。

さあ、透子、これが噂の女子会よ、用もないのにダベルのなんていづぶりかなあ。

私はちょっと期待して、そのホテルの回転ドアをくぐりぬけた。

## 第22話

私の初の女子会は、恩田徳子さんという黒ユリ会では委員長の補佐をしている子の母親が経営しているというレストランで行われた。

気楽なコース料理で、和洋まぜたものだった。

なかなか予約が取れないらしいが、鴨肉のフォアグラのせと、特大はまぐりの塩焼きが特に気に入ったので、ユキちゃんに早速帰ったら報告で、いつか作ってもらおう。

広い店内は6組ほどしか入店できない作りになっていて、全て予約制で本当にゆったりと2時間ほどの食事を楽しめた。

デザートのカキを、それも数々のおいしいそうそれを、サービスです、と持ってきてくれたので、遠慮なく別腹を発動して2個目のそれを、おいしい紅茶で頂きながら、これからの予定をどうするか話し合っている。

まだ20時近く、夜はこれからよ。

うーん、久しぶりの夜遊びにワクワク感満載。

ふふ、だーれが21時に帰るかっていうの、全然外に出なかった反動か、私はオールする気満々よ。

みんなお腹いっぱい食べすぎて、これは少し動かなきゃって事になった。

そこで、梁間さんが、そう言えば黒ユリの子たちが最近ハマってるスポーツがあるといいでした。

何やら怪しげなのがいいと、皆で誘い会っては、そこでちょい悪気分を味わっているらしい、と。

クラブだと聞いているが、そこは踊れるらしいしどうだろう、行ってみないかと興味津々で話してきた。

ほほう、ちょい悪とな。

黒ユリ上層部としてはどのような場所か知るべきだ、との黒い笑顔のもともらしい意見の元、委員長が早速誰かに電話して場所を聞き出していた。

早速タクシーを呼んでもらい、総勢12名でその「アーバン」なるクラブに遊びに行く事になった。

おっとメール、メール、忘れるところだった。

「今から委員長達と食べ過ぎたので、食後の体を少し動かしにアーバンという所に行きます。」

うん、間違いじゃないよね、送信っと。

都心の繁華街にあるそのクラブ・アーバンは、見た目は普通のクラブで入口にいる黒服の人まあまあそれなりな感じだった。

店内に入ると、もう一つのガラスのしゃれたドアがあり、それとなく中が見えるようになってる。

あちゃあ、一目で黒ユリの子がどこにいるのかわかるわかる。

着ているものから持っている物、その雰囲気が少しどころか浮いている。

このクラブで遊ぶには、この子たちじゃあ店としていい迷惑じゃないのお。

まっ、でもこうして通ってるって事は、お金を落とせばいいってスタンスなのかしら？。

店内の他の人間をチラッとそれとなく見てみると、キョーちゃんに近い匂いのする男の人や女の人が沢山いた。

私が最後にガラスのドアを開けて入ると、その両側に委員長達がかさず綺麗に並んで待っていた。

そして、フロアーの中央に近い所にいた20人くらいの黒ユリの子たちが私達に気づいて慌ててこちらに向かってくる。

何、何、何！まさかよねえ、お願い、謝るから、ホント謝るからそれだけはカンベンしてよ。

私の心からの叫びはむなしく潰え、例によって子猫ちゃん達が場にそぐわぬ上品なしぐさで、優雅に膝を折り、軽く頭をさげながら、挨拶をしてきた。

「しぎげんよう、黒ユリ様。」と。

・・・終わった、ふっ、たった店内に入って数歩で終わった・・・。  
いいともさ、こうなったら笑われてなるものか！と、ギツと気合い  
を入れて何事かとこちらをみる店内を見渡す。

私は空気が読めない、読めない子、心の中で涙を流しながら、そう  
よ、マリー・アントワネットの「お菓子を食べればいいのに。」に  
匹敵するような空気を読めない子になるのよ、いや、もうなるしか  
ない！

私は、優雅に「ごきげんよう。」と答え、皆が私を嬉しそうに案内  
するフロアを女王然として横切った、もちろん心で泣きながら。

オールはなしだな、21時すぎには、ちゃんと迎えに連絡して、大  
人しく乗って家に帰ろう、そう思った。

## 第23話

案内された二人掛けの椅子に一人で座ると、子猫ちゃん達が集まってキヤイキヤイ質問攻めにしてきた。

委員長達と夕食を食べてきたのと答えると、ずるい、今度ぜひ皆でとの話になった。

どこのフレンチがおいしいだの、海外で過ごしている子も多いので全員揃っては無理じゃないか、だの本当に小鳥のようにさんざめく。

私が夏休みの最後は、避暑にでかけて留守にするというと、では次の秋の休みには皆でスイスは如何かと言う子がいた。

何やらお父上がローザンヌに新しいホテルを手に入れたので、皆でいこうとのお誘いだった。

それならイタリアに所有する別荘にも是非に、とか、ポンポン次々にそんな会話が飛び交う。

このブルジョワ娘どもめ、私は鷹揚に目を細め、手でしっしと子猫ちゃん達を散らす、後で話は聞いたげるからと。

さすが羨の行き届いた血統証つきの子猫ちゃん達は、頭を下げて、綺麗に大人しく引き下がる。

約束ですよ、といいながらすぐ傍に控えている。

タイミングを待っていたボーイさんがすかさず注文を取りに来た。

もしか彼らもブルジャワめ、と会話を聞いて思っているやもしれない。

私もその仲間だよ、と言って友好を求めたいが無理だな、何気にこちらを見つめる目が痛い気がする。

できる子の委員長が無難に人数分の炭酸入りのペリエを頼んでくれた。

これじゃ踊るとかの雰囲気はないな。

それにしても私達のいるこちらと向こうじゃ、店内の雰囲気が違っていいよね。

まあいいか、今さらよね、私は委員長にこれからの連絡事項の幾つかを尋ねながら、臨時黒ユリ会を発動した。

どうせ雰囲気は場違いなら、ここは徹底的に黒ユリ会化よ。

ほら、旅の恥はかきすて、っていうじゃない？

もう2度とこないもん、こじ。

委員長がまず文化祭は例年通りでかまわないと思うが、今年は学園生から渡される一般公開日のチケットの争奪戦が今から白熱していると聞かされた。

一人当たり三枚のそれが凄いことになりそうだと。

家族以外に渡すチケットねえ、それは各自誰に渡すか腕の見せどころじゃないの？と聞けば、そんな単純なもんじゃないから困ってるんだ、との話しだった。

えー私関係ないもんねえ、会社関係全然ナッシングだもんねえ。

それとカメラメンバーズの選挙があるが、我々としてはどうするか、という話だった。

推薦人は問題ないと私を見る委員長に、い・や・だ・と答える。

そんな話の途中、こちらに近づく気配があった。

何気に見ると、この暑いのに紺とはいえ和服姿の母娘らしき人、それに付き従う男の人がいた。

こちらにまつすぐ向かってくる新たな場違いさんの登場に、店内の注目度はさらに増している気がする。

委員長達がかさず座る私の前にたちはだかり、私からは見えなくした。

もちろん、向こうからもね。

この店に入ってまだ30分くらいよね、まあ、タクシーからぞろぞろお嬢たちが降りるのは目立ってたから、ちょうど車で通りかかって、みつけて後をつけてきたって感じかな。

委員長の少しきつい声が聞こえた。



「何かご用でしょうか？山田様。」

うん？山田、そういえばいたな、あの山田かな。

そして年配の女の方らしき声がする。

「井上様のお嬢様でしたわね？お会いするのは木下家のパーティー以来ですわね。お変わりはありませんか？」

うげっ、きつそうな声。

「お久しぶりでございます。何か？」

おっ、委員長負けてないねえ、さすが。

「うちの上の娘がカメラメンバーズを止めて、アメリカに9月から留学するのをご存じかしら？」

「チラッと皆さまの姿をお見かけしたものですから、来年度高等部に入学する予定の下の娘をご紹介したいと思ひまして、お邪魔させていただきましたのよ。」

「ほら、あなた、ご挨拶を。」

うん、店内に流れる音楽が、何故ここでレフトアローンに？好きよ、これ、好きだけど、さっきのダンスビートカムバックだよ、会話聞こえるよね、これ。

小さな声が聞こえてきた。

「山田さくらと申します。お見知りおき下さい。」と。

おや、姉上とはまた毛色が違うな、そういう印象の声。

「本当に情けない事、上の美佐子と違って、こんな挨拶しかできないなんて。ごめんなさいね、同じように育てたつもりなんですけどねえ。」

と、ため息をつく。

やっぱりやな感じだ。

何がしたいんだ、このおばさん、のこのこ乱入しといて、娘を頼む、というよりも、なんだろ？ほら、牛乳に張った膜が舌についたような感触。

委員長が、

「ごく丁寧に挨拶をありがとうございます。」

とただ一言だけ返す。

だから、何？暗に早くここから出ていけ、と言っている。

そうだ、そうだ！いったれ、いったれ！と心で声援を送る、私はばつちり背中に隠れてるけどね。

ところが、さすがおばさん、無視だ、無視。

「あら、梁間さんの所のお嬢さんも一緒にですの。」

一段ときつい声にする。

最初から委員長の横にいただろうが！まったく……誰か塩まくといいよ。

梁間さんが、あたりさわりなく挨拶する声が聞こえる。

「本当に、変な所でお会いするわねえ、ここって皆さんひいきの店なのかしら？」

「うちの美佐子では、やはり皆さんとは……合わないみたいねえ。」

ほほう、そうきたか、でもあの家柄家柄と九官鳥みたいに同じ言葉しかしゃべれないんじゃない、遊びの程度もしたもんじゃないの、彼女も。

「何故なのかしら？ねえ、梁間さん、うちの美佐子を貶めて満足かしら？何故うちの美佐子なのかしら？うちの美佐子が何をしたっていつの！妬むなんて、恐ろしい子！」

おお！さすがバカの親は大バカ、ここで声出して笑っちゃダメ？だめよね。

私はすぐ前の子の足を軽く蹴って、促す。

その子はわかったらしく、ホントうちの子猫ちゃんたち使えるよねえ。

その子は播磨さんの前にさりげなく立って、

「山田様、お久しぶりでございます。このような所でお話もなんですので、改めてご招待させていただいてもよろしいでしょうか。それに、さくらさんでよろしかったかしら？来春のご入学を私達も心よりお待ちしておりますわ。」

そう無難に、おばさんを何気にリードして、どうでもいい世間話をしつつ出口に向かう。

うん、家柄好きには、家柄がいい仔猫ちゃんよね、作戦大成功！

そんなやれやれな私に、その言葉が聞こえた。

「この子は外部受験ですよ、ええ、美佐子とは違って付属からではないものですから。私はね、私は期待などしてませんけど、主人が学園に入れたがっているんです。本当にどこの馬の骨か知らぬ子を引き取ってきちんと我が家にふさわしいように育てている私の身になってほしいものですわ。美佐子の留学に合わせて、こうしてまわる挨拶周りも、この調子ですもの。恥ずかしいったらありませんわ。やはり血筋かしらねえ。」

そう何のためらいもなく話すのが聞こえた。

それを聞いた私は、すぐに別の子猫ちゃんに、あの子を連れてくるよう言った。

「お待ちください、山田様。これも何かの縁と 생각합니다。まして来春の外部受験は難しいとお聞きします。何か私ども学園生として

アドバイスができるかもしれません。きちんと送り届けますから、お嬢さんと少しお話させていただいてもよろしいでしょうか？私山田先輩には良く可愛がっていただいたものですから。留学されると聞いて寂しいですけど、勿論、アメリカの流派の会館でご指導なされるのでしょうから仕方がない事だと自分を慰めておりますのよ。」

そういつて引き留めたのは鎌倉で足利時代から続く料亭の子、ほら、家柄大好き攻撃再び！よ。

おばさんは、つきそいの男を残して、あっさりと出て行った、どうやら娘を褒められてご機嫌らしい。

おばさんが出て行ったのをしっかり確認してから私は声をかけた、「そばまでくるように」と。

例のリサーチ会社の子がさかさず私にメールをみせる。

山田家の事情って奴ね、早いねえ、いい子と目で褒めてやる。

ふうん、あの付添いの男は流派の懐刀と呼ばれる高見という事務局の人間が濃厚ね。

すばやくメールに目を通してしていると、私の前に立ちはだかっていた子猫ちゃんが綺麗に左右に割れた。

そこをおどおどと、今度受験といったから一つ下か、その態度のせいで似合わない紺の着物姿で私の前にその子が歩いてきた。

脇にぴったりと連れれの男がついてくる。

委員長が黒ユリ会代表斎賀透子様です、と私を紹介する。

私は顔を上げず、二人を目の前に立たせて、メールをつらつらと声にだし読んだ。

父親は山田泰三氏、言わずと知れた家元で母親はその弟子だった原祥子、婚外子、認知はされ、8歳で本家に引き取られる、ね。

間違いはない？そう初めて顔を上げ彼女をみて聞いた。

彼女は何なんだろうと言う顔をして私をみつめて、そして簡単に頷いた。

事務局の狸はそれに表情を変えず、そのまま頭を軽く下げて挨拶をしてきた。

「初めまして、高見と申します、家元の代表秘書をさせていただきます。ております。」

そう言つて私をみる、ビンゴね、懐刀さん。

ねえ、それであなたたち、初対面の私がつらつら読んだそれスルーするわけ？

そうなの、慣れてるのね、これ言われるの。

・・・どういじってやるうかしら？

私は二人を交互に見据えて、それはそれはお手本のような綺麗な笑みをこぼした。



## 第24話

「高見さん、でしたわね？私は山田さくらさんとお話がしたくて、残って頂いたのよ。きちんと送り届けますから、お帰り下さらない？」

私は、ゆったりと背もたれに体を委ねながら、マリー・アントワネットもかくや、な態度でこの年上の男に話しかけた。

うん、凄いやね、この女王様ぶり、だから、そこ！何でうっとりするんだ、子猫ちゃん達……。

高見氏は、

「申し訳ございません。奥様のご指示なものですから、私の一存では……。お話のお邪魔をするつもりは毛頭ございませんので、お側にいる事をお許しただければ、と存じます。」

そうすぐ返してきた。

言葉のみシオラシイって、さすがムカつくわね、自分がやる分にはいいけど、人にやられるのは嫌ね。

「日本語おわかりになる？さすがは山田先輩、ああ、元先輩だわね、その家の人間らしいわ。あなたは呼んでないから、私の目の前にいないで、さっさと消えてくださらない、そう言ってるのよ。」

私がぴしりと言い募ると、一瞬の沈黙、ちよっとお、この場だけじゃなく店内まで沈黙ってどういう事よ。



言葉を浴びせた肝心の高見氏は理知的なメガネ姿も完璧に、帰れという前と同じ表情で、悠然と立っている。

無視する気満々、それに委員長はじめ子猫ちゃんが柳眉を逆立てる。

その微妙な空気の中、何とおどおど娘から声がした。

「あの、ごめんなさい。私が頼りないんで、いつも高見さんには補佐して頂いていて、それで・・・あの、初めまして、山田さくらと申します。代表の黒ユリ様にお会いできて光荣です。」

その声を震わせながら話しかけてきた。

「さくらさん、こちらこそ初めまして。ところで、あなたお姉さまのお話は知っているのと思っっているのよね。」

「で、ね、誰が先に声をかけていいと言ったのかしら？私許した覚えがないのだけれど。」

そう口だけで微笑みながら目は感情を一切ださず言った。

「あの、え、えっ、・・・ごめんなさい。」

そう呟きながら高見を見て、子猫ちゃん達をみて、そして、唇をかみしめて下を向いてうつむいてしまった。

さて、まずはこの懐刀をどうにかするかと、高見氏を見れば、おっ、何？目に感情がチラッと出ていた、怒りと思われるそれが。

自分が邪魔だと、はつきりと、それもこんな年下の小娘に言われてもビクともしなかったのに、ちよいと、おどおど娘をいじつたらこれだ。

ふうん、面白い、私が面白がったのを察した委員長が、すかさず彼女に声をかけた。

さすができる子。

「あなたの姉であった人は、黒ユリ様の不興を買って、学園を出ることになったのよね。ご存じでしょうけど。あなたはどうなるのかしら、ね?」

梁間さんがそれに重ねた。

「あら、まだ入学さえしておりませんが、井上さんたら、気が早いこと。」

そう言って仔猫ちゃん達も合わせたように上品に笑う。

上品に一斉にこうして笑われるのって、・・・くるよね!こわっ!

おお、それにしてもみんなノリノリだ、何ていうの、これ?。

委員長をチラッと見る。

了解ですとも。

うちらシンデレラのママハハと姉ズ設定ね、おし!頑張らせてもらいます。

高見氏は、うつむくおどおど娘の肩をグイッと抱きかかえると鋭く私をにらんできた。

そして口調は丁寧ながら、その一段と抑用の消えた低い声その怒りのほどを伝えてきた。

「失礼をいたしました。何ぶん、さくら様は、いろいろと不慣れな事も多く、もしご気分を害されましたなら、後程丁寧に詫言ひ申し上げます。大変申し訳ございませんでした。本日はこれにて退出させていただいてもよろしいでしょうか？」

そう言つて返事も待たず、背を向けて彼女を抱えて去ろうとする。

「誰が帰つていいといいました！話しは終わつていません。流派が明日にでもなくなる覚悟がおりになるのなら、かまいませんけど。」

その帰ろうとする背中にきつく言つてやった。

高見氏はそれを聞くと、こちらを振り返りもせず言った。

「山田流の会館の幾つかは既に差し押さえが入り、お弟子さんたちの流出も止まりません。明日にそれが早まるうと、私の知った事じやありません。私は私の大事なものをいたずらに傷つけるほどバカじゃありません。お好きになさるがいい。」

そう言つて腕のおどおど娘を更に強く抱きかかえ、帰ろうとする。

高見氏は私に答えを見せてくれた。

ならば、と、私はおどおど娘に声をかける。

「さくらさん、あなたのその着物は何のためのものなのかしら？情けないし無様だわ。とっとと逃げ帰って2度と顔を見せないでちょうだい！」

これは本気で言っちゃった。

するとおどおど娘は一度足を止め、また歩き出そうとしたが、キツとこちらを振り返り、私を見た。

彼女が初めて私の顔を目をちゃんと見た瞬間だった。

「あなた方にはわからないわ。庶子というだけで見下され、好きで本家に引き取られたわけじゃないのに、いつもいつも、本当にいつもい로운な事言われ続けて。それでも目立たないように波風立たないように恥をかかさないように頑張ってきたのよ。それが急に表舞台に引き出されて・・・みんな勝手だわ、勝手すぎるわ！」

そう言っで大声で泣いた。

それを見た高見氏が痛ましそうに、その胸に抱き寄せる。

「悔しい、悔しい。」

そう、くぐもった声がそこから聞こえてきた。

私はゆっくりと立ち上がり、二人の元に行く。

手には例の黒ユリマークの刺繍のハンカチを持って、どう、これ空  
気読まないにもほどがあるよね。

私はまず警戒して私をにらみつける高見氏に手を差し出す。

にらみつけながらも怪訝な顔をする高見氏に、

「私の握手は高いのよ。」

そう言ってほがらかに笑いながら仲直りの握手を求める。

そして、怪しんで手をさし出さぬ高見氏に、まあ、そうよね、と、  
自分の手を戻しながら、そして傲然と一気に言う。

「山田流は一度壊すわ、徹底的にね、今さらこぼれた砂はいらない  
でしょう？それは理解できるかしら？」

「それでね、高見さん、この子は新家元としてどうなの、やってい  
ける実力はあるのかしら？」

そう聞くと、高見氏は一瞬私の顔をまじまじと凝視し、

「十分に！誰よりも！」そう力強く答えた。

「新家元の前で信頼でき、しかも使える人間はいるのかしら？」

そう聞けば、いる、としつかりとうなずく。

改めて顔を合わせ、高見氏と私は握手をかわし、だから話は終わっ  
てないって言ったでしょうに、と二人に笑いかけながら店内のテー

ブルのある方の席に向かう。

きよとんとしてる、おどおど子に、

「ほら、みつともない、涙を拭きなさい。」

と、ハンカチを渡し、それを聞いた梁間さんがクスクス笑うのが聞こえた。

テーブルに向かいながら彼女に言い聞かせる、初めて感情を爆発させただろう現在真っ白な彼女にしみ込むように、洗脳するように。

「もう、頭を、いい、自分の頭を誰にも押さえつけさせるなんてさせちゃダメ。あなたは私を選んだ新家元だと自覚なさい。あゝダメダメ、そんな自信のない顔なんてしないでちょうだい。辛気くさいの嫌いな。少なくとも高見さんをあなたは信頼してるでしょ。その人が、さつき全てを捨てて貴方を守ろうとしたのよ、そこそこはわかってる?」

彼女は一度目をつぶり高見氏をみると、真剣に頷いた。

「あなたは新家元になるのよ、誰でもないあなたがね。父親や母親、ましてあのバカ母娘がどう騒ごうとね、決まりよ。彼らがあなに何を与えてくれた?何もよ、何もないでしょう、だから、きちんと自分の取り分は奪い取るのよ。かけらも残さずにね。」

おどおど子は、私に答える。

「ええ、そうよ。何も、何も無いわ、何一つもなかった覚えはないわ  
」!

私に答える彼女の目が徐々に強くなっていく。

「あなたはこれから、自分の足元を眺める暇があるなら、かわりに無理にでも頭を上げて、目の前の邪魔なものを蹴散らさない。おさえつけようとするなら、反対にふみつぶしてしまいなさい。それが得意そうなのがちょうど傍にいるじゃない。あなたの前にふみつぶす状態で持ってきてくれるだろうから、あなたは迷わずきつちりと踏み潰しなさい！いいこと、歩みを止めるようなら、私が綺麗に蹴飛ばしてあげるわ。忠犬もね、力が必要な時は迷わず貸すわ。上手に得物を狩りまくって私を楽しませてちょうだい。」

さあ、黒ユリ会へようこそ、歓迎します、と委員長が言った。

そして、改めて今後を話し合った。

高見氏があと3年、彼女が高校3年を待って新家元に就任が一番ベストだという。

とことん今の体勢をつぶし浮き上がらせない、との答えに、皆で黒く笑い、新しく飲み物を持ってきてもらい全員で乾杯する。

それまでの、新体制の為の準備期間は、我々も影ながらできる事は応援するが、気をつけねばならぬ事はないかとこれも話し合う。

そうして今度は本当に新メンバーである彼らを笑顔で見送った。

彼女の入学は推薦枠でどうにかなるだろうと委員長が言って、私達はこちらからの新しい学年に思いをはせる、黒ユリ会に入ってくる後輩たちに。

何といっても私達乙女は、「シンデレラ」が好き。

けれど、「みにくいアヒルの子」はもっと好きなの。

店内、うん、ここ店内なんだけど、もう気にしちゃいない、だってさっきのあの修羅場よ、ドン引きよ！ドン引き！私達以外は絶対に最早呼ばねば寄っても来ぬボーイさんたちに、私はどこの崇り神よっ！と乙女的には思いはしたけど。

それにね、保護者ズが、きつちりと21時によこした迎えの面々、そう、面々なの、これが。

その人達がこちらを見ているのなんて気にしちゃダメだと思うの、時計もね。

よく私がいる場所みんなわかったよね、私アーバンで運動するしか言っていないのに。

それぞれがよこした迎え・・・何でバラバラでそれぞれよこすかなあ、やってらんない。

そのバラエティーあふれる面々がこの店内を威圧しているなんて、今さら気にしちゃダメよね。

何故か店内の私達以外の人間から憧れの眼差しを受けるキョーちゃ



んからの迎えさん達、いかにもなオーラ漂うガンちゃんこの迎えさん、ヨウちゃんの迎えなんてそのオーラを超えてもっと只ものじゃない臭が凄い。

そして、テイちゃんこのはキラキラしいお方達、店内で垂らしモード発動させてどうすんのって感じのバカ。

レイちゃんこのは、やつほの榊さん、この方秘書長補佐なんだけど、もう鉄板みたいなお人、私いつも「やつほ」っていつて挨拶してやる、こめかみピクピクしておもしろいの。

ユキちゃんこのは紅一点の桑原女子、ユキちゃんの秘書してるんだけど、とても男前なお姉さま。

もう2度とここには来ないはず、呪文のように唱えながら、すっかりぬるくなったペリエを私は飲んだ。

帰りの車を選ぶのも、また面倒事の予感がひしひしとする。

だって私達のここでの支払い、皆それぞれがカードを出して支払おうとして揉め、その雰囲気は真空みだったよ、言葉ってああいふ風に使ったって子猫ちゃんたちは、真っ黒化してみても勉強してた。

ボーイさんたちへのチップ、ようはここでの事は他言無用！って事ね、それがいつのまにか競争するかのようにならぬが飛び交い、別な意味で彼らを青くしてるんだもの。

それをまた、仔猫ちゃんたちは、しっかりと学習してた、ヤメレ、お願いだから、あんた達まだ十代だから、それ忘れちゃダメよ。

私は空気が読めない子、ここには二度とこない、私は・・・そう頭  
の中で繰り返していたけど、ついに私は切れた、プツンとね。

「うるさいのは嫌いだと言わせてもらってもいいかしら！」

私が彼ら迎えのものに、ひたつと目を合わせ最初の一言目を笑わず  
に言い放った時、再びの女王様降臨に子猫ちゃん達は、また、うっ  
とりとするのだった。

## 第25話

新学期が始まってすぐ、カメラリメンバーズの選挙告示が行われた。

1週間の期間を設けて行われたそれは、5人以上の推薦人と10人の補佐をつけて立候補するのが条件だったが、学園開設以来はじめての事態、立候補者ゼロで終わった。

そして、ここに呼ばれて透子はいた、学園長室に。

お久しぶりです、そう透子は挨拶し、ナイスボディーな秘書さんが入れたリプトンの安いティーパックのお茶を飲んでいた。

この学園長の香川惣一は、この9月の新学期に、大学部の学長でもあった前の学園長の一身上の都合により辞任を受けて新たに就任した人物で、透子も良く知る人間だった。

もちろん、ナイスボディーなこの秘書さんも。

「なあ、お嬢。お前さん以外いねえんだよ！そこんとこあわかつてんだろうよ、なあ、おい！聞いてんのか！」

「だ・か・ら・やだ！」

私はつくんとして行ってやった。

「だ〜！こんの、我儘娘め！俺が親父たちや組長みてえにお前に甘いと思うなよ！」

「そんでなくても、わざわざロシアから呼び戻されたこつちの身になつてみやがれつてんだ！半年だぞ、半年で呼び戻された俺をかわいそうだと思わねえのかよ、おい。カワイイ女どもやっど手なづけて、これからつー時呼び戻されたんだぜ！まったくよお。」

そう言つて頭をガシガシかく。

そうこの新理事長はガンちゃんこの若頭さんの息子で、頭だけは確かに良く、アメリカで飛び級をやり20才には有名どころの大学を卒業し、その滞米期間にガンちゃんの組のやばい取引きをきちつと作り上げ、メキシコ国境沿いに日本の、いやアジアの暴力団では初めての拠点作りに成功した人物でもある。

ある意味天才なのかバカなのか、私にはイマイチ理解できない人でもある。

ロシアでお水系に働かせるの女の人を集め日本で稼がせる組織づくりをする、それとは別に人身売買組織から作りあげ見目麗しい子供達を育てて、一流の娼婦や男娼を養成し、また用心棒になりうる子供も育て、世界中にその子らを売るといふ案もガンちゃんに提案して許可と資金を得るや、嬉々としてその責任者としてロシアに行つただけけど、今回こうして呼び戻された。

「だって、ソウあんたの自業自得だと思つよ、絶対。元からあつた組織ぶつつぶして乗っ取つたら、底辺にできる人材ゴロゴロしてるつて、そんでそれ発掘して拾い上げて忠誠心植え込んで、組織まかせられるほどにしたの自分じゃん。もうあんたいなくて動くんだもん、何ていうの自業自得つていうのよ、それ、私が親切で教えてあげるけど。」

私はリプトンティーパックの安い大型パックだろう、その紐を持ってカップから出し、

「コロ、お手。」

そう言った。

コロと呼ばれたナイスボディーな秘書は、すかさず私の前に手を差し出す。

その手にティーバックを乗せて教えてやる。

「コロ、紅茶のティーパックのこれは取り出すのよ、お客に出す時はね、わかった？」

そう笑ってやれば、わかったとうなづく。

コロ、相変わらずカワイいな、後で頭なでなでしてやるわ。

ソウのことだ、わざとこのティーパックしか用意せずに、のこのこやってくるバカどもに、せっせとこれを飲ませてるんだろう、あなたの考えそうなことだ。

コロはしゃべれない。

そして、美女にしか見えないが、ソウが子供の頃からガードとしてついているれっきとした男だ。

けれど仕事柄、勘違いする女や媚び女に嫌気がさしたソウに、コロが女装してわずらわしい女を排除しろ！と命じられ、アメリカにつ

いていくとき胸にシリコンを入れ、またかかさず女性ホルモンも与えられているので、はた目にはナイスボディーな大柄なモデルのような超美人なお姉さんにしか見えない。

ちなみにいじったのは胸と永久脱毛だけだそうだから、コロ自身は男のままなはず。

どこぞとのハーフラしく、綺麗な黒がかった金髪に目は青だ。

若頭であるソウの父親が香港で息子の遊び相手にと酔った勢いで買った二人の子の片割れで、その時既に舌は切り取られてなかったそうだった。

名前もなくソウの犬と呼ばれていたのも、私が二人をコロとシロと命名し、二人はそれ以来私をおかーさんだと思っている。

暴力沙汰にリミッターのない、ある意味純粹培養なワンコ二匹は、ソウが語学やもろもろを教え、暴力のノウハウをプロに仕込まれたのだけど、肝心の心は誰も育てなかった。

ソウが私の家庭教師としていた時、ロシアに行くまでの間は、毎日のように一緒にいた。

このワンコ二匹も当然いつもソウの傍にいた。

本当に微動だも表情も変えず何の主張もせずに傍にいた。

ほら、私生きてない奴嫌いだから、いっぱいいいじめてやったんだけど、きつと殺されても反応なかったと思うわ、この犬は、そんな感じだった。

ある日犬、犬呼ばれるのに、犬なら名前を付けようと、私が名前をつけたの、コロとシロって。

きよとんとしてる二人に名前を覚えさせ、それから一気に二人は変わっていった、いい意味で。

親が名前をつける、そういう知識はあっても考えもしなかったそれに、突然名前をつけられ、私に頭を撫でられたワンコ達は、瞬間私をおかーさんとして認識したらしい。

それから自由な休みの時間は私の傍を離れない二人にソウの許可をもらい、いろいろな事を教えた。

人を殺したらそのままにせず、ソウかそれに準じる人間に対処を頼むこと。

一般人がいるところでは、大人しくしている事。

何より危険を回避する行動をきちんととる事。

ごはんは食べなきゃダメな事。

彼らの日常のTPOに合わせて、保身を中心に教えていった、プロの意見を交えてね。

ある意味何もなかった二人の世界は少しだけ人間らしく広がったから、こうして秘書として形は何かなっているように見える。

一度ソウに私がおかーさんなら、ソウがおとーさんだね、って言う

たら、真っ青な顔して、

「マジで俺を殺す気が、お嬢！」

「二度とそんな恐ろしい事は言わないでくれ！」とスライディング土下座をお願いされた。

それだけでなく、若頭である父親が私がワンコ達のおかーさんになった事で、ガンちゃんに詫びると、指を詰める、詰めないの大騒ぎになったと聞かされた。

うちの保護者ズは二匹のワンコに関しては、こいつら人間じゃねえな！と本質を見て言って、人間には決して戻れないだろう！とも言った。

保護者的には全然オツケイなんだそうだが、人でなければ。

まあ、そんな新理事長が、見た目いい男だし、綺麗に化けの皮かぶっていれば、アメリカ帰りの優秀なインテリにしか見えないし、二人の秘書も「できます」オーラの人間にしか見えないし、今の所大丈夫そう。

新理事長として最初紹介された講堂で見た時は、さすが私もえ〜と思っただけだね。

仔猫ちゃんたちは、素敵だと悲鳴を上げてたけど、私は別の意味で悲鳴を上げたよ、だって一つ間違えば行方不明者続出上等！だよ。

それで話を戻すけど、カメラアメンバーズに黒ユリ会代表の私と中心幹部たちがなれ、とお願いされているわけ、学園長室で。



これをお願い、というならね、地が出てるよ。

私が頭を縦にふらないでいると、

「俺、やっぱり引越するかなあ、ボスと同じマンションって何の拷問だつっの！階が真下とはいえ、やっぱりだよなあ、引越ししよーかなあ。」

そう私を見て、大層な椅子にだらしなくのけぞりながら言ってきた。

まずい・・・私はコロを見た。

はた目には何も変わったようには見えないかも知れないが、私には耳を垂れブルブル震えて、あまつさえクーン、クーンと鳴くコロが見えた、用事でここにいないシロの泣く幻も。

そう、この新学園長とコロとシロのワンコは私達のマンションの真下に、非常用の脱出部屋としてあるその部屋に今住んでいる。

そして、コロとシロはヨウちゃんの毎日がかさず見る「ムーミン」にただ今絶賛夢中になっている。

ムーミン上映が始まる前には、非常用の通路からリビングにいつのまにやらやってきて、それは何時間でもムーミンがはじまるまで大人しく座って待っている。

非常用通路の齟齬はないか引越してすぐ、それを使ってソウがやってきたとき、恒例のムーミン上映会中だった。

コロとシロは、初めて見るそれに夢中になって、同じくムーミン大  
好きヨウちゃんに気に入られ毎日見に来てもいいと許可をもらった。  
ソウは「ガードを追いかけてこなきゃいけないなんて、間違ってる  
よなあ。」といいながらここに来ては、レイちゃん達に、いろいろ  
教えてもらって、こちらでもご機嫌だったりする。

ほんと、私的に間違ってるのは非常用が毎日平然と使われてること  
だと思っただけだね、誰も言わないから私が言うけどさ。

そんなわけてソウが言った引越すに、私はしぶしぶ降参した。

大丈夫だよ、おかーさんはコロとシロの味方だから、安心なさい、  
大丈夫だよ。

私がかメリアを受けるとソウに言うと、コロは見えない尻尾を振っ  
て表情は相変わらずだけど喜んでるのがわかった。

よしよし、カワエエね、おいでおいで頭撫でてやろうね。

ソウ、一個貸しだよ、そう言ったら何故か青い顔をするソウがいた、  
失礼な！

こうして私は前代未聞の選挙なしで新学期早々かメリア代表になっ  
た。

## 第26話

正式に黒ユリ会がカメラメンバーズにそのままシフトされ、元々学園祭はうちら黒ユリ会にまかされていたから、できる子の委員長達にそれはまかせて、私は黒ユリ館の私室で暇さえあればのんびり過ごしている。

カメラメンバーズになったから、どんなもんかとカメラ専用の部屋のぞいたけど、豪華なだけで全然癒しのない空間で、結局そこは私専用の物置として活用することになり、ホラ例のいらん品々を運ばせてもらった。

あそこ人の気配ないうえ熊のはく製とか置いちゃったから、絶対に学園の都市伝説となるの目に見えてるよね。

私のせい？知らないわ。

今日も今日とてお気に入りの私室でのんびり好きな小説読んでいると、シロがおつかいできた。

シロは東洋系でも中東の血が入っているらしい黒髪、黒目の鋭い容貌で、なおかつガタイもいいのも相まって、学園生から「大鷹の君」と呼ばれている、笑っちゃうよね。

まあ、ここ若い男少ないから、はつきりいって、ワアワア騒ぐいいおもちゃになってる。

ちゃんと皆自分の家やもろもろの現実を知っているから、ファンタジーとしてソウヤシロにワアワア言って遊んでる、ね、かしこいで

しよ。

シロは黒ユリの私のこの部屋にくと、何故かいつも天井の一角をみる、なんでだろ？

お願い、毎度毎度、止めてって感じよ。

私、貞子関係苦手なんだよね、今度塩盛つといた方がいいのか聞いてみよう。

シロは天井をいつものようにじっとみて、それから最近私のはまっているヨーグルトを私におもむろに渡す。

「シロありがと。」

そう言うと、私に頭を差し出しナデナデを催促するため、身長180超え、体重も100キロは超えている、いかにも鍛えてます！な体を一生懸命にかがめてくる。

私がよくしと撫でてやると、それはそれは嬉しそうに、またソウの元に帰っていく。

この間一言もしゃべらんけど・・・。

私シロの声聞いた事ないんだよね、ほら、相方コロだからコミュニケーションの仕方はアウンの呼吸のみ？

そのシロはもうじきロシアに状況を見に行く為一度学園を離れる、ソウの命令で。

またまたしばらく会えなくなるので、毎日学園内でもこうしてロシアに行く「ほつびにこ」にくる。

私はシロがロシアで何をしてくるのかは関心はないけど、ソウがこうして、おかーさんに甘えさせる事許す事で察するに、どうせロクでもないことだとはわかる。

今回のロシアプロジェクトが、ガンちゃんの組織のトップの方の覚えが良いらしく、ガンちゃんが組織の3人の理事の一人に格上げになるらしいと聞いた。

面白くないのは、ワクを追い出される人間で、九州統括部長、まったくヤのつく人の組織の名称じゃないよねえ、これ。

その九州統括部長のなんとかという人の組が、ロシア組織にちよっかいをかける動きがあるらしい。

そんでソウの父親である若頭直轄の組の人間と、シロがロシアに行く事になったんだよね。

今度ガンちゃんに言ってみよう。

おどろおどろしい名前の組ばかりだから、身内でもこうして争うんだよ、〇〇系〇〇組って。

ほらサクラ組とかスミレ組とかにしたら、なんか喧嘩しずらくない？早くトップになって改名してって言ってみよう。

学園は10月に入ると学園祭に向けて午後の授業はなくなり、来週の3連休にある学園祭のムード一色にそまっている。

各学年で合同で行われる催しは喫茶コーナーが2つに、体験コーナーが2つ、展示コーナーが1つと決まっっていて、それぞれ内容は自由だけれど、殆どが業者が入って準備するので、学園祭とはあれぬ本格的なものばかりだ、このブルジョワどもめが。

私達1学年は例のレストランを経営しているお母さんプロデュースの元、イタリアンカフェと飲茶カフェをやることになっている。

ヒラヒラレースの蹠丈のドレスのイタリアンカフェとチャイナ服も豪華な飲茶カフェのメイドさんが登場するんだよ、ふふっ、マジ本物のお嬢たちだよ、みんな萌えるがいいよ！

私は学年の催しに参加せずに、学内生用の初日と翌日の家族専用日のそれぞれ一度の見回りと、最終日の一般公開日の午前、昼、午後の計3回の見回りがある。

やってらんないよね、猿回しの猿じゃないんだから、それを聞いて私が文句を言う前に、にっこり黒く笑う委員長の顔を見て、私が綺麗に両手を上げ白旗をあげたのはしょうがないよね。

だって、カメラリアとしての書類仕事も、代表印をつくまでだけにして持ってくる委員長に私が逆らえるわけ絶対ないもんね。

学園長でもあるソウは昨夜、例の如く上にきて、

「舐められねえよオーにしねえとなあ！」

と恐ろしい言葉と共に、来賓リストに〇と？をつけていた。

かわいいワンコ達がムーミンを見て、フローレンの花冠にうつとりしているというのに、なんで飼い主がこのバカなんだろ。

うん、よしよし、今度花冠作ってあげようねえと思った私に、ヨウちゃんがこちらをすかさず見た。

何でわかるかなあ、OK、OK、ヨウちゃんのもちちゃんと作るよ、そう目で答えた。

このソウの舐められてたまるか発言に、珍しく今夜はうちにいたガシちゃんが、

「あたりめえだ！てめえもいつかキョー同様俺の補佐につくんだ、舐められるような真似しやがったら承知しねえぞ！」

とハツパをかける。

そのあとさんざん2人で盛り上がっていたのはいいけど、只のお金持ち学園の学園祭だよ、そこんとこわかってんの？

ちなみにうちの保護者ズは学園祭立ち入り禁止だ、これだけは頑張って阻止した私はえらいと思う。

まあ、代わりにいろいろおねだりをかなえる事になったけど、目の前の惨事は回避した事には変わらないもの、私は私を褒めてやったよ。

ちなみにソウが？をつけている来賓は、新学園長の挨拶周りにきた

中で気に食わなかった奴で「地獄を見せてやるリスト」だそうだ。

あのさあ、あきらかに？多いよね、それ。

そんな不穏な空気醸し出し何やら具体的に話し出した2人と、ムーンをみて蕩けてる3人。

私は相も変わらずの時間を過ごしていた。

私はシロが帰ってすぐ、カメラリア代表として学園祭期間中に私が相手をしなければいけないという委員長が持ってきた来賓の接待リストと、そのタイムスケジュールの説明を受けながら、やっぱソウにできれば学園祭前に地獄をはじめてもらうのはありだろうかと本気で考えていた。



## 第27話

私のまったり計画はどこにいったの？という怒涛の、マジで半端なかつた忙しい学園祭は、2つほど女王様モードを発動したものの、おおむね大成功に終わった。

最終日の一般公開日に発動したそれらは、姉妹校の生徒会だという勘違い女に対してと、この学園の同窓会役員というおっさんに対してだったが、もちろんウイナーはこの私だ。

見世物パンダにはなつたけどね、ええ、「おつかねえ」とどこぞから聞こえた声は・・・なかつたことにしよう。

学園祭最終日に、全ての片付け、まあこれも殆ど業者がやるんだけど、それを終わるのを待って夜18時から今回初めてお疲れ様パーティーをホールで行った。

ぶっちゃけて、はちゃめちゃで、何でもありなそれは楽しいものになった。

うん、何ていうか学年の垣根が取り払われた感じだった、基本ノリががいいのね。

はじめは参加している3年生が浮いていた感じで、2年はもともとあっさりしていたから、すぐに1年といい感じになったんだけど、それをみかねた3年生とうちの1年の有志が、急に舞台上がってコントをはじめたの。

うちの学園のブラックジョーク連発の、それも私はどんな鬼ババ？

って感じの奴、実名いろいろポンポン出て、初めは引いていた皆だけど、はたからみたらそんな感じかもって気が付いて、そしたら、そのうちクスクスから大爆笑になって。

そんなもんなのよ、うちらまだまだ子供だもん、それからは無礼講もいいとこで、うん、はじめてこの学園好きかもって思ったの。

2時間半くらいで解散になって、それぞれが迎えの車に乗って帰ったり、それに便乗してそのまま遊びに行くという人もいたけど、翌日から学園祭の代休に入るのもあり、私もテンションあがったまま沢山の人と抱き合ってバイバイした。

まあ、そんな楽しい気分もガンちゃんからの迎えの車に乗って30分くらいで消えちゃったけどね。

何でかって？

そりゃあ現在、絶賛逃亡中だから、パーティードレスのまま、私。

今夜の「黒ユリ祭」のために、レイちゃんを作ってくれたドレス、凄い優雅で濃紺のロングドレスなんだけど首の一番上まで繊細なレースで覆われて手首のともなんだけど、それが自分でも驚くくらい似会ってて、グフフって感じで帰りもご機嫌でいたんだけど、これ逃げるのには適してないのね、まさか裾を持って駆けるなんてレイちゃんも思ってもみなかっただろうけどさ。

学校から車で帰ってる途中、大通りが大渋滞で、どうやら事故処理中らしくってね、それで迂回路に入ったんだけど、片側工事のところにまた出くわして、ついてないことに、そこで前方の車が故障したらしく、うんともすんとも動かなくなっって、私の乗る車も自然立ち

往生してしまったの。

私は別にぼんやりしていたからいいんだけど、さすが初めての学園祭で大忙しだったからね、急いで帰る必要もなかったから。

それではーっとして、うつらうつらしてたら、助手席にいた迎いの近藤さんが緊迫した声で私に座る位置を中央に移動してくれと言ってきたの。

何事かと思ったら、車に近づく人達が見えてきて、その人たちが車の傍までくると、車のタイヤに何かしてるみたいな音が聞こえてきた。

変だと思って私もすぐ携帯でガンちゃんに連絡したんだけど、電波がなくてつながらなかった。

近藤さんも、おかしい、携帯がつかない！と運転手さんに話しかけていた。

近藤さんは、

「透子様、大丈夫です、この車は特殊車両ですから、ご心配いりません。」

そう言って冷静に運転手さんに車の状態を確認させ、前が進めないなら後ろへ車をぶつけて退路を確保しようとしたんだけど、結局車がスムーズに動かさず思うようにいかなかった。

さっき何かタイヤにされたのが関係してるみたい。

車に備え付けてある非常用無線を使い近藤さんが連絡していると、窓ガラスをガンガン叩く音が聞こえてきた。

これって、結構怖いもんよ、音って想像力をかきたてるんだってわかったわ。

窓ガラスはスモークで外からは見えないんだけど、フロントガラスからは見えるから、そこからこちらを見る人が、顔の半分近く帽子を深くかぶっていて、その影でどんな人かはわからないんだけど、シロなみに鍛えられたがっちりした体形の男の人が私を見て獰猛に笑ったのが何故かわかった。

近藤さんが大丈夫です、と私を落ち着かせるよう何か話しかけてきたけど、私はちゃんと聞いちゃいなかった。

だって私を見て確かに獰猛に笑ったんだもん、私狙いかもしれないってわかったから。

私はフロントガラス越しに私を見て笑った男に、震える姿なんて見せたくなくて、震える手をぎゅっと握りしめ、毅然と顔を上げ、私のできる最上の笑顔で微笑んで、そして冷たく睨み据えてやった。

驚いたような気配で私を見る男に向かって、私は決して目はそらさなかった。

近藤さんが非常用無線が発信されましたし、窓ガラスも割れる心配はありませんから、そうゆっくりと私が怖がらないように説明してくれました。

さっき聞いてなかったのわかったんだ、ありがとう。

ところが驚いたことに、襲撃してきた奴らは、ここで工事をしていた人間とグルだったようで、工事用のブルドーザーを2台、私の乗った車に向けてきて下から車をすくい上げようとした。

徐々に上がりゆく気配に、彼らが下から持ち上げて車を落とす気だとわかる。

いやいや、私、スプラッタ関係も貞子関係以上に苦手ですから、やめてよねえ。

近藤さんが声に緊張を乗せてすぐさま私に声をかける。

「透子様、私が声をかけたら思い切り私のいる側のドアを開けてお逃げ下さい。すぐ助けがまいりますから。ご安心下さい。」

私はうなづくのはやめて、わかった合図に助手席側に不自然にならぬよう転がる感じで移動した。

「さあ！大丈夫です。今です、行って！」

その合図に思い切りドアを開け、ドアの周囲にいた男をよろけさせ、身一つで綺麗に飛び出し毎日の朝練で鍛えた護身術で無防備に近づこうとする男どもを一人、二人とかわし、バスケットで鍛えた自慢の脚力を舐めんなよ、と思い切り駆け出した。

横目で見ると近藤さん達が私が逃げる方を背にして戦っているのがチラッと見えた。

私はドレスの裾をたくしあげ、小柄な私に有利であろう路地裏を探

して駆け出した。

あの頃、あの放浪の時間で培った路地裏の津々浦々を踏破したおのれのカンを信じて、迷いなく路地裏に私は無事駆け込んだ。

不思議に恐怖は感じなかった。

## 第28話

狭い道幅の路地裏に入ると、そこは住宅地の路地裏ではなく、小さな店舗などの裏側にあたる路地裏だった。

ビール瓶が積みあがっていたり、段ボールがまとめられていたり、私は走りながら裏口から店に入れそうなそれを幾つか素通りし、それらは悔しいけど入ってすぐにあったから、店に逃げこんでも無理だろうと思ったから、泣く泣く素通りした。

小さな丁字路に出たので狭い方に迷わずに曲がり、路地裏に必ず一つはある大通りと対になっているそれを探していた。

重い足音が、追っ手のそれが絶えず聞こえ、その数がどうやら減ったり増えたりするのを、荒い息をあげながら聞いていた。

追っ手のあげるその音に耳に澄まして、自分でも思ったよりは冷静に逃げていた。

ただ、さすがにヒールはきつくなり、後ろの気配を探りつつ、カワイイそれを脱ぎ捨てる、ごめんねミュールちゃん。

私は汗をかいた体に、疲労を訴える体にまたムチを入れて、気配を探りながら更に走った。

追っ手にも私の姿が常にちゃんと見えているはずで、思ったより単純な路地裏なので、ここらで路地裏におさらばしないとまずいと判断し車の音が大きくする方へとまた頑張って走る。

更に大きな音を求めて右に曲がって走っていくと、一段と喧噪の音が聞こえてきた。

やった、もうじき出口に近いはずだ。

そう期待して、そしてさすがにガクガクする体にムチ打って、思い切り駆け抜けた先で私が見たのは行き止まりの大きな壁だった。

いろいろな生活用品などが、山と積まれて捨てられたそれが、いつものまにか道を塞ぎ、ガラクタ置き場の壁になっていた。

ちよつとあ、粗大ごみシールくらい買いなさいよ！

あちゃあ、・・・私は後ろを初めて振り返った。

追っ手のいかつい男達は、肩で大きく息をしながらこちらに向かって走ってくる。

1人、2人・・・5人くらいいた。

その中に、あの顔を帽子で半分近く隠した男もいた。

私はあせることなく状況を確認すると頭の中で冷静にタイミングを計る。

さあ、もっとこっちに来てよ！お願いだから来い！私はおびえたふりをしてギリギリ行き止まりのゴミの壁近くまで後ずさった。

あと、一歩、そう、もう少しこつちよ。



けれど、その一歩がなかなか埋まらない。

私を囲むように男達が立ち止まるが両手を伸ばせば突っかかるくらいの路地の狭さの為、体をずらしあつて私を取り囲む。

そこを顔を帽子で隠した男が堂々と私の正面にゆつたりと歩み出た。

へえ、やっぱりこの男がリーダーらしい。

男は低いしゃがれたドスのきいた声で私に声をかけてきた。

「お嬢ちゃん、鬼ごっこが好きか？」

「で、つかまえた鬼には褒美は何だ、何をくれる？」

男がそう話しながら、唯一見える口には例の獰猛な笑みを浮かべて私の方に一歩歩み寄ってきた。

今だ！

男が私に近づくと蹴りをいれながら、すいと体をかがめ、この男を何とかかわし、わからぬように後ろ手に隠していた、捨ててあった折れた物干しざおの小さな一つを手に取り、寥先生直伝の棒術でチエックメイトと油断していた後ろの男達に攻撃をしかける。

くるくるくるくる、自分の小柄さを生かして上に下に、斜めにと、舞うように体を動かす。

打撃力は軽いものだが、一つ一つの攻撃は急所を狙う。

突然の攻撃に、男達の間に一瞬の隙ができるはず・・・案の定だ。

その隙のできるタイミングを、わずかなその時間を逃さず、その短い物干しざおを最後に彼らに向かって投げ捨てると、ちゃんと計算して戻っていた後ろから、再び少し長い物干しざおをとると、それを助走なしで地面につきたてて、棒飛びの要領で彼らの頭上をひらりと飛び越える。

「I can fly!」

やってみたかったんだよね、これ。

この間体育で習ったばかりのそれは自分で言うのもなんだが、綺麗にできたと思う。

わずかな距離の男達の頭上すれすれを飛び上がる。

下着が見えたかは気になるところだったけど、そこは考えないようにして、男達の先に出られれば又逃げられる、そう思った。

ところが、宙を浮く私の体にすぐさま反応して、路地の壁に足をつきたて、そのでかい体で同じように宙に浮き私の腰を抱き込み地面にたたき落とす化け物がいた。

地面に落とされる瞬間、その化け物の大きな体に包まれ、そのままゴロゴロと路地を転がり、その化け物の体の上に抱き込まれたままの私は一瞬何が起きたか理解できず、その後何が起きたかを確認すると思わず言った。

「嘘でしょ、ありえない、ほんと、ありえない!」って。

その化け物は例の獰猛な笑みを見せ、クククと笑うと、

「つかまえたなあ。」

そう言つて、真下から私を抱きしめたまま、私の頬をゆっくりと撫でた。

ずれた帽子から見たその男の顔は額から左の目を通り顎の下まで引き連れた赤い傷跡が一本通っていた。

けれどそれが男の雰囲気と相まって危ない色気を醸し出し、私を見つめるその目はどこまでも昏く底なしの黒で、あの保護者ズに人間に戻れないと言わしめたコロヤシロのあの目より、もっと底なしの目をしていた。

私は男の上に抱かれる形に抑え込まれながら、今の状況を冷静に考えた。

やっぱ化け物で間違いない、そして、敵ではあるだろう、襲撃をかけるくらいだから。

そして、私を捕まえるために、私の動向を探り、なおかつ大きな道路で事故をわざとおこし、この迂回路まで誘導し、そこを封鎖する力がある。

けれどその身にまとう力や暴力の気配を、私に向けてはこない、今のところは。

目的は、私で間違いない、では私を捕まえたこの先はどうなる？

私は初めて先がよめない状況に背筋を震わせたけど、けれど目だけは決してそらさなかった。

男はそんな私をじっと見つめて、そして一度ホウツとため息をつき一度目をつぶると、次にこちらを見つめる目は愉悦をたたえたひどく濡れた目をしていて、この私が引き込まれるほどの。

私の頬を繰り返して撫で続け、私を抱きしめいつまでも地面に転がったまま男は動こうとしなかった。

私もまた、自分からは動かなかった、何かあった時はじっとしている、それは身を守るセオリーの一つだと知っているから。

## 第29話

男は私をその体の上に乗せたまま体をおこすと、私を片手で抱き、そのままひょいと起き上がった。

そしてそのまま歩き出すと、自分に続く残りの男たちの一人に時間を聞いた。

「12分です。」

どうやらこの逃亡劇にかかった時間らしい。

それが長いか短いかわからない、私にとってはじめての事で判断がつかない。

それを聞くと男は腕に抱く私をしっかりと抱え直したまた歩き出す。

いいけどね、私裸足だし、でも男の腕や胸が半端ない筋肉で覆われているのがわかり、まるで猛獣の腕の中にいるようで落ち着かない。

私はあの無線から12分がたっている事、先ほどの通りに戻るにはそれ以上の時間がかかるだろう事を考えて、ガンちゃんの助けがもうすぐくるだろうと確信した。

ただし、この私の状況が足を引っ張る事も同時に確信した。

誰だってわかるよね。

どうやってこの腕から逃げ出し、ガンちゃん達に不利にならないようにできるか、さあ考えろ！

一度目をつぶり、瞼の裏できつと心配しているだろう愛しい彼らを思う。

大丈夫、彼らの助けは必ずくる。

私が戻るのは彼らの所しかないから、私は必ず戻るんだと改めて思う。

私は男の腕の中から男を見上げて、からかうように聞いた。

「ねえ、あなたは九州統括のなんとかさんとかいう人関係？」

男は綺麗に無視してくれた。

「ねえ、あなたは高津さんの東仁会と敵対してる人？」

これも無視、でも話すなどは言われない、今のところは、ね。

「ねえ、あなたは穴倉さんと敵対してる人？」

はい、無視。

「ねえ、じゃ橋爪さんかな？」

うん、ないね、ないと思うよ、私も。

この人半端ない化け物だもん、サーベルタイガーみたいな人だもん。いくら無謀なキョーちゃんどこでも、対立するにはレベルが違います。

きる。

相変わらず無言でいる男に、一番聞きたくない名前を私は嫌々出した。

「・・・青井さん関係の黒幡？」

男の腕に抱かれてその気配を一つも見逃さないようにしていた私は、そう言った私を面白そうに見下ろす男の顔を見た。

「ビンゴね！」

で、敵対してる方？そう聞きたいけど、わざわざ火に油は注ぐような馬鹿じゃない。

「ところで、私のミユールそこらへんに落ちてると思っの、探して下さらない？」

私は裸足の足を、ストッキングが破れているその足をわざと大きくプラプラさせて、男の短い髪をキュッと引っ張って私の方に向けて頼んだ。

それを見た、すぐ隣を歩く、これも一分の隙のない見るからに鍛えられている大きな男の人が、今まで無表情だったその人の顔が驚愕したのが見えた。

ふん、この人、やっぱり身内にもヤバいと認識されてるわけね。

男はそんな私にふっと笑みをもらすと、私の頬を撫で、また何も言わず歩き出す。

そりゃあ、私ってば毎日、愛情こもったヨウちゃんのエステ受けてるし、ユキちゃんの理想的な食事毎日食べてるし、肌はもう白桃のような色合いで、つるつるだけどさ、ついでにピチピチの花の子高校生だし。

ただどね、何であなたにこうも触られるのか理解できないわ、許した覚えはないわよね。

けれど現在の私の状況をみれば、頬を撫でられるくらい目をつぶるべきなのかしら？

私の考えた時間稼ぎの質問タイムも、途中どこかの店の裏口に立っていた男の案内で裏口から中に入る事で簡単に潰えてしまった。

さすがに、これはないよねえ、反則だよ。

だってその店に入ると営業はしていないようで、店内は非常用灯だけで暗くて、けれど慣れた仕草で裏口に立っていた男が壁にしかみえない所をついっと開けて地下に続く階段を先導して下りていくんだもん。

さすがに、これはやばいかもって思って、考えるなんて悠長なことしてる場合じゃないと、やぶれかぶれに腕から何とか抜け出そうと暴れたんだけど、どうやっても男の腕はビクともしなかった。

これでも拘束を逃れる方法もバツチリ教わってたんだけど、全然私じゃたちうちできなかった。

それどころか、暴れすぎて肩で息をつく私をめんどくさそうに見て、



「お嬢ちゃん、ちゃんとあとで遊んでやるから、オイタはなしだ。」  
そう言つて、また頬を撫でると、その手で私のレースで覆われた首元をそつと壊れ物のように撫でて、そしてその指先で首元を軽く押さえてきた。

私は意識がもうろうと遠くなってきたのを驚いて、どうしてそうしたのか男にすがるように手を伸ばした。

その私の手を握り、自分の頬にあてる男をかすむ目でみながら、私は非常用通路つてやっぱりこんな風に使うのがベストよね、とか、この人自分の顔に一本の赤黒い引きつれがあるせいで顔肌フェチなのかしら、とか考えながら綺麗に意識をなくしていった。

第30話(前書き)

ガンちゃん登場

### 第30話

緊急連絡が入った時、俺はまだ家を出ていなかった。

透子が帰るのと交代で、そのままその迎えの車で仕事に向かうつもりだった。

事務所から緊急無線が入ったと聞いた時は何事かと眉をしかめたが、それが透子を迎えに行った車からのものだと言われた時、俺は最後まで聞かすくさまマンションを飛び出て、陽二にその電話を放り投げ、下の駐車場に止めてある陽二の車に飛び乗った。

こういうのは陽二にまかせれば一番だと知っている俺は、続けて助手席にかけこむ陽二を乗せ俺の後を慌ただしくついてくる若頭補佐の上条に、人数を集め無線が発信された場所まで急げと指示し、急発進した。

俺は場所のみ聞いて、他の事は全て陽二にまかせ、陽二も一瞬たりとも時間を無駄にせず、そのまま連絡をよこしてきた事務所の人間に、車の中で詳しい話を聞いている。

俺も陽二もこういう時の時間がどれだけ明暗を分けるか嫌と言うほど知っている。

俺は一刻も早く透子の乗った車からのSOSがあった地点まで信号も無視して猛スピードで向かう。

大丈夫だ、必ず助ける、俺達がいて助けられないわけがない、そう怒りのあまり叫びだしたくなる自分に言い聞かせながら一心に車を

走らせた。

陽二は次に自分の携帯で、やはり動かせるだけの人数を動員して近辺の封鎖を指図している。

俺は帰ってきた携帯で同じように礼司に電話をかけて、それをまた陽二に渡す。

礼司もこちらに急いでかけつけるらしい、礼司も礼司で打てる手を全て打ってくるだろう。

礼司との電話が切れたと同時に宍倉から電話が入る、簡単に説明して切る。

宍倉はすぐさま礼司とは別の夜の闇の情報の情報を探るといつてきた。

俺達に、俺達の透子に刃を向ける奴は、俺達が地獄に叩き込んでやる！

恭弥の所がバイクの特性を生かし、一番にかけつけるだろう。

陽二が、恭弥にまず透子の車を確保しそのまま俺達がつくまで護衛をしると、そして敵の排除も同時に指示している。

万が一透子が車にいなければ、近辺を走る車と言う車を止めまくれ！それとは別にその近辺を人海作戦でくまなく探せ！と万が一の場合の指示も出している。

もしいなければだとお、俺は怒りのあまり唇を噛み破った。

目の前が真っ赤に燃える、殺してやる、殺してやる！一族郎党全て、もし透子に何かあれば、その血につらなるものは全て殺しつくしてやる。

SOSを受理してから現在まで時間にして5分、現場までは恭弥がすっ飛ばして20分ほどでつくだろう。

この車も30分もあればつくはずだ、透子の車にはサブで警護の車もついていたはずだ。

何があったのか状況はわからないが、あの車は防弾特殊車両である車内にいるぶんには危険はない。

迎えにやった近藤は切れる男だ、腕つぶしにも間違いはない。

大丈夫だ、大丈夫なはずだ、30分くらいは余裕のはずだ、と俺は祈りを込めてハンドルを握る。

隣の助手席から、こんな場合なのに、一心不乱で運転しているこの俺が気付くほど、俺でもぞっと震えるような気配がする。

それはこの闇の世界を引退したはずの「ゲヘナ」と異名をとる黒幡の？2だった男のまごうことなき気配だった。

煉獄の炎で敵も味方ですら容赦なく焼き尽くした、伝説の男がそこにはいた。

第31話(前書き)

キヨーちゃん視点

### 第31話

俺の電話が珍しくなった。

この携帯はプライベートのもので、一緒に暮らすあいっすら以外登録はされていない。

透子からのメールはたびたびくるが、なるのはめったにない携帯だ。

俺はチームのたまり場の3階建てのビル、飲食店とタトゥーの店ばかり入っている俺所有のそのビルの三階にあるクラブ「デジャブ」のVIP席で、幹部たちと酒を飲みながら、いろいろな報告を聞いていた。

このクラブに足を踏み入れられるのは一部の許された人間のみで、おのずとここに足を踏み入れられるかどうか、夜の街に疾走するものたちのステータスになっていた。

夜に遊ぶチーム系の男も女も、遊び好きな若い奴らも、ここに足を踏み入れるのを目標としている狭き門だった。

透子と知り合う前は、俺に群れるいい女を食い放題で特定の女など作らなかつた俺だが、今は俺の半径一メートル以内に香水臭い女がくる事は暗黙の了解でご法度になっている。

1、2度抱いたらしい女が、俺は覚えちゃいないが、その暗黙の了解を無視して俺に近寄ってきた時、俺はその女を女とはいえ、配下のものにきっちりしめさせてスタボロにし、その後ビビッて静かになった店内に俺自身で穴倉を呼び出し、その女を、一緒にいた女達

も一緒に売り払ってやった。

穴倉も透子が香道を習い始めてから、自分の香りに、自分につく香りにも、より敏感になって、それが仕事だろくに俺同様気を付けている。

一番神経をとがらせているんじゃないかと思う。

だから、俺の怒りを一番に、いや俺以上にきれる事がわかって、穴倉に電話した。

透子のきく香りの為にも、透子の鼻には負担がないよう俺たちはみんな気を付けている。

穴倉は夜の帝王と呼ばれ、高津さんならみで必ず俺と一緒に闇の中で名前をひっそりと上げられる男だ。

その貫禄はさすが、このちゃっちいまだ黄色い嘴ばかりの奴らが多い中で異質だった。

穴倉が俺に、

「どおしたよ、おい。このくそ忙しい俺を呼び出すたあ覚悟はあるだろうなあ。」

と不機嫌そうに声をかけてきて、それを聞いた幹部たちが穴倉にガンをつけるが、ゴミでもみるようにそいつらを見ると、てんで相手にもしない、まあ、こいつらも自分たちじゃたちうちできねえのは知っている。



けれど俺に心酔するこいつらは、俺が手綱を外せば、負けを承知で  
かかっていくだろう、かわいいもんだ。

こいつの得体のしれなさは、夜の蝶たちを男も女も飼って夜に君臨  
している男、ただそれだけじゃないのは誰でも知ってる。

「このバカ女、俺に安っぱい香水つけやがったんだよ。」

俺がそう言えば、宍倉は倒れている血まみれの顔も原型をとどめて  
いない女を、連れてきた部下に顎をしゃくり連れ出させる。

あばれる連れの女たちにも冷たい目を向け、それも連れ出すと、処  
分はまかせろ！そううつそりと笑い、そのまま背を向けて静かに出  
て行った。

この出来事以来しばらくは大人しいものだったのに、バカはすぐ痛  
みを忘れるらしい。

また、バカな野望に燃えてこの店に出入りできた、それだけで勘違  
いする。

なぜ、どんどん新しい女が、男もだがある条件の元、この店に出入  
りが許されるのか、前から出入りが許されていた面子が、消えてい  
くのは何故か、考えもしねえ。

そう、この店は人間も卸している、密かにな。

勝手に自分に自信がある奴らが、自らここに、この蜘蛛の巣につか  
まりにやってくる、飛び切りの奴らが。

俺には大事な女がいる、というのは透子のよこすメールの度に、普段無表情で顔色もかえず人を嬲り殺すと言われるこの俺が、それはそれは蕩けた顔になる、というので、それはいつの間にか周囲に浸透していた。

信賴する幹部の数人は俺がマンションに連れて行って透子を紹介しているので透子を知っているが、それ以外の奴らには透子は伝説の女になっっている。

今夜も自意識過剰な女どもが、こちらをチラチラ伺い、俺の機嫌を悪くさせていたが、その電話を取った俺は、飲んでいたグラスを叩きつけ、すぐさま大声をあげた。

俺がこんな大声をあげるのは初めてで、昔から俺についている奴らも驚いていた。

「人数集める！集められるだけ集める！」

そう言ってすぐさま席を立ち、見附の三丁目だ、すぐ出るぞ！と叫んだ。

得物も忘れるんじゃないぞ！と叫びながら俺は店を飛び出した。

副のヒデがすぐさま指示をだし俺にそのまま他の幹部がついてくる。

エレベーターに飛び込むと俺は言った、「透子が襲われた！」と。

下におりると、俺のバイクが出されていたので、俺はそのままバイクに飛び乗り急発進する。

透子が襲われてSOSが出されてから現在まで6分という時間がたっている。

見附まではバイクでも通常20分はかかる、10分だ、10分で行ってやる、待ってる！透子！

俺は車と車の間を猛スピードで抜け、それに幹部どものバイクと、特攻のバイクが続いていく。

さすがに伊達に全国トップをはるチームじゃねえ、続々と集結するバイクの半端ない行列に、一般車がビビッと止まりだす。

邪魔だ、どきやがれ！俺はバイク同様咆哮をあげ、俺の透子にちよつかいかけたバカをどうしてやろうかと、残忍に歯をむき出しながら透子の元に向かった。

向かった先には、倒れている男が3人みえた、それは高津さんのところの人間だった。

そして透子の乗っていた車は横転してその上にシヨベルカーが二台乗り上げていた。

俺は絶叫を知らず上げて、その車に向かう。

その絶望に満ちた声が、自分のものだとは理解せずに。

幹部たちがシヨベルをどかし、車のドアに俺は気が狂うばかりにか

けこむ。

車には誰もいなかった。

透子、透子、透子！

俺は手分けして車を、この近辺の車を全て止める、と命令し、残りの人間を通りという通りへ向かわせた。

俺もかけだし透子の姿を探す。

すぐ傍に路地裏を見つけた。

透子の好きな路地裏だ、俺は数人を引き連れて路地裏に飛び込んだ。

すぐさま陽二さんに電話を走りながらかけた。

車の話をすると、一瞬陽二さんが黙った。

もうすぐ高津さんと共にここにつくという。

俺は透子の名前を叫びながら路地裏を更にかける。

やがて合流した俺たちが見つけたのは、透子のはいていたはずの華奢なミュールだった。

それから路地裏にある店という店、人間に力づくで聞き込みをし、確かに透子がこの路地裏に逃げ込み、この行き止まりの路地裏から消えたことがわかった。

透子はこの路地裏から出ていない。

俺がここに駆け込むわずか5、6分前まではここにいた。

外には俺や仲間たちがいて、表には出てきていない、だとすれば透子はまだここにいる。

俺たちは透子が消えて1時間、全員がそろって店の一つ一つをしらみつぶしに手分けして探した。

しまっている店は壊して中に入った。

そのうちの一つに、その壁にでかでかと黒幡の紋章が書かれていた。

俺たちはそれを見て、陽二の顔を見た。

陽二はニンマリと口元を少し緩めてそれをみていたが、その眼は全てを焼きつくす憎悪に燃えていた。

陽二を先頭に俺たちは、黒幡の隠された日本支部へと向かう。

高津は若頭の息子に電話をかけて何か用意を急がせた。

皆もそれぞれ携帯片手に準備をはじめた。

待ってる、透子、すぐに行くから。



### 第32話(前書き)

ちよいとスプラッタです。

苦手な方は読まないでくださいね。

### 第32話

誰かが優しく髪を撫でている。

トクン、トクンと耳に響く優しい音。

何だろう？全てが優しく感じる。

夢とうつつの境の微睡の中で、透子は穏やか目を覚ました。

すぐに瞬きをして、これは何だろう、と思った。

この匂い？香水？違う、これって香道の先生の所で嗅ぐ香木の匂いに近い、けれどももっと生々しい匂いがする。

灯りのほの暗いそこは、透子の目を覚ましたその場所は透子の知るどこでもなかった。

髪を撫でる優しい手が透子が目を覚ましたのを知ると、そのまま頬に手をはわせてきた。

そのゆっくりとした動きを目で追い、何故かぼーっとしていた透子は、その顔を至近距離で見ると一気に覚醒した。

こんのおーフェチ男が！そうだ、私、ここどこ？起き上がるうとしたが、ビクとも体が動かない。

どうやら、まだこの男の腕に抱えられたままみたいだ。



今は何時、何時よ！絶対気が狂うくらい心配してる、嫌だいや！私  
ははじめて泣きたくなかった。

私は私を撫で続ける男に初めて震える声で懇願した。

「お願い、帰して、きつと心配してる、きつと泣いてるわ。」

男は私をもう一度しっかりと自分の胸に私を抱え直すと、私の瞼にそ  
っと指を添え、

「泣いてるのはお前だ。」

そう言つて唇を寄せ、その舌で私が泣いている事を教えてきた。

あふれる涙をなめとるその舌は何度も何度も私の瞼をいたりきた  
りした。

そうか、泣いてるのが私か、自分でも驚いた、泣くことなど2度と  
2度とないと思つていたのに、皆の心配する様を思い浮かべるだけ  
で涙がこぼれるなんて。

私は泣くのは嫌い！そうでしょ！

私は目覚めた時にこの男が何故か優しい何かを私に感じさせたせい  
だと、そのせいに違いないときつく男をにらみつけた。

「私は泣くのが大嫌いなもの！聞いてる？早く私を帰しなさいよ！帰  
せてば！聞いているの？」

私は泣いてるせいで、かすれた声で男の胸を叩きながら言った。

「幾らあなたが黒幡に敵対してる人でも、どんなに自信があったって、私の男達が負けるわけないでしょ！だから、だからお願い、お願いだから私を彼らの元に帰してちょうだい。今なら大丈夫かも知れないわ……。」

最後は小さく囁く声で男に話しかけた。

しかし、男はまたしてもそれを無視して、私と目を合わせるようにして、

「泣くな……」

と、続けて何か言いかけた時、それは突然バーンと開け放されたドアの破壊音でかき消された。

そして、そこには私が今しがたまで求め続けていた、けれど見たことのないような凍てつくような雰囲気の私のヨウちゃんがいた。

ヨウちゃんの後ろにはポケットに手をつっ込んだままのガンちゃん、機嫌が悪い時はいつもポケットに手をつっ込む癖があるんだ、ガンちゃんは。

それに目を血走らせ、まなじりも切れあがって凶暴な雰囲気を隠そうともしないキョーちゃんがいた。

テイちゃんは気だるそうにその後ろにいるけど、私が初めてみるくらい怖くて暗く、いつも人を誑し込むのが商売だという、あの身につけた軽いひょうひょうとした雰囲気はなかった。

レイちゃんは、その普段怜悯な表情を更に色のないものにして男を睨みつけていたが、私の姿をみると優しく微笑んだ。

ユキちゃんはあせった様子で私の全身をみて、怪我もない事を確かめると、ほろつと肩で息をついた。

私は思わずみんなに向かって手を差出し、小さな声でごめんね、と言い、皆も私に一度微笑んで私の所までこようとした。

しかし、いつのまにか、この男しかいないと思っていた空間に、大勢の男達が突然現れ、私の愛しい男達に向かって、ありえないことに武器を向けていた。

現実では見たことのない光景に息を呑む私に、ヨウちゃん達はそれらを一切気にせず、足も止めず、当たり前のように私の前にこようとす。

ガンちゃんがぱつと背広の上着を広げるとその体中に、うそ、それって見たことないけどダイナマイト？

ダイナマイトに似てる筒状のものを上半身に幾つも巻いていた。

あつ、同じようにキョーちゃんも巻いてる。

ユキちゃんは何か小さな透明なケースをこちらに見せる。

ヨウちゃんがそして静かに歩きながら男に言った。

「俺達は透子がいなけりゃ生きていけない、目の前からいなくなっ

「でも同じことだ。」

「龍豈、初めての願いだ、透子を俺達に帰してくれ。このダイナマイトは本物で、あの生物兵器を持っている男以外全員身につけている。それも最新のものをだ。」

「龍豈、あなたの部下が1人、2人斃したとしても、3人目、4人目は防げるか？ウイルスから逃げられると思うか？」

「俺達は透子が奪われるというなら、その奪う世界ごと、丸ごとぶつつぶしてやる。」

「それで何人、何万人死のうが知ったことじゃない。」

ひどく穏やかに話しかけていても、その雰囲気は凍てついている。

けれど、こちらを見据えるヨウちゃんの目はひどい熱いマグマのよくな目をしていて、それを無防備にみた武器を構えた男達から、ひつという息を呑む音が幾つか聞こえてきた。

「透子がもし俺達の前からいなくなるのなら……。あなたの力に正面きつてぶつかっても、幾ら俺達が束になっても地の利をいかしてさえも勝負は五分五分だろう、悔しいがな。そして、争っているうちにあんたは余裕でこの国を出る。今を逃せば2度と透子を取り戻せなくなる。そうだろう？」

「なあ、龍豈、一緒にあんたと逝くのは気に食わねえが、俺達は透子を誰かに渡すくらいなら、こうして一緒に、この世とおさらばすることに決めただ。」

「透子があんたと会ってもまだこうして生きているって事は、あんたも透子が気に入ったって事だ、違うか？」

「俺以上に何にも執着しねえあんたが、そうして腕に抱いてるって事は答えを聞かなくてもわかる。俺も目の前にこうして見せられるしな。」

そして、ヨウちゃんは優しくほわっと笑って私に言う。

「なあ、透子、悪いが一緒に死んでもらうぜ！俺達は地獄があるならそっち側の人間だ。悪いが俺達でお前を困るではなさねえよ。地獄の底まで連れて行く。」

そう言っただけの上着を開け体に巻きつけたダイナマイトをさらす。場が凍っているのに、私を抱く男はそれを聞いて、面白そうに声を出して笑った。

「黒よ、黒。お前が初めて人間にご執心と聞いてな、長兄の俺としては、いつまでもお前がすねて仕事もせず遊んでいるのが、そろそろ気に食わなくてな、遊びの時間は終わりだと挨拶がわりに、お前の初めて大事にする人間を殺すつもりだった。だらけて腑抜けたお前の目の前でな。」

そう言う男の雰囲気は、この吐息一つももらさない、はりつめた空間に毛ほども何も感じていないようだった。

「ただし、お前の言った通り、俺も気に入った。知り合っただけならなんだ、死なれるのは困ったな。」

そう全然困った風なんかじゃなく男は言った。

その瞬間に信じられないことに、バタバタと急にみんなが倒れ、その体を衝撃がないように受け止める人間達がいた。

え、えっ、どうしたの？何、何なのよ！どこにいたの？それよりこの人たち、私のみんなに何をしたのよ！

私は茫然と次に必死に倒れたみんなの元にいこうとして、またもや、この男に阻止された。

「うそでしょ、何をしたの！殺しちゃったの！いやよ！嫌よ！私も殺してよ！殺してよお！」と絶叫した。

男が私の惑乱する姿を見て私の頬を両手で囲み、私が暴れるのをやめるまで、じっと目を合わせ、そして放心する私に言った。

「大丈夫だ、自分のかわいい弟とその友人を殺すわけがないだろ？」

「ただ、本当に死ぬつもりなら奴らを助けたただけだ、まだお前とは知り合っただけだ、はじめて面白いと思っただ、美しいと感じたんだ、本当だ、お前の嫌がることはしない。だから俺以外の人間の事で泣かないでくれ、な。」

そう言ってわかってくれと囁きながら私を抱きしめてくる。

・・・良かった、死んじやいないのね、男に抱かれながら私はバクバク言う自分の心臓の音を聞いていた。

目覚めた時はあんなにやさしく感じた音なのに、一体、何が起きて

どうなってるんだろう？

弟？この人ヨウちゃんを弟って言った、この男の言った言葉を一生懸命思い出す。

私は現実味がないその部屋の天井を見上げた、呆けてる場合じゃないと思った。

そしてたかれてる香木のたなびく香りに意識を向け、ここにきて初めて深呼吸した。

私は私の頬を囲む男の手に目をやり、私の唇のすぐきわにある男の小指を舌をそつと出して舐めた。

男を上目使いで見つめると、男が嬉しそうに私を見る。

その眼を合わせ、私はゆつたりと微笑み、そして思い切りその小指を口を開け、力の限り噛んでやった。

溢れる男の小指からの血に喉がむせる。

男は血相を変えて、そばに寄ろうとする側近を押しとどめ、より蕩けるような甘い目で私を見つめる、痛みなどないかのように。

私が憎しみを込めてにらむと、そのブラブラと半分近く切れた小指をいつの間にか取り出したナイフで、まるで果物を切るようにあっさりと私の目の前で骨ごと断ち切った。

血が噴き出るその小指をあわてる側近に手当てをさせながら、それをまじかで見つめて青ざめて顔をそむけた私に、それはそれは甘い声で

囁いてきた。

「ちゃんと見ろ、お前の望みだらう？」と。

さすがに、首を横に何度も振る私に、男はその切り捨てた小指の欠片をチラとみて、私の唇にその切れた欠片をあてがってきた。

「お前の欲しかったものだ。ホラ、口を開ける。」

男はとてとても甘い慈しみに満ちた声で私の唇を何度もその血のあふれる指で何度もなぞり、私が首を振り続けると、仕方がないとばかりに自分の口にその切れた欠片を咥えると、そのまま私の唇をふさいできた。

私と男の唇の間にちぎれた男の欠片がはさまってある。

私が止めてと涙目で男を見ると、男は強引に私の口をあけ、自分の舌で私の口の中にちぎれた男の欠片を押し込んだ。

私は口をあけてそれをはきだそうとしたが、次の男のその言葉を耳にして固まった。

「俺の体の一部だ。ちゃんとお利口にそれを飲みこんだら、お前の望みをかなえてやる。」と。

私は男を見、倒れて体からダイナマイトをはがされつつある私の保護者ズの状態をみた。

私は泣くのが嫌いだ、泣かされるのはもっと嫌い！



それなのに今日は・・・そう思いながら私の喉を優しく撫でさせる男の目をしっかりと見て、確かめるように男の顔をみて、その欠片を思い切り飲みこんだ。

喉を通る感触がリアルで吐きそうになるが、これが彼らを救う対価だと思えば何でもない。

私は今ここで人を殺せと言われても、ためらいもせず殺しただろうから。

私は確かめるよう私の喉を何度も撫でてくる、その男の私を見る甘ったるい目を見つめながら毅然として言った。

「約束よ！」と。

### 第33話

開き直った女は強い！ほんと、真理だと思う。

麻痺の針をその道のプロ、暗殺方面のね、に一瞬にして打たれた私の保護者ズは、やっと体が起き上がれる状態まで回復し、これ本当なら3時間くらいは効くらしいけど、わずか1時間もかけずに、こうして起き上がるまでになっているのはさすがだと思う。

ただし、そのブリザードぶりは、一人ひとり半端ないのに、それが椅子に腰かけじつとこちらを見る目つきは、・・・本当にこれでもかってくらい、いっっちゃってた。

私は、みんなが起きてきたと聞いて、みんなが横たえられていた部屋に入りこうして無事なのを確認してやっと安堵のため息をついた。私の腰に手を回し、甘ったるく私を見る黒幡のトップの肌フェチ男、何かめんどくさいので縮めてロンと呼ぶことにした男の手をパチッとたたき落とし、みんなの元に抱きついていった。

このロンという男は本当に究極のシンプルライフを子供の頃から送っていたらしく、殺すか殺さないか、敵か自分の下にくるか、それだけで生きてきたらしい。

みんなが目覚めるのを待っている時に聞かされたからね、いらんにね。

それでもって、驚くことに、我がヨウちゃんの兄上様、敵対してるどころか兄弟よ、兄弟。

私もいらぬ姉がいたけど、ヨウちゃんもなんだね、わかるよ、ヨウちゃん。

彼らの父は後継者争いを推奨し、10歳になると数多くいた腹違いの兄弟姉妹で力試し、ぶつちやけ殺しあいさせられたそうだ、それぞれ側近を与えられて。

そして勝利したのが三番目の男子だったこの男。

生き残ったわずか数人の弟は、自分が実力を認め、なおかつ自分に忠誠を誓ったものだけで、そしてその中でもヨウちゃんは14歳の頃からこの兄の右腕として生きてきたと聞いた。

さすが私のヨウちゃん、できる子だ。

私がみんなの元に思い切り飛び込んでいくと、一人一人がぎゅっと力いっぱい抱きしめてくれる。

私は嬉しくて、本当にうれしくて、ハイテンションにみんなにキスの嵐だ。

あの後ロンは約束通り、私の願い、「今まで通り私の大事な彼らと共にいる事。」を認めてくれた。

誰がこの単純なんだか複雑なんだか、まして人間とは思えないこの男の傍にいたってかっというの！

変な所でロマンチストなこの男は、40になるこの年で、まさか初恋をするとは思わなかったと真面目な顔で、蕩ける顔で恥ずかしげ

もなく言ってくる。

「自分の女の我がままはカワイイもんだな。」

それを本気で言ってるバカだ、人外で暴力方面では天才かも知れないが、まぎれもないバカだ。

いつ、どこで私があんたの女になったか言ってみろ！っていうの。

ふん、あんなもの飲み込んだからって、私がそれに何の価値も認めなければ、意味がないのよ。

もう一つ出た条件もね。

まあ、私はこの男みたいにおバカじゃないから言わないけどね、  
・  
・  
・怖いし。

みんなが私を震える体で抱きしめる、うん、私も怖かったよ、もう二度とこんなのは嫌だからね。

私は人外のお願いをあと一つきいてやった、それで「私達全員の自由」も保障された。

そのことは、後でみんなには話すし、それも私にとっては意味がない事の一つだから。

ギブ&テイク、好きな言葉なんだ、嘘が入る隙がないもの。

私はこうしてここにいる、それ以上の幸福はない、それでOKよ。

あの詩が好きだ。

「・・・すべて世は事もなし。」

これもまた真理だと思ふの。

## 第34話

私達はあれから自分たちのマンションに移動した。

もうじき夜明けを迎える頃に。

それぞれの部下に撤収をかけて。

はあ、やれやれだ、果てしなく長い1日がやっとあけた。

レイちゃんちの大きいリムジンでみんな帰ることにしたんだけど、だって、もう一瞬でも離れたくないから。

私がそう言えば、少しだけピリピリと目に見えるんじゃないかっていうくらい凄まじい怒りのオーラが一瞬和らいだ気がした。

後ろをついてくる黒い車がバックミラー越しに見えて、みんなはまた、おどろおどろしいオーラを身にまとう。

ほんと、男ってテリトリーの生き物なんだって、こういつ時よくわかる。

女はここまですごくないよね、もっと柔軟だ。

そう、後ろからは、あのバカ男のロン、あの男がついてきてる。

あれから手打ちの話になったんだけど、私がもうお風呂に入らなきゃ耐えられない！と言ったんで、一旦マンションに戻る事になった。

バカロンが、私がバカロンと呼ぶとみんな変な顔するけど、さすが透子、凄いなって、だってバカロンでしょ、あいつ。

そのバカロンが着替えも用意させたと言って、あの部屋の風呂に入れっというから、私、女王様モード突入したの、自分の家じゃなきゃ入らないし、着替えの下着も刺繍入りじゃなきゃ嫌、まして着る者は家のじゃなきゃ絶対嫌だと。

私にそんな我慢をしろというのかと睨んでやったら、バカロンが折れた。

バカロンの側近も、何故かヨウちゃんも驚いてたけど、なんで？当たり前前よね。

それでこうしてマンションに戻って、バカロンをマンションの外に待たせて、この際だと、全員一緒にお風呂に入ってる。

ほら、大丈夫だよ、私の体指一本触れさせていないからね、私は皆が食い入るように私の体を見つめるのに、綺麗に笑ってやった。

後で爆弾をみんなに投下することになる私はせつせと皆に甘え、皆も私に甘える時間をいっぱいとした。

ところがその時間も、乱入者の登場で終わりを迎えた。

「遅い！」

遅い！って何さまよ、バカロンの癖に。

お風呂のドアを開けて、なおかつ私の裸身を目を細めてみやる男の登場で。

すぐみんなが私の体を見えないようにしたけど、みんなに気配を一つも感じさせないし、うちのマンションは超最高水準のセキュリティのはずなのに、まったく意味ない、ほんと厄介な男だ。

みんな怒りモード爆発になり睨み合っていたけど、私の邪魔！の一言でバカロンはしぶしぶ出て行ったし、いつもめんどくさがり屋の私がみんなの髪を洗ってやったんで、何とか雰囲気は戻った。

着替えて部屋に戻るまで。

なぜって？それはバカロンが勝手に側近たちに酒を用意させくつろいでいたから。

結果ひどいブリザード復活。

ヨウちゃんが誰かに電話をかけ引越しの用意をしろ、と言っている。

引越し？えゝめんどくさい、だからテリトリーなんだよ、男はね。

そして、何故かにやりとバカロンが笑って私を見た。

まさか、嫌な予感がする。

今言う気じゃないだろうね、と睨みつける私をよそに、奴はシレッと爆弾を言い放った。



「俺も賛成だ、俺の子供の大事な母親がこんなセキユリティーが甘い所に住んでるんじゃない心配で、おちおち仕事もしてられない。」と。

・・・空気が凍り、そして一気に燃え上がった。

ヨウちゃんが、ガンちゃんが殴りかかりバカロンがそれに応戦する。

側近にはキョーちゃん達が殴りかかる。

私は冷静にそれをしばらく見て、さすが迫力あるそれを見ながら、物の壊れる音の合い間に、静かに言った。

「私、とつても疲れてるの、わかる？わかるわよね。うるさいのも今は嫌！す・ぐ・に・や・め・て頂戴！」

「それに、ロン、あなただけじゃないはずよ、年なのね、忘れたの？うちの希望者にも、よ。」

そう言った瞬間、パタツと殴り合いは止まった。

「座ってちょうだい。」

私の言葉に、全員が大人しくあいている床に座るのを見て、だって、ソファーなんて吹き飛んでるもの。

私が静かに説明する。

「あのね、みんなが寝てた時に、ロンが私をみんなの元に戻してくれるっていう約束はもらったの、ただし時間制限つきでね。」

「バカなことに理由はね、人間自体好きじゃなくて、後継問題もどこから子供を集めて一斉に自分の時のように争わせて生き残ったのに継がせるつもりだったんだって。だけど好きな女ができたなら、その女と自分の子供を腕に抱きたくなるのは、そんな夢をみたくなるのは当たり前だろ、って、だから私を近いうち連れて行く、そう言うのよ。」

だから時間制限。

私はみんなを見る、みんなは食い入るように私をみつめる。

「でもね、私がそれを許すと思う？ありえないでしょ。私ってば花の女子高生、んでもって処女よ！」

そういつて憤然と全員見渡せば、皆こんどは嬉しそうに優しく私をみつめる。

「だから、何嬉しそうなもの！本当私ってば、何でこんな事宣言しなきゃいけないのよ！まあ、いいわ、話は戻るけど、そんなの無理だつて言ったのよ、私に嫌われる事は絶対したくない、けれどこればかりは譲れないつて言うからね、全然お互い平行線で。じゃあ、つて話になったのよ。この間テレビでやってたじゃない、ユキちゃん」とみてたあれ。」

ユキちゃんが私をいぶかしそうに見て、次に目をみはる。

「そう、人工授精つてやつ。私が卵子を提供することで何とか折り

合いをつけたのよ、このロンと。」

「だけど、私の大事なみんなにも、もし子供が、私との子供が欲しい人がいたら、ついでに希望とって、それもついでって何だけど一緒にいいでしょ、と許しをもらったの。じゃなきゃもしその子が産まれても絶対無視してやるって私言ったのよ。」

はい、説明終わり！

私がそう言つと、またバカロンが余計な事をいつてきた。

「今はまだな。遊ばせといてやる。」

ほらあ、またみんなギン！つてなった。

はい、質問ある人。

真つ先にガンちゃんが手を上げた、相変わらずいい反応だ。

「俺はそいつより大事に大事に透子との子を育ててみせる。」

そう言つて私を真摯にみる。

そして全員がにっこり手を上げていた。

了解つす。

ユキちゃんが自分の病院で、極秘に人工授精を行なうと嬉しそうに今後の日程を話しだし、私の体調や排卵日を予測していいことは早い方がいい、と来月にでも子づくりをしようという話になった。

子づくり・・・何かリアルで嫌だ。

代理母はバカロンが最高のを用意しよう、と言って、何故か皆は先ほどまでのあのギスギスはどこにいったのか、ワイワイとスーツの破れているヨロヨロの側近が嬉しそうに用意する酒を飲みながら床に座ったまま話しをはじめていた。

バカロンは、「俺はとても大切に傷一つつけず大事に育てる、俺と透子の子だからな。補佐も早くからつけてな。」

とうとうとりと話している。

レイちゃんは、「私の子も次代の総帥にふさわしい最高の子になるでしょう。」と言っている。

何故か皆自分の子の方がと、まだ何も始まっていないのに勝手に親バカモードに突入しはじめた。

ガンちゃんが今ロシアで育てている護衛用の子供で優秀なのを俺らの子供につけよう、そう言っていると、バカロンも俺にもくれ、変わりにきちっと洗脳はして最高の護衛にしてやる、と話し出す。

そして、それ以降の教育は黒幡で引き継ぎ、最高の忠犬を作ろう、と言っている。

皆は、特にヨウちゃんが、それなら安心だなんて笑って、皆にいか  
に黒幡のそれが凄いか説明する。

だが多くは潰れて死ぬだろうから、黒幡側でも子供を集めてくれ、

と何故か和気藹々と父親同士の結束を固めあっている。

それから何故か黒幡日本支部長にヨウちゃんが復帰することになり、全員で乾杯した。

反目はどしたのさ、と私が冷たく聞いてやったら全員が声を揃えて言った。

「透子との子の将来がかかっているんだ、安全ネットは何重にもあった方がいい、ましてそれが最高のものならなおさら、な。」

と全員嬉しそうに答えてきた。

確かに、この男達がスクラム組めば、怖い物などなさそうだけどさあ、ここ少しは私が怒ってもいい気がするのは何で？

私はこの1日の大騒ぎを思いだし、一体この落ちはなんなんだろう、と呆れながら、まあ、私が産むわけじゃないんだし、とまた思い直し、最高級に危険な男達がやりあうよりは、全然これましなんじゃない、と思いつつそのまま安らかな眠りに身を委ねることにした。

手打ちなどきれいさっぱり雲の彼方に飛んで行ったばかりか、最強最悪の父親同盟がここに発足した。

ね、だから思うんだ、女にまかせたら、少しは戦争なんていうのも減るんじゃないか？ってね。



### 第35話

信じられない、私は遠く現実逃避中。

私はこの手術台とはいえ、ピカピカ特注のゆったりとした柔らかいその上で手術着、うん、これも特注のね、それを着てユキちゃん自ら長い針で私の卵子を取り出したんだけどね、機械の画面をみながら、それはそれは慎重に、さすが神の手、婦人科もばっちりだ。

ま、それは置いて、ユキちゃん、この日の為に長期休暇ずっと取ってて、私の管理はパーフェクト、凄かったよ。

信じられる？トイレまでついてくるんだ、ありえないでしょ。

ここは新規オープンするという名目でバカロンが風水ばっちりの診療施設にリフォームした建物なんだけどね。

ふっ、何が信じられないって、私から取り出した卵子にね、一人ずつ目の前で、その・・・精子を出してんの、恥も恥じらう乙女の前で、嬉しそうに、私を見ながら・・・。

私が目をそらすとすると、俺をみる！って懇願されるの、切ない声で・・・。

ええ、ええ見ますとも、見りゃあいいんでしょ！私ってばまだ男の人といたしたことないのに、こんな間違ってるよね。耳年増ならぬ目年増？って奴？普段の生活もこうして思い起こせば、とても半端なく濃い気がする、うん、濃いどこじゃないよねえ。

子の後、学園も明日から3日は休まなきゃだめだっていうし……。

「透子！」

はいはい、余計なこと考えないでって？

今最後に受精するのはユキちゃん、ユキちゃんは満足そうに私にキスすると人工授精させたそれを確認すると、すぐ隣の第二手術室のベッドで眠らせている女の人の子宮に慎重に戻している。

その女の人の首には数字がかかっていて、それぞれの父親の記号もついている、肩にはその記号のタトゥー。

それぞれ個室があてがわれ、その個室につく看護師は大金で雇われた人間で、全て産婦人科出身のベテラン揃い。

そして、その女性たちの世話をするのが、それぞれの一番信頼できる側近達。

この個室で経過観察して、安定期に入ったらバカロンだけその代理母を日本から出国させるらしい。

彼女達代理母の腕には発信機までが埋め込まれ、そして……彼女たちの目は潰されていた。

余計なものを見ないように、皆日本語を知らないから耳は大丈夫。

私はその後、ユキちゃんのOKをもらってベッドを出ると、一人一人の部屋に挨拶に行き、寝てる彼女達の頬とそのお腹にキスをした。



一生遊べる大金と引き換えとはいえ、目をつぶされるのもいとわない、それぞれなりの事情を抱えている彼女たちに敬意をこめて。

初回で出産まで行かない場合、解任され金額は半減されるという、彼女たちの為にもどうぞ無事で生まれるてくるように、と私は心から祈った。

そろそろ寒い冬も終わりに差しかかる頃、全員大丈夫そうだと言ちゃんが嬉しそうに教えてくれた。

何とか9月まで無事に過ごし、元気な赤ちゃんが生まれればいと素直に私もその父親たちも思った。

### 第36話

いよいよ新学年に上がった。

新入生を迎える準備というのは、学園側とは別に新入生名簿を作ったり、それを元に使えそうな1年をピックアップしたり、歓迎会の準備やら親睦会やらと幾らでもやることであって、さすがに私もせっせと働いている。

シロも新年度に合わせて、伸びに伸びていたロシア滞在から合わせて帰国していた。

ホラ、伸びた理由はね、九州統括なんたら奴らは直ぐにつぶしたらしいんだけど、例の護衛の子供集めがねえ、・・・原因らしい。

これって、ちょっとは私も関係してるかなって思うわけ、少しだけど。

だから新しい家、うん、今度は高い塀もばっちりな凄いセキュリティのついてる大きな家に住んでんの、マンションやめて。

その家にソウも住んでてね、離れの部屋だけどね。

だって、ここじゃなきゃ、絶対シロもコロもムーミンなんて見せてもらえる時間をくれないよ、ソウはそういう奴だ。

だから、離れの部屋にソウも無理やりお引越しよ、かわいいわんこズの為に私頑張ったよ。

そのシロの帰国の日には、帰るなり新しい家でいそいそと涙を流してムーミン見て喜ぶシロとコロの頭に花冠乗せてあげたの、そつとサプライズで。

・・・ついでにヨウちゃんにも、あげないところさいからね。

うん、2人の喜ぶ様子にすごく癒されたよ、久しぶりに私もね。

あんなにパアツてカワイイ笑顔見せられたら、作った甲斐もあるってもんよ。

一生懸命フローレンのに似せて花も選んだんだから。

そんな感じでシロも学園に戻り、新入生にもシロは理事室の王子様として人気を不動のものにしてる。

あの例の山田妹も無事入学し、新1年生をまとめる黒ユリ会幹部となった。

うん、本当に覚悟した女の顔してる、いい感じ。

でもね、黒さが薰るの、あの、おどおど娘っぷりが懐かしいって思うのは何故なんだろう？

こんな感じで順調に2学年に進級しても順調に学園生活は送れてんだけど、プライベートでは、ちょっとめんどくさい事に、学園祭にこないようにお願ひした時の条件の履行を、最近とみに溺愛っぷりが増した保護者ズから催促されてんの、毎日のように。

あのとんでもない大騒動の後の、またまたとんでもない子づくりの

件で、このままウヤマヤにならないかな、と思ってたんだけど、すっかり催促されてんのよ。

それはね、「それぞれと1日中一緒に過ごす。」という約束。

しゃあないかなあ、約束は約束だもんね、今日の夜はくじ引きで一緒に過ごす順番を決めよう。

私は次回の学園祭で保護者ズに暴れられる事を想像し、絶対こっちの方がマシなはず、そう心で天秤をかけ、そこら辺にある紙で、いそいそとくじ引きを作った。

うん、小学生の時やった職場訪問、あれだと思えばいいよね。

そう軽く考えていた私が甘かったのは、言うまでもない。

第37話(前書き)

レイちゃんと一緒

### 第37話

まったく、私のそこらにある紙で作ったくじ引きは却下され、我が保護者ズはマリオカートで熱い順番決めをした。

いやあ、マリオカートってもっとほのぼの遊ぶゲームだと思っただよ、私は。

何と言うか、ひどく熱かった、というかひどく物騒な雰囲気の間だった。

結局、一番になったのはレイちゃん、次にテイちゃん、ユキちゃん、ガンちゃん、ヨウちゃん、そしてブリツケはキョーちゃん。

キョーちゃん、真っ白になっていたな、ガンちゃんにお前の転がしは誰より上だが、まあ、あそこの罠に綺麗に次々はまるなんざあ、誰にも真似できねえよ、と馬鹿にされてるんだか褒められてるんだかわからない言葉で、肩をポンポンされていた。

リアルな走りでは誰にも負けねえ、って叫んでたけど。

それで今日は学校を1日サボって、新歓も終わったばかりで私的にちよつと余裕もあるから、1日レイちゃんと一緒の日になった。

筆頭秘書の前島さんが、レイちゃんと私の赤ちゃんの代理母さんの所にずつとついているんで、今は筆頭補佐の「やつほ」の榊さんが家に迎えにきている。

私が例によって「やつほ？」と言って挨拶すると、毎度毎度律儀に

こめかみをピクピクさせてくれる。

本当にからかいがあるよね、この人。

「おはようございます。透子様。本日は1日よろしくお願いいたします。」

そう言うて目では「邪魔スナ」そう訴えてくる。

うん、私つては超エリートのお癖に、実際レイちゃんもこうして身近に置くくらいだから出来る奴なんだろうけど、このからかいがあるこの人好きなんだよ。

いまだき、どこのオボコ息子だよ！つて感じ、ほら私の周り黒い人多いから、こつも素直な反応返されちゃ、いじめがいあるのよね、まったくの直球でブレの持つ余裕を知らないんだよね、大人のくせに。

よく言うじゃない？頭のいいのと賢さは違つて、ほんとそんな感じ、でも嫌いじゃないのよ私。

「よろしくお願ひします、今日はお邪魔させていただきますね。」

私は、それはそれはにっこりとほほ笑んでやった、目にかからかいを乗せて。

ほら、そうやってピクピクする、本当に私相手だと榊さん面白いよなあ。

今日1日榊さんで遊び倒すのってありだよね。

はいはい、レイちゃん、そんな顔しないの、私はレイちゃんの腕に自分の腕をからませて、榊さんへの私の反応にふてくされるレイちゃんに甘えた。

今日1日我儘ほつだいやつてやろうと、そんな意気込みで車に乗った。

みんなの「つまんなかったら早く帰ってこい！」の大合唱の見送りを受けて。

本社の超高層ビルは、全部レイちゃんの企業グループが入っているそう、中層階から上が本社になるという。

レイちゃんと一緒に車を降りて、恋人つなぎで役員専用エレベーターに乗ったんだけど、受付嬢はじめロビーにいた大勢の人達の視線が痛いこと、痛いこと。

思わず鼻で笑っちゃったよ。

一番上の総裁室は総裁用のいかにもの机と椅子があり、総裁秘書チーム10数人が少し離れた所にいる大きな1つの部署になっていた。

お客様と面談するのは別の専用の部屋があるらしい。

先代と違い無駄な総裁室を一つの部署としたという。

ついて早々、レイちゃんは秘書さん一同の挨拶を受け、彼らはレイ



ちゃんと手をつなぐ私に1階と同じような反応を返してきた。

私はレイちゃんにそのまま総裁用の椅子と一緒に座らせられて、本日の予定なるものを榊さんから必然的に聞かされた。

うげっ、いろんな人と会う予定びっちりじゃん。

今日は出張がないと言つので、一緒にいるのに、私にどうしろと。。。

榊さんが午前の予定に続いて午後の予定を言い始めた時、私はさすが携帯を手にして電話していた。

「ヨウちゃん、いますぐ迎えに来て、つまんないから。」と。

その瞬間ピシリと固まる榊さん。

レイちゃんは、すぐさま私から携帯を取りあげて、

「迎えにくる必要はありませんよ。」と私を見つめながら話している。

「なんで、私つまらないの嫌いなもの、今日の私は誰かと会いたい気分じゃないし、何で私がレイちゃんというせいで、誰かに会わなくちゃいけないの、ましてお留守番を私にさせる気なわけ？絶対いやー！」

「あゝそうだ、オリエンテーリングのいいアイデア浮かんだわ、学園に行かなきゃ。私学校行くね。」

私がそう言って立ち上がろうとしたら、レイちゃんがすかさず私をぎゅっとして動けないようにして、榊さんに指示を出した。

今日の予定は全てキャンセルしろと。

固まったままの榊さんはレイちゃんに抱っこされてる私を、それはそれはじとっと思て、その後、背後に控える自分の部下達に今日の予定の全キャンセルを急ぎ相手方に連絡するよう告げた。

こちらに向かっている方々には、急ぎ専務に連絡して専務との面談に切り替える、と。

ふん、私知らないもんねえ〜だ、私のわがままモード甘く見ない方がいいよ。

それから書類仕事に切り替え、それを次々とするレイちゃんの膝で私は、メールしたりメールしたりメールしたりしてた。

だって、あまりに秘書さん達の、予定のキャンセルに翻弄されてるのみると、ちよっとは大人しくしようと思ったのよ、少しは。

それに大人しくしてないと、レイちゃん仕事しづらいと思ってね、私が別の椅子に腰かけようとしても却下なんだもん、抱きかかえて仕事するなんてその時点で私どんだけ邪魔なんだろ、とは思っけど私のせいじゃないよね？

けどね、私がせっかくそうして気を付かってメール打つたび、レイちゃんのチェックが一つ一つ入るんで、これ意味ないかも。

私がメールの邪魔しないで、って言ったらレイちゃんの変なスイッ

手押しちゃったみたいで、いかに私が心配で愛しくてと、ほんと勘弁してつてくらい滔々と説明されて、しまいには自分たち以外の邪魔者はさっさと処分すべきでしたね、と本気で言いだした。

はい、ごめんなさい、委員長達へのメール今すぐ止めます、私は空気が読める子だから、ちゃんと白旗をあげる時知ってますとも。

そしてキャンセルやその他の仕事の電話や書類をまとめながらも、こちらに時々よこされる秘書さん方の私への視線は徐々に隠そうともせずにきついものになっていった。

そりゃそうだよね、こんなレイちゃん見たことないだろうし、この職場だもんね。

理解はするけど、だけどね、こちらを見る秘書さん達の空気の悪さに私は言っちゃった。

だって私って基本優しくないし。

「レイちゃん、みんな私を嫌な目でみるんだけど、すごく感じ悪い。」「って。

だってホントだもん、女の秘書さんが6人くらいいるんだけど、特にその目がね、いろいろと語ってますよ。

私が言うとレイちゃんはそちらを見て、納得すると即座に、

「ただ今を持って、総裁秘書室は解散する。」

「すぐに追って辞令を出す、すぐさま退室し企画室でそれを待つ

ように！」

続けて榊さんに明日までに新しい秘書室を立ち上げるよう、命令した。

榊さんは机で電話を取ってただけで、すぐさまレイちゃんの所に慌ててきて、どうぞお考え直し下さいと嘆願した。

私はレイちゃんの手を取って、その指をいじりながら知らん顔して遊ぶ。

ほら、何度も言うけど基本私って優しくないから。

榊さんはそんな私をはつきりと睨みつけて、レイちゃんに言う。

「総裁、お考え直し下さい、彼らは我がグループが誇る優秀な人間達です。どうぞどうぞ今一度お考え直しくださいますようお願い申し上げます。このような事で解散などありえません。透子様もどうぞお戯れなさらず、総裁にお取り成し下さい。」と。

それを聞いたレイちゃんの温度が、醸し出す雰囲気が一気に低いものになった。

口々に解散を告げられた部下の秘書さん達も、総裁、総裁！とうるさかったが、その初めて見る空気に皆固まって、総裁室はやがてシーンと静かになった。

「私の妻が嫌がる人間を何故私の傍におかねばならない？何故榊、お前ごときに指図されねばならない？お前には前島のかわりは無理なようだな。前島なら透子がこの部屋に入る前に、既にこの部屋に

いるべき人間を取捨選択していただろうに。」

「その対応さえ満足にできず、あまつさえ透子に対して、お戯れだと！このようなことだと！お前は、いや、お前達は何を勘違いしてる？お前たちの代わりなど幾らでもいる。日替わりにできるくらいにはな。この会社はそういう人間ばかりだ。私はそう自負しているし現実にそうだ。違うか？いったい何をうぬぼれているんだ？」

「私が私の命より大事にしている、私の存在の全てを捧げている大事な大事な妻だ。その妻が嫌だという空気を醸し出す愚か者、そんな勘違いどもなど私はいらぬし目障りだ。消えてもらおう、すぐに、私の前から、今すぐにだ！」

「出ていけ！私に何度言わせる気だ！お前もだ、榊。」

私は榊さんを見た。

とても真っ青な顔で血の色がなかった。

私は茫然とたたずむ榊さんに「やつほ？」といつものように手をあげたが、はじめて何の反応もなく、そのままフラフラと総裁室を出て行った。

あんたつてばレイちゃん、表の一部しか見せてもらってなかったもんね、バイバイだ。

けど、レイちゃん、妻ってなあに？妻ってさあ、何度も連呼してたよね。

筆頭秘書の前島さんに電話するレイちゃんを見ながら、ま、気にし

ない方向でいこうかなと私は思った。

第38話(前書き)

テイちゃんと一緒

### 第38話

今日はテイちゃんとおでかけの日。

ふふっ、夜の世界にゴー！よ。

キラキラしたお姉さんやお兄さんを、日本でもトップと自他とも認める最高の店に、テイちゃん自慢のその店に連れてってもらおうの。

実のところ、このお出かけだけはちょっと楽しみ、好奇心いっぱい。

私はこの日の為にレイちゃんが、レイちゃんそれぞれのお出かけの日用に、とても綺麗なデザインのワンピース作ってくれたの、いつもドレス作ってくれるデザイナーの方が、作ってくれてんだけど、綺麗なシルエットの上品な、それでいてカワイイワンピースは絶対私のお気に入りなの。

今夜のお出かけも、テイちゃんとお出かけ用の最高級のシルクの生地、全体に大きな刺繍、鳳凰が上品に同じ色で入ってるんだけど、ところどころボヘミアンガラスが装飾でついていて、凄い贅沢で綺麗な乳白色の膝下までのなの。

これが歩くたび優雅で、家出る前にみんなに見て、見て！ってクルクル回り大騒ぎしちゃった。

で、テイちゃんが最高の場所で最高の男と女を揃えて、日本一だと豪語する会員制のクラブ、料金も最高級なそこに連れてきてくれたんだけど、実際どんだけのものなんだろうと、ワクワクしていたのよ、私的には。



テイちゃんに抱っこされながら、ここ大事、抱っこなの……。

それでもね、それさえも目の前のごちそうに比べたらと、大人しくされるがままにいた私に、この仕打ちはないよねえ、切れてもいい？

「貸切」なの。

そう、今夜は私の貸切になってた。

キラキラしい最高のプロの綺麗な方たちと、それに見合うセレブなお客様たちの高度な駆け引き目の前で見たかったのに、肩すかしてえ〜って感じ、やってらんないよね。

1日一緒プログラムで唯一楽しみだったんだよ、マジない！

今夜はこのビルの？2以下の店、6店舗が営業中で、ここだけ貸切中。

綺麗なお姉さん、お兄さんはどこ？と聞いたら、

「お前には俺がいればいいだろ。俺が相手だ。」だって。

即効却下、私、超わがまま+切れモード発動！

テイちゃんは一つため息をついて、私を抱っこしたまま？2の店に席を用意しろって、そばに控えてるボーイさんに言った。

やった、やったよ、透子！

「ホントに透子はわがままだなあ。」って言いながら、テイちゃんは私の髪を撫でる。

うちの保護者ズの好物は私のわがままなんだ、それ知ってるから、ここぞって時使うんだ、これって生きる基本だよな、弱いところくのは。

私はそのままテイちゃんいわく、？2の店に移動した、・・・抱かれたままだけど。

この店内は女の人しか置いてないけど、素敵なフォーマルドレスや華やかな着物を着たお姉さんが沢山いて、テーブルごとの間隔も広く取られていて、背の高い観葉植物がそこかしこに置かれていて、その合間にもお花や置物で飾られ個室とかわらないくらいにお互いのテーブルがあいてて、煌びやかなシャンデリアも間接照明も綺麗で、思わずテイちゃんのほっぺにチュウして、私はここにこだった。

これよ、これ！

ボーイさんがすぐそばに控えていて、綺麗なこの店のママさんと数人の美女が私のテーブルの向かい側についてくれて、かいがいしく私の世話をやいてくれる。

私が機嫌がいいので、自然テイちゃんもご機嫌。

ママさんもしつとりとした大人の女って感じで、他の美人さんたちも、押しつけがましくなく控えている。

これぞプロ！プロ最高！と私が堪能していると、テイちゃんがこうしてひととこに落ち着いている事が少ないらしく、来ている客たち

の中で目端のきく何人が、さりげなく挨拶にきはじめた。

ほら、機嫌いいから、私もどうぞどうぞって感じていたの、大人しくテイちゃんの隣に座って、それはそれはおいしいバナナジュースを飲みながら。

その男が来るまでは。

その男は40くらいの人で、私のセンサーにピコピコ反応したの、ガンちゃん臭のするヤのつく方面の人だって。

高級スーツを着こなすその男は、一見エリート然として、その後ろに控える人たちも、そうは見えないけど、バカロンやガンちゃんと同じだ、気をつける、と私のセンサーは警告する。

はあ、何で花の女子高生がそんなセンサー身に着けてんの、と自分でも思うけどね。

私はさりげなく下を向いて、顔を合わせることなく、無邪気にジュースを口にしながら、この人も1、2分で終わりになりますように、と、「早く行け〜」と頭の中で祈りを込めていた。

うん、私がかたま〜に祈っても、それがかなわないのは何でだろう？  
初詣いったよねえ。

そうか、私の周りかどちらかと言えば、いや、100パーセント地獄の住人決定の人ばかりだからか？

神の加護もとからけっぱしてるわな〜、納得したかも。

そして案の定、その男は私に挨拶をしてきた。

「お噂はかねがね、黒ユリ、というより、もっとカワイイ花の名前の方があつてるように思いますね。だから私は別の名で呼ばせてもらつてもいいかな?」と。

私が目をつと上げると同時に、テイちゃんがすぐさま立ち上がり、その男と一触即発状態になる。

それに何気に控えていた、それぞれの部下達も加わり、ピリピリと雰囲気痛いくらいだ。

はあ、めんど……。

私は座ったまま、ジュースの最後の一口をしつかりと飲み、テイちゃんのスーツの裾を引いて「抱っこ。」と甘えた。

ついでに、その男に、

「あなたは誰かは知らないけど、私を知ってるみたいね。」

「それで、私に許可なく話しかけるって事は……壊れたいのね。自虐が好きならお望みのままにしてあげる。相手はよりどりみどりで、あなたの望みの相手は誰かしら?」

私は携帯を手に取り男を見る。

それを見て後ろの部下が声をかけた。

男はニンマリと初めてその本性をあらわし、そう怒るな、そう言っ

て勝手にテーブル越しに私の前に座る。

テイちゃんがあきれたように溜息をつき、私をなだめるように肩を抱いてきた。

綺麗なママたちをその時点でテイちゃんがどかしたので、私がふてくされると、テイちゃんは私を更にその腕に抱え、私にごめんな、そう言っつて、それからその男に話しかける。

「お前、本当にやられてえーなら何もいわねえ。ふざける相手間違えるなよ、おい！」

そう言っつて男を見て、ガンちゃんはこの組織の理事の一人で関西に本拠を持つ本間組組長本間義久だと私に紹介した。

私は勿論知らんぷりした、綺麗なお姉さんカムバックよ。

その本間さんが噂は噂以上っつてわけか、と言っつてたけどこれまた無視よ、無視。

その変わり、しぶい側近らしき人が、丁寧に謝っつてきた、いつまでも悪戯好きなもので申し訳ありません、だっつて。

いたずら好きじゃなくて、ただのバカよ、バカ。

けれど、その側近の高須さんが、いかにもごつい体を縮めて眉を下げて謝っつてくる様子が、なぜか私にヒットした。

ああ、そうか、私が幼稚園の時に飼っつた犬のコロにそっくりなんだとそう気づき、私が気にしないで下さいと手の平返したようにご

機嫌になったのは、そして待ち受けにするんで写メとらせてて下さ  
いって言ったのはしょうがない事だと思う。

私には癒しが足りないから、貴重な癒しはゲットして逃がすもんか。  
うちで飼う生き物の名前は全てコロとシロしかない。

その後機嫌が急降下したテイちゃんを余所に、ちゃんと私の望みを  
気がついた高須さんの指示で、写メを取らせてもらい、なおかつ沢  
山の綺麗どころが入れ替わり立ち代わり私のテーブルに来てくれて、  
私は凄いが機嫌になった。

それに反してテイちゃんは、おどろおどろしくなったけど。

テイちゃんが昔ワルだった時の兄貴分だったという本間さんと、絶  
対コロの生まれ変わりだと言う私に、コロが生きていた時には、こ  
いつもいたぞ！目を覚ませっ！て怒ってるけど、私はべーっ舌を  
出して相手にしてやらなかった。

家にいるコロとシロ、それにコロ2号、ふふっ、私の癒しだ〜、と  
ニコニコ笑う私に、テイちゃんは、

「ちくしょー！俺はみんなに責められるじゃんか、俺のせいかなぁ〜  
！」と騒いでいたけど、無視だ無視。

それを同じように確信犯で乱入してきた癖にニコニコしてる本間さ  
んがいた。

私と目が会ったので、私は決まりのセリフを言ってやった。

「お主もワルものじ。」

第39話(前書き)

コキちゃんと一緒に



### 第39話

はい、はい、今日はユキちゃんと一日過ごす日なんだけど、基本ユキちゃん、バカロンの作った病院に長期休暇とって一日中いるから、私はそこにはいかないんで、普通に学校終わってから会うことにした。

放課後、黒ユリ館で新入生歓迎会について皆が話を詰めているのを聞きながら、新1年生からのアンケートに目をやり、ついニヤリと笑ってしまった。

仮装パーティー、遊戯施設を借り切ったのレクなど無難なものが多い中、「仮想力試しゲーム」なるものがあった。

その趣旨は、わざわざこの学園にきたからは、どこまで今のままで何ができるか、どれほどの事ができそうか、仮想でいいので試したい、なんていうものもあった。

委員長が密かに笑う私に気が付いて、他に宝塚系の萌え劇で主人公を私と委員長でというのもあったと笑う。

どれだけ楽しむ気なんだろうと思ったが、こういう楽しむときには楽しんで、っていうスタンスは好きだったりする。

おっ、携帯だ、見るとユキちゃん、もう迎えの時間らしい。

私は皆と挨拶をして、出迎えたユキちゃんの車に乗った。

ユキちゃんとのデートはグループトップのご両親の元への顔合わせ

だった。

これってあり？

それはそれは明治の世に建てられたという洋館は黒光りして、幾代もの手に大切にされた、そこらの金持ちが真似できない威風を感じ、その憤まじやかな内装も一つ一つが由緒ありげで、私はその古い大切にされてきた空気は嫌いじゃないけど、何で私が会わなきゃいけないのかってところで、当然不機嫌マックスだよ。

代々仕えてるといふ年配の執事さん夫婦は、私とユキちゃんの顔を見て声をあげて涙を流した、おいおいと思っちゃう私って普通だよ、玄関先でこれだもの。

当主のお父さんと後妻のお母さんもそれはそれは諸手をあげて歓迎してくれた。

喜ぶご両親を見て何か怒ってるのもバカらしくて、もういいや、ってなっちゃった、あきれてだけどね。

お母さん、すんごい影が薄いつていうか、薄幸の美人というか、一人でなんかしよっちゃってるような人。

これじゃあ、子供時代のユキちゃん先妻の兄、姉から、その一族からやられて、病んじやうわけねえ、っってお母さんを見て納得した。

バカみたい、自分で産んだ子一人守れずに、いいえ、守ろうとはせずにいる親二人。

それが、息子がつきあっている女性を家に初めて連れてきたと、父

親は破顔し、母親も嬉しそうにこちらを見る。

うん、これが普通の反応かもしれないけど、すんごく気持ち悪いのよ、基本的に忠実？みたいな芝居みてる感じ。

父親は一度家の決めた女性と結婚して、二人も子供を作った癖に、看護師だったユキちゃんの母親である元カノと再会して、やはりその儚さに自分が傍にいなければって思い込み、不倫の末にユキちゃんを作り、すったもんだの騒ぎの後に無事再婚。

実の母親は不倫した段階でわかってただろうに、めでたく後妻に入った後、一段落したら周囲の視線が気になり、あげくの果てに自分の不幸にばかり目を向け、辛いのよ〜というオーラばかり身をまとう、結局自分が、不幸な自分が大好き女。

ほら、今もそう、嬉しそうに笑った後で新しい不幸の種に目を向け始めた。

ほら、言った。

「私は体もそんなに丈夫じゃなくて、この子の面倒もちゃんと見れなかったの。こんな私が母親だなんて、許せるものじゃあないわ。あのころに戻って、ちゃんとちゃんと……。」

そう静かに泣き出した。

本当にそう思っているの？夫の胸にすがって泣くのに、肝心のユキちゃんには目もやらない。

そして、「しょうがなかったんだよ。」そう言って妻を抱きしめ慰

めるる父親もまた、同じこと。

しょうがなかった、そう言える資格があるのは当事者だったユキちゃんのみだろうに、この夫婦愚かすぎるにもほどがあるわ。

大体こういう男は、先妻と別れる時「君とは違って、悪いけど彼女には自分がいなければダメなんだ。」とか言っただけで離婚してそう。

親が決めたにしても二人の子供を産み育てた先妻との間に、少なくともお互い何かがあったはず、その先妻の心に思いをはせる事もできない男が、まして先妻との子を責任持って育てられたのかしら？親の責任とかでそのまま育てられた子供たちにしたら、ましてこの自分だけ不幸の後妻のオーラみてたら、たまったもんじゃなかったと思う、うん、嫌だ。

そりゃあ、ちゃんとわかる人間なら、腹立たしいよね、ユキちゃんに当たるのも違うから、だからって許せない話しだけ。

ユキちゃんも、もし先妻の子供たちが、父親に向かっていったなら、彼らを叩きのめす事は後々しなかったと思う。

大人しく争いもせずにはいたはずだわ。

実の母親は甘い臭いの放つ自分の不幸をいつも嘆きつつ、その実、で、どこら当たり不幸なわけさ、って女で、命にかかわるような虐待を受け続けていた実の子の本当の不幸は目にも入らない人間で。

実際もしそれがわかったとしても、「自分の方が！」と言いかねないバカ親。

父親は、自分がいなきゃダメな女を愛してると言いながら、その実、その女が自分自身以外、誰も見ていない事実に気が付かないバカ。バカだから一番寄り添うべきそれぞれの子供たちのSOSにも気づかないし見ようとしてもしない。

初めて両親に会わせられた私は、ユキちゃんを見た。

ユキちゃんは幼い自分を何とか守ろうとしてくれた執事夫婦に向けた時の優しい顔のままだけど、自分の両親に向ける眼差しは、そこに何の感情も乗せられていなかった。

私はユキちゃんが何故私を連れてきたかがわかった。

私は、普通の親の顔をして、普通に私に接するユキちゃんの両親に言った。

「もう二度とお会いする事はありませんが、報告まで。ユキちゃんには私がいいます。」

そう言ってそのまま席を立った。

ユキちゃんも同じく席を立って私をみて嬉しそうに微笑む。

急に立ち上がって出て行くこうとする私たちに驚いて、戸惑う二人はユキちゃんの顔を見て、私の顔を見て都合よくまた解釈した。

「若い二人の邪魔するのもなあ。そういうことだな。」

お父さんはそう言って好々爺の如く笑って、私達を見送る。

愛妻の不安げな眼差しに、優しく肩を抱きながら話す声が聞こえた。

「子供はいつの間にか大きくなって親から離れていくんだよ、寂しいかい？」と。

私は一瞬だけ怒りのあまり足を止めそうになったが、そのままユキちゃんちを出た。

帰りの車の中で、ユキちゃんに言った。

「アホだね。」

ユキちゃんは笑ってそんな私をみた。

ユキちゃんは、あの両親を切るつもりだ、その為私に会わせた。

私がどこかで自分の家族を引きずっているかもしれないと考えて、自分が切る身内である両親を私にちゃんと見せた。

私が万が一、ユキちゃんの「家族」の事が耳に入っても気にする事がないように。

私がお家逃げた理由を、みんなには話していないその理由を、さては保護者ズは知っているなと確信した夜でもあった。

まったく、彼らは私が傷つく欠片でも見逃したくないようだ。

これは一度最早もう何でもよいよ、と証明する必要があるかもしれないな、と私は思った。

### 第39話（後書き）

今までは予約投稿でしたので、震災後、初めての投稿になります。いつも通りに粛々と生きていく、ですね。



第40話(前書き)

ガンちゃんと一緒に

## 第40話

新人生歓迎会は、大体の骨組みも決まり来週の木曜日に予定通りできそうだ。

ユキちゃんちに行つて両親に会つた事は、誰も触れも、揶揄もせず、皆完璧スルーしている。

何、なんなの？大人の余裕つてのを見せられてるわけ？

他の時には、根掘り葉掘り何でも、どんな事でも何があつたか知りたがるくせしてさ。

やっぱり、絶対怪しいよね・・・これは一度はつきり聞かなきゃ、だな。

私は夜のお仕事組の準備が整うのを待つて、自分の用意も準備万端なのを確認した。

今夜ガンちゃんとお出かけするのに、思いっきり白いレースのこれでもかつていうパステルグリーンを基調としたふりふりワンピースにしてやった、しかもスカートの下はばつちりパニエよ。

どうよ、これ、嫌がらせにも程があるでしょ。

本当は、すごいシツクな大人っぽいレイちゃんが用意してたんだけど、ガンちゃんと一緒の日にこの恰好でいくつて絶対ないと思うわけ。

仮装大会なみに私的には恥ずかしいけど、恥と嫌がらせを天秤にかけて、嫌がらせをとる女だから私。

このワンピース誰が買っておいたのかは、後で聞いてきっちりいじめてやる事も忘れない。

さて、後は出かけるだけだ。

私はそこで初めて聞いた。

「ねえ、うちの家関係はだ〜れも触っちゃいないよね？特に姉たちは。」

私が唐突に聞いたのに、まるで当たり前のように保護者ズはあっさり答えた。

「ありゃあ、俺達が手を出す事じゃねえなあ。」

「忌々しいにも程がありますが、彼らだけは透子の領分です。」

うん、知ってるならいい、「だけっ!」ていうのは引つかかるけど、えっ他は？なんて聞かない、聞かない、私空気読める子だから、やぶ蛇って言葉も知ってるから。

よし!それじゃあ、今夜はガンちゃんとお出かけた。

・・・うん、このワンピース買った犯人即効わかったよ。

ガンちゃんはこの本部事務所の一見すると只のビジネスビルにしか見えないそこで、入ってすぐにソウの父親である若頭の香川さんが代表で出迎えてくれた。

その挨拶の後に開口一番に、

「組長が透子さんにお買い求めになったこの服を着て下さり、まして男ばかりのむさくるしい事務所にこうしてお出でいただけると、組長以下我々幹部一同、感に堪えません。我々も一緒について共にお選びするのに、助言させて頂いた甲斐がございました。」

もう一人の補佐も、

「さすが組長です、おかわいらしい透子さんに、とても似合ってます。つしゃいます。」

あなた達、ガンちゃん筆頭にこの乙女系ファッション専門店に大挙して押しかけて、あーでもない、こーでもないやっただけ？

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

事務所の中は、ただのエリートサラリーマンや普通の人に見える人間もいるが、半数以上ヤのつく人だよねえ、と一般ピープルがみてもすぐわかる強面な人ばかり。

まして、こうして本部に詰められるのは、分派の組を持っている人

や幹部の皆さま、そしてその護衛の方々しかいない。

あれっ？その恰好と独特の異質な空気を持って、一発で黒幡の人だとわかる人間もちらほらいる。

何でここにいるんだ？

まあいい、気にしちゃだめ、この系統の人間は理屈じゃない、普通じゃない、常識じゃない、まともに考えちゃいけないのよ透子！スルーよ、スルー。

それにしても、私とガンちゃんを見るこのなま暖かい事務所の雰囲気は何とかならないのか、と思う。

それに、なんで各々のテーブルに派手な生花がドーンとこれみよがしに置いてあるの？

派手派手な金色が入った花瓶に、これまた派手派手しいというか、最早毒々しくさえ感じる花々、目が花を見てチカチカするって初めての体験だ。

ちゃんと見ないようにしよう、自分の為に。

ほら、視野をぼーっと広げるのよ、透子、焦点を合わせたら待ってるのは毒々しい花！気を付けて！

視野を広げたせいで目の端に入る、事務所の窓についてるポリウームたっぷりのレースのカーテンは同じようにみないようになきゃ。

ついてるタッセル、ぬいぐるみのクマ？見ない、みない、見ちゃダ

メ、何か失われる気がするもの。

挨拶もそこそこに、急いでチカチカから逃れる為に、ガンちゃん専用の個室に入れば、ガンちゃんのマホガニーのどっしりとした机を背にして、こちらから見て表面に飾られた高津組の紋と、本部紋、飾り刀が見えた。

本来なら、その筋らしい重厚な雰囲気をかもしだすはずが、そこにも何故か結婚式場でみるような生花の飾りが施されていた。

サテンとシフォンの大きなリボン、綺麗だね、飾りの日本刀についていなければ、ね。

そして、驚くことなかれ、壁紙は可愛いクリームイエローの地に、上部には真っ白ふわふわな雲が描かれ、可愛い花束を持ったテディベアが赤いリボンをつけたメスのテディベアのほっぺにチュウをしてる図柄のものだった。

・・・これはすごいジョークとして笑うべきなんだろうか？笑うとこだよね？間違いなく今すぐに。

けれどなんでクマ？

あまりの突拍子もない部屋の様子に、私が目を点にしていると、ガンちゃんが、

「透子、どうだ気に入ったか？うん、どうだ？」

と得意げに甘い声を出し聞いてくる。

隣にいる香川さん以下、補佐の皆さんも、「どうだ！」と言わんばかりに期待に満ちた眼差しで私を見ている。

えっ、これってどつきりジョークじゃないの？まじなわけ？それこそビックリだ。

続けてガンちゃんが、

「陽二の野郎が、俺が内装をこの日の為に変えようとしてるの知って、いい業者だと紹介されたんだがな、あいつときたらここの壁紙を勝手にムーミンで注文してやがった！それも特注で！念のため用心して業者に聞いといて良かったぜ！アブねえとこだった。」

香川さんが続けて言う。

「さすが組長です、油断なならない、相手がああ青井さんでも。本当に感心いたしました。」

「だろうな！俺はあんなカバもどきの何処がいいんだか疑うぜ！な、透子。」

と、鼻を得意げにならすガンちゃん。

私は学校の元カメラリア館に眠る、ガンちゃんから贈られた、あの熊のはく製を思い出した。

で、あんたはクマなのね、と。

思いつきりこの部屋に引きながら、頭の中で了解です、とりフレインする私。

こっつてまがりなりにも名前の通った暴力団の本部事務所だよね。

・・・バカだ・・・。

ニコニコ、ニコニコそんな笑顔の溢れる中、ガンちゃんの仕事所訪問は終わった、遠い目になる私を残して。



第41話 ヨウちゃんと一緒(前書き)

今回からサブタイトルつけようかと。

## 第41話 ヨウちゃんと一緒

この間のガンちゃんところで、いろいろ打撃をくらった私は、まず仮装大会みたいな服を買ってくれたお礼？に、委員長達に頼んで、可愛いクマグッズをいろいろ集めてもらった。

一昨日ガンちゃんところに夜出かけて、昨日学校で委員長達に頼んだのに、今日の帰りまでには、それはそれは可愛いクマグッズが黒ユリ様の私へと献上された。

金曜日の今日はヨウちゃんと一緒の日。

来週木曜日に授業をつぶして行われる新入生歓迎会の前に、仕事場訪問を終わらせた私には、放課後は家でゆっくりヨウちゃんといつも通りに過ごす。

黒幡日本支部長に復活したらしいけど、ヨウちゃんは今まで通り家にいる。

必要な時は電話、ヨウちゃんいわく、自宅勤務らしい。

それなのに、それはそれは凄い大金が、兄であるバカロンから振り込まれてくる。

私とヨウちゃんは、二人でニタアと笑いハバカだろハバカだねと心の中で会話する。

黒幡は日本でこれといって活動をしていない。

ただし、黒幡支配下の中国系企業や飲食店にチャチャを入れなければ、だけど。

横浜の中華街に夜中行ってみるといい、不審な人間や車が足を踏み入れたら、日本語のわからない方々が、武器を片手にワラワラ取り囲んでくれるから。

持ちつ持たれつという日本の美德はこちら方面にもいかなく発揮されて、ヨウちゃんたら面倒だから、どうやらガンちゃんこと連携したらしく、仕事丸投げしてる。

勿論ガンちゃんどこにもバカロンから大金が振り込まれている。

ソウに言わせれば、バカロンは自分の知る人間の中では史上最悪な狂人だと、彼を知る人間は誰でもそう言うはずだと顔を青くして私に説明してくれる。

私達に対する態度が異常なんだと、だから絶対頼むから俺や犬に会わせようとするなと本気でお願いされた。

えっ、私？本気であればあるほど裏切りたい女だよ、次回来日したらこの家連れてくるよ、勿論ね。

それで話は変わるけど、今日の放課後はヨウちゃんと一緒に過ごすから、今日は他のみんなには18時以降出払っておくようお願いします。

レイちゃんなんかはいつも日付けが変わる頃しか帰らないから、関係ないけど夜組みには、いつもより早くお出かけしてもらっている。

23時過ぎたらいつでも帰ってね、のキレイイ言葉と共に。

家に帰るとヨウちゃんがいつものように出迎えてくれた。

「18時6分。」

帰宅時間を告げたヨウちゃんに私は目を合わせ、またまたお互いニタアと笑いあう。

さあ、ゴーだ！

私は急いでジャージに着替え、うん、わざわざ学校の体操服持って帰ったよ、今夜の為に。

迎えにきてくれたヨウちゃんとの、いかにもな3人が両手に一杯のかわいいクマグッズを何度かに分けて置いて行ってくれたのを確認して、またしてもヨウちゃんと二人で目を合わせ、それらを抱えてガンちゃんの部屋にゴー！をした。

2時間もしないうちに黒でシンプルかつゴージャスに統一されていたガンちゃんの部屋は、小学校までの女の子が喜びそうなメルヘンチックなクマグッズに占領された、それをやった女の子であるはずの私でさえドン引きの、それはそれは「おとぎの国」に変身していた。

カーテンのクマがプリントされたピンクのそれには、ところどころパステルカラーのボンボンをヨウちゃんが器用に縫い付け、ベッド

もテディベアのセットに早変わり。

ヨウちゃん、完璧です！私はグッズを飾り付けて、ぐらいいしか思わなかったのに。

ベッドの枕元に鎮座するテディベアの大きなぬいぐるみは、足の裏にナンバーの印刻された限定品らしいけど、それ一つだけ見れば確かに愛らしいのだけど、大きなものでドレッサーからティッシュケースまで可愛いクマグッズに占領されたその部屋は最早視界の暴力でしかなく、私とヨウちゃんは早々に終わり次第自分たちでやったとはいえ、辟易とリビングに引き揚げた。

夕食をパスタとサラダで簡単にとり、お風呂に入ってヨウちゃんのエステを受ける。

いつも通りだけど、リビングに戻って今日は二人で早めにゆっくりムーミンを見ながら、ヨウちゃんに甘えて膝枕。

優しく髪をすいてくれるヨウちゃんの手で頭をこすり付ける。

ヨウちゃんと二人じっと見つめあいながら、たまの二人だけの時間を堪能する。

けれど欲張りな私はそろそろヨウちゃんだけじゃ足らなくなってきた。

ヨウちゃんもそれを知ってるから、私のおでこにキスしながら、

「そろそろユキが帰ってくる、コロとシロはほら、部屋の外にいて呼ばれるの待ってるよ。」

そう優しく私に囁く。

私が笑ってヨウちゃんの頬に手を添えて、

「コロ、シロ。」

と一言呼べば嬉しそうに犬たちが入ってきて、テレビの前に大人しく座り、ムーミンを最初から見たいと目で訴えてくる。

ヨウちゃんはその願いをかなえてやりながら、また優しく私の頬を撫でる。

お互い頬を撫でながら、残りの時間をゆったりと過ごした。

いつもより早く帰ってきたみんなと、ユキちゃん特製ハーブティーを飲んで、いろいろな話をしたり聞いたりしているうちに、日付も大幅に超えた時間、私は自分の部屋に戻った。

しばらくすると私の部屋をバーンと開ける音がした。

ガンちゃんは、ドアの外の方を指さし、

「ありゃあ、何だ、何の嫌がらせだ、透子！俺が何をした！」

と、珍しく動揺している。

続けて勢いよくキョーちゃんが入ってきた。

「透子お！おめえ、今日何していやがった、ありゃあナンだ！何のつもりだ！あ！」

と、私を見て叫ぶので、キョーちゃんに答えて言った。

「うん、おまけ？」

実は余ってしまったファンシーなクマグッズ、私つてば自分で見るのもいっぱいだったから、捨てるのも献上してくれたみんなに悪いし、だったらとガンちゃんと同じ系統のキョーちゃんにプレゼントしたわけ。

ガンちゃんの部屋ほどじゃないけど、そこそこの幼児部屋にキョーちゃんの部屋も変身した。

あらっ？違ったっばい？ワナワナと震えるキョーちゃんの手には、30センチくらいの可愛いウェディンググテディベア。

自分で何を持つてるか気づいていなかったらしく、私の視線を感じて、やっと自分の手にあるクマのぬいぐるみに気づき、やけどしたかのように、それを放り投げる。

私はやれやれとばかりにベッドをおりると、ぬいぐるみを拾ってガ

ンちゃんに差し出す。

「ほら、ガンちゃんてば、好きでしょ。」

そう、できるだけ可愛く笑いながら。

それを聞いたキョーちゃんは日頃尊敬してるガンちゃんに向けて、それはそれは物騒な笑みを浮かべて、

「犯人は高津さんすか。」

そう言つて、色っぽい仕草で髪をかきあげ、伊達じゃないガンを切る。

そう言つてきたキョーちゃんをチラつとみながら、ガンちゃんは私からぬいぐるみを受け取った。

そしてそして、それは黒い笑みを浮かべて私を見た。

ありゃ、やりすぎた？

「当分俺たちは、あんなとこじゃ寝られやしねえ、さあ、寝るぞ、透子！」

そう言つて大人の男のやばい色気を垂れ流しにして、私を抱き上げベッドに向かう。

キョーちゃんも服は着ない主義らしくポンポン服を脱ぎ棄てついでくる。



明日急いで部屋を戻してもらおう！

ベッドの中で二人に抱かれて眠りながら、何かサワサワとさわって  
くる男たちと攻防を繰り返しつつ、からかう限度を見極めるのも大  
事だと学習した私だった。

## 第42話 キョーちゃんと一緒

寝不足の私は、頭がぼーっとするのに任せ、ユキちゃんに朝ごはんをあつさりとした和食を作ってもらい食べた。

今日もいそいそと臨時病院に向かうユキちゃんと、同じく休みとはいえ接待されに向かうレイちゃんを、ちゃんと良い子で見送る。

そして、私の首筋に見えるキスマークを、それぞれ指で優しくそつと辿ると、2人ともいい笑顔で、

「ふふ、あのバカどもには一度教えてあげる必要がありますそうですね。」

「確かに……。今度いい薬でも用意しておきましょう。」

そう言つて穏やかに笑い合っている。

うん、そこは私を抜いた所で話しをしてちょうだい、と思う、寝不足の朝はきついもん、そういう系の会話。

2人を何とか見送つてもう一度寝ようと、ヨウちゃんの部屋に行こうとすると、喉が渴いたのか、ユキちゃん特製ハーブジュースを飲んでるテイちゃんがりビングにいた。

「おはよ。」

私がそう言つと、

「うう飲みすぎた、久しぶりに陽一とあの後、朝まで飲んだんだが、

ちいつと飲みすぎたかなあ。」

そう言っつて眉をしかめた。

そして、めざとく私のキスマークに目をやると、面白そうにひょいと今度は眉をあげ、クックと含み笑いをする。

楽しそうだ。

「それは、あの後聞こえてきた騒ぎのせいか？高津の大声があいつの部屋から聞こえた途端、陽二の奴、大爆笑してたぞ。」

そう言いながら歩いてきて私を片手で抱きしめてくる。

気のない女でも一発で落ちそうな、気だるげで半端ないフェロモン全開にして、私の耳元にキスをしながら囁く。

「で、俺にはお仕置きをしてくれないのか？透子。」と。

はあ、私は何度もいうが寝不足だ、それもあのバカ2人との攻防つき。

私の機嫌が急降下するのを感じたらしいテイちゃんはさすがタラシの元締め、

「んな顔すんな、な、透子。ほらたまには一緒に寝ようぜ。さすがに俺も眠い。来いよ。」

そう言っつて私にその大きな体をすりつけ、大型犬ですよ、と猛獣の

癖にワンコに擬態する。

シロとコロに対する私の態度を見て、最近テイちゃんは「俺も犬ですよお」的な仕草をしだしてきた。

さすが弱いとこついで甘い汁搾り取るプロ、私は怒るのも馬鹿らしくなり、そのままテイちゃんに午後遅くまで優しく抱かれて眠った。

・・・ガンちゃんが乱入してくるまで。

今、寥先生がロシアに行ってるもんだから、私は今朝練ないんだ、だから軽く自主練してる。

シャワーを浴びて戻ってくると、ユキちゃんが作り置いた遅いお昼ご飯にした。

そして、陽も沈みネオンがまたたく頃、最後の職場訪問にキョーちゃんとお出かけた。

迎えにきた副長の神戸さんたちと軽く挨拶をかわし、キョーちゃんの持つビルに入ってるクラブに向かう。

繁華街にあるその黒で塗られたビルはどぎつい真紅の流線が描かれ、私はみただけでゲンナリした。

私のシックな黒のドレスは裾に向かって遊びのあるデザインで背中のでれープも綺麗だ。

首には幅広の本物のダイヤのちりばめられたゴージャスなチョーカー

ー、これが持つてる中で一番幅広だったのよ。

手首と足首にもお揃いの奴、・・・バカロンからのプレゼントのー  
っただけ。

何で私が成金の上をいくようなアクセサリつけてるかといえば、  
首筋に大量にあるキスマークのせいなわけ。

かといって絶対、この黒いのは着たかったの、我がまま？そんなの  
知らないわ。

そのクラブに入った途端、キョーちゃんに殆ど抱きかかえられてい  
る状態の私に好奇心バリバリの視線が刺さること刺さること、ほん  
と面倒。

年内に入っただけ、一番奥の個室に連れていこうとするキョーちゃ  
んに、私はめんどいのは嫌いだからね、とやんわりと雰囲気  
に出した。

キョーちゃんと歩きながらも、耳には店内の音が聞こえてくる。

「すげー美人！」・・・当たり前。

「えっ、総長の女・・・違っから。」

「あれつけてんの本物？」・・・あんなバカロンに殺されるよ。

そんな声の中、女達の嫉妬の視線と何よ、あの女！の声も聞こえて  
きた。

レイちゃんいわく、

「女の嫉妬の視線を浴びるだけ浴びろ、その分ますます透子は美しくなる。」

と言っただけけど、それって私がSって事？いや、それともM？

一度レイちゃんと話をする必要があるかも。

そんな馬鹿な事を考えてる私に、キョーちゃんが突然後ろを振り向いて言った。

「今、俺の大事な女に罵声を浴びせた奴は誰だかわかるな？すぐに叩き出せ、勿論、その後の事はわかってるな、何をしたのか思い知らせてやれ！」

シーンとなる店内と数人の女の悲鳴、グラスの割れる音が、即座に背後から聞こえてきた。

私、ほら今日はめんどいの嫌いな日だから、かまわずスタスタ個室めざして歩いたよ、知らんぷりして。

キョーちゃんがすぐさま慌てて私に追いつき、私の腰に手を回し、一緒にVIP室だというその個室に案内されて入る。

続けて私も知る幹部たちがやってきて、キョーちゃんが仕事モードに突入した。

私は軽いアルコール入りのりんごの発泡酒を飲みながら、キョーちゃんが腰に回す手を何とか追いやろうと奮戦している。

だって、座りずらいのよ、これ。

そんな私を見て嬉しそうに髪にキスしてくるキョーちゃんに何が嬉しいのかちっーともわからん私は、トイレと言って部屋を出た。

けれど何故かキョーちゃんがついてくる・・・。

何で一緒にトイレ？とは思っても、ほら、ガンちゃん系統だから、キョーちゃんは。

理屈じゃない、普通じゃない、常識じゃない、が看板背負って歩いてる感じ？でしょ。

けれど、わざわざ一緒にトイレにまでついてくるキョーちゃんに店内の人間はおろか、チームの人間も目が点になっている。

私はトイレから個室に戻るため店内を通る時に、わざと手をひらひらさせて、キョーちゃんにおしぼりで歩きながら手を拭いてもらいながらゆっくりと歩いた。

憧れの総長が女にいいようにされているのをみて、私を知らないチームの人間の幾人かがにらみつけてきた。

その視線を感じた方にさりげなくふりむき、鼻で笑ってやった、だってつままないからね、今んとこ私。

「やつほ」以来久々に感じるこういう視線は嫌いじゃないんだ、私。

だってこれはキョーちゃんを慕ってるまっすぐな視線だから。

あつ、そういえば「やつほ」放置プレイのままだ、いつけない、忘れてた。

今度レイちゃんに言って回収してこなくっちゃ。

「総長！」

生きのいい金髪ピアス君が必死に非難をその声にきちんと乗せてキョーちゃんを呼ぶ。

うん、キョーちゃん懐に入った人間には、ちびつとだけ優しいところあるけど、君もそれを知ってるから思わず声をかけたんだね。

けれど、私がいる今はダメだね。

キョーちゃんの取り囲むオーラが昏く冷たいものにかわっていく。

それは誰の目にも明らかで、そして一瞬にしてキョーちゃんの姿は私の隣から消え、声を上げた金髪ピアスはその周りにいた仲間ごと、キョーちゃんに次々と潰されていく。

数分もしない内にクラブとも思えないうめき声の聞こえる店内は、そのキョーちゃんのキョーちゃんである所の昏い激しい王者のオーラに飲み込まれ、押しつぶされしわぶき一つ出ない空間に早変わりした。

まだまだやりたならなそうなキョーちゃんに私は声をかける。

「ねえ、まだ手が濡れてる気がするんだけど。」



私が何事もなかったかのようにキョーちゃんに話しかけると、キョーちゃんは優しく笑って、カウンターから新しいおしぼりを持ってきてくれた。

そのまま個室に戻る。

うん、やっぱり私ってば、ちょっとだけSっ気あるかもしれない、ちょっとだけ。

だって気に入ったもの、特に人間は一度壊してみたくなるの、今みたいに。

つぶれた後の変化をみたいの、曲がるのか、堕ちるのか、そのままにいるのか。

「やつほ」で味をしめた私は、ちらっと倒れたまま動かない金髪ピアス君を見て、やはりレイちゃんと、いや、ユキちゃんの方がいいか、一度相談してみようかな、って思った。

まあ、けれど聞くまでもなく答えはわかってるけど。

「好きなだけ壊せば。」と言っに違いないから。

保護者の職場訪問最終日に、私は花も恥じらう女子高校生的には、それはどうなんだろうか、という反省を少しはした。



### 第43話 新入生歓迎会

今日の新入生歓迎会が終われば、後は夏休み前の中間考査まで、前日程は行事的には殆ど何にもないといってよい。

それなのに、まだ5月だというのに何せ委員長達執行部のやる気つたら半端ない。

去年の学園祭は、旧カメリアからの引き継ぎでやったので、今年の学園祭は本当の意味で自分たちが1から立ち上げるものになるので、この新歓が終わり次第、準備委員会を発足させるという。

やる気というか、楽しむ気満々で、彼女達は本当にこういってこ賢いと思う。

きちんと自らのレールの先を見据え、遊べるときは遊べ！遊べないようなら遊びを作れ！と日夜楽しそうに駆けずりまわっている。

今回の新入生歓迎会は、各学年3名程度で、縦割りで班が生まれ、校内でのアスレチック大会が行われる。

校庭からはじまり、そこで最初は班代表同士の単純なじゃんけん大会が行われ、それで色別に分かれた各コースが選ばれると、その色にそって各教室に設置されてる手の込んだアスレチックの数々を制覇していき、最終コースまでのトータル時間をきそうものだ。

運が悪い班のところは、2クラス程に設置されているターザンロープコースの教室で、耐えきれず落ちれば無残にも大きな組み立て式プールにおかれた泥にまみれる事になる。

私もつい面白そうだから覗きにいつてきたんだけど、ターザンロープが教室の天井に張り巡らされていて、落ちたらその下は本当にどろんこ地獄が待っていた。

普通水かなんかじゃないの？と私が委員長に聞いたら、水なんかに落ちたら、ジャージの上からとはいえ、体の線が出てしまう、そんなのたえられない、との答えだった。

他のみんなも、それだけはたえられないと、同じように答えてきた。

あ、そう、髪や顔が泥だらけになるのはいいのね、わけのわからん乙女心だと思う。

しかも落ちるだろうから、と落ちるの前提なの、最初から。

そのどろんこは、どうせなら有名どころの泥パックにしてしまえ、と誰かが言いだし、結局ほんとに有名エステの泥パックが、その2つの教室にはターザンロープの下に敷き詰められている。

業者さんが準備を相も変わらず手伝ってくれたんだけど、絶対おバカなブルジョワめ！って思ってるよね、絶対。

それと、各教室に移動するさいに使う廊下には、いろいろ趣向がこらされているの。

全員片方の足首を手ぬぐいで縛って班が1つになって歩いていかなきゃダメだったり、平均台の上を渡ったり、網の下をくぐったりしなきゃ移動できなかつたりと、そりゃあそれで大変なわけ。

そんなかなで、ようやく最終地点までたどり着いたグループの最終試験は、この理科室。

理科室で待つこの私になってる。

……納得いかないよね、この扱い。

私の背後に教室続きの準備室があるんだけど、私に通り返しの許可を貰って、その準備室に置いてある最終チェック表に自分のグループの印をつけてタイムカードを入れて終わりんだけど、すでに始まって3時間くらいたってから、そろそろ誰かきてもよさそうなのに誰も来ないのね。

て、というかドアの外にはひそひそとした気配が30分くらい前からしてるのよ。

それも徐々に増えていく感じ、なのに誰一人入ってこない。

うふふ、これってケンカ売ってるよね、グループには2年生も入ってるんだもの、当初からの黒ユリメンバーの子がいるはず、なのに入ってこない。

まあ、ちょっとだけ、お優しいモード中のこの透子さん的には、1年や3年が二の足踏むのは、とりあえず許そうと思う。

けど2年生はね……。

私は、読んでいた文庫本を置くと椅子から立ち上がり教室のドアまでいき、思い切りそのドアを開いた。

その瞬間聞こえた「ひっ」という悲鳴を飲み込む音は聞かなかった事にしてもいい、そしてバタバタと逃げ出すものも・・・、許すと思う？

「お待ちなさい！」

私が、きつく声を出すと、3グループほどの生徒たちは、立ち止まって、すすすこと逃げるのをあきらめてこちらに顔を向けた。

何？そのおどおどしたドナドナぶりは！私があなたがたを売るとでも？

・・・いたな、身近に人間売る奴・・・、でも私がするわけじゃないし、それじゃあ、きっちり教育的指導とやらしてあげようじゃないの。

うちの学園生が、おどおどするなどどんな場面でも許さないわよ。

理科室にて私じきじき教育的指導をしているのを次にきた誰かが見ていたらしく、新入生歓迎会のゴールの理科室には、それ以降、この3組以外到達しなかった。

最終地点に他の班がこなかったのはそのせいだと知るのは後の話で、もちろん透子はそれを知った後、全校集会にて女王様モードを発動して怒涛の如くその場で教育的指導を行ったのはいうまでもない。

次の授業など吹き飛ばして。

この校内アスレチック大会が後に学園名物として定着するなど、この時点では委員長はじめ私でさえ思わなかったけれど。

第44話 再会（前書き）

本日2度目の投稿です。



## 第44話 再会

新人生歓迎会、結局3組以外ゴールにたどり着けなかったあの騒ぎの余韻も薄れ、いい意味で高等部全体が良い雰囲気にとまったので、透子もこうしてまた堂々とこの黒ユリ館の私室で授業をさぼって、晩春の日差しを満喫している。

カウチに寝転がり本を片手にご機嫌良くいる透子の携帯が鳴った。

見るとレイちゃんからで、こんな中途半端な昼下がりに珍しい、さては「やっほ」の回収の許可やっとなったか、といそいそと電話に出た。

私がレイちゃんに「やっほ」の回収忘れて放置プレイ中だったよ、と言って、回収しなきゃ、とお願いしても、レイちゃんたら、スル―して相手にしてくれなかった。

「そのまま忘れてくれていい。」って。

そんなの無理よねえ、どんな様子だか見に行くべきよね、楽しそうな事はすぐしなきゃ、これ黒ユリ会裏の会則第一項だから。

私がすぐに電話に出ると、それは全く違う内容だった。

「父が倒れて救急車で昨夜病院に運ばれた。」と言われた。

どうやら私があの家を出る時の緊急連絡先はレイちゃんが請け負ったらしい、そりゃあガンちゃんじゃ電話なんてしたくても出来ないに違いない。

まあ、レイちゃんに連絡する時も怖気づいてはいたただろうけど。

私は携帯を耳にあてたまま晴れ渡った空を見た。

あの日、高揚とした気持ちのまま家に向かった私が見たのと同じような空だった。

まあ、一度うちの保護者ズには、もう私は大丈夫、そう教えてあげなきゃとは思っていたしなあ、父が倒れたと聞いて私が思った事は、本当にそれだけだった。

私は数年ぶりにこうして家族だった人に会いに行くことになった。

## 第45話 父の病室

私は連絡を受けた後も、黒ユリ館にいてその後の選択授業まできっちり終わらせてから、父の入院しているという病院にユキちゃんに迎えにきてもらって向かった。

餅は餅屋っていうでしょ、病院いくならユキちゃんよ。

元の家の際にあるその総合病院は、ユキちゃんここに比べれば小さいかもしれないけれど、ここいら辺の人間は、具合が悪くなると殆どここにくる、そこそこ大きな病院だ。

ここには私も小さい時から何度か世話になった覚えがある。

ユキちゃんは特に私と私の家族の關係に気を使っているから、この間ユキちゃんちに行った時の様子でよくわかったし、大丈夫だよと教える、ちよつどいい機会だと思う。

私は受付で名前を書き面会バッジをつけて、その病室の中に入った。

そこは4人部屋で、そのうち2つは空いていた。

その病室の窓際の一つに父が点滴をつけて静かに横になっていた。

ベッドサイドには母と姉がいた、父は眠っているようだ。

私がユキちゃんと入っていくと、母が何やら言ってきたみたいだが、私は聞いちゃいなかった。

誰より先に姉の碧を見たかったから。

私の中3で家を出る時、いつも睨みつけて私を見ていたあの姉は、戸惑ったように私を見て薄く笑いかけてきた。

そしてそれは、どうという事もないと、この再会にたかをくくっていた私に静かな冷たい、色で言えばひんやりとした蒼い、そんな怒りを呼び起こした。

笑いかけてなんて欲しくなかった、あのまま堂々と「何か文句でもある？」っていう態度のままできて欲しかった。

何故そう思うのかは自分でもわからないけど。

ああ、そうか、その笑いの中に、あの出来事を軽んじる気配があったからだ。

姉の中ではすでに過去だという事を、その笑みの中に見たからだ。

けげんそうに私と一緒にいる大人の男であるユキちゃんに目を向ける母たちに、ユキちゃんが名刺を出して、爽やかに挨拶しながら渡している。

母は驚いてユキちゃんと私を交互に見る。

そりゃあ日本でも大きな病院グループの代表だもんね、ユキちゃんは、凄いよね、わかる、わかる。

私は母と話してるユキちゃんを横目でみながら、私をうかがうように見る姉に、

「私のダーリンよ、触るのはやめてね。」と言った。

ちよっとは思いついた？

母と姉は数年ぶりに会った私の第一声がこれなんで、どう返していいかわからないみたいで、目を私と合わせようとせず、逃げるように父の倒れた状況をそのまま説明してきた。

あらま、何にもないふりは健在なのね。

ユキちゃんは私にダーリンと呼ばれたのが嬉しいらしく、すかさず私にキスをしてきて、そうキスをしやがりました、ここで！

そして、甘い優しい声を出して、担当医に詳しい話を聞いてくるから待ってるように、と言って病室を出ていった。

・・・この空気どうしてくれんのよ！放置プレイは私がおもしろいと思えばするもんで、決して私がされるもんじゃないはず！ユキちゃん後で覚えておきなさいねっ！

そんな微妙な空気もかえりみず、いや、元々こういう人だったか、母が私の制服姿を見て、すっかり綺麗になって、とバカな事を言いはじめた。

私が病室に入っても、父に何の関心も向けないのを、見もしないのを取り繕うように、気付いていないというように。

そうね、どれだけ私にお金がかかって磨かれているか、あの半端ない男達に磨かれているか！から10まで教えてあげましょうか！っ

て言いたいとこだけど、あなたたちに話しても意味がない事だし勿体ないから話してなんてあげない。

あの、姉とあの男がいるのを見ただけでおかしくなった自分を捨て去る為、私は自分でも頑張ったと思うし現在進行形で自分を褒めてやる。

だから、だから、・・・私はこの病室にきて初めて優雅に微笑んだ。完璧な所作で、そして目には怒りの蒼い炎を潜ませたまま私は家族であった二人を見た。

そして、ベッドで静かに横たわる父と、私を驚いたように、違う生き物を見るように見ている母と姉にきちんと挨拶をした。

「お久しぶりです。」と、私にとって他人であるという線引きの元に。

そこにはまだ10代と言うのに、大人の色香と少女の清廉さを併せ持つ優雅な美しい生き物がいた。

碧はそんな妹に目を見張り、その雰囲気から頭から飲み込まれている母と自分を知りながら、そして妹だったあの天真爛漫な明るい笑顔とやつれた姿を改めて思いだし、自分がした事の本当の意味を知った。

最早、妹だったあの子はいない、この冷たく感情もなく自分を見据える美しい少女がいるだけだった。

あの太陽のような妹を壊したのは自分だと、ようやく自分が逃げ続けたその事実にも、その恐ろしさにも驚愕した。

## 第46話 姉・妹

ユキちゃんが父の主治医だという先生と病室に戻ってきたので、私は病室のベッド脇にあるサイドテーブルに花瓶と花をいけて見舞いの形を整えて、そのまま何か話したげな主治医と家族にいとまを告げて早々と帰ってきた。

病的には、ユキちゃんとは是非ともお近づきになりたいらしいが、今日の私は優しくないモードだから、無視よ、無視。

帰りの車の中でユキちゃんから、父は胃癌にかかりステージ的に手術するのも無理で余命2か月と聞いた。

仕事にかまけて随分とほうっておいたらしい父、相変わらずだったらしい。

そうか、父は死んじゃうんだ・・・それだけだった、本当に他には何も感じなかった。

そこで私は自分の歪さに改めて目を向けた、知ってはいたけど。

自分のあの時壊れた心は、本当なら若さ特有のしなやかさで時間と共に柔軟に修復されゆくはずだったろう。

けれど私はその健全さを拒否して、傷は傷のまま忘れなくなかった、いずれ曖昧に薄れいく忘却という救いを自分に許しなくなかった。

私の心はブラックホールみたいに、ヨウちゃん達の愛情を飲み込んでみても、その虚ろはうつろのままここにあり幾らでも愛を呑み込



む。

けれどそれが何？誰に迷惑かけるでなし・・・周囲の私に関係ない人達に何がおころうと、私の人生には少しも問題ないわ。

しょうがないよね、私の前にいて、邪魔するのが悪いってことね。

「それも善し！」私的には。

少なくとも私と私の大事なもの以外私の世界にいらないし、うちの保護者ズの力があれば、私が自分の歪みをそのままに、気にせずこれからも生きていけるはず。

これで未永くすねかじりと虎の威をかる狐ちゃんの世界決定だけど、基本自分に甘いから私、OK、ばっちこい！よ。

正しいものなんて私は知らない、そんな曖昧なあてにならないものなんてイラナイわよ。

あゝあ、面倒だけどやはり父のお葬式にはちゃんと出るべきかしら？

保護者ズは来るのかな？やめてよねえ、面倒は嫌よ。

私は家に戻る車の中で、ユキちゃんの話聞きながらそれだけ思った。

二度と病院にはいかないだろうな、と思いながら。

妹の透子が病室を出た後も、私は茫然としていた、母も同じだろう。彼女は突然やってきて、父と母には目もくれず、私にその意志の強そうな視線を一度だけ向けてここが病室だというのに、颯爽とという言葉がふさわしくまた慌ただしく去っていった。

妹が家を出ると聞いた時、まだ未成年でそれも中学三年生の癖に何を馬鹿な夢みたいないなことを、と思っていた。

本気だとは思わなかった私に、言葉を濁しながら私に話す両親を見て、それが本当なのだと思った。

私は自宅から通える公立の大学受験の予備校通いで忙しく、別に勝手にいなくなればよいとその時も思ってたのを覚えている。

妹の透子は小さい頃から親戚はじめ両親に可愛がられ、それを当たり前のように受けていた、私にはそう見えていた。

いつからだろう、そんな妹を見る時、チクリと胸に持ち上がる嫌な感情に気が付いたのは。

テストで同じような点を取っても、運動で同じような成績を残しても、何故か妹ばかりにスポットライトが当たるように感じていた。

妹の透子が中二の時、幼馴染の洋介にいを好きだと、どうしたらいい、と相談された時、頑張って告白しちゃえと言ったのは本当に心からだった。

中、高と生徒会長をしている洋介にいの人気は半端なく、透子はまだまだ幼すぎて可愛そうだが撃沈だろう、そう思って疑わなかった私に、つきあうことになった、と嬉しそうに報告する透子に私は耳を疑った。

そして、ここでもまた透子選ばれた、そう胸に嘯く声があった。

洋介にいを呼び出し、話を聞くと、本当に透子を大事にしたい、今まで付き合ってきた子とは根本から違うんだ、と、今まで表立ってはいないけど、裏では二股なんて当たり前前の遊び人だった癖に、大事そうに透子の名前を口にさせる表情を見て、ああ本気なんだとわかってしまった。

洋介にいのその表情や声を目にした瞬間、思い切り透子を傷つけた、い、そう思った。

それからなんだかんだと洋介にいの相談に乗るふりをして、私は透子を傷つけ、思い知らせるチャンスを待っていた。

洋介にいは、透子の為に遊びの女を全て切っていた、そしてその日メールがきて、凄い嬉しい、透子のファーストキスを昨日貰ったと踊るように嬉しそうにメールで報告してくる洋介にいに、おめでとう、これは一緒に帰って祝おうと、たまには学校をさぼってもいいだろうと強引に誘って、そのまま学校帰りに待ち合わせて、私の部屋に向かった。

軽くお酒で乾杯し、ほどよくお互い酔った所で、それからは透子が見た通りの事に私がかんた。

大切すぎてどうしてよいかわからない、そう言って笑う洋介にいに、

大事な透子はまだ幼いから代わりに私を抱けばいいと全裸になり、背中からのラインは透子と同じだとみせつけ洋介にいをあおった。

そして、透子の名を呼び私を抱く洋介にいの背中越しに、待ちに待った透子の絶望の叫び声を聞き、その時私は心から笑った、その私をみて顔を青ざめさせ絶望の表情にいた洋介にいは目を見張っていたけど。

今さらだよ、同じ穴のムジナだと私は言っちゃった。

自分でも何がしたかったのかわからない、何に対してあのも怒っていたのかわからない。

本当にあれは私なのか、まるで他人をみてるような感じだった。

一度だけ洋介にいから呼び出されて会った時、俺が憎かったのか、それとも透子か、と聞かれたけど、私には返事しようがなかった、だって自分でもわからないから。

そこで久しぶりに見た洋介にいは、昏い暗い全てを、自分自身でさえ憎んでいるようなすさんだ目をしていた。

そして、そこまでして私が気が付いたのは、結局透子がいなくなっ  
てさえ、両親は元々自分には遠い人だった、という事だけだった。

透子という太陽が反対に私達を照らしていたのだと、家族としてつ  
なげていたのだと気付いたけれど、私はそれに頑丈な蓋をして知ら  
ないふりをするしかなかった、忘れるしかなかった。

自分がちゃんと生きていくために。



## 第47話 回収

今年は空梅雨だと天気予報で言ってたけど、外は確かに綺麗な青空で納得だ。

私は窓に目を向け、真っ黒モードに突入した委員長相手に、そろそろ降参するべきかを考えていた。

何せ私の机の上には、半端ない書類が山積みになっている。

そう、いつもなら判を押すだけになってくるはずのそれらが、手つかずのまま私の元にきている。

何故か？理由は簡単、いわゆるコミュニケーション不足と言う奴だ。

7月の頭に伝統的に行われている他校交流会が今年度当番校である白鷺高校で行われる事になっている。

いわゆる生徒会役員が主に参加するそれに、私は行く気など全然なくて、誰かがいくだらう、そう思っていた。

前期の残りは定期考査があるだけだ、なんて呑気にしていたわけ。

だけど委員長達は私もいくものだと思っていたらしく、行ってきてねえとお願いしたら、私もいかなきゃダメだとストライキされた。

ほら私つてば去年の学園祭で姉妹校の役員と一悶着あったから、私が行かない事でまだその姉妹校に思う所あるんじゃないかと勘ぐられたり、いちいちそのフォローしなきゃいけないなんて面倒だから

参加しろって事らしい。

そもそも対外的には代表として動け！それぐらいしなさい、めんどくさい！だって怒られた。

で、2日目にして、この書類の山にギブよ、ギブ。

こうして、姉妹校の香蘭学園と、課外活動などで交流がある公立の上森高校、白鷺高校、私立の弘和学園、古桐学園が毎年合同で行う交流会に私は出席することになった。

家に帰ってヨウちゃんのエステを受けながら、ここんとこ父の事からはじまって、ちよっとめんどろが續くなあ、と思い、こんな時こそ遊びは大切だ、と私はしみじみ感じた。

それに何気に委員長たち私に似てきたし……。

次の朝、学校へ行く準備を早めに終わらせ、今日はユキちゃんじゃなく、一足早く家を出るレイちゃんの手で行くと話した。

そんな私を見送る面々の何を企んでるんだって感じの、からかうような視線は止めて欲しいと思う、君たち保護者ズじゃないんだから私のする事なんてカワイイもんよ、花も恥じらう女子高生が何をするっていうのよねえ、ちよっとだけ遊びたい、ホントにそれだけよ。

おし！それじゃあ出発だ。

「ねえ、レイちゃん、私つてば今度余所の高校にわざわざいかなきゃならないのよ、そんでもって、お葬式も待つてるし、……。どう、私つてば可哀そうだと思わない？思うよね。」

レイちゃんが面白そうに私を見て、声をかけてきそうなのを遮って、「あ、いいよ返事は！いらぬ。だからレイちゃん会社に私も今日はこのまま行くからね。」

今日は委員長にメールで午後から学校行くって言うてあるから、フオローはバツチリしてくれるはずだ。

レイちゃんに寄りかかって、その腕に腕をからませて、耳にイヤフォンをつけて、お気に入りの音楽を聞く。

レイちゃんは仕方がないな、って優しく笑っている。

チラッとみた助手席に座る新しく秘書室勤務になった小出秘書の顔色が一気に悪くなったのは笑うところかしら？

そんな顔されると、ほら私ってば、期待に答えたいと思う子じゃない？

ちょっと黒くなった私にレイちゃんは、くっくと含み笑いをした。

何さ！私がレイちゃんのふくらはぎを蹴ってやったのはいうまでもない。

私がレイちゃんにもう片方のイヤフォンを貸してあげて、私のお気に入りのピロースのアルバムと一緒に聞きながら仲良く本社ビルに入っていくと、今度は前と違ってじっと見られる事はなかった。

いや、何ていうかすぐさま目をそらされるんですけど・・・私って



ばガンちゃん達と同じ扱いされてる？

私、堅気のカワイイ女子高生ですけどお、この扱い納得いかないんですけどお！

隣のレイちゃんは爆笑したいのを無理に堪えてて、表情には出てないけど、私には笑いを我慢してるのがよくわかった。

私はおもむろに立ち止まって、レイちゃんのほっぺをむにゅって両手で抓ってやった。

ところが、レイちゃんたらそのまま私の方に背をかがめ、あつという間に顔をよせられキスされた。

・・・私は恥を知る日本人代表として、こんな場合すたこらさと役員専用エレベーターに足早に向かうしかないよね、何もなかったぶりです。

レイちゃんの総裁室は相変わらず豪華で広く、私達が入っていったら、今回の新秘書室の皆さまは爽やかに朝の挨拶をしてくれた。

私はその方たちに黒ユリモードの挨拶を返しながら、ざっと一人ひとりを見渡して、私の遊び相手になる人間はいないと判断した。

皆揃いも揃って賢そうだけど、すぐに潰れそうで遊べそうにない。

何て事だ！ちょびつと期待してたのに。

だから小出さんの所に綺麗なお姉さんがファイルを渡して、それに沿って今日の予定をレイちゃんに説明してるのを脱力して大人しくみていた。

今日の予定を聞き終えたレイちゃんに、じゃ、次だと思い直し、私はお仕事頑張つてね、とハグをしながら、会社の探検がしたいとおねだりをした。

ついでに案内役は小出さんがいいと忘れずに。

レイちゃんが小出さんをそれはそれは冷たい目でにらみながら、しようがないと許可をしてくれた。

言い出したら聞かない子だからね、私は。

そして、この世の終わりみたいに青ざめる小出さんに、期待に応える子なの私、覚えとくといいよ、と思った。

茫然とする小出さんが何とか午前中の自分の仕事の引き継ぎを終えるのを待って、いざ探検に出発した。

レイちゃんのすぐ下の階から順番に各フロアーを回る。

制服姿の私みたいな部外者が入っていくと、皆一様にぎよつとするけど、続けて顔色の悪い小出さんが入ってきて、その仕事場について丁寧に説明する様子に、何事かと目をむくのが面白いの。

続いて、私を何気に見て、胸にぶらさがる身分証明が、レイちゃん  
のなんで、またびっくり。

みんな胸にぶら下げたり、つけてるから、私も欲しくなって、レイちゃんの強奪してきたんだ。

そして、そのあとそれを認識すると空気がびゅんと張って急に知らんぷりになる。

そうなるにつまらないので、次の部屋に行く、それを繰り返す。

どうよ、これ、いい迷惑だよね、けれど誰も何も言わない、知らんぷり。

そして1時間も過ぎたころ、とうとう営業3科という部屋で本日の目的を達した。

3科室長という席に「やつほ」の榊元秘書がいた。

自分でも目がきら〜んとしたのがわかる。

部屋の入口に案内を頼んだ小出さんに待つようにいい、そのまま堂々と表面の席にいる「やつほ」の元に向かう。

制服姿のこれでもかかっていう部外者の私を見て、声を荒げて何か言ってくる人が何人かいたけど無視する。

そのまま「やつほ」の榊元秘書の元につかつかとかと向かい、気配に顔をあげ、驚愕する「やつほ」の顔を見る。

「やつほ」の大きな机にぴよんと乗って座り、すわった場所の周りにある品を手で払いのけて下に落とす。

物が落ちる音と、何をする！と、どこかから上がる怒声が部屋に響く。

「今、私に声を上げたのはどなたかしら？」

私はもう一度私の周りにあるものを綺麗に叩き落としながら、後ろを振り向いて言った。

そこに慌てて小出さんが入ってきて私に必死に謝る。

「申し訳ございません。」と。

顔色が最早真っ白な小出さんを見て、私は鷹揚にうなずく、そんな様子に部屋にいる面々は戸惑いを隠せない。

「やつほ」が最初の驚愕から立ち上がって、私をにらみつける。

「透子様、ここは見ての通り現在工作中です、何の気まぐれかは存じませんが迷惑です、出て行ってください。」

そう私を本気で怒ってくる、これが当たり前前の反応だ。

私の不興をかって、秘書室を出されたのに、あいかわらずなのに嬉しくなる。

「やつほ」は自分を曲げてない、遊びのない余裕の部分を持ってない自分をちゃんと理解してるのだろうか？

まっすぐな不器用さで、なおかつ料簡の狭いこの男を愚かだと思うけど、けれども決して折れようとはしないその生き方は好きだ。

うん、好きだ、誰でもない自分の人生だもん、蹴散らしていけばいい。

まっすぐなあんたがそのまっすぐなありようの中で切り捨てた事の、その歪みを私がいつか教えてあげよう。

ねえ、だから「やつほ」私と遊ぼうよ。

私は「い・や！」と言って私と「やつほ」を隔てるパソコンにも手をかけた。

「やつほ」は私のその手をつかむと、いい加減にわがままは止める！と敬語を止めて、低い声を出し私をにらみつけ怒る。

私はそれこそが望みとばかりに「やつほ」の顔をまっすぐに見つめた。

ああ、すごい楽しい、自分が今心からの笑みを零してるのがわかる。

こんな私の顔を知ったら、あんたうちの保護者ズに無事ではすまされないね。

だから私はそれを一瞬で心の奥底に綺麗に沈めて隠す。

私そのままじっと「やつほ」を見たまましていると、

「何が望みですか？」と諦めたようにため息をつかれた。

「お願いですから、パソコンから手を離してください。大事な仕事のデータが入っているんです。そのくらいの事はあなたでも理解できますよね。」

と嫌味までいつてきた。

私が一緒に出かけようと言つと時計を見て30分くらいなら、と本当に疲れたように答えてきた。

だからそんな態度をとる「やつほ」に、私は机から降りるため、わざとらしくたいぎように「やつほ」に手を差出して、その手を促してお姫様よろしく降ろしてもらつ。

部屋にいる人間の仕事の手が止まり、こちらを注視する中、幾人かが「室長！」と心配そうに声をかけてきた。

ふん、好かれてるじゃない。

「やつほ」は心配ないというような動作をして、私を促して部屋の外に向かおうとする。

私はそれを無視して、綺麗に制服のすそを払つと、私を待つ「やつほ」の顔を見ながら彼のパソコンを机の上からわざとらしく落とすてやった。

・・・ねえ、「やつほ」、私に命令はしちゃダメでしょ、懲りないわね、あなた。

にらみつける「やつほ」に冷たく微笑んだ。

部屋をでる時、小出さんや部屋にいる人間は、私と一瞬たりとも目を合わせようとしない。

だから言ってるじゃない、私はガンちゃん達と違ってる、まっとうな女子高校生なんだって、そんな反応は間違ってると思うわ、傷つくかも、よね。

何はともあれ、こうして私は無事「やつほ」を回収した。





第48話 復帰（前書き）

花粉だとばかり思っていたら、熱が出て風邪だとわかりました。  
わけがわからん。

題名ともども「復帰」です。

## 第48話 復帰

あれから「やつほ」を連れてレイちゃんところに戻った。

私が前総裁室秘書だった「やつほ」を連れて戻ったもんだから、何ていうの？ぎこちないの、空気が、お互いに。

「やつほ」ってば、最早私に礼儀は必要ないって感じていたくせに、何よね、パソコン落としたくらいで、そう怒るなっていうのよ。

それなのに総裁室に近づくにつれて、私をチラチラみて、まるで助けをこう感じ。

私は知らんふりして、レイちゃんが応接室から戻るのを総裁の椅子に座って、椅子をクルクル回しながら「やつほ」を隣に立たせて大人しく待ってる。

「透子様、椅子は座るもので、回して遊ぶものではありません。それに……。」

そう言っただけまた小言をつらつら言いだした。

ね、私ってば、「やつほ」にはちょっとは優しいと思わない？嫌な空気を私に意識を向ける事で感じさせないようにしてあげてんの、どうよ。

私が自分で自分を褒めていたら、やっとレイちゃんが帰ってきた。

私が遅い、と思いきりふてくされて言っと、

「ごめん、ごめん、待たせたかな？もう、探検は終わりなのかい？」  
そう優しく笑って私を見つめ、ひょこつと私を椅子から持ち上げると、自分が椅子に座り、私をおいで、と言って自分の膝に抱えた。  
そして、傍に立たせている「やつほ」をチラと感情を込めない目で見つめた。

「やつほ」が緊張しているのが、その顔色の悪さからも、握る手が白くなっているのもみてとれた

レイちゃんは、

「榊がまさか探検の宝物？どうしてここに連れてきた？」

私は何故連れてきてるか知ってる癖に聞いてくる。

だから、私は望み通り、レイちゃんにおねだりする。

「榊さんが朝迎えにきた方が楽しいの。絶対にそう！私が楽しければレイちゃんも楽しいよ。」

私のお願いを聞いたレイちゃんは、「やつほ」に仕事の引き継ぎが終わり次第、秘書室長補佐として戻るように言った。

うん、これで、ちょっとは楽しみゲットだね。

もうじきいかなきゃならない学校交流会に向けて、自分に先にご褒美だ。

またまた茫然とする「やっほ」に意地の悪い笑みを向ける、あつち  
にころころ、そっちにころころ、どんな気分？

私は「やっほ」にちょっとは優しいけど、それ以上に意地悪だよね。

乙女心は複雑なんだ、そういうこと。

## 第49話 戸惑い

私はこのところ、ちょっとおかしい。

自分でもわかってるんだけど、何か感情の浮き沈みが丸わかりになっている、ありえないよね、コントロールできないの。

うちの保護者ズは、そんな私に大人っぷりを発揮して、半端なく猫かわいがりしてくれる。

だから私はそれを無尽蔵に求め、そして喰らいつづけている。

私から珍しくみんなにぴつとりとくつついて離れないし、いつもは何でもないテイちゃんに纏いつく仕事先の女の香水の匂いにさえ、眉をしかめてしまう。

それを見たガンちゃんが、わざと香水をつけてきて、いつもの私なら相手にしないのに、それを怒って喜ばせてしまつくらいに変。

うん、原因なんて悔しいけどわかってる。

父が意識が戻っている時に、私に会いたいと言ったらしく、母親からもう一度病院に来てほしいと連絡がこの間きた。

ユキちゃんから、1日の内で意識があるのもそれほど続かないんだという事、いつ昏睡状態に陥ってそのまま危篤という事態に入つてもおかしくないんだよと説明されて、「やつほ」の件が終わつたばかりで機嫌がいい私は、一度会ってみてもいいんじゃないかと、いかないと決めていたはずの病院に、気まぐれをおこして父に会いに

病院に行った。

病室には母がいて、いつももう少ししたら目覚めるから待っていて、とお願いされて1時間だけという条件をつけて私は大人しく病室で待っていた。

この間と違って父の病室は特別室の個室になっていたから1時間くらいならと待っていた。

母は聞かないのに説明してくれた。

病院が取り計らってくれたという事、その差額ベット代や個室の料金は請求されていない事など。

そりゃあ、ユキちゃんとお近づきになりたい一心つととこよね、現に事務局長とか院長とかが、入れ替わり立ち代わり挨拶にくるもの。

私はベッドに眠る父を数年ぶりにちゃんと見た、すごい痩せてる。

母とは話すこともなく、私の無言の拒絶はわかるらしく、私に必要以上に話しかけてこない。

うん、楽だ。

今日もユキちゃんときたんだけど、院長たちがめんどくさいので、その相手にユキちゃんをおしつけてやった。

どごぞで接待されてたらいいよ、ユキちゃん、さすが使い道のある男。

そして、もうすぐこの病室に来て四十分になるころ、姉の碧がやってきた。

……友人を連れて。

私がいる事にとても驚いている。

母もその友人とは顔見知りなようで、

「大輔君もきてくれたの、アルバイトもあるのにありがとう。あま  
り気を遣わなくていいのよ。」

そういつて、姉の友人の大輔君とやらの持ってきた花を受け取つて、  
世間話のように気さくにお互い近況を話している。

姉は私がいるのに驚いたままで、何のリアクションもとらないの  
で、母が妹だと私を友人の大輔君に紹介して、そのまま花を花瓶に  
移すため洗面台の方に行った。

どうよ、これ、沈黙が支配した空間つてやつよ。

その大輔君とやはらは、いたつて普通の背の高いひよろつとした人で、  
姉の碧をみつめるその柔らかな眼差しで、その関係もわかった。

私が無邪気にお姉ちゃんの彼氏？と笑いかけると、照れたようにう  
なずいて、私にもよろしく、とちよつと恥ずかしそうに挨拶をして  
きた。

……うん、私のセカンドラブの目標に掲げた純朴王子がここ  
にいたわ。

私が興味深げに、純朴王子をみつめていたら、はじめて姉の碧が私を表面からみてきた。

その眼差しはとても不安定で、内心の動揺、おびえ、疑惑、それらをクルクルクルクル伝えてきた。

私とその眼差しをきっちり受け止めて見つめ返してやると、姉はびくつと下を向いてしまった。

何、何？その態度、彼氏の大輔君もどうしたの？って感じで姉と私をみている。

バカにしないでくれないかしら？姉にとって未だに私はあの時の私なのね。

この間の様子じゃ、都合の悪い事は優しい記憶に塗り替えて忘れていたっばいくせにね、自覚してるの？

まったく、どうせならそのままでいなさいよ、そのまま堂堂としてちょうだいよ。

貴女の今の表情って、私をじゃなくて、自分を思ってる事だよね。

私が貴女ごときに、未だにかかわりあっているとても思っているのかしら？

どこまでわからない女なの？貴女の目線は自分では彼氏を見られてあまり悪いせいだ、なんて思っているでしょうけど、違うわね。



それは未だに私を自分の下だと捉えてる視線、決して今の私をみよ  
うともしない視線、あの時と変わらない視線。

だから私は言っちゃった。

「ごめんね、この通り私達仲が悪いの、相性最悪？って奴なのよね、  
中2までは仲は良かったんだけどね。理由を聞きたい？すごい単  
純明快なのよ、これが。」

そう言えば姉は顔色を悪くし、うつむき、私が笑顔なのに比べて姉  
がこの様子なので、彼氏は強い視線を私に向け、姉を守るように  
姉の傍により近づきたたずむ。

はいはい、悪者は退散しますよおだ！もう約束の1時間がすぎるも  
の。

だから、私はうつむいて震えたままの姉をおもむろに見て、彼氏の  
大輔君に「ごきげんよう。」とにっこり微笑んでから病室を出た。

どうよ、ちょっとした悪役ぶりよね。

そして、その時は全然平気で反対に鼻で笑ってたはずなのに、時間  
がたてばたつほど、何か釈然としないモヤモヤに囚われて、現在に  
至るわけ。

私何が気に入らないんだろう、私の夢の純朴王子を手に入れた姉？

それとも何も知らないくせに、それでも自分の大事なものをきちん  
とわかって守ろうとした純朴王子？

違う、違う、そんな事じゃないよね。

そんな事じゃないんだ、姉の眼差しをもう一度思い浮かべる。

あれは、そうあれは傷ついた目、深く深く傷ついた目。

ああそうか！私は姉のあの眼差しが許せないんだ。

ひどくおびえ、苦しみ、逃げるあの眼差し、あれは自分の為に、自分だけの為に傷つき自分が被害者であると訴える眼差し。

そこには私という存在は根底からないんだ、はじめからない。

私が壊れたあの時を姉が本当に意識の外に置いていることを知ったからだ。

姉の中にかろうじて存在している私は、あのみじめなままの私しかないんだと理解して、初めて憎むという感情がひっそりと芽生え、それに戸惑っていたんだ私は。

さあ、どうしてやろう、ふとマザーグースの歌が頭に浮かんだ。

「だ〜れが殺したクック・ロビン」

そういう歌があったはず。

## 第50話 乱入

7月に入ってすぐにある定期考査もやっと今日で終わり。

クラスもそして学園全体もどことなく浮かれているのはしょうがないよね。

頑張りましたよ、ええ、本当に。

私は白鳥になりました。

水の上を優雅に漂っていると見せかけて、水の下は勢いよく頑張つて水を掻いているというあの白鳥に。

ゆったりと黒ユリ館で遅くまでいつも通り過ごしながら、家に帰ればエステ以外全てキャンセルして必死に勉強しました、頑張ったよ。

上位のみ発表されるテストの結果に名前が入ってなきや嫌だし、それに夏休み前に行われる全国模試の成績の為に、うちの昼組みの奴らを家庭教師に総動員して、頑張りましたとも。

うん、やっぱり私って見栄っ張りなのだと再確認しました、どう？素直でしょ。

驚いた事にはね、同じように相手しないとすねる夜組みにもちよこつと勉強手伝わせたんだけど、テイちゃんとガンちゃんは、うん、少しはましかもと相手にした私の時間を返してよね！だったけど、何とキョーちゃんの数？のやまかけパーフェクトだったのよ、信じられないでしょ。

キョーちゃんごめんなさい、バイクやケンカ、それに人身売買以外の得意技があるなんて夢にも思わなかったのよ私。

まあ、そんなサプライズもあつたけど、必死に頑張ったおかげで学年で成績ベスト10入りは確実だと思うのね。

そこで私はとても機嫌よくテスト終了後の楽しい午後の予定をたてたの。

車を正門の少し先に止めさせて、私は運転手さんに待っていてもらって護衛の二人、今日はヨウちゃんとの範さんと王維さんという普通の人にはどうしても見えないんですけど、きっぱりと無理、その大人しめなスーツを着ても意味ないですよ、とても残念だよ、という二人を連れて、姉の通う国立大学まで来た。

うちの黒ユリメンバーの子のリサーチ会社で調べてもらってもよかつたんだけど、うちの保護者ズが面倒な事にならないよう、みんなにオープンになるようにレイちゃんここに調査をお願いした。

それでね、ガンちゃんなんか「壊すの手伝うかぁ」だって。

失礼しちゃうよね、私まだ壊すかどうか決めてないのに、っていうか私壊し専門みたいじゃない、その言い方。

それで、と、あ、いたいた、目標発見、第三教室から出てきたのを捕獲だ、捕獲。

うん、そりゃあ驚くよね、会つの2度目だし、初対面あんなだったし。

「こんにちは、大輔さん。ちょっとお話したくてきちゃったの。」  
そう無邪気に微笑むと、周りにいた友人たちが、私をぎよつとしたように、次にまぶしそうに見てくる。

たかが制服姿と侮るなかれ。

ほとんどのこの制服じゃない？私達高校生って。

だからこそ髪型やリップや仕草にとても神経を使って自分をより美しくみせる努力は惜しまないでいるの、みんな同じ格好だからこそ、やりがいがあるのよ。

一緒にいた友人だろう男の人は、にやにや笑いながら大輔さんに肘鉄をしかけたりして、おい、おまえ〜って雰囲気です。

そして女の友人はあからさまに私に警戒している、何なの？この子、って感じ。

「定期テストが終わったので、ちょっと話をしたくてきちゃったの。ごめんなさいね」

本当に無邪気に害はありませんよお、って感じに繰り返し話しかけた。

大輔さんとその友人たちにもついでに安全性をアピールする。

うん、後ろに控える二人は・・・無視の方向でよろしく。

ちゃんとこの後1限コマがあいてんの知ってるもんね、きっちり調べてあるのよ。

大輔さんは、戸惑っているようだけど、まず周りの友人たちに私を碧の妹だと紹介して、冷やかす男の友人たちを黙らせた。

女の人たちはそれを聞いて、碧の妹かと急にフレンドリーに私に話しかけてくる。

ばっかみたい、そう思ったけど、ニコニコして当たり障りなく挨拶して彼らとは別れ、大輔さんを促して外のベンチに向かう。

姉の碧は大教室のはず。

私を何で来たんだろうと不審げに見る大輔さんに、淡々と事実のみを話した。

姉たちとは殆ど音信不通状態で、この間みたとおり仲は良くないのだという事。

けれど何故か急に姉がどんな感じで過ごしているのか知りたいと思ったから、ここに来てしまった。

直接姉に会っても、今までが今までだから、うまくお互い話などできそうにないから、彼氏である大輔さんに会いに来てしまった。

迷惑だとは思ったけれど、と謝りながら、それにまた会えるかもわ

からないし、と。

不器用なんです、私も姉もって感じをアピールしながら話を聞いてもらった。

見知らぬといってもいい、碧の妹と言っただけの存在に戸惑っている彼に対して、私はこの間の空気を忘れさせるのに専念して、注意深くこの男の中での私と言う存在のあり方を軌道修正した。

ただ、ほんの少しボタンを掛け違っている姉妹という感じに受け取られるように話をした。

そうして、しばらく話し込んで別れる時、彼は言った。

「ちょっとお互い気持ちの伝え方が下手なだけなんだよ、たった二人の姉妹なんだし、お父さんの病気は悲しい事だけど、お父さんがくれたチャンスだと思って何とか仲直りができるよう、俺もできる事があつたら手伝うよ。改めてはじめまして、よろしく。」

私はガンちゃんに新しく買ってもらった、この男専用にする携帯を取りだしメールと番号の交換をした。

「じゃあ、わざわざお姉ちゃんとのデートのときには悪いから呼ぶことはないからね、でも何かもう一度話せるようになるきっかけがあるときはお姉ちゃんに内緒で私も呼んでね。お願いね。」

そう言っただけで、お墨付きの、心を蕩かすような、それでいて無邪気なあやうさを持つ笑顔を安売りし、ついでにその腕に可愛くそっと触れ、一気にこの男が持つ私の立ち位置をきちんと重さのあるものに変えて別れた。

いやあ、実際もう、限界だったからマジで。

ほら、最近表情がわかりやすくなっていたし、万が一にでもひどく冷めた目になる危険があるし、何より私がこの単純バカ、もとい、純朴王子と一緒にいるのが一分たりとも耐えられなかったからね、ホント限界でした。

セカンドラブの目標は、しっかりと黒いちょっとだけ純粹王子に修正しました。

ただの純朴王子って自分が耐えられないってわかったから、いやあ、これが「百聞は一見にしかず」って事だね。

やっとこさ息をついた帰りの車の中で、早速あの純朴王子からメールがきた、はあ、これが誠実って奴？やっぱり私にはいらないなあ。姉の碧とうまくいくよう、できるだけ協力するからよろしく、そんなメールだった。

ふふっ、何で大学にわざわざ行って、それも自分が出てくるのを待ち構えていたのか、疑問にも思わないんだね、早死にするよ、君、時と場所によつてはね。

私はそれをみながら、この夏休みは姉の私生活にきっちり乱入してやろうと黒く笑い、私が現れたら、あの姉がどんな反応を返すか楽しみだとまた小さく笑った。

ばからしい、本当にばからしい遊びの始まりだ。



けど、そんな事もたまにはいいよね。

うん、いいはず。

頭にはまたマザーグースの詩。

「だ〜れが殺したクック・ロビン。」

「それは私と雀が言った。」

## 第51話 他校交流会？

前期考査の結果は堂々の首位獲得、数？のパーフェクトぶりが効いた、これで差をつけれたのよね、もうキョーちゃん大好き！またよろしく、だわ。

本当は鼻息も荒く、ガフン・ガフンってな感じで校内を練り歩きたいの、そう、例の他校交流会のせいで、テスト明け後のその楽しみがお預けになった。

なぜなら、そのまま他校交流会に突入だから。

今年度の当番校である公立の白鷺高校は、中、高一貫校として人気も偏差値も高い高校だ。

午前中は白鷺高校で授業参観を行い、午後はいわゆる生徒会同士の交流会が行われる。

午前10時に白鷺高校正門に直接集合なので、私はいつものユキちゃんの車ではなく、ヨウちゃんの車で白鷺高校まで送ってもらった。

アホなこの新車のリムジン、バカロンからの貢ぎもの、バカロン自分でも私の中じゃ影が薄いのが知ってるから、忘れるなよ！ってアホみたいにいろいろ貢いでくる。

うん、それはちゃんとありがたく貰ってるよ、宝石や時計は私ちやんとつけるし、こういった車や不動産なんかは、それぞれ保護者ズが勝手にいろいろ使ってる。

物には罪がないもん、これぞ平和的解決ってやつだよな。

できれば、このまま海外にずっといて貢ぎものだけ送ってくれるのがベストなんだよね、って私がいつだったか何かの品受け取った時話したら、ヨウちゃんが、そんなことあの人に言えるのはお前だけだな、ってあきれていたっけ。

え、当たり前のことだよなえ、バカロンすんごいめんどくさそうじゃない。

うちの保護者ズと戦って一人で互角っていうの、面倒以外何もものもないよね。

まあ、このリムジン静かだし寝心地もいいし、いつもユキちゃん特製のさまざまな飲み物が入っているから好きだったの、過去形だけど、これ大事。

今日は朝練で体をほぐしてから、ヨウちゃんのエステをゆっくり受けて、肌も髪もつやつや、やっといつも通りの私に戻った感じで、ちょっとウキウキしてたの、車に乗るまで。

白鷺高校にもうじきつくよって隣に座るヨウちゃんが教えてくれたけど、この前まで私の癒し空間だったこのリムジン内、ヨウちゃんたら内装改造しちゃって、ずっとムーミンのDVDがエンドレスで流れているわ、ドリンクホルダーもバーカウンターも、その他もろもろムーミンキャラクター満載なの。

特注かけて作ったらしいけど、どこぞの子供の本にあるように「あんぱんまんを探せ」みたいに、これでもかかってくらいにムーミンの仲間たちがいっぱい。

タッチ式の室内灯も凄く凝ってるの、によるによるの形してるのよ、  
・・・バカロンに言いつけてやるうかしら、私が黒くそう思ったの  
も仕方ないよね。

もうこのリムジンいららないな。

私は迎えは委員長達と一度学園に帰るので、委員長の車に便乗させてもらうから、いらないとヨウちゃんに言った。

大事だから2度言った、迎えにくるなよ、ってことだよ。

そんな私にヨウちゃんは仕返しとばかりにニヤリと顎をしゃくって、向こうを見ろって感じ。

外からは車内は見れないけど、こちらからはよくわかるの。

何さ？私がヨウちゃんを目線を追って外を見ると、白鷺高校の正門は綺麗にあいていて、そこには我が黒ユリメンバー8人ほどが委員長を先頭にリムジンをみると優雅に頭を垂れて軽く腰をかめるのが見えた。

待つて、待つて、それはないよ！

誰がそんな風に出迎えろって言った？ここはうちの学園じゃないよ、わかってる？

リムジンはスピードを落として堂々と正門の中にすべりこむ、・・・すべりこむ？

待てえ、こらあ！なんで校内入ろうとするわけ？

私は運転手さんとの間の仕切りのプレートに書かれている、スナフキンがリュック背負って遠くを静かに見つめているそのイラストをコンコンと急いで叩き、止めてちょうだいとお願いしたが、時遅く車は校内に入っていた。

私もスナフキン同様、現実逃避で遠くを見つめてしまったのは仕方ないよね。

くっくつと声をかみ殺して笑うヨウちゃんの足を踏みつけて、私は運転手さんにドアをあけてもらい、初めての交流会が行われる白鷺高校におりたつた。

恥ずかしくなんかないぞ、と一生懸命気合を入れたせいで目に力が入り、そのせいで更に周囲をビビらせてしまうなんて思いもよらぬに。

第52話 他校交流会？（前書き）

ちよいと短めです。

## 第52話 他校交流会？

委員長達に出迎えられたあと、何でもないですよ、って感じに全てスルーして、白鷺校内へと委員長達と私は移動している。

でもね、ちょうどもうじき前の授業が終わる頃合いで、いかに公立有数の進学校といえど、集中力の途切れているその時に、ばかでないリムジンが正門に入ってくれば、いやがおうでも目立つよね、そりゃそうだ。

まして委員長達も同じように高級外車でそれぞれ乗り付け、そのまま正門で私を20分ほど待っていたと聞くとなおさら。

本当は恥ずかしいやら、あきれんやらで口からポカンと何やら抜けていく気がするけど、それをしちゃあオシマイだから、ほら、私って見栄っ張りでしょ、だから何にもなかったわって感じで校内に入っていくわけ。

ただね、この白鷺高校生徒会の案内の方がきてくれたんだけど、そのおびえっぷりはないと思うのよ。

私ってば、そういうのを見るといじめたい、って感じになっちゃうじゃない？

私がどうしてやろうかって、舌なめずりをして、案内の白鷺会の副会長を眺めていたら、委員長ったら困ったちゃんを見てるような顔をして、私を見るの。

失礼しちゃうわよね、最近、私に慣れすぎよね。

そして玄関に入るまで、校内の窓という窓からの好奇心あふれる視線など、ばっさり無視よ、無視、私を見るなんて100年早いっつーの。

今日の休憩所となる会議室に案内されて、とっとといなくなった案内の子はほっというて、委員長達とゆっくりおしゃべりをした。

最近私になれたんじゃない？って話をふれば、とんでもない、私が車から降りた時、おもわずイスラムの祈りの時のように平伏しなきやっと思いました、と私に答えてきた。

私が笑いながら、そう思いながらしないのが慣れた証拠ね、って軽く目をすがめてからかってやったら、やっとなんか「降参！」と手をあげてきた。

本当にツーと言えばカーなこんな雰囲気が好きだと思つ。

さてさて、次の授業時間から正式な交流会のはじまり。

授業参観を1時間して、そのあと体育館での全校集会に参加、昼食後は大会議室でのメインである交流会で顔合わせ、ざっと今日のスケジュールのチェック。

私達はうちに指定された2年生の授業を見に行くべく、身だしなみを整え、会議室の鍵をかけて、外に出た。

私がいっまでもなく、我が黒ユリ執行部の面々は完璧なお嬢バース



ヨンの雰囲気、そこに私も初の交流会、気合を入れて凜と立つ。

どうよ、これ、ひいき目に見ても、我が聖桜学園オーラが違っわね、ふっ、格の違い見せてあげるわ。

・・・あれ？この交流会ってこんな喧嘩腰でいいんだっけ？ま、い  
いか、気にしない方向で。

私を先頭にその後ろに2列になって、いざ、我が学園もこの白鷺高  
校での交流会に出陣した。

## 第53話 他校交流会？

白鷺高校の2年1組の授業は英語だった。

執行部の1人の子が教室のドアを開けて、そのまま恭しく控える中、委員長たちが教室に入っていく。

委員長達が軽く頭を下げる中、最後に私が入っていった。

うん、委員長に言わせれば、これは「お約束」なんだそうだ。

このバカげた動作・・・委員長自分自身でも白々しく開き直って認めましたよ、バカげた動作だって。

これは、いつか真に自分たちの組織ができた時、トップへの証として、こういう動作をしようと小学生の時に決めた事らしい。

小学生でそれかい！私はこのお嬢たちの抱えるものに、少し意識を  
はせた。

それと同時に私が小学生の頃をふと思い出した。

太陽の匂い、体育館の埃の匂い、ボールの音、何も考えずに笑っていたあの笑顔、次から次にと一瞬で浮かび上がるそれらに、私は他人事のように冷たい感情の蓋をおろした。

馬鹿らしい、考えるのも馬鹿らしい。

委員長達も私も、それぞれに生きてきた、ただそれだけの事だ。

私が委員長達の子供時代に思いをはせるなど、傲慢もいいとこだ。

どうやら私は、皆に甘やかされているうちに、傲慢さもパワーアップしてみたみたいだ。

見栄っ張りで、いじめたがりやで、そこに傲慢さが加わるって、どうよ？少しばかりのケナゲさが私には必要だな。

どこかで売ってないだろうか？ケナゲってやつ。

私は委員長に先導されたまま教室に入り、教室の後ろから退屈な授業風景を見ていた。

このクラスの生徒は思い切り背中で意識してますってアピールしてくるし、30代の男性の教師もバリバリに隠そうともせず、その癖チラチラと視線をこちらに向けてくる。

ほら、そういう態度されると、私、困ったちゃんスキル発動しちゃうよお、ついさっきケナゲめざそうとしてたんだけどなあ、こうやって簡単に挫折するのね、人生って。

世の無常を嘆きつつ、委員長に目をやる。

委員長はしょうがないな、って目をしたあと、ひときわその長い髪に手をやりつつ、何気に教師の視線を自分に向け、気が付いたって感じに教師を不思議そうに見つめる。

他のメンバーたちもかわいく小首を傾げ、ほんのり口元には笑い、  
笑い、笑い。

私はそれを確認しつつ、授業を見る。

その教師はそんな皆の様子に誤解し、勝手にてんぱっていく。

自分の発音に問題があるのか、解釈に何か間違いでもあったのかと、  
どンドン、どンドン、思考が悪い方にループし、だんだん教科書を  
読むのも、しどろもどろになっていった。

生徒たちも教師がそれから逃げるためひんぱんに指名してくるので、  
かといってそれに答えることもできず、だって質問自体もはや意味  
不明だもん、私が聞いていてもわかんない。

このクラスの英語の授業ははじまって30分で壊滅的になり、混乱  
のまま終わった。

これって誰のせいでもないよね、だって私達はほんのり上品にお嬢  
様らしく笑みを浮かべて立っていただけだもの。

だけど涙目の大人の男ってカワイイものだったのね、ほら、私の周  
りって、あれだもの、あの保護者ズだもの、とても新鮮で癖になっ  
たらどうしよう、そう思って私は授業参観を終えた。

## 第54話 他校交流会終了？

一度用意された会議室に戻って、軽く珈琲を飲んでから、体育館に向かう。

全校集会で本日の交流会各校の紹介があるから。

紹介されたって、どこぞで会う予定もないのだから、無意味だと思うけど、毎回通例で行われているみたいだ。

まあ、「郷に入れば郷に従え」だからしょうがないけど、もしうちの学園が当番校なら絶対やらないことの一つよね、これ。

もう既に全校生徒が体育館に並んでいる中、教職員とは反対側の壁に設けられている、各校の名前が書かれている椅子にむかう。

どうやら私達が最後らしい。

生徒たちの好奇心あふれる視線を委員長たちは、バツサバツサと綺麗に無視して優雅に歩いていく。

私をその簡易椅子まで誘導すると、おもむろに例の動作を一斉に揃えて、私が座るのを待つ。

私が鷹揚に座ると自分たちもこれぞお嬢の座り方、っていう見本の如くそれぞれが美しい所作で椅子にすわる。

ガヤガヤとした体育館の雰囲気も、定刻になれば自然落ち着く。

さすが、ここは進学校だけあり、その所は見事な切り替えだった。つまりらない学校長の挨拶、当番校の生徒会長の挨拶、招かれた交流会側の代表として同じ公立進学校である上森高校の生徒会長の爽やか君が挨拶して、やっと学校紹介に入った。

そのまま上森高校が紹介され、私立の弘和、古桐と壇上で紹介される、こちらは皆男子の生徒会長だった。

去年の学園祭で私と一悶着あった姉妹校の香蘭学園が続き、最後に私の所の聖桜学園が紹介された。

代表が一言言わねばならないので、「ごきげんよう、皆さま。本日は楽しませていただきます。」と無難に終わらせたのだが、生徒たちからどよめきがおきたのには驚いた。

え？何？何で？そのどよめきについて、どちらの方向でのどよめきか、良い方が悪い方なのか聞いてみたいと思った。

壇上をおりて、その後副校長の挨拶で締めくくられたんだけど、終わって椅子から立ち上がるうとした時、急に前に立ち、話しかけられた。

香蘭の生徒会の人間だった。

委員長がささず私の前に出てそれを遮る。

他の子たちも臨戦態勢に入った。

委員長が彼女たちに、そして私に話しかけた少女に、優雅に微笑みながら、

「ごきげんよう、皆さま。学園祭ぶりですわね。」

と上品に微笑みかけ挨拶した、目は笑ってないけど。

「前に学習なさらなかったのかしら？我が黒ユリ様に取り次ぎもなしに話しかける不調法はやめて下さらないこと？何度言ったら理解して下さいのかしら？」

ためいきをわざとらしくして困ったように彼女達を見る。

他の子たちも、半端ないオーラをあふれさせ、同じように私を守るようにして立っている。

まったく、ツーと言えばカーの、この反応たまらないよね。

香蘭の子は、

「何度もこちらから正式に面会の要請はしております。それを無視なさっていらっしやるのは聖桜の方ではなくって！」

そう委員長をにらむ。

委員長はそれはそれは見事な笑顔でそれをばっさり切り捨てた。

「我が聖桜黒ユリ会は皆さまもご承知でしょうけど、国内外いろいろなおファーで、とても忙しくしておりますの。何故香蘭を優先しなければいけませんの？意味ない事はしない、っていうのも組織を

動かす上では基本中の基本でしょう？それからお話ししなければならぬ。」「  
ね。」「

「意味ないですって！うちの副会長だった先崎さんの事が意味がないっておっしゃるの！一人の人間の人生が意味がないですって！信じられない！」

そう言つて熱血女子が大きな声を出す。

お嬢様ズVSお嬢様ズの戦い勃発に、体育館の中は好奇心の塊。

何せこの後はお昼とお昼休み。

教職員もほとんどの生徒もまだ残っているのに・・・なぜに見世物パンダにならんといけないんだろう。

香蘭の女子もまさかこうヒートアップするとは自分でも思つてなかつたんだろう。

ちよいと話をしたいという約束を取り付けたかっただけみたいだから。

でもね、アポイント1つを取るにも、あなた方お嬢様方にとっては覚えるべき大切な事の一つよね。

それをこんな公衆の面前で、軽くとろろとした愚かさを知るべきだわね。

どうも香蘭とはとことん合わないみたいねえ、私は呑気にそう思い



ながら、例のリサーチ会社の子の差し出す携帯情報を見る。

豊中悦子、豊中農水大臣の一人娘、現在高3で会計職ね。

上に二人の兄がいて、長男は財務省に入省3年目、二男は都市銀行に今年入行、ね。

ふうん、あの学園祭で喧嘩吹っかけてきた女とは母方の従姉妹同志で幼馴染、ですか。

了解しました、えーとメール、メール。

レイちゃんにメール発信、よし、完了。

私はにこやかに微笑んで体育館をでるべく歩き出した、香蘭を無視して、面倒だから。

それに気づいた子猫ちゃんズが私に続き、委員長ももはや相手にせず踵を返して私のあとに続こうとする。

無視する私に頭に血ののぼった香蘭側は、口々にこちらを非難する。

1人の口から、「おじい様に頼んで、あなたのお兄様なんて仕事ができないようにしてやるからっ！」

と言っのが聞こえた。

私は立ち止まって静かに問いかけた、「誰のお兄様？」と。



## 第55話 他校交流会終了？

「誰のお兄様？」

私はもう一度静かに尋ねた。

委員長達は、今度は綺麗に私の背後につき、もう口は出さず控えるのみだ、さすがわかつてる。

おじいさまに、と言った子は、私が反応を返したので思わず無意識に後ろに一步下がってしまい、それに気づくと、今度は怒りのまま私をにらみつけた。

どうやら新しく香蘭に入学した子みたいね。

でもね、虎の威をかる、いやかりまくる私が言うのも何だけど、自分以外にこれやられると、ひどくむかつくんですけど。

ましてうちのメンバーの誰かに対して言ってくれちゃったみたいだけど、私のものに手を出されるのもイヤなのよ、ここらへんでそれをアピールしとくのも大事よね。

わがまま？いいじゃない、わかつててするワガママは「覚悟」とでも呼んで欲しいものだわ。

その子は、うちの新1年の庶務の藤堂さんを見て、自分のおじいさまが会長をしている財団法人の名をあげ、藤堂さんの兄が事務局にいる事を教えてくれた。

藤堂さんとはその関係のパーティーで顔なじみらしい。

それで、おじいさま、ね。

勿論、こんな淡々と説明されたわけではなく、怒りのあまり喚き散らしたのをまとめたんだけどね。

私はお話しはそれだけかしら？と言って冷たく、ガンちゃんが「おつかねえなあ。」と喜ぶその表情を浮かべながら、ピツと携帯を鳴らした。

出たのはレイちゃん、レイちゃんにそのままその団体の名と会長名を告げ、ついでにバカ香蘭の1年の名も告げて切った。

怪訝そうな顔をする子をまず無視して、最初に話しかけてきた香蘭会計に声をかけた。

「先崎さんの人生っておっしゃってましたけど、あなたもその仲間入りって、本当に素晴らしい友情ですわね。」

怪訝な顔をしながら、相変わらずきつく見つめる彼女に微笑みながら話し続ける。

「お父様は政界を引退なされるわ。財務省のお兄様もお父上の後継はなくなつてよ。ああ、お父様政界スキャンダルで引退なさるから、あなたこんな所においてよろしいのかしら？テレビとかマスコミとかもうじき動くはずよ。私ならさっさと帰るわね。」

レイちゃんに最初打ったメールの返信には、しばらくしてそういう事柄が返ってきていた。

農水大臣の子の携帯がなり、何を言ってるのかと、バカじゃないかと私を見ていた彼女が携帯で話すたび、みるみる顔が青ざめていく。

「嘘、うそでしょ。えっ、私何にも、何にもしてないわ。電話を代われ？誰に？何、何よ、お父様、何を怒りなの！わけがわからないわ。」

こちらにも携帯ごしに何やら大きな声が漏れ聞こえる。

そして、続けて、1年の子の携帯がなった。

何かわからないけど尋常じゃない事が起こっているのは皆わかってる。

例の会計の子は父親に怒鳴られながら、混乱のうちに、私の言った言葉を思い起こし大きく目を見開き私を見ながら、唇を震わせ父親の電話を聞いている。

香蘭1年の子に私は言った、電話を出たらいかがかしらと。

そして、同じく電話に出た子はみるみる血の気を失っていく。

倒産、失職、そんな小さな声が聞こえてくる。

早っ、まだレイちゃんに連絡してから20分くらい？うん、レイちゃんでは鬼畜仕事させたらガンちゃんよりえげつないところあるからね。

それに最近ちょっと機嫌悪かったからなあ、いい八つ当たりだね、

それと私が久しぶりに頼ったのも嬉しかったのかな？

「いい仕事してますねえ」だよ。テレビの人同様、うさんくさいけど、ん？笑顔とか？。

レイちゃんの機嫌悪い理由、それはね、私が実家に関わろうとしてるせいだと思う、過保護でしょ？私が傷つかないか心配してるの、杞憂よね。

杞憂といえば、この言葉の元になった人、本当に空が落ちてこないか悩み苦しんだなんて、なんてカワイイ人なんだろう、空が落ちるって信じた人生計り知れないよね、そう思わない？一緒に空みたかったな。

それにしても、お願いした私が言うのもなんだが、香蘭の1年倒れそうだな・・・あつ、倒れた。

輪をかけて香蘭大騒ぎ、みつともないったらありゃしない。

姉妹校止める方法ないかしら？ま、この分じゃ向こうから言いだしできそうだけど、こちらに怯えて。

委員長があゝあつて感じて私を見る、知くらないつと、穩便にここを出ようとした私の足を止めた方が悪いよねえ、ことわざにもあるじゃない？

「キジも鳴かずば、うたれまい」って。

悪いけどちょうどいい見せしめになってもらっわ、黒ユリ会には手も口も出しちゃダメってね。

私、姉のところに乱入して遊ぶ気満々だから、ホント満々なの。

だからね、黒ユリ関係は静かな状態でいてもらわないと、おちおち遊んでいられないと思うわけ。

私が体育館を出ようときびすを返すと、小さな涙声が聞こえた、「お願い、電話に出て」と。

私は無視してそのまま歩き出す。

何故かモーゼの十戒のように、綺麗に人が割れていく。

・・・いつかのデジャブだわ、失礼ね、これ、花も恥じらう乙女に対する態度じゃないわ、どこの化け物かっていうの。

背後には号泣する二つの声、どう？人の人生をもう一度言いにかけてみる根性あるかしら？

その後行われた合同会議という顔合わせには、香蘭の面々はいなかった。

ピリピリした雰囲気の中各校紹介が行われ、我が聖桜学園は委員長に質疑応答をしてもらった。

あからさまにほっとした各校の面々に微笑みながら冷たく視線をやると、誰一人目を合わせるものはいなかった。

「勝った！」・・・あれ？何か間違ってる？

こうして黒ユリ会初の学外公式行事は幕を引いた。

あまたの噂話だけを残して。



## 第56話 学園にて

はあ、落ち着くわ。

この黒ユリ館の代表室のカウチに寝転がって、ぼけーらとしている幸福。

アイスティーとクッキーやシュークリームの差し入れをおいしくいただいた後はなおさらね。

反対側のソファでふんぞり返って寝ているバカ、もとい、理事長のソウは無視して、私の足元に座り手作りのムーミンの塗り絵で遊んでいるシロとコロを愛でる。

夏季休暇目前で、いろいろやることがあるだろうに、ソウはいつのまにかこの黒ユリ館の私の部屋に堂々という事が多くなった。

初めてソウがここに足を踏み入れた時は噂の理事長様だから、下の階にいたメンバー達は大騒ぎしていたが、今は何やら誤解して、生ぬるい目でみてる。

ソウはもう学園の理事長に飽きていて、根っからの裏側の人間らしい仕事に戻りたがっている。

けれどロシアの事業・・・あれらを事業と呼ぶのも何だが、あれらは既に自分が育てた人間達で軌道に乗っているし、バカロンがバツクについた事で、当仁会に、実際は高津組に逆らうバカもいず、かといって理事長に就任早々、挨拶にきた人間のほとんどを1、2週間の内に気に食わないという理由で潰してしまったので、ここでも

自業自得？ってことで、現在まっとうな学園理事長としての仕事し  
かなくなってしまった。

それでソウいわくトラブルメーカーの私の所において、そのおこぼれ  
で遊ぶつもりでいるらしい。

失礼しちゃうわよねえ、まあ、この間も香蘭相手にやらかしたた私  
が言うのもなんだけどさあ、トラブルは向こうからくるのよ、私の  
せいじゃ、これっぽっちもないと思うの。

それが空振りでも、ソウがここに入り浸る事で、ガンちゃんの怒り  
をかい、理事長職を退任できたら、それこそ万々歳なんだそうさ。

指の一本や二本、この退屈に比べたら安いもんだと、せせら笑う。

なにしろ、ソウの夢はどこぞの路地裏で「何だこりゃあ。」って叫  
んで死ぬことなんだって。

シロとコロのムーミンの事言えないよね、昔の刑事ドラマで「きき名  
優が言ったセリフにあこがれてるんだって。

何で私とその刑事ドラマ知ってるかって？

この部屋でその昔のドラマ、その俳優さんバージョン何度も見てる  
からだよ、誰がって？もちろんソウだよ。

自然見ていなくても耳から覚えちゃったわよ、私。

何なんだろう？夜の世界で生きる人って、ある意味萌え系？凝り性  
？人間ばかりなのかしら？

私の周りの男達の顔を思い浮かべつつ不思議に思う。

まあ、そんなわけでソウいわくヤバい事に飢えてる自分に、一刻も早くそれをくれそうなの傍を離れたくないんですって。

いい迷惑よね、でもシロとコロがヨウちゃんの手作り塗り絵でこうして喜んでる姿を見るのは癒されるから、善しとしよう。

塗り絵のクレヨン色が、黒とか黒とかそこに赤とか上塗りして、ムーミンもフローレンもひどく不気味なのはスルーの方向で……。

そんな風に夕方まで時間をまったりと過ごしていたら私の携帯がなかった。

あの姉の純朴彼氏専用携帯からだった。

私がどんな顔をしたのか知らないけど、私の顔を見たソウは、寝転がっていたソファから起き上がり私の予備の携帯から聞こえる声を一緒に聞こうと寄ってきて、それはそれはあくどい冷えた目をして笑ってこちらを見た。

ほらな、っていう顔をしながら、私の携帯に目をやる様子は、まるで毒蛇がかまぐびを持ち上げたかのようだった。

あんた一緒に来る気満々でしょ？やなんだけど。

私はソウを睨みつけながら、クチパクで言った。

（私のエモノ）と。

ソウはニヤリと笑い、耳をあて聞こえる声からの場所を声に出さず復唱し、せっかく楽しく無邪気・・・うん、無邪気なはず、遊んでいた足元のシロを蹴とばして車の用意を命じた。

「突然だけど、さっき飲み会やろうってなってさ、気の合う友人たちのだから、透子ちゃんもよかつたら気兼ねなくおいでよ。ジュースを飲んでもいいからさ、それともやっぱ居酒屋は非常識だったかなあ。」という問いかけに、声は無邪気な女子高生のようにかわいく大丈夫だと、是非参加させてとお願いし嬉しそうに答えながら、しかし目ではソウときつくきつく対峙していた。

結局折れたのは私だ、確かにソウに少し息抜きに遊ばせなきゃ、こいつ嫌がらせに学園に何を持ち込むかわからないもの。

この間、お嬢たちを売りにした売春組織つくろっかな、とか新しい合成麻薬試したいなあやら、何気に本気で言ってたもん、ソウ。

私がいる間は、そんなめんどろな事させません！私何度も言うけど面倒はきらいだから。

どうせ制服着替えに戻んなきゃいけないし、私はコロの頭に手をやって、塗り絵の手を止めさせ、私を嬉しそうに見るコロに・・・うん、そのスナフキン塗ったの、ヨウちゃんには見せちゃダメだからね。

ヨウちゃんマジでスナフキンに関しては余裕ないから、心のシシヨーだからね、ヨウちゃんの。

そんな本来なら緑の帽子についている羽飾りが、おどろおどろしい黒で、どうみてもそれって出刃包丁が刺さってるようにしか見えな  
いし、ましてスナフキンの服からあふれる赤のクレヨンはどう  
見ても血が噴き出てるようにしか見えない。

不思議だ、あれだけ毎日見てるのに、何でこれ？この色？

これ絶対隠さないと、コロ、ヨウちゃんにやられちゃう。

私はコロに、その塗り絵ここに置いとこうねって優しく言って、シ  
ロに家に向かうからって行き先を伝えてきてって伝言をお願いした。  
シロ舌切り取られてしゃべれないし、この2人どうみてもコミュニ  
ケーションとってるように見えないのに完璧に意志の疎通ができる  
のよ、これこそ不思議よね。

私は今から物騒なものダダ漏れさせてるソウに、「漏れてる、漏れ  
てるよ、隠して。」と言いながら下に向かった。

階段下りる時「お前もな。」って返事は聞かない方向でスルーした。  
こうして楽しみだった乱入計画に予想外の困ったちゃんがついてく  
ることになった。

私は路地裏で野垂れ死に希望の、自他とも認める暗黒の天才とこう  
して居酒屋に行くことになった。

何がおこると、私のせいじゃないよね。



第57話 乱入？（前書き）

風邪がぶりかえしたようで、ここ1週間ぐらいは、短めで更新させていただきます。

更新・・・できますように。

皆さまもお気を付け下さい。

喉にきますからね。

## 第57話 乱入？

私は、居酒屋に乱入するまで、中途半端に時間があるものだから、ヨウちゃんにプチエステをしてもらった。

あのね、腰から太ももにかけてのマッサージって、もう感動ものに気持ちいいの、ほら恥ずかしいとか、恥ずかしいとか、そういう感情捨てちゃえば極楽気分になれるわけ。

相も変わらず年頃の娘としてどうなんだろうと思うけど、「うーん」と気持ち良い声が自然と出ちゃうんだけど、ヨウちゃんがマッサージしながら言うのよ。

「あのバカ連れて行くと、面倒だぞ、俺にしとけ。」って。

いやいや、ソウでギリギリですから、ヨウちゃんなんか連れていったら、乱入楽しむまもなく、全て終わっちゃう気がしますから、絶対無理、無理ですから。

何とかヨウちゃんを説得し、リビングに戻ると、ソウも高級ブランドの明るいグレーのスーツに着替えて待っていた。

そうやって大人しく雑誌を読んでいるのをみると、確かにいい男なんだけど、ダメね、まだまだ。

レイちゃんの足元にも及ばないね、自分のテリトリーの空間がまだ作れてないよ。

あの裏の仕事してるときの、半端ないオーラ出されても困るけどね。



私はフェミニンな淡いピンクのワンピースに、アクセサリーはかわいい貴石のペンダントだけにして腕時計も細めなものをつけた。

でも、これ値段すごいんです！ってのばかり、さらっとつけといた。

大学生の女達はめざといからね、ほら、私って見栄っ張りが得意だからね。

ヨウちゃんに抱きついて甘えていると、突然だらだらとソファアで雑誌を読んでいたソウがきりりと立ち上がった。

目を奥にやると、夜組みの男達がリビングに入ってくる所だった。

ソウを見ると、挨拶をしながら、どこに目をやっていいかわからない様子。

そりゃそうだろう、自分の直属のトップであるガンちゃんが来ているトレーナーの上下、ポケモンキャラのだもん。

テイちゃんのは仮面ライダー大集合のだし、今はいないキョーちゃんのはプリキュラ。

いやあ、せめて家にいる時は可愛くと思って私がプレゼントしたんだ。

思ったより簡単に手に入ったよ、ネットバンザイだよな。

ソウがみんなの寝起きの時間くる事ないからね、目なんかそらさなくていいから、反対に貴重なそれ見ないと損するよ、そう言ってあ

げたかったけど、どうやら夜組みさん達、機嫌悪いみたいね。

うん、ソウ目を合わさなくて正解かも。

久しぶりに怒ってそうだもん、ガンちゃん。

なして？本当に過保護なんだから。

うん、どうやって機嫌直してもらうかなあ、ここは私の腕のみせどころだわ。

第58話 乱入？（前書き）

復活しました。

ふっ、インフルからはじまり、感染症オンパレード。

2度と思い出したくない黒歴史です。

## 第58話 乱入？

こちらを睨みつけるガンちゃんに、ひらひらと手を振る。

ん？君ら何を心配してるのかな？

私はにつこり心から微笑み、一人一人みつめた。

テイちゃんは頭に手をやりガシガシかいて、一つため息をついて私をみる。

失礼な！何のため息？・・・そのあと私の傍までくると、私を両手でしっかりと抱き締めて、私の耳元で優しく腰にくるような声でしっかりと囁く。

「遅くなるな。」と。

・・・あのさ、テイちゃん、たったそれだけ言うのに、その半端ない色気いりませんけど、これっぽっちも全然いりませんから！

それよりさ、ガンちゃんの機嫌直す方法教えてよね、ほんと意味ない事得意だよね、テイちゃん。

ガンちゃん今日は手ごわいなあ、この分じゃ外出できそうにないかも・・・。

こういう時頼りになるのに、全然知らんぷりするヨウちゃんをチラッと怨みを込めて見ながら、私はガンちゃんの傍にいて、腰に手を回し、抱きついた。

その無駄にでかい体をつんつんつき、その頭を私の近くまで下げさせる。

そして、テイちゃんの二番煎じみたいで嫌だけど、本当に嫌なんだけど、私はその耳元にひっそりと囁いた。

「もう逃げたくないの」と。

人一倍仕事柄絶対という言葉信じない心配性のガンちゃんに、私は思いを込めて、ガンちゃんの胸に耳をあてながら、その心臓の音を聞きながら、ほうつとため息を一つついて、ガンちゃんを見つめる。

ぎゅっとガンちゃんが抱きしめてくるのを、私も抱きしめ帰す。

私はもう大丈夫だよ、って思いを込めて。

ガンちゃんの大きな手が私の頭を何度も撫でる。

そしてそれはやがて頬を優しくそつとさすり、口元をさすりながら、私の唇にたどり着く。

私の唇を幾度も撫でるその無骨な指を、私は口を開けて、ちろつと舐めながら、ガンちゃんを見る。

ガンちゃんは能面のような表情をしながら、その実、目の奥に昏い熱い何かをひそめて私を瞬きもせず見ていた。

私はもう一度その指をちろつと舐め、綺麗に微笑んだ。

そこにテイちゃんの、

「おい、おい、ごね得かあ、透子お、俺のも舐めろ！」

との、身もふたもない低レベルの声掛けに一気に今までの雰囲気霧散した。

私はそれはそれは冷たい目でテイちゃんを見て、ガンちゃんとヨウちゃんに物騒に睨まれるテイちゃんに、ざまあみる、怒られるがいよいよ、と思いながら、そのまま出かけるべく玄関に向かった。

ソウも当然のように私に続き、それにコロとシロも続いていく。

ソウはヨウちゃんとガンちゃんには丁寧に頭を下げ、テイちゃんには、鼻で笑って答えた。

テイちゃんが何やらぶつくさ文句を言っているが、私は綺麗に無視して玄関を出た。

その目的の場所にある居酒屋まで、私もソウも車中で何か話すでもなく沈黙のまま向かった。

レイちゃん達には、しっかりとメールを送り、うん、これ大事だよ。

後で地獄みるからね、カタギの人間馬鹿にしちゃあいけないと、何度私が思ったことか。

キョーちゃんはカタギ？なのか？・・・あとでヨウちゃんにでも聞

いてみよう。

いつも夜組みとひとくくりにしてたけど、あいまいだよね。

そしてメールを送りやることなくなった私は、あいついでくる返信や着信はスルーの方向で、過ぎ去る景色を眺めながらマザーグースの詩の続きを頭に思い浮かべていた。

誰が死ぬのをみたのクックロビン　私とハエが言いました。

私がこの目で死ぬのを見ました。

誰がその血を受けたのか？　私と魚が言いました。

小さな皿で私が受けた。

誰が死装束を作るのさ？　私とかぶと虫が言いました。

針と糸とで私が作る。

誰がお墓を掘るのだろう？

・・・私よね。

## 第59話 乱入？

その居酒屋は繁華街の駅前ビルの3階にあるおなじみのチェーン店だった。

ソウとは駅前についた時点で別れた。

別に何の話もしなかったが、かわいいコロとシロの頭を撫でて私は車を降りた。

ソウはソウで勝手に遊びにくるだろうから。

ビルのエレベーターの中で、わずかな時間だが自分に気合いを入れる。

ここにいる私はもうあの時のみにくいアヒルの子じゃない。

白鳥？ふん、そんなもんでもないけどね、確かに私は変わった。

私は私の保護者ズを思い浮かべ、嫌々ながら、ついでにあのバカロンも足のつまさきの方くらいに思い浮かべてやって、どうよ？これ特別大サービスだよね、心を静めた。

そしてエレベータがあいた3階にきつ！と目を向け、教えてもらった居酒屋へと向かった。

もちろん、あの姉の彼氏の純情バカにメールしながら、「今ついた」と。



店の入り口の脇の方で、名前忘れた、あの何とか君を待つ。

やばっ、名前なんていったっけ？

登録もこの予備携帯に純朴王子としか入れてない。

ま、いいか、私には全然関係ない人間だし。

待つこと数分、その間一人でいる私はそこを通る人間に注目を浴びていた。

そりゃあ、今日の仕様はズバリお嬢様！

派手派手しい装いではないが、デザインアースブランドの清楚なワンピース、一目で高価とわかる貴石のかわいいネックレス、時計も0が7ケタつくものを、さりげなくつけている。

ましてプチエステ後の私はツヤツヤだし、気合いが入った私はそりゃあオーラが違うはず。

現に私の周りをうるちよろはしても、誰も私に声をかける事はできない。

そこになんとか君が店内から出てきて、私の方に笑いかけながら近づいてくる。

「透子ちゃん、悪いね、急に呼び出して。今日は大学の講義も最終だし、みんなバイトもなくてね、じゃあみんなが集まるうってなっちゃって。それで連絡させてもらったんだ。」

そういつて眩しそうに私を見る。

私は猫の皮を20枚ほど自分にかぶせて、にっこりと邪気もなく言った。

「呼んでくれてうれしかったです。私こういう所初めてなんで、ちょっと緊張しちゃいます。」

「あはは、全然ファミレスみたいなのに毛が生えた程度だよ、何も怖い事なんてないさ。じゃ、中に入ろうか。」

「だけど未成年は内緒ね、まあ、暗黙の了解ってやつ。」

そう言つて笑う姉の彼氏に私はクスクスと笑う。

これは心から笑った、だってこの男と一緒に今からあの姉の元に行くのよ、これつて笑えるよね。

私は無邪気を装つて、この男の手をさらつと握り、それに驚いた顔をする男に、どうかした？つて感じに笑いかける。

どうやらこの純朴王子は、私のその行為をまだ異性を意識しない幼さゆえの所作と理解したようで、困つたように笑いながら、その手をつなぐという行為を、しかたないかと苦笑いして受け入れた。

そして姉たちの待つテーブルの一角まで案内されながら、姉と言う彼女がいるのならば、たとえその妹であれ必要以上の接触は姉を傷つける、という事に思いを浮かべない、この純朴王子の鈍感さに、さらにその姉と私がうまくいってないと知っているくせに、その姉

の前で簡単にこういう行為を許す男に私は自分で仕向けたくせに軽い憎しみを覚えた。

これが純朴で優しいというのなら、私にはいらぬ。

この男が確かに、あの姉をかえたのは確かだ。

私を私のあの男達を変えたように。

もし私に彼氏ができたならば、私以外は決して見せない、思わせない、そう思う。

私でいっぱいにして少しの間も許さない。

・・・あれ、うちの保護者ズって、そんな感じだよな？うん、深く考えるのはまずい気がする、やめよう。

そう思った時、私と純朴王子は、その姉のいる10名くらいのテーブルについた。

私は、緊張しているかのように、ぎゅっと純朴王子の手を改めて握った、・・・ほんと嫌だけど。

純朴王子はその手を握り返し、大丈夫だよって感じに私に笑いかける。

私は小首をかしげ純朴王子をさがるようにして見上げた。

純朴王子はくしゃり、という感じに私の髪を撫で・・・ごめん、こ

れ以上の接触は鳥肌が立つ、ギブだギブありえない。

私はシンと静かになったテーブルで、私と手をつなぎ、あまつさえ髪を撫でるといふ暴拳を行ったこの鈍感馬鹿にはわからぬよう、姉の目を馬鹿にしたように、姉にのみわかるよう見てから、鳥肌が立つ前に、いかにも「ごめんなさい」感を出して、ケナゲさをアピールしつつ純朴王子から離れた。

その態度に、柳眉を逆立てつつあった女性陣は、まだ友人の彼氏とこの女は誰なんだというピリピリした空気を全面にだしつつも、他の男子の手前、偽物の笑顔をかるうじてはりつけ私達をみていた。

1人の女子が、ああ、という感じの表情になり、それと同時に、純朴王子が私を紹介する。

「碧の妹の透子ちゃん、姉妹でゆっくり遊んだことないっていうから、サプライズで呼んだんだ。最後まではいられないらしいけど、みんな一緒に遊んでやって。」

そう言って嬉しそうにニコニコする。

私はおずおずと、

「はじめまして、碧の妹の透子です。突然乱入してごめんなさい。」  
驚愕に目を見開く姉の碧が面白くて、私は鳥肌も何とか阻止したことでだし、少し嫌がらせに、つい、と純朴彼氏の傍に寄って、彼を見上げた。

案の定このバカは、優しく私に笑いかけて、肩に手をやり私を席に

案内してくれた。

それも姉の碧と向かい合う席に。

やつほぐ、お姉ちゃん、遊びましょ。

私の脳裏に、あの初夏の日の、世界はまるで自分と一体になったような幸福感と、それが一瞬で自分と全てが壊れたあの時を思い、そしてあの体をからめながら勝ち誇るように私を見た姉の目が思い浮かぶ。

そしてまた、再会した時見た姉の穏やかな目と私を認識した途端怯える目が浮かぶ。

ねえ、何故あのときのままの貴方でいなかったの？

それならば、私は……。

私は……どうしたいんだろう？

まあ、これが暇だという事ね。

## 第60話 乱入？

私が必要以上にグループの男子達に接触せず、女子とばかり打ち解けていこうとするので、初めは警戒していた姉の友人である女子たちは、少しずつ、こいつは大丈夫かも、って思ってくれはじめ、とどめとばかりに居酒屋のトイレと一緒にわざとついていってもらったリーダー格の女子に、つきあってる彼氏がいてどれだけ夢中か何気にアピールしたら、すっかり女子の警戒がとけた。

ふん、男がいる女は安心なわけね、・・・それからは女子会のノリ。私空気読める子だからね、外さない。

何故か私の恋バナに全員盛り上がり、何せ年上の貢ぐ君設定はお姉さまがたに大うけ。

最初はその貢ぐ君設定に男子は引いたけど、男のプライドってやつね、私が女子とは打ち解けても男子には警戒する様子に、1人の男子が、

「俺、何となくその男の気持ちわかるかも。なつかない猫にエサやる気分だな。」

とか言いだして、なるほどという空気になり、それから年下のかわいい妹設定に何とか軌道修正して、いやあいかんいかん、つい男のプライド甘くみちゃったよ、私。

お姉さま方とうまくやるために、そっちまで考えなかったものね。

それからもう大盛り上がり。

1人を除いて。

そう、姉の碧ちゃん。

どう？自分の大事な空間が私に浸食される気分は。

私は昏く冷たい視線を私を見つめる姉の碧にひたつとあてて、彼女がそれに気付くとそんな事がなかったようにふるまった。

碧ちゃん、あなたの限界はそろそろじゃない？

## 第61話 乱入？

気が付けば姉の碧だけが静かな、けれどはたから見れば、とても楽しい空間が出来上がっていた。

そして、私は、私をあの時のように睨みつけはじめた碧に、それこそが私の望みだとばかりに、心からの笑みを浮かべてみつめた。

姉の隣に座る純朴彼氏も、やっとその姉の空気に気付き、遅いよね、ほんと、私ならこんな彼女の気持ちに気づかぬ鈍感な愚かな男は願いたいだけだわ。

「碧、どうした？気分でも悪いのか？」

気分？そうかもね、確かに、ね。

姉の碧はそれを無視して、

「あんだ、何のつもり？私が苦しむのが楽しい？今さらでしょ！」

そう私に向かって怒鳴った。

一瞬でしゅんとなったテーブルで、戸惑うように皆姉の碧を見つめる。

「父さんにだって会いに来ないくせに、なんであんだがここにくるのよー！」

「なんで大輔と……。」



後は別に何か言ってるけど、聞きもしなかった。

おお、大輔君ね、名前だけでも今だけ覚えとかなきゃ、だわ。

どうしたの？と女友達に声をかけられ、彼氏の大輔君にも何やら声をかけられている。

そろそろ私もこの空間に厭きてきた。

さあ、猫の皮どころか、化け猫の皮にバージョンアップよ。

「お姉ちゃん、ごめんなさい、仲直りしたくて大輔さんをお願いしたの。」

「大輔さんも、お姉ちゃんのお友達も優しくして……ごめんなさい。」

私がつつむいて声を震わせると、ほらバカ男子達が、私に同情の視線と言葉をくれる。

それには首をふるふると振って応えず、隣に座る例のリーダー格の女子の服の裾をすぎるようにテーブルの下でぎゅっと握る。

「仲直り？」

その女子が私と姉をみてそう聞いてきた。

私が答えずにいると、姉の碧を落ち着かせるように抱きしめていた大輔君が私の変わりに答える。

「なんか昔喧嘩して、そのまま妹の透子ちゃんの家を出たらしくてさ、ほら親父さんが入院したたる？それを機にたった二人の姉妹だから、仲直りしたいって。」

「ほら、斉藤もいたろ？大学に透子ちゃんきた時頼まれたんだよ。」

斉藤と呼ばれた女子は、ああ、あの時ね、という顔をして私を見た。

私は彼女に頭を下げ、

「あの時は、」と話そうとして、姉の碧の怒声に遮られる。

「何よ！あんた大学まできたの！いつよ！いつ！なんで大輔に隠れて会うわけ？信じらんない！2度とあんたの顔なんかみたくなくなつたわ。」

「ずっとずうしいわね、早く出て言って、2度と私に顔を見せないで！」

きつく私をにらむ姉に皆は驚いて、彼氏の大輔君は一生懸命なだめようとする。

「私に復讐のつもり？残念だけどそんなの気にしないわよ、私は！」

そう言って大輔君の手を振り払って、テーブルに手をつき立ち上がって私を睨みつける。

ふふっ、ここはうちの例のおど娘の真似っこで、と。

私がますます顔をうつむけ下をみると、ここにいる人間の空気が姉に対してひんやりとしてきたのがわかる。

「ご・ごめんなさい、復讐とか、意味わかんないよ。私今とても幸せなの、私を大事にしてくれる人もいて、・・・だから・・・。」

姉の碧はその私の言葉を遮り、

「そう、幸せねえ、だったらその幸せのまま、こっちに関わらないですよ！迷惑だわ！」

「あんたっていつもそう、周りに大事にされていつも幸せそうに笑って！私はそんなあんたが大嫌いだったわ。お日様みたいなあんたが。」

「だから、あんたがもっと幸せそうに、本当に幸せそうにあいつとつきあうって喜んでいるのをみて、私はそれを壊してやったのよ。」

「どう？初恋の愛しの君を私に寝取られた気分は！あんたがいつもこれに気づくかと、そればかり楽しみにあいつといつも私も私のベッドでやってたのよ！キスもまだなあんたがそれを見て泣き喚いた時、ほんとにスツとしたわよ！」

その場の空気が更にシンとする。

姉はさすがに自分が言った言葉に気がついたようで、一瞬顔色が変わり立ったまま硬直している。

・・・だあれが殺したクックロビン！私は下につつまきながら、頭  
の中で節をつけて歌った。

・・・それは自分と言いました。

第62話

乱入？（前書き）

乱入終了

## 第62話 乱入？

私はおどおど娘と自分に言い聞かせながら馬鹿な姉を笑うのをこらえた。

私はチラとだけ姉を見て立ち尽くす姉にのみわかるようなかすかな侮蔑を姉に与えた。

案の定、姉は激高した。

しかし言葉にはならないみたいで、ワナワナと震えている。

「碧、あんた・・・」

そう声をかけようとした女子の言葉を遮って、私は小さな声で姉に声をかけた。

彼氏の大輔君に促されて・・・うん、彼氏まだ何が何だかって顔してる、ほんとニブっ！姉は腰を下ろした。

それにかぶせるように、

「隣のお兄ちゃんの事はいいの・・・あの時は私はまだ中二だったし、お姉ちゃんがあの人を好きだったのも知らずに、嬉しい、嬉しいって言ってた私が悪いの。」

「お姉ちゃんの方が同じ高校生だったんだもん、ごめんなさい、お姉ちゃんの好きな・・・」

そう言った時姉がそれを遮った。

そりゃそう、私が好き好き言う度に、さすがにその言葉に純朴彼氏が反応するから。

姉はまたまたあせるあまり自分で落ちた穴を、更に掘り進めてくれる。

「あんな男、好きなわけないでしょ！あんたが大事そうにしてるから、ちよっかいかけただけよ。」

「ホント信じられない高校でも生徒会長してて、凄いいてるのに、よりによってまだお子様のあんたが心から好きだって、バカみたい、あほでしょ。」

おっ、今の一言で男子どもを敵にしましたね。

まあ、厭きたし、もう一度言うけど厭きたし、そろそろ退散しよう。

そう、あなたはこれでなくっちゃね、ふふっ、周り中敵にしてるの、気付いてる？

バイバイお姉ちゃん。

私はうつむいてごめんなさい、と一言言って静かに席を立った。

「あなたが謝る必要ないじゃん。」

そう口々に言う女子や肯く男子に、頭をふるふると振り、頭を下げ

て、ここから大事ね！おもわず、つと言った感じで駆け出した。

呼びとめようとする声を無視しながらかけていると、他のテーブルからも同情の眼差しが……。

ありゃ、やりすぎた？ま、いいか、私は何にも耳に入りませんよお、つてノリで店内を出る時、気が付いたとばかりに立ち止まってレジ横にいる店員さん達に迷惑をかけました、と頭を下げ、万札を何枚か出して支払いをお願いして、おつりは皆さんでわけて下さい、とかよわい声を出して店を出た。

店内を出て、そういえばソウ達はどうしたんだ？とは思ったが私はそのまま駅前タクシーを拾って家に帰った。

あの子の店内はさぞや面白い事になっているだろう。

私ってちょっとばかり、ちょっとだけ、性格曲がっているかも、とその日思った。

でもね、あんな怯え交じりの弱い目をした碧はいらない、碧はああじゃなくっちゃ。

そして、ソウも念願なトラブルに巻き込まれ、嬉々として更にその種火にもならない騒ぎを大きく燃やしていたのを知るのは次の日だった。



## 第63話 ソウの楽しみ

俺は時間差で透子のいる居酒屋に行くため、駅から少し離れたゲムセンターなどのあるコインパーキングに車を止めさせた。

「おい、行くぞ！」

そう言ってコロと最近名のついたこいつの足を蹴飛ばす。

こいつはあいかわらず無表情に俺のあとをついてくる。

今回こいつの片割れには留守番をさせる。

一応こいつの見た目はたっぱのある極上の外人女だ。

居酒屋に行くにはちょうどいいカップルの出来上がりだ。

まあ、居酒屋に行くには俺達の雰囲気相場違感もぬぐえないが、これ以上着るもののランクは落とせねえしな、俺的には許せねえ。

しかし、透子は面白い、あれだけ過保護に大事に愛されてるのに、それを歯牙にもかけないし、それを当たり前として貪欲に呑みこみ続ける。

かといって、それに慣れ溺れ、バカな女に成り果てる事も、ましてやあの規格外達という潰れる事もねえ。

青井さんはじめ高津さん達が抱えた闇まで綺麗に呑みこんで、その

ままの透子として変わらずに傍にいる。

ただ変わらずにそこにいて、魂に寄り添う存在なんて、どんだけ規格外なんだか。

それも度外れに狂った男達のその狂いまで呑みこんで平気にいる。

どっちが化けもんだっつーの。

チツ、あまり余計な事は考えねえほうがいいな、くわばらくわばら、だぜ。

透子はまだ16?17か?そんなもんだ。

この先を思いやり背筋が震える。

今回ほど自分のおつむを褒めてやりたい気分はないな。

伊達に天才と呼ばれたわけじゃない自分の、まあ、人としては終わってるかもしれないが、人間自体を冷めた只の種としか認識していない自分だからこそ、透子に狂わないでいられるんだろう。

おう、天才バンザイだとも。

絶対あのカリスマたちのレベルに達してない、そんな理由じゃないはずだ、そんなはずない。

大事だからな、ここ、俺のアイデンティティに関わることだから。

そんな事をつらつら思いながら、駐車場の出口の脇に差し掛かった

ところで、声をかけられた。

俺と同じくらいの若い奴らと、もう少し若い奴らが8人くらいたむろってて、その中の座り込んでいる奴が立ち上がりながら、俺に声をかけてきたらしい。

「よお、兄さん。いい女連れてるじゃねえか。」

チラッと駐車場の方に顔をやり、

「それに運転手つきの外車かよ、なあ兄さん、仲良くしようぜ！」  
そう言うてにやにや笑うこいつらに、俺の方こそ笑いたくなった。

俺が見るにこいつらバックに絶対の自信を持っているか、それともただの女連れのお坊ちゃんならと甘く見たか。

何せ残念な俺の今日のかっこうは、居酒屋でひと暴れするにも一応透子の知り合いな訳で、それなりの、けれどいきすぎない程度の金のかかったまともな装いだからだ。

うん、どこぞのボンボンにみえるかもしれない、俺ってみてくれはいいからな。

本業の方のいつもの俺の恰好ならこいつら近寄りもしなかっただろうがな、ヤバくて。

透子あんがとよ、早速こりゃあお遊びの時間はじまりだ。

俺はいいとこの坊ちゃんらしく眉をひそめて見せて、

「何だ、君たちは！失礼だろう！」

と言ってやった。

どうよ、これ。

自分でも腹抱えて笑いそうになった。

君たち・・・とか、おいおい、だぜ。

こいつらは 勿論鼻で笑いやがった。

まあ、俺もこんなセリフはく奴がいたら、同じように笑っただろう。

俺は自分の言ったセリフに笑いをこらえるのに必死で、それをどう勘違いしたのか、こいつらは更に図にのってきた。

「まったく羨ましいなあ、いい服きていい車、それにいい女、ちっ  
ーとは俺達にも分けてくれよ。なあ。」

そう言いながらあつという間に囲んでくる。

そうして囲いこみながら奥の暗がりの方へと誘導していく。

ほお。慣れたもんだな。

俺が大人しくついていくものだから、誘導された奥につくとその中の一人が調子に乗って俺のスーツの内ポケットを探りだす。

俺の名刺入れを見つけたその男が、リーダーと思しき男の手にそれを渡す、ついでとばかりに財布もだ。

今日は透子の知り合いに途中から乱入するつもりで、表の名刺、聖桜学園理事長という肩書きのを持ってきていた。

奴らの一人が、

「俺、これ知ってるぜ。」

と得意そうに言う。

「超金持ちお嬢様校だぜ、山校の女がうちの親の年収が月の授業料にちけえなんざ、ふざけてやがるって騒いでやがった。」

それを聞いた奴らの目の色が変わったのがわかった。

そりゃそうだ、俺だってこんな金づるいたら舌舐めずりする。

教育者〓表で騒がれてはまずい〓特上の力モ、だ。

そこからは定番のオンパレード、脅すは脅すは。

ただ、俺に言わせれば甘すぎて全然だがな。

それからどこぞに電話をかけて、・・・ビンゴ！だ。

遊べそうな予感に俺こそ大喜びだ。

女を盾にとって、俺の車にまで案内させ、これまた静かな印象の運

転手のコロを脅して、乗れるだけ自分たちも乗り込み本格的に脅す場所まで移動。

まあ、定番だな。

俺は触られたらシロが男だとばれちまうんで、わざと怯えた風にシロをみせ、守るように自分の腕に囲い込む。

肝心のシロをこいつらに見せたらアウトだからな。

こんな目を、こんな冷えた目をした女がいるかってーの、感情のない顔も。

男達の目は後が楽しみだと言って、下卑た笑みをみせているが、それには同感だ、俺も同じだ、楽しみでしようがない。

しかしなんで俺がこいつを抱きかかえにやらん。

むかつくから後で制裁だな、あゝ、透子にはわからねえようにやらねえと。

こいつらに名前までつけてかわいいがる透子の気持ち俺にはわからねえ。

こいつらは本物の化け物だ、人間じゃねえ、しっかりと誰が主人か時々力で教えてやらねえと、こっちがアブねえ。

そういえば、こいつらの後釜も鍛えちゃいるが、なかなか育たねえで、途中で壊れちまう。

まったく、投資した分ぐらい返してから死ねや。

こいつらみてえな地獄の底も底で生まれ、その中で育たなきゃあ、こついう化け物が作れねえというのなら・・・、仕方ない、この俺が人工的にその地獄を作るしかないよな。

俺はいきなりひらめいたその考えに機嫌が良くなった。

やっぱり人間遊ばなきゃ、いい考えも浮かばない、って良い例だな。

俺はすぐさま今紛争地域で、なおかつある程度の治安ができつつある、国や地域を幾つか思い浮かべた。

人工的な地獄を作るはずのその場所を素早くシュミレートする。

やっとこさ、新しい仕事だぜ。

俺には子守りは無理だ、第一透子に子守りがいるかってーの、全くあの人たち透子に関してはダメだな。

早速、高津さんに進言して、黒幡の方にも話しを青井さんから持っていくてもらおう。

いやあ、黒幡とのつながり、世界中の闇に生きる人間が喉から手が出るほどのそれを持つてる幸運を、俺はしみじみ考えた。

うん、前言撤回、透子さままだ、な。

今日の帰りは、何か透子の好きな差し入れでも買って帰るか。

・・・いや、やめておこう、あの人たち、透子に関しては大人げなくなるからな、キジも鳴かすばうたれまい、だ。

俺がいろいろ考えているうちに、ちゃらい倉庫群に車はついた。

倉庫の中に怯えた様子を作り入る。

俺だけが・・・コロ・シロと名前がついたこいつらはシラ〜としてるんで俺だけが頑張ってるわけだ、いろいろと。

やっぱこいつらまとめて、ち〜つとばかり制裁だな、決まりだ。

そして、そんな俺達に声がかかった。

「こんな所まできてもらって悪いが、少し話しをしよう。なあ学園長さんよお。」

そう言ってこちらを見る壮年の男にもその連れたちの男にも見覚えがないし、俺の頭に入ってる自称ヤクザ年鑑にも記憶がない顔だ。

・・・あまりの雑魚ぶりにがっかりだ。

まあ、いい。

場末のやくざにも上がっているはずだし、そしてまたその上があるはずだ。

傍系だろうがどうだろうが、どっかで大きいところにカスリぐらいするだろう。



たとえ名刺一枚でも大きいとこの持つていてくれよ、頼むぞ、おい、相手になりもしねえ。

からんできたのはそっちから。

なあ、覚悟はいいか、俺のいちゃもんはスゲーぜ、これぞプロって奴をみせてやるよ。

まあ、お前達を知ることはないがな。

せいぜい汚く泣き喚き消えていけ、お前達からのつながる線はどんな欠片だろうと、きちんと繋げて綺麗に潰していつてやる。

今まで暇こいてた分、せいぜい楽しませてくれよ。

俺がとりつくるのをやめ本来の表情を見せて獰猛に笑うと、相手の男達の顔色がどんどん悪くなっていく。

おいおい、失礼な、それでもお前達やくざの端くれか？

いろいろなくすのはこれからだぜ、ついでに命もだがな、何度も言うがこれからだ。

俺は犬ころどもの足を蹴って人間どもを襲わせた。

たった二人にざまあねえ。

さて、直の上の組織を教えてもらえば、もう用もない。

俺の合図で表情もかえず、悲鳴を上げる男どもを素手で殺しつくす

こいつらは、顔色一つ変わることなく最後の一人まで綺麗に殺しくすこいつらは、どこをどう見てもペットなんて甘いもんじゃないだろが。

けれどあの透子の事だ、目の前でこれらを見ても、困った子達だとあきれただけで、服が汚れたじゃないかと着替えの心配をするだけだろつと俺にはわかった。

透子はあれで16か7だぜ、修羅場をくぐって経験したならそれなりにわかる対応も、蝶よ花よとカリスマたちに溺愛されて、それだ。

俺が透子を怖がるのもわかるってもんだろ。

俺はこいつらの上の組織に、どういちゃもんをつけようか楽しく考えていて、透子が一人でタクシーに乗って帰ったのも、例の居酒屋の事もすっかりきっぱり忘れていた。

気分よく家に帰ると高津さん自らの呼び出しで、ちよつどいい、俺の人工地獄計画の相談を早速しようと、いそいそと事務所に出かけた俺は、透子を一人で帰した、とのきつい叱責と、背中にやきごてをあてられるという軽い制裁を受け、その痕がちよつど逆さ十字に似ているので、ちよつどいいとばかりに、それに彫りを加えてちよつど逆さ十字に見えるようにした。

何せ人工の地獄を作り出そうというこの俺だ、ちよつどいい目印だろ？

その俺の犬っころどもへの軽〜い制裁は追って図るべし。

地獄の紋章をきちんとその体に刻んでやったさ。

俺の制裁はきちんと細かいことが自慢だ。

## 第64話 暇を持て余す人々

今日は夏季休暇前の最後の登校日。

黒ユリメンバー達は殆ど海外脱出らしい。

最近私の怒りの沸点がどこらへんか学習してきた彼女達は、遊びに誘う事は問題ないと思っっているらしく、口々に私と一緒に連れて行くことと一生懸命誘ってくる。

やれマカオだ香港だ、プラハにはちょっと触手が動いたが、かまびすしい事半端ない。

ま、可愛いから許すけど。

けれどね、委員長がしらっくと持ってきた「第一回黒ユリ会臨時総会」なるものを、なぜフランスなんぞで開く？

意味不明、却下！

私を恨みがましく見つめる執行部の面々に、文句の一つや二つ言ってやるうと思つて顔を見れば、遊んで、と顔にかいてある。

確かに最近平穩過ぎて私の女王様モードも他校交流会以来発動していない。

そうか、とでも思つて私が遊んでやるなんて甘いよ。

あなた達も暇なのね。

けれど私的にいろいろ大変なんだ、今は。

私は彼女たちのお願いをことごとく却下し学院を出た。

別棟にある理事棟をちらつと眺めながら迎えの車に乗る。

ソウは私が居酒屋にいる時、どこぞのチンピラにケンカをうられたらしいけど、きちつとその場でやつつけちゃったにも関わらず、暇だからって理由でやつつけたそこを傘下にしていたという理由で1つの団体をわずか二日でつぶした。

凄いやね、数百人程度じゃ相手にならないのね。

そしてね、その団体の会長が心酔していた、という理由でそこそこ大きな黒竜会という組織にただ今喧嘩を売っている最中。

なんとというか、相手にしてみたらいい迷惑よね。

その黒竜会というのは戦前からある昔かたぎの残るテキヤを主にする団体らしいの。

ほら、お祭りやなんかの出店してるあの人達の元締めみたいなの、黒竜会って。

私はあの独特の雰囲気が好き。

それにガンちゃんに私に教えてくれながら黒竜会はいいと珍しく褒めていた。

……けれどソウを止める気はないらしい、黙認。

そのところがよくわかんないよね、あそこの世界。

まったくソウときたら、あの日帰って早々ガンちゃんにひどく怒られた癖にさ、私を一人にしたって。

それなのにはた目で見てもわかるくらいにルンルンだったのは、遊び相手見つけたからなのね。

だけれも止めないんだもの、ソウってば結構やることえげつないから、それに私ってば、お祭りの夜店好きだし、これって私の出番だよな。

いつもコロとシロけとばすソウにちょっと頭に來てたしね、人が楽しそうなのって嫌だし、私けっこう暇なのにな。

邪魔するしかないよね、これは。

ソウ私と遊ぼう。

私はこれからの予定に口元が笑うのを意識して引き締めた。

## 第65話 暇を持て余す人々？

私は携帯で都内であるお祭りの情報を集めた。

さすが7月ともなれば、結構の数になる。

その中でも比較的小さめのお祭りを探す。

あった、あった、小さな神社の境内で行われる町内会主催のお祭り。

下町の方だけど、黒竜会の本部も下町にある。

これだ、これ！

明日から土曜、日曜と行われるそれに出かけなきゃ、だ。

まあ、私が動くまでに潰れるようだったら、それはそれでしょうがないって事で。

ソウは何やら黒竜会の資金凍結からはじまって、今は幾つかある事務所の追立てをやっているらしい。

ここまでわずか3日、さすがソウというべきか・・・。

向こうは訳が分からない内に、あれよあれよと防戦一方らしいけど、ガンちゃんも褒めるだけあって、事務所の追立てをくらっても、ソウの手下たちの挑発には、まだ手を出してこない。

きちんとしつけられてるワンコは好きよ。

私は明日の祭りに行くために、ちょうどいい、遊べ遊べとうるさい可愛い黒ユリメンバーズでも誘って行こうと思った。

これぞ一石二鳥、黒ユリ達と出かける事で、保護者ズからの難癖はなし。

黒ユリ達という時は護衛もいつもより離れているしね。

私はいそいそと委員長にメールを送った。

もちろん委員長からは速攻了解の返事。

みんなで浴衣で一番近い駅に午後6時集合だ。

私は本来の目的などとうに忘れ去り、久方ぶりのお祭りの夜店に気持ちがあわわわわしていた。

私ที่บ้านにつくなり、お祭りの事をとても楽しそうに話すので、自然それぞれのお祭り話して盛り上がった。

ユキちゃんとレイちゃんがお祭りを知らないというので、今度一緒にみんなでかけようという話しになった。

俺にまかせろ、というガンちゃん達夜組みを見送って、就寝前のエステをのんびり受けていると、ヨウちゃんが私の耳元に囁いた。

「何を企んでる？」と、楽しそうに。



私は乙女は人に言えない秘密でできてるのよ、と答えて顔を横にしてヨウちゃんを見た。

ヨウちゃんは本当に嬉しそうに私を優しくとろけるような目でみていた。

本当にそう、秘密って大事よね。

## 第66話 暇を持って余す人々？

車で約束の駅まで向かう。

緊急用の携帯やら何やら持たせられ、保護者ズに見送られながら1時間ほどでその駅についた。

駅前の道路には、ずら〜と高級車の列ができていた。

ロータリーなどないからね、この駅。

私の車が駅の表面につく間に、それらの車から色とりどりの浴衣を着た黒ユリの子たちが降りてきて、私が車から降りる時には、皆がそろって出迎えてくれた。

レースがこれでもかといった浴衣やビーズがついてキラキラしいもの、ドレスのようなものまで勢ぞろい。

うん、かわいい年頃の子たちの着る浴衣ってそれだけでなくも可愛いのに、より一層かわいいよね。

私は大満足で40人ほどの大集団で徒歩で7分ほどの出店をめざして、小鳥のようにさんざめいて歩いていく彼女らを目を細めて見つめる。

委員長も心なし浮かれているようで、自然みな足取りも軽やかだ。

うん、善きかな、善きかな。

出店が出ている境内についても、私達は注目を浴びていた。

皆初めてだという子が多いので、心から子供のように楽しんでいた。人数が多いせいで地元の子からのナンパの心配もない。

出店のお兄さんやお姉さん、おじさんからおばさんにいたるまで、私達が行くところ、行くところほくほく顔だ。

そりゃそう、華やかな上に、これでもかっくらいいお金を使っているからね。

かくいう私もそれなりに使うが、委員長、君は、君たちは金魚すくいに幾ら使うつもりだい？

一人一人万札幾つか消えてるよね、下手すぎる……。

その癖「お嬢ちゃん好きなの一匹持っていきな。」

というおじさんのありがたい言葉に、きっ！と金魚を見すえて、

「ありがとうございます。でもこれは自分で成し遂げとついでますので心遣いなく。」

とお嬢のプライドをいかになく発揮するのも間違っていると思う。

入れ替わり立ち代わり金魚すくいの出店から動かない彼女達を、小さな子供が馬鹿じゃないか、って目をして颯爽と金魚を掬ってその場を去るのを何度みた事か。

一度休憩を取って何か食べようという私の言葉に、はっと我に返った面々は、私に頭を下げながら、

「本当ですよ、透子様。」

「約束してください、透子様。」

などと口々に上品に私に話しかけるものだから、私がいらぬ注目をヤジウマや出店の皆さんから浴びてしまった。

金魚すくいの反対側にあるやきそばやお好み焼きを大量に注文しておいた私はエライと思う。

皆口々にテーブルは？御手拭は？などと大騒ぎする中、私がこつこつ所では、立ったまま食べるものです、と言うと、それはそれで目をキラキラさせておすおすと口にする。

私はできる子だから、勿論量は半分で注文している。

料金は変わらないよ、というおばさんに、にっこりと皆は初めて食べるので、これで問題がないと話しをすると、へえ、っと変な所で感心された。

私達が境内の片隅でラムネを飲みながら、屋台の味を堪能している間に、その話しが伝わったようで、余計出店の人達の視線が暖かいものになった。

それからの射的の出店での会話には、その出店のお兄さんに呆れられたりしたけどね。

「クレイ射撃はお父様とアメリカで・・・」とか、そんな会話のオンパレードを聞いてお兄さんが、

「そんな御大層なもんじゃねえよ。ほら的に向かってポンだ！それだけだ。」

と丁寧に教えてくれたりした。

戦利品の小さなわけのわからないぬいぐるみを嬉しそうに抱きしめる彼女らを見て、私も嬉しくなった。

本来の目的をわすれるくらいには。

第67話 暇を持て余す人々？

その夜はキラキラと輝いていた。

何のかけひきもなく、ただの女の子の集団と化して、ひたすら楽しんだ。

地元の小学生のワルガキどもと、その後金魚すくいに戻ってアドバイスと言つ名の罵詈雑言を笑いながら浴びながら。

「しょーがねえな、姉ちゃんたち、何やってんだよ！」

「まったくよお、どんくさっ！」

「浴衣濡れてんぞ、ばっかじゃねえの。」

などと子供達に言われながら、その言葉の裏のない暖かさに、お嬢たちも私も余計この時間が楽しくなっていた。

委員長が、

「うるさいわねえ、待ってなさいって！今から華麗にすくう所を見せてあげます。」

といい、決意もあらたにすくおうとするのに、他のメンバーも、

「頑張ってくださいませね。」

「井上様なら今度こそ見事に……。」

など口々に声をかけて応援する。

それに悪がきどもが、

「え、それ言うの何回目だよ、姉ちゃん。」

「無理っぽいよなあ。」

とか茶々をいれてくる。

それにまたメンバーズが丁々発止と返す、という感じで、その時間が笑い声と共に過ぎていく。

何と言うのだろうか？その光景を見ながら、私は初めてこの黒ユリの子たちを愛しいと感じた。

私は保護者ズ以外信じようとも思わず、必要ないものと心から思っていた。

私の中には未だ怯えた子供があ那时的ままうずくまっていたらしい。

傷つくのは2度と嫌だと目と耳をふさぎながら。

それを今改めて突然その幸せの中、認識した。

黒ユリが出来た時、これは私の手足となるもの、として自分のテリトリーの一角に据え置いた。

黒ユリメンバーが何人いるのかも関心はなかったし、自分の庭先で

遊ぶもの、それでしかなかった。

委員長でさえも。

自分が壊れている自覚はある。

けれど、けれど今のこの時、瞬時に思ったのは、私も彼女達もまだまだ子供でいる時間があっていいはずだという突然の思い。

私達は自由だという幸福感。

なんて簡単な事を忘れていたんだろう。

権謀術策の世界で生きていくし、邪魔なものや立ちはだかる者は絶  
対潰す。

それは変わらない。

それと同時にこうしてまだ子供という世界に遊ぶことも許されてい  
いはず。

だって「ともだち」がここにいた。

怯えて縮こまっていた小さな子供の私が胸の奥の奥で、やっと顔を  
上げ外を見た瞬間は、委員長が金魚をもう一步の所ですくい網から  
のがし、メンバーズの落胆の声と子供たちのはやし立てる声、夜店  
のお兄さん達の大爆笑の中だった。



私はあの時ヨウちゃんに拾われ、そしてガンちゃん達に優しく守られ起き上がった。

私の前にはだかるものは、私を傷つけるかもしれないものは2度と嫌だと、私はそれらを潰してきた。

それらはしよせん怯える子供の目をつぶったままのものだった。

うちの保護者ズは私のそれを知っていて、だからこそより過剰に私を守ってくれていたんだとわかった。

けれど、今やっと怯えたままの私は目をあけた。

そして私の今守るべきものをしっかりと見る。

黒ユリの子ら、コロにシロ。

生物学上、私の血をひきもつじき生まれてくるだろう子供達。

充分だ。

私は笑った。

私はより強くしたたかに、そして残酷に笑った。

## 第68話 暇を持て余す人々？

楽しい夜店の時間は過ぎ、駅で皆と別れてから、私はまた夜店のあ  
る境内まで戻った。

ギブ&テイク。

楽しい時間を貰ったのだから、そのお返しをするために。

今回は護衛を後ろにはりつけて。

今夜の護衛は黒幡担当。

一応勢力的にはフリー？なはず。

私が金魚すくいのお兄さんの所に戻るまで、誰が見ても普通でない  
護衛を5人ほどつけて歩く私を、さっきまで閉店間際までいた女の  
子の一人だと見知った面々はぎよっとして、こちらを見ていた。

射的のお兄さんが、私の護衛と睨み合っているのを見て、このお兄  
さんは黒竜会の人なんだとわかった。

私はへらへらと笑いかけ、手を振る。

私の護衛への態度で綺麗に黒竜会の人間か、バイトでやっている人  
間かすぐにわかった。

射的のお兄さんはそんな私の態度に戸惑いをみせていた。

そりゃそう、さつきまではしゃいでいた女の子が戻ってきた。

普通じゃない人間を引き連れて。

私は金魚すくいのお兄さんの所まで戻ると、私のあとを警戒してついてきた、射的のお兄さんとくじ引きのおじさん、りんご雨のおじさんやらにチラツと目をやり、それからいぶかしげに私を見る金魚すくいのお兄さんに声をかけた。

「さつきはありがとう。みんなすんごく楽しんだみたい。」

「魔法の時間は終わったけど、新しい呪文をあげたいの。黒竜会の代表の方に、ね。」

そう言っただけ微笑んだ。

それと同時に私に怒声をあげた射的のお兄さんが、黒幡の護衛の一人にあつという間に組み伏せられ、それを見た他の人たちがかかっていこうとして、やはりあつという間にやられてしまった。

わあ、黒幡半端ないな、強い、一人で充分なのね。

特に私の護衛役はバカロン自ら任命したみたいで、私への忠誠凄いいからね。

怒鳴る一言めで潰されちゃったねえ。

私は倒れたお兄さんの傍に屈んで、

「私、門限破ってまできたのよ、仲良くしてくれなきゃあ、ね。」

そう言っつて携帯を差出し、そこにストラップとしてつりさげてある、黒幡のバッジやガンちゃんのとこのバッジを見せた。

バッジつて名称じゃないらしいけど、金に張り付けられたガンちゃんとのこの当仁会のと、黒に金の紋章の黒幡のを見せたら、さーっと顔色を変えた。

良かった、どちらかは知っているらしい。

これで話しやすいはず、と思いきや、あたりは異様に静かになった。りんご飴のおじさんが、「なんてこった・・・なんてこった。」と涙を流しはじめたのを筆頭に、あちこちから絶望の声が上がる。

そこに震える女の人の声が聞こえた。

「うちのところもそうだけど、」

そういうおばさんを止めようとする、たぶん旦那さんらしい人の静止の声を振り切つて、

「なんだい、なんだい、うちは父親の代から黒竜会には世話になつてんだ、怖くて声も出せねえあんたはすっこんでな！」

そう言っつて、すつと強く私を見る。

そして今度は強いしつかりした声で私に声をかけてきた。

「私らは黒竜会と持ちず持たれずで律儀に長年商売をしてきたんだ

！何が何だかうちらには今回の騒動はわからないけど、この人らほど信用できる仲間はいないんだ！」

「どこのお嬢様だかわかんないが、この人たちに何かするってーなら、うちらが相手だよ！」

そう言うとおばさんズから「そうだ！そうだ！」の大合唱。

けれど背後の護衛の本気の怒りの気配に、ほら、私イノチみたいなところあるからね、本物の殺気にあてられ尻つぼみ状態。

そんな所に強い覇気のある声がかかった。

「何を騒いでる？」と。

「カシラ」との声に、やっと話しが進むと私はため息をついた。

私の時間は貴重なんだと、言っただけでいいよね。

第69話 邂逅？

そこで振り返って私が見たのは、数人のその筋の人間を引き連れた40前後の短髪のいかにもがっしりとした体が、そのダークスーツからも見て取れる「カシラ」と呼ばれた男だった。

「何を騒いでる。俺は自重しろ、と言ったはずだ。」

そう言って再び声を発する。

その重低音の声を、その感情の見えない眼差しの奥を見つめながら、透子は言った。

「あら、私つてば自己紹介した方がいいのかしら？」

無邪気に首をかしげながら、ガンちゃんが褒めた組織の上にいるらしい男を見つめながら言う。

「私が新しい魔法の言葉を教えてあげる、って言ってるのに、この人達ったら意味不明？なのよね。愚かだわ。がっかり。」

「ねえ、あなたはどうかしら？」

私はそこに這いつくばる人間に冷たい目を向けながら、その男を再び見つめる。

小娘の言葉に背後に控える人間が殺気立ち、それに呼応して私の護衛達が臨戦態勢に入る。

私を何の感情もない目で見つめる男が、背後の人間を叱りつけた。

バカじゃないみたいね。

「お話しできそうね。」

私を見つめた男は、

「事務所でいいか？」

とたった一言言って踵を返す。

私はそれに従い歩き出す。

優雅にお手本のような会釈をその場で立ち尽くす人間達にかえして。

その事務所は私が黒ユリの子たちと待ち合わせた駅の傍にある、こじんまりとしたビルの3階にあった。

その事務所の中は別段変わったところなど見受けられず、私がその男に続いて入っていくと、どこにいたのやらワラワラと大勢の人間がやってきて、こちらに物騒な眼光を向けてくる。

私はソファアに腰かけながら、出されたアイスティーをチラツと眺めてため息をついた。

時計を見ると既に夜の11時近い。

あゝあ、やっちゃったかな・・・まあ、とりあえずこちらをかたづけなきゃあ、ね。

男は黒竜会若頭藤堂と名乗った。

だから私も斉木だと名乗って、私の後ろにぴたっとついた黒幡の護衛を目で制する。

この目の前に座る藤堂という男が口を開いた。

「この日本では表立って行動はしていない黒幡の人間をはりつかせたお嬢さん、斉木さんと言ったか？ いったい何のお遊びだ、と聞いていいか？」

その瞬間、護衛の黒幡らしき背後の気配が凶暴に膨れ上がる、思わず私の背筋も震えるくらいのそれ。

ふうん、さすがね、でも私がないところで、よろしく、だわ。

だから男って・・・またまたため息をつきたくなるのを我慢して、

「お礼がしたい、そう思っただけよ。今日の夜店とっても楽しかったの。本当にそれだけ。」

「え〜と、取引先の銀行口座の消失、幾つかの焦げ付きに、あ、あところいった事務所が3つだけ？ 追いだしくったのよね。」



私の言葉にこの場の雰囲気は更に暗く重いものになる。

ここでかわいくテヘッってやってやるうかしらと、私の小さな堪忍袋がそろそろきれそうな気配に、現実逃避してみる。

ざわつく人間に私は初めて冷えた目を向けた。

自分でもわかるくらい冷えた目だ。

心の中で天秤にかける。

もうよくない？ここまで一応やろうとしたのに、この雰囲気は冷めるわ、もうソウの好き放題させちゃおうかしら。

それとも私がソウより先に潰しちゃう？それもありかも。

私からどんどんあの魔法の時間の効力がなくなりかけていた。

それを察したのか背後の護衛が膝まづいて携帯を私に渡してきた。

私はそれを見る。

そこに声が降ってきた。

「あそぼ」

と。

一斉に振り返った先には、ザングリ頭の中学生くらいの伸びきったTシャツとその目が印象的なひよろひよろと鎖骨も浮いてみえる男

か女かもわからない子供がいた。

## 第70話 邂逅？

「お嬢！」

幾つもの声がそこかしこであがる。

女の子か、私は藤堂という男が初めて感情をあらわにするのを見た。

「守りのイサムはどうしたんです？さあ、もう遅い、上にお戻りください。」

一転して温度の感じる声をかける藤堂と、この部屋に詰めかけた私たちの心配そうな、困った顔を見る。

そろそろ厭きて、もういいか、と思っていた私はこの新たな登場人物に目を奪われ続けていた。

デレツと伸びたTシャツにGパンをはいた痩せこけた女の子の、痩せすぎているせいで、ぎよろりとバランス悪く大きく見える瞳は、今までみたどれよりも深い色を湛え、引き込まれるように私は思わず息を止めて見つめていた。

「あそぼ」

またその子が声をかけてきた。

そして浴衣をきた私の傍まで、本当に漂うようにきて、私の隣に腰を下ろすと、私の頬をさわりながら、ニコニコする。

どつやら私と遊ぼう、と言ってくれているらしい。

周囲のこれまた困った、という思わず出た反応に、いつもの私ならほら、素直じゃないから、何か一番嫌がりそうなりアクションを返すのだけれど、私はその子の顔を見つめ、ただ、見つめ続けた。

そしてその手に握られたままだったらしいキャンディーを私にくれようと、私に向かって、

「ん、」

と言って手を差し出してきた。

私の頬がべたつく気がしたのは気のせいじゃないらしい。

誰もどうしたらいいか動きが硬直する中で、私はまばたきを一度すると、ゆっくりり口をあけた。

彼女の目を見つめながら。

自分の手に握られた半ば溶けたそれと私の顔を見ながら、彼女はニコニコと笑う。

けれど手を開いたまま、その後のリアクションをしてくれないので、私は彼女の手の高さまで自分の顔を下げると、軽く歯と舌でその半ば溶けかけた物体と化したキャンディーをチロツと舐め、小さく歯ではさみ、彼女の目をみながら、それをゆっくりと口に入れた。

まるで教会で祝福を受けるように。

自分が今どんな蕩けた顔をしているか、それは私の目の前の藤堂の、私を見る色のついた眼差しを見なくてもわかる。

私の心からの充足は、この少女によって瞬間になされた。

何というのだろうか？魂の片割れ？半身？今なら私はその言葉の荒唐無稽さを信じることができる。

私は壊れた自分のいびつさは認めていたけれど、それと共にある「飢え」が少なくとも初めて満たされた、そう感じた。

ソウが・・・もしこのままここで遊ぼうとするなら、ソウこそ私の真の敵になる。

私は彼女の手の平の甘さも舌でそっと堪能し、その甘さにうっとりとな溺れながら、

「待っててね、私も遊びたいわ。ちょっとだけ我慢して、ね？」

自分でも半端ないと思われるどこまでも甘い声をだしながら、私は急いで電話をかけた。

そして電話口に出たソウに、今までで一番だろう極北の声で話しかけた。

「ソウ、貴女の望みは路地裏だったわね。今でも変わらない？」

と。

私は電話口で何かをわめくソウに、冷たい笑いを返す。

「すぐにいらっしやい。すぐによ。」

ニコニコと私とあそぶのを待つ半身の頭を優しく撫でながら、私は凍りついた声でソウと電話を続けた。

## 第71話 邂逅？

事務所の中は異様な気配に包まれていた。

私は全身でもって「邪魔をするな！」と雄弁に語っていたし、あのあとソウとの電話を切って遊び始めようとした私の行動を、

「ふざけんな！」といい、阻止しようとした愚かな人間に、

「私が誰かは知らなくていいわ。その必要はないから。」

「けれど、チイちゃんと遊ぶのは邪魔しちゃダメよ。・・・わかるわよね。」

そう言った。

私が言うと同時に護衛の人間が待つてましたとばかりに、ありえない強さで彼らを次々に沈めていく。

目の前にいる藤堂とその腹心らしき数人を除いて。

そして、その藤堂は少しもそれらに頓着することなく、じつと動かず、私を、お嬢と呼ばれるチイちゃんを静かに見ている。

そこらにあるチラシで作った紙風船で私はチイちゃんと遊ぶ。

床には倒れたまま動かない人間や痛みにくめく人間、その他に聞こえるのは私とチイちゃんの笑い声。

「わたしチイちゃん」

そう言って遊び始めたチイちゃんと私の時間は、30分ほどでかけたソウとその部下達によって破られた。

藤堂たちはこの度の一連の騒動の主、高津組若頭の一人息子のソウを知っているらしく、血相をかえて腹心らしき男達が身構える。

それを藤堂は目で制して座るよう促す。

それにすかさず私が声をかける。

「ダメよ、ソウ。お・す・わ・り。」

ソウは私の目を見てためらうことなく、そのまま私の遊ぶ足元まできて、きちんと正座をする。

それにコロやシロも嬉しそうに続けて私の足元に座り込む。

さすがにソウの部下達はできる人間が揃っていて、当たり前のように傍に控えている。

私は可愛いコロとシロの頭をよしよしと撫でてあげて、チイちゃんを手招きして、その手を取り、

「コロとシロ、可愛いでしょ？」

と一緒に頭を撫でさせて、コロとシロに言っ。



「チィちゃんよ、これからはコロとシロはチィちゃんも守るの、わかった？」

そう言い聞かせる。

ソウにも「わかった？」と声をかける。

ソウは日ごろの彼を知るものなら、ありえない口調と態度で、

「ごめん、てば。悪かったってば。なあ、機嫌直して。俺まだ壊したりない。まだまだ足りない。」

「路地裏はまだ許して、ね？」

そう言って私の好きなワンコに擬態する。

あんたは少なくとも人間の範疇じゃ入りきれないし、それは知っているよ。

「ここはダメ、他で遊んで。」

私が言うとブンブン首を縦にふる。

ソウの腹心の片岡さんが、どうやら既に和解の方向で話しを持っていつているようだ。

一方的に手を出したのは高津組のソウだけど、力のある方が正しい世界、どうやら黒竜会が詫び状と慰謝料を払うらしい。

それで万事おしまい。

私はコロとシロを相手に遊び始めたチィちゃんを見つめながら、私を本来の眼差しで、こんな目をする人間なんているもんですか、っていう無機質な目で計ろうとするソウに、わざともう一度目を合わせ、にこつと笑ってやった。

「ソウ、誰が足を崩していいって言ったの？」と。

「え、透子ってば、サドっ娘なの！俺のながい足じゃ正座なんてこれ以上無理。」

「片岡、ヘルプ、俺透子にいじめられ中。」

「俺、親にも厳しくされた事ないのに。」

そい言いながら口をとがらせて、さきほど一瞬お互いの中にあつた緊張を忘れるかのように、いつものような会話を重ねる。

けれどお互いの眼差しは、それを裏切っていたけど。

そうよ、ソウお互い不可侵でいきましょう。

あなたは自分以外のものをいそいそ壊して今まで通り。

私もかわいいコロとシロの飼い主であるあなたと今まで通り。

何も問題ないわね。

話しが終わりそうな片岡さんに、

「片岡さん、全て元通りよ。元の状態で、ね。」  
そう声をかける。

黒竜会は以前どおりの状態に戻る。

ただし詫び状と慰謝料を高津組に収める。

さあ、私もチイちゃんと遊ぼう。

コロとシロはもう帰るのかしら？

マナーにしている携帯は数秒もおかずなり続けている。

私の保護者ズの過保護ぶりに、帰ったらお説教だな、と覚悟を決める。

レイちゃんのが一番きついんだよな、ごまかされてくれないから。

ユキちゃんはあまりにも悲しそうに話されるから、私は最初から「めんなさい」と素直に言える。

キョーちゃんは、むっつり黙り込んで2日くらいは、そのブリザードに耐えねばならない。

ガンちゃんとテイちゃんは、軽く笑いながら話しをしてくる。

言ってくる事は監禁するかとか、いろいろえげつないけど。

ヨウちゃんは、何故か甘さが倍増して私を構い倒してくる。

ただ、今回はもう日付も変わろうとする時間だし、私の変化を何一つ見落とさない彼らに、チィちゃんチィちゃんの存在はどうなるのだろう？

私自身もわからないのに。

## 第72話 変化

案の定、日付が変わってから帰った私に、うちの保護者ズのお小言やら泣きが入って1週間ほどは外出禁止令が出た。

私はその間に課題やらレポートやらをきっちりと終わらせ、謹慎？期間が晴れて開けた今朝、そういえばここ数日コロとシロの姿をみていないのに気づいた。

「ねえ、コロとシロは？」

朝食をとりながら、せつせと私の朝食を運ぶユキちゃんに聞いた。

レイちゃんは出張で昨日から中国に行つてて半月は帰つてこない。

ヨウちゃんも何故か一緒に付いていって、ちょっと中国で仕事をしてくると言っていた。

どうせろくでもない事だから私は詳しく話を聞きもしなかったけど。

キヨーちゃんは、何やら面倒がおきたらしく昨夜電話がかかり、いつもより早く迎えがきて出て行つたきり帰ってきてない。

ガンちゃんとテイちゃんは朝方帰ってきて、それもお酒を二人で飲んできたらしく珍しく出来上がっていたから、当分起きそうにない。

全く2人して体がでかいくせに、私のベッドに乱入してきて、「透子、透子お〜」と酒臭い息でからんでくるのは、マジやめてほしい。

結局、2人して私のベッドに寝てる。

私は早朝におこされた腹いせにエアコンを切ってやるうかと思っただけど、あの二人の汗にまみれたベッドや部屋にこもる匂いを想像した所で、それをあきらめた。

うん、人間冷静に、だよね、危ないところだった、自分を自分で褒めてやりたい。

だから、私はユキちゃん特製ジューズのおかわりを頼みながら、唯一私の傍にいるユキちゃんに、そういえばここ何日かコロとシロを見ていないんだけど、と聞いたんだ。

そして、コロとシロが日本にいないと知った。

馬鹿ソウの新しい仕事先の海外に行ったと。

ソウ！ソウ！ソウ！私言ったよね。

「チィちゃんを守って」と、コロとシロに。

……言ったよね。

わかってる、コロとシロを置いて新しい仕事先、それも海外になんていけないって。

ロシアと違って、すぐに帰れない、って事も理解した。

危険がある場所に護衛は必要だと頭ではわかってても、心が認めない、

認めたくない。

ソウ・・・、あんたってやっぱり嫌い。

自分以外壊すものとしか認識しないあんたから、いつかコロとシロを取り返してやる。

私ってば、なんてボケてたんだろう。

ぼやぼやしてるうちに大事なものが手の平から抜けていつちゃった。

コロとシロを手に入れる事は簡単だったのに、平和ボケしててミスした。

私は珍しく落ち込んで、朝食後もぼんやりしてた。

ユキちゃんはいそいそと例の病院に出かけて行った。

私は知らないふりしてるけど、みんな保護者ズはそれぞれ生まれてくる赤ちゃんの準備をきっちりとしている。

黒ユリメンバーズの殆どは海外バカンス真っ最中だし、私とさえばこの間、自分がパスポート持ってないの初めて認識したばかり。

ただ今申請中なの。

これもうちの保護者の意見が真っ二つで、何とか反対組にお願いして申請したばかり。

何だろう？何か理由もなく自分が不安定なのがわかる。

こんな時はチイちゃんに会いたいな。

黒竜会に電話して遊ばせてもらおう、この1週間外出してないし勉強まみれだったから、情緒不安定なんだ。

そうだ、善は急げ！っていうじゃない。

私は携帯を手にしてアドレスを探した。

その時、携帯がなった。

もう一つの放置して忘れていた携帯、お姉ちゃんの彼氏専用だった奴。

ソファアの隅に放り出されたままの携帯を意識もせずに取り出した。

「ああ、良かった。すぐに病院これる？しっかり聞いてくれる？お父さん危篤なんだ。」

父が危篤と聞いて私が思ったのは、そうかレイちゃんの携帯が連絡先だったもんな、って事と、どうやらこの純朴王子はまだ姉の碧とつきあってるんだ、っていうことの2つだった。



### 第73話 変化？

そのまま病院に行くと言話を切って、私は着替えを出すとシャワーを浴びてタクシーに乗った。

ちょっと病院まで出かけてくると一斉にメール送信して。

まあ、この間の事もあるから連絡だけはこまめにね。

そして私が病院についた時には既に父は亡くなっていた。

母は私を見ると泣きながら、さつきよ、まだ温かいの、そう言ってもまた泣き崩れた。

姉はと言えば私を見るときつく見すえてきたが、何も言わず、やはり静かに涙を流していた。

純朴王子こと、大輔さんはそこにはいなかった。

結局それから2時間程は手続きや葬儀の手配などで大わらわになって、父の遺体が葬儀社に引き取られて病院を出るまで、感傷なんて浸る暇はなかった。

まあ、私にそんなものはなかったけど、姉と大輔さんが父に付き添って葬祭場に向かい、一度準備の為家に向かう母に同行した私は、初めて会話らしい会話を車の中でした。

その後葬祭場で合流をしたけど、私は誰が見てもしらけていたし、姉はいつでも何かに身構えてるようだとんがっていたし、身内が亡

くなつたというには、まあ、残念な雰囲気ではあつた。

父には、母と大輔さんが何やら思い出を語り合つてしみじみしていたので、それで納得してもらおう。

結局、葬儀と告別式は家族でのみ行い、父は激務の公務員であつたけれど、自分のやつれた姿を同僚には見せたくらしく、きちんと家族葬で、と遺言があつたらしい。

それなので、私の保護者ズにも遠慮してもらつた。

当日、香典はそれぞれ分厚いのを代理が持ってきたけどね。

私は三日ほど実家にいたけれど、かつての自分の部屋は驚くほどの違和感だつた。

そして、本当にこの家に何の感慨もない事を改めてわかつた私は、二度とこの家にはかかわらないと決めた。

たつた一つ、今回父が亡くなって良かった事がある。

私の不安定さを、きまぐれさを保護者ズがいつもより大目にみてくれている事だ。

私は黒竜会の例の事務所に毎日チィちゃんと遊ぶため出かけるようになった。

チイちゃんの調べはついているらしく、護衛を連れて遊びに行く分は何も言われない。

事務所の上のチイちゃんの部屋で初めは数日は護衛も一緒にいたのだけれど、ガンちゃんところの護衛の番の時、その護衛を嫌がりチイちゃんが大泣きしたので、それ以来、保護者ズの許可を取ってドアの外に護衛はいるようになった。

チイちゃんの部屋は窓がない、本当に面白いくらい開放感とは無縁の部屋だ。

それでも薄暗いのに、昼間でも間接照明しかつけないそこは、まるで暗い海の底みたいな不思議な空間で、私はそこで心からまどろむ事ができた。

チイちゃんにくっついたり、あやとりしたり、紙飛行機飛ばしたり家に帰るギリギリまでそこでゴロゴロ過ごす。

そして、隠された裏口からお客がひっそりとやってきたりもする。

最初に現れた時はさすがに驚いたけど。

心配がないのは、心臓に悪いよ。

「チイちゃんは人魚姫だから、あなたは海の王様ね、私は悪い魔女。」

そう言えばあなたは口元だけでうっそりと笑い私の髪にキスを何度も落とす。

今日もやってきた海の王様は、やがて遊び疲れて眠りだしたチイチ  
やんをそっとベッドに移す。

そうして部屋で心地よくまどろむ私に沢山のキスをしてくる。

百のキスを、千のキスを。

あきることなく、いつまでも。

クスクス笑う私に、本当に許される時間の限り。

## 第74話 変化？

私は私の部屋をチィちゃんの所のように改装してもらった。

もちろん、大きな窓は深い蒼の厚手のビロードのカーテンで覆い、一流のデザイナーに改装してもらったので、あのチィちゃんのところの独特のあそこにしかない雰囲気は出せないけれど、深海をイメージしたそれなりの部屋になった。

かすかに海の独特の音が部屋には流れ、ベッドも低いものにかえられ、私はムフムフと機嫌がいい。

けれど、やっぱり気をつけなきゃいけないのが、うちの保護者ズ。

ユキちゃんは、少し私がチィちゃんに依存しすぎじゃないかと最近気にはじめていて、内心ヒヤヒヤになって昨日は大人しく家に入った。

ところが昨日いつも通りにいった例の病院で、妊婦の一人の胎児の心音が弱くなった気がすると言うので、今日からしばらく病院に泊まり込むことになるらしい。

やった！でかしたぞ、その胎児。

これで思い切りチィちゃんのとこに入り浸れるじゃん。

卵子提供者としてそれだけは褒めてやろう。

私はひんばんに中国からくるレイちゃんとヨウちゃんのメールにも

数秒おかず返信し、結局あの夜のトラブルで怪我をして、何と足の骨を折ってユキちゃんの正規の病院に入院してるキョーちゃんにもメールを優しく送って、今度また病院に顔を出すと連絡した。

キョーちゃんの個室、半端ない人工比率だから、あまり行きたくないの、きつといかないな。

ガンちゃんとテイちゃん対策は、2人が仕事に出かける前に帰ればいいし、よし！今日も出かける準備はオツケイ。

「準備」そうこれは保護者ズに余計な手を出されないためには大事な事。

いつから、と聞かれてもわからないけど、私の中で保護者ズ的位置が傾きかけている。

何が、どうして？私にも答えられない、それ。

一番敏感なレイちゃんとヨウちゃんがいないでくれて良かった、本当に心からそう思う。

彼らならば、私自身も知らない内に、そんな私を軌道修正してしまうだろうから。

今の感情は確かに大事で誰にも干渉されたくないから。

結局今日から私のお守はガンちゃんとテイちゃんの二人。

この2人は一番私に甘い。

どう言えばわからない、かすかな違和感を感じてはいるだろうけど、私が笑っていればいいか、と様子を見ている感じた。

私は保護者ズが一番なのは確かに変わらないけど、もう一つ心に別の大切な存在が初めて出来た。

自分でも嫌になるくらい甘く蕩けるそれがどういうものかは自分でもわからない。

けれど、今は一番そこにいたいと私の心が訴えてる。

## 第75話 変化？

チィちゃんの部屋は全ての守りが徹底している。

電波と言う電波が通じないのは当たり前だしね。

防音もそう、もっと小さい時のチィちゃんが大声を出したり、あばれたりしたから。

そりゃあ、商売が商売だから、まっとうなテキヤ、香具師です、だけじゃすまない所もあるだろうし。

その事務所でどこからか子供の悲鳴とか聞こえたもんなら、ねえ・  
・・。

今その部屋のベッドを背にして、チィちゃんと私でしりとりしている。

しりとりにもならない言葉の掛け合いだけど、一つチィちゃんが答える度に、小さめのサンドイッチをその口に入れる。

食の細いチィちゃんに私は親鳥のように暇さえあればこうして食べさせている。

遊びながらだと食べてくれるから。

チィちゃんの部屋は窓がないかわりに、いつも徹底的に掃除されていて、いつ誰がしているのか不思議なくらいだ。



チイちゃんがその口をかわいくモグモグ動かしながら、ふと嬉しそうに私の背後の方を見る。

ギシツと音をたててベッドが軽く沈む音が聞こえた。

海の王様のおなりらしい。

さすがだ、チイちゃん、良くわかるねえ。

私はチイちゃんの頭を、凄いな、と褒めながら撫でようとしたけど、ベッドの上から私を当たり前のように海の王様が抱きしめ邪魔をした。

私の耳元に低くかすれた声と共に吐息がかかる。

「何故昨日こなかった？」

私は答えない。

「・・・狂いそうだ。」

それにも答えない。

海の王様は私をきつく背後から抱きしめ、私の髪をすくいあげると、私のうなじに舌をはわせてきた。

ぞくぞくとするその感覚に目を閉じると、そのまま私を抱えあげ、人ベッドの上に転がり込む。

両手は狂おしそうに私の全身をまさぐり、確かめ、私に体をこれで

もかと強く押しつけ、その体を激しくからめながら、狂おしい程の口づけの嵐が襲ってくる。

私の体はもみくちやにされ、ベッドも激しくきしむ。

やがて激しい絶叫を私に口づけすることで押さえながら少しずつ王様は落ち着いていく。

激しくベッドが動いたことで、一緒にベッドに登ってきたチィちゃんは大喜びだ。

汗をひどくかいたので、ついでに3人でシャワーを浴びる事にした。

私はチィちゃんを優しく洗ってあげた。

シャワーを浴びた後、そのままベッドでチィちゃんはお昼寝タイムに入ってしまった。

つまらなくて、私が携帯のメールを確認していると、その携帯を取り上げて、海の王様は、表面から私に覆いかぶさり「抱きたい」そうかすれた声をだし、私をその大きな体で抱きしめてくる。

「無理、ね。」

私はその髪に指をからませながら事実を素直に言う。

うちの保護者ズとはそういう関係じゃないけど、それが不思議なほど濃厚な関係ではある。

まだ男を知らない、と不思議なほどには。

海の王様もそれを感じている。

その狂おしいほどの熱い嫉妬をギチギチと歯を噛みしめ、唇を噛み破るその血で持って私に伝えてくる。

その噛み破った唇の血を私は舌先でなだめるように舐めてやり、その頭を私の胸に抱えて慰めてあげる。

うちの保護者ズの時つ、その天秤がどういうものなのかはわからないけど、この海の王様の存在で、それがどう転ぶのか、私にはわからない。

海の王様は好きだ。

だって愛しい人魚姫と同じ匂いがするから。

私はまた私の体にすぎるように覆いかぶさっている海の王様と、この静かな深海の底でまどろむ。

その乱れた前髪を優しく指ですくいながら。

私は少なくとも、無事ではすまない、そういう可能性があるうちは、海の王様も人魚姫も隠しておきたい。

いまはまだ一線はこえられない、こえるつもりもない。

初めはそれでいい、そういつて私に千のキスをおくってきた海の王様。

けれど、目を追うごとに、その目で、その存在全てで、私が欲しいといつてくる。

困った王様だ。

熱く舌をからめあいながら、お互いを見つめ会う。

もうじき中国から帰ってくる2人を思い出す。

私の思考がそれたことを敏感に感じ取り、それが気に入らないとばかりに、海の王様の口づけはより深く、その両手はより細やかに体をはっていく。

この海の奥底のこの時間を守るために、私は何をすべきだろう、と考える。

「俺の、俺のものだ。」

私を切なさうに見る海の王様の固い髪を抱きしめて、そのまま私の胸に顔を埋めむしゃぶりつく王様に甘い声をあげてしまう。

私の愛しい愛しい人魚姫の眠る姿を見つめながら、この混沌を手放したくないと思う自分がある。

## 第76話 久しぶりの女子会

夏季休暇も残り半分を切って、まるで計ったかのように、委員長から連絡が入った。

結構黒ユリメンバーズもちらほら帰国している事だし、会いたい、と。

理由は、学園祭についても何でも用意すると、さすがに付き合いが長い分、開き直ってる。

私はケラケラ笑いながら了解の返事をした。

私の笑い声に驚いた委員長が「何があったの?」と聞いてくる。

委員長にでさえこれじゃあ、おととい中国から一足先に帰国したレイちゃんにもバレバレだったかな、とちらっと思った。

レイちゃんはまだ何も言ってこないけど、自分では意識して普段通りを心掛けたけど、無理だったかな、ちょっと心配になる。

私は朝いつてらっしゃいと送り出したレイちゃんを思い浮かべた。

別段、変わってないように見えるけどなあ、人外だしなあ。

まあ、今さらだけど。

どこか突然開き直った自分に気が付いた。

逃げられないの知ってるからね、うちの保護者ズが本気を出したら。

久しぶりに、かわいいメンバーズと気分転換に遊ぶのもいいかも。

あの海の奥底の部屋には当分いかないつもりでいる。

それを思うとギリギリと重いしこりが、自分の体に積み重なっていくけど。

守る術を考えつかない内はいけない。

心は今も囚われ続けている、あの昏い海底に。

私はガンちゃん和テイちゃんに、「委員長達と遊んでくる〜。」と気持ちよく眠るる彼らを嫌がらせのように叩き起こしてやった。

ふざけてうなりながら私にからんできたガンちゃんに、頭をぐしゃぐしゃにされて、いつものように頬にキスされた時、何故か急に泣きたくなった。

寝起きの鈍さ倍増のガンちゃん和助かった。

私はガンちゃんの腰に手を回し、「夕飯もいらな〜い。」と、ごまかすように笑った。

ガンちゃんは、おい、といぶかしげに声をかけてきたけど、忙しいの〜と言ってごまかして家をあわてて出た。

今日の護衛はヨウちゃんとこの人たち。

本当にできる人たちなので、離れていても問題なし。

委員長達と出かけたりするときは目立たないようについてきてくれる。

待ち合わせのカフェは貸切りにしてあった。

さすが委員長、そつがない、というか最初から断るなんて選択肢なかったのね。

総勢10名ほどで貸し切るなんて、おバカだけど。

もう一度言わせてもらっけど、相変わらずおバカのどこ健在ね。

ゆっくりと3時間ほどランチを楽しみながら、お互い報告ともつかぬ報告を語り合ったり、誰それが婚約が決まりそうだとかの噂話を聞きながら、最後のデザートまでキャツキャツと楽しんだ。

店を出て、買い物に行く時、それぞれ車に分乗したんだけど、私は委員長と一緒に車で、その委員長が、

「とても透子様、綺麗に、うっん、元々綺麗なんですけど、何かとても雰囲気私でもくらくらきちゃうくらいで。何か、もう自分でも何ていったらいいか混乱してるんですけど、うっとり、そう一緒にいても同性の私でもうっとりしますわ。」

そうわけのわからない事を内緒話をするように言い出した。

私はそれを聞いて笑いながら、男はもう手一杯だから、女の子は若干名空いてるよ、と委員長の耳元でからかってやった。

たちまち真っ赤な顔をした委員長を眺めながら、私はまたあの海の奥底の部屋を思い出した。

人魚姫は無事だろうか？

悪い魔女の私が守らなくても、あの海の王様や沢山の臣下がいるあの場所で、何がおころうというのか、私はそつと窓の外を眺めながら、自分はこんなに厄介な人間だっただろうか？と一人ため息をついた。



## 第77話 きしみ

あの海の底の楽園にいかなくなって既に5日たった。

レイちゃんが、あのレイちゃんが気がつかないわけがない。

私の変化を、私の今を。

そして、・・・ヨウちゃんが今日の昼に中国から帰ってくる。

何かおこる、とは限らないかもしれないけれど、慎重に考える。

私の自意識過剰ならまだいい。

けれど、私は思い起こす。

あの生まれて初めて手に入れた大事なものは、私の全てだと思ったあの人は、簡単に姉に壊された。

もし、私のチイちゃんがいなくなったら、海の王様も一緒に、あのおとぎ話のように泡となって消えてしまったら？

ダメだ、絶対無理。

うちの保護者ズが時々言うあの戯れが、もし本気だとしたら、考えるまでもない。

「俺たち以外いらないだろう？邪魔なものは潰す、だろ？簡単なことだ。」

ありえない、ありえない。

今さら人魚姫も海の王様もなかったことにはできない。

ホラ、こんなにも彼らの事を考えると、体が震える。

「黒ユリ様？黒ユリ様ったら、本当にもう、・・・聞いていらっしやるの？」

私はその声に瞬きをして、現状を把握する。

そう、私はこの所、毎日朝から夕方まで黒ユリメンバーズと遊んでいる。

今日は、お洋服を大勢でわいわい買い物中。

私はいらなから買わないけど、今はできるだけ外に出るようになっている。

あーでもない、こーでもないと、服選びに3時間たつ。

乙女のパワー侮りがたし、ついでにおこづかいもバツチりどころか、カードが乱舞するのだから、その買い物の一つ一つが長いなんの。

予算関係ないのは、なまじ疲れると知ったよ。

それでも彼女たちの声を、楽しそうな声を聞いているのは、ほっとする。

私の世界は、広がりつつある。

買い物が終わわり、夕方近く解散の前に、最近はやりのスイーツで一休みした。

夏休みも終盤にさしかかったし、学園の行事の摺合せもしなきゃね、という話しをして、本日は解散になった。

皆をも見送りながら、一瞬あの海の底の匂いが鼻をかすめた気がした。

私は一度しっかりと目をつぶり、その気配を望みを遮断する。

そして、のんびり家に帰った私を待ってたのはヨウちゃんだった。

お帰りなさい、と抱きつくと、ヨウちゃんが同じように抱きしめ返してくれる。

今夜はお出かけしようかと、後ろにいるレイちゃん達を見ながら私に笑いかけてきた。

勿論、病院に入院中のキョーちゃんも外泊許可を貰っているから、迎えに行くよ、と優しく笑う。

久々の全員参加だ、と笑うヨウちゃん。

けれど、その目は、私が初めて目にする黒幡の男の目をして、冷たく底なし沼のように昏いものだった。

## 第78話 覚悟

病院にキョーちゃんを迎えに行つて、その足で高級料亭に車に分乗して向かった。

出がけのあの緊張は何だったのかというくらい拍子抜けした。

この料亭はガンちゃんとレイちゃんの御用達の店の一つ。

私も何度も連れてきてもらっている。

はじめ心の底で、少し身構えていた私も、どんどん食事が進むにつれて、普段通りの皆の様子に緊張も自然と緩んできた。

ヨウちゃんのおみやげ話しに、それぞれ合いの手をうったり、チャチャをいれたりして2時間ほど久しぶりの全員集合の食事を楽しんだ。

料亭を出る時、久しぶりに皆で料亭の庭を散策しようとなつて、庭口においてある専用の履物に取り替えて、ゆっくり池を中心に散策した。

学校の話しや、今日の昼の買い物話しをしながら、庭を歩いていく。

皆が歩くのがゆっくりなので、私は振り返りながら、皆に話しを続けていた。

皆も嬉しそうに相好を崩して私の話しを聞いてくれる。

久しぶりの穏やかな時間。

ゆったりと優しくここだけがまるで違うように時間が流れていく。

くすくすと私は笑いながら、そのまま皆の方を向いて背中を表面にして歩きながら、「遅いよ。」と声をかけた時、私は誰かにぶつかってしまった。

私達以外この庭に人間がいるとは思わなかった私は驚いた。

ピクンと場が緊張する。

見れば皆の視線が冷たい硬質のものに変わっていく。

けれど私はぶつかったであろう背中的人物の方を向くことができなかった。

その背中でぶつかった相手もまた動かない。

そしてまた、私の視線の先にいる私の保護者ズも立ち止まったまま動かない。

私は今あの懐かしい愛おしい海の底のあの匂いを体全体感じていた。背後にるのが私の海の王様だと気配でわかってしまった。

何故、なぜここにいるの？

海の底からあがった海の王様は、陸では無力なはず。

ああ、私の人魚姫はどこにいるの？陸は危険がいつぱいだわ。

私もまた振り返ることもできず、かといって動くこともできず硬直していた。

なんて事だろう、油断しちゃダメだったのに。

私は初めて私の視線の先にいる保護者ズを睨みつけていた。

いつも私を守り慈しんでくれる彼らに初めて敵意を向けた。

そんな私を保護者ズは傷ついたように見ていた。

第79話 覚悟？（前書き）

風邪の熱で書くのは無理かなと思いましたが、頓服薬は偉大なり、  
で、更新しちゃいました。

## 第79話 覚悟？

私が保護者ズをにらんでいると、背後の気配が動いた。

そしてその背後の人間を見る保護者ズの視線は、苛烈なくせにそこに感情を乗せない静かなものだった。

すつと綺麗な動作で私の前に出た海の王様は、

「お招きありがとうございます。」

「高津組長には何度かおめもじさせて頂きましたが他の皆さまにはお初におめにかかります。黒竜会若頭藤堂始と申します。」

そういつて綺麗に腰を折った。

海の王様が人間の男になった瞬間だった。

ガンちゃんがクイツとあごをしゃくるようにして、離れに向かって歩き出す。

同時にヨウちゃんが私に向かって手を差し出し、他のみんなはただ黙って私を静かにまた、あの感情の読めない目でみつめる。

私は手を差し出すヨウちゃんに、

「なんで！どついう事？なんで！」

と、叫んでその手を取る事を拒否した。



あの海での奇跡のような出会いから、ヨウちゃんの手を拒む日がくるなんて、自分でも思わなかった。

そんな自分に驚いたが、もう一人の自分は戸惑いつつもそれを納得していた。

海の王様でなくなった男が、陸の人間として初めてずっと私の傍に寄り私の手を握る。

私を見るその目は、昏い海の底のあの部屋と変わらぬひどく甘苦しいものだった。

そして私の目の前にいる力ある男達を前にして、それは徐々に強い色を浴びていく。

それは甘い未来を思い浮かべた男の眼差しではなく、私はこの陸に上がった男が既に自らを捨てる覚悟をしているのを知った。

うちの保護者ズがきつく見つめる中、私はぎゅっと藤堂という男の手を力を込めて握った。

ああ、チイちゃんと私と陸に上がった男と3人、海の泡になって消えていく。

私は全身が震える恍惚を覚えた。

チイちゃんも藤堂も決して私を裏切らない。

あの海の底の部屋で確信した真実。

チィちゃんを守ってきた海の王様は、感情というものを知らない壊れた男だった。

壊れた純真さで、黒竜会を支え、守り、長患いの組長にかわり、その使命のみで生きてきた。

その壊れている心を知らない男に悪い魔女は魔法をかけた。

チィちゃんがいて、私がいればいいのだと。

女というのはただ抱くだけの存在だと思っていた男に、唯一の守るべき聖域の隣にいつのまにか存在し、やがて初めて心をかき乱す私という女の感覚に戸惑う男に、私は甘い魔法の言葉を囁いた。

何度も、何度も、遊び半分本気半分で。

初めはからかうつもりだったから。

会うたびに、おろおろする男がおもしろかった。

でかい図体をして、ひどく威圧感があり雰囲気も男気にあふれていて、それなのに、私に落ちていくのが目に見えてわかった。

そして、壊れた心を抱えた男はあつという間に私に溺れていった。

けれど、ここで思わぬ事が起こった。

私が改めて壊した男は、私の大事なチィちゃんと同じ匂いがするようになった。

今度は私が溺れていった。

あの海の底の部屋は私達だけの秘密の部屋にかわっていった。

うちの保護者ズが初めて表情を一変させてギリツと唇をかみしめた。

私は私の握る手を見つめる保護者ズに声をかけた。

「何のために彼を呼んだかは知らないけど、私ぬきはやめてよね、と、というか散歩の後はおいしいアイスが食べたいわ。前に食べたゆずがいいわ。」

そう言うてにつこりとほほ笑んだ。

背を向ける保護者ズの後について、私は私を全身で欲する男の頬をつないでない方の指でなでた。

その指にすかさず喰いついて舌でなめまわす男に嫣然と微笑みながら。

第80話 かわいい子には(前書き)

保護者ズ視点です。

## 第80話 かわいい子には

「おい、詐欺師よお。」

俺は禎夫を下からにらみあげて、いまいましげに聞いた。

「ああ！ナンだ！」

「ほんとにほんとだな！」

「何がだよ！うぜえ！」

そう切り替えしてくる禎夫も機嫌がすこぶる悪い。

最近の透子の様子がおかしいことは、この俺でもわかる。

俺の機嫌など、あつたのか？と言うほどに、俺の行く先々ではこの所、血をみない日はない。

昨日も組の事務所に行ってから、土木企業の接待とやらで高級クラブに繰り出したが、俺のあまりの低気圧ぶりに、プロ中のプロである女達でさえ、誰一人この俺に近寄れなかった。

昨日はまだましな方だ。

空気を読まないで近寄るものは、一般人であろうが女、子供であるうが、今の俺は容赦しねえ。

俺はまた禎夫に聞いた。

「いつまでだ、いつまで我慢すりゃあいい。」

中国にいる陽二には、一応報告済みだ。

透子の様子が変だ、と。

「おい、ホントに知らんぷりしてる方がいいんだな！」

「うっせーな、そつとしくもんなんだ！」

これまたひどく物騒なものを漂わせて禎夫が答える。

「反抗期か？」

「反抗期だ!!」

陽二は礼司と上海で落ち合った。

宮廷料理の小皿の数々や、舞台では華麗なショーが客の目を楽しませていたが、2人はそれに見向きもせず、酒のみを次々と飲んでいた。

「透子のガードの報告を分析しても、やはり最近の事だ。」

「例の居酒屋か？」

そう言う礼司に陽二は首を振る。

「いいや、俺が透子の事を見誤る訳はないし、お前も、だろ？」

「祭りか？」

そう聞く礼司に陽二は沈黙で答える。

あの後しばらくしてから、透子の目の奥に揺らぐ何か熱いものを、危うい色気のようなものを感じるようになった。

じつとこれまでのように透子をみつめているべきだったのかも知れない。

黒幡関係に復活したのは、もっともつと透子を守る力をより以上つける為だった。

あの豈までもいかなくても、あの豈に我々だけで拮抗する力が欲しかった。

2度と連れ去られる愚はおこさない。

それなのに……。

今透子に現在進行形で起きているのに、この中国にいなければならない皮肉。

噛みしめた唇からは血の味がした。

礼司はと言えば、暗い冷えた目をしながら、何事か考え事をしていく。

「泣かすつもりか？」

そう聞けば、

「離すつもりも、俺達以外に欠片1つ渡すつもりはない。」

そう何を当たり前の事を聞く、とばかりにこちらを見る。

「お前こそ、俺達の中で一番恐ろしい男のくせに。」

そう言っつて俺を見る。

俺は酒のおかわりを頼みながら、

「幸弘がいれば大丈夫だと思ったんだが、あれはあれで透子バカのあまり、病院につめっぱなしだ。」

「で、高津達は何だと言ってきた？」

礼司が俺に問いかけてきたのは、さっき日本にいる高津に透子の様子を聞いた件だろう。

「……………反抗期、だそうだ。」

「……………。」



俺達は、申し合わせたように脱力したまま天を仰いで酒を一気にあ  
おった。

幸弘は黒幡総帥の作った最新鋭の設備の整った自分たちだけの産院  
で、心音のエコーを目で追いながら、愛しい透子の事を考えていた。

1人弱い心音におちいった胎児は、何の問題もなく普通の心音に戻  
りつつある。

妊婦には無理をしないよう眠らせている。

愚かな代理母は産後のきらびやかな未来の為、スタイルの維持を考  
え、無理な運動を隠れて行っていた。

それがどれだけ胎児の負担になるか考えもしないで。

悪いがこの女は、大事な透子の子供を危険にさらした罰を無事に出  
産を終えたら、その身で償ってもらおう。

出産後の死亡など仕方がないだろう？それだけの罪を犯したのだか  
ら。

初乳は大事だから、せいぜい出産後3日ほどは余裕をみないとな。

私は透子が初めてのめりこんだ千尋のカルテを手に取る。

ふん、母親と弟と共に一緒に殺されておけば良かったものを。

幼児退行のどこに透子のはまる理由がある？

わからない。

透子の欲しがるものなら、何でも与えよう。

けれど人間だけは認めない、許さない、耐えられない。

どうやってこの身の程知らずな子供には退場願おうか？

方法は幾らでもある。

ほら、一度激しい蕁麻疹を起こして点滴をしている。

アナフェラシーショックもいいかもな。

楽には逝かせてやるものか。

今、透子の傍にいられぬこの怒りの分も込めて、私は幾つものやり方をひたすら考えていた。

病院のベッドで恭弥は昏く物思いにふけていた。

透子が嫌がるのを知り、この個室にはなんびとも見舞いにくるな、  
と言っている。

それでも野心にあふれる男や女が高い見舞い品を抱えてやってくる。

その末路は宍倉や高津さんの所の若頭補佐に今回めでたくなったソ  
ウさんの所に売られて終わる。

未成年でなければ、本当に簡単だ。

密やかに行われるそれは気付かれることなく、ほらまた自分だけは  
と思うバカが、俺に近づこうとやってくる。

今も俺の側近に優しく腕をとられ図々しくもこの病室に入ってきた、  
かけだしのモデルだという女が二人、あれよあれと言つ間に連れ  
出される。

こいつらのこづかいにさせているので、そりゃあ扱いは優しいだろ  
うさ。

何を勘違いしたのか、嬉しそうに腕をとられていく女には目もくれ  
ず、俺は透子の事を考えた。

鷹津さんは、あんなにも人を人とは思わぬ外道中の外道なのに、透  
子にだけは……へたれになる。

俺の病室にやってきて、透子の事をどうすれば、と聞く俺に、マジで、

「あれは初めての反抗期だ！」

と堂々とのたまう高津さんに俺は初めて憐みを覚えた。

まさかの反抗期発言に、それを陽二さんにも報告したと聞いて、俺はどう説明したらいいか、いや説明していいのか悩んだ。

俺の部下の報告や病室に来てすぐ帰ってしまう透子の様子は、誰が見ても恋する女の姿だろう。

初めては初めてでも、恋の方だ、そう言いたいが我慢する。

この足では、それを知った高津さんをおさえる自信がない。

俺もまた抑える気がない。

全ては陽二さんの帰国を待つしかない。

透子、悪いが俺達はその恋を全力で潰す。

お前が2度とそんな気がおきないように、徹底的に、な。

陽二さんが今度作る3回目の鳥かごは、きっと堅牢な檻になるだろう。

透子次第では、本物の檻になるかもしれない。

けれどもお前が泣いても喚いても俺達がお前を離すわけがない。

最悪、鎖につないでも。

第81話

運命の女(前書き)

藤堂視点

## 第81話 運命の女

俺は黒竜会を、姐さんと跡継ぎのぼんをひき逃げという手段で殺されて、まるで急速に萎んでしまったかのように、具合を悪くし病院に入院したままの組長にかわり、きつちりと守ってきた。

もともと俺は乳児院から孤児院へと、そういう風に育った男だから、親子や夫婦などの情愛などわからない、想像ですらつかない。

俺がものごころがついて言葉より先に覚えたのは、人に殴られないようにする為には、殴られる前に人を殴るのが一番だということだし、そのあとも他のガキよりも、どうやって先に食い物を手に入れるか、上にたつか、それだけで生きてきた。

中学に上がるころには、俺にはどちらかの親に外国の血が入ってるらしく、体は人一倍でかくなってケンカでも最早負けることはなくなっていた。

そして、体がでかくなるのと同時にあきれた事だが、15になってその施設を出るまで、その施設長の妻だった女に、いいように体を使われた。

その施設長も、施設の子供達に見境なく手を出していたから、似たもの夫婦だったんだろう。

そうして、やがてそこで働く女どもは、皆隠れて俺の体にまたがってきた。

俺にはどうでもいい事だった、勝手に俺の上にまたがって腰を振る。

本当にくだらねえ奴らだった。

十五で施設をおんだされたのも、バカげた理由だ。

施設長の妻とパートの女ども、若い職員、皆勝手に俺に乗っかってきた癖に、どいつもこいつも自分だけは特別だと思っていたらしく、ある日鉢合わせて、「どっか〜ん」てな具合で一氣にヒステリー女どもの大喧嘩がはじまった。

バカらしい、俺はちょうど黒竜会で小さな仕事を貰いはじめたばかりだったが、ちょうどいいとばかりに施設をおんだ。

あつちの祭り、こつちの祭りといろんな所を飛び回り、ちょこちょことしたトラブルがあれば、俺はそれを力で排除していった。

施設でやっていたことと何も変わりがない。

そのうち組長の目にとまり、少しずつ仕事も重要なものにならなくなっていった。

その間、相変わらず女が途切れる事はなかったが、どの女も俺にはただのマネキン、そんな感じだった。

名前も顔も全然覚えなかったし、どれがどの女なのかも判断などつかなかった。

いればいたでいいし、いなくても困るものではなかった。

あれらは勝手に湧いて出る、俺の中では「もの」ですらなかった。



だから組の歴史上初の二十代で若頭をまかされてすぐの、あの凶行で、組長が一気に心身ともに崩れていったのを、愚かだとは思いますが、気の毒だと周りの人間が口にすることを理解できなかった。

それほど妻とぼんが欲しいなら、また作ればいいだけだ、そうしか感じなかった。

お嬢がやっとな歩けるようになって、父親である組長の見舞いに行くのだと言われた時、俺は淡々と自分の仕事として、組長の病院まで連れて行った。

まだ小学低学年のお嬢は、共に車に吹き飛ばされた自分のみが生き残った事に情緒が不安定だった。

皆がおいたわしい、とか言って腫物を扱うかのようにお嬢に対していたが、俺に言わせれば、嫌なら死ぬ！ただそれだけだった。

病室に見舞いに言ったお嬢の望みは何だったのか、2人きりの家族になった父に涙を浮かべて抱きついたお嬢に、全てに疲れ切っていた組長は、

「何故、お前だけが。」

そう呟いた。

そして今のお嬢ができた。

ひどいものだった。

わめく、泣く、暴れる。

食事をとれば吐くし、お嬢大事な古株である組員でさえ、ひくありさまだった。

俺はただ、その壊れたお嬢をまだ生きてるのか、と見ていた。

しばらくしてから組長から、自分の不用意な一言で愛しい娘の最後の何かをひいてしまったと後悔に泣く組長から、お嬢の事を頼まれた俺は「仕事」として、つきつきりでお嬢の面倒を見た。

誰もが俺を「さすがだ」と、さすが組長の後をこうして守り抜く男だ、と褒めた。

俺は只「やれ」と言われたから「やる」だけなのに。

そして、おもしろい子供だ、といっただったか気が付いた。

なぜなら、このお嬢の様子をただひたすら見てわかったのは「絶妙」だという事実だった。

……壊れ具合が。

俺は初めてお嬢が気に入った瞬間だった。

半分以上は本当にわけがわからなくなったり、幼児に戻るの事実だ。

けれど残りは……。

だから俺は頃合いを見てお嬢に声をかけた。

「俺は稼業に戻る、そのままこうして生きていきたかったら俺の邪魔はするな。」と。

「そうすれば、まあ、俺が生きているうちは、このままと許す。」と。

それに答えはなかったが、その後、周りも医者も「落ち着いた。」というのだから、それが答えだろう。

そうして、落ち着いたかにみえるこの黒竜会を、あのわけのわからぬ三日間が襲いかかってきた。

後手、後手と回るしかなく、さすがの俺もたった三日で黒竜会の屋台骨をこれほど揺るがされることに驚きを隠せなかった。

そして今や飛ぶ鳥を落とす勢いの、親である当仁会でさえ喰う勢いの高津組のターゲットにされている事を知った。

理由など考えるだけ無駄だ。

何でもありが、俺らの世界。

何度か会った事もある高津組組長の顔を思い浮かべ、何とか会う算段をとりつけていた時、その知らせが入った。

うちの事務所の目と鼻の先の氏神さまのお祭りで、うちのもんと子供がもめていると。

俺は、特にいらぬもめごとが嫌いだ、めんどくせーからな、それは若い衆には身に染みてわからせているはずだ。

それが子供とだと！

最近のごたごたで殆ど寝ていない俺は、ふざけんな！と低い声でうなり、祭り会場まで出かけて行った。

そこで俺は初めて透子を見た。

綺麗な赤い色の花の浴衣を着て、後ろに只ものじゃねえ奴らを引き連れて、こちらを馬鹿にしたかのように笑う透子を。

俺の第一印象は、やはりただの綺麗なおべべを着た「マネキン」だった。

第82話 運命の女？（前書き）

藤堂視点ラスト

## 第82話 運命の女？

高津組長と無事に手打ちがすんで、やっと普段の日常が戻ってきたかに見えたが、一つだけ異分子が事務所に出没するようになった。

それは高津組長の、くれぐれも丁重に扱ってくれと言われた最愛の女である、あの娘、透子だった。

透子は何故かうちのお譲に暇さえあれば会いに来ていた。

お嬢の部屋には非常用の隠し扉があり、俺は何気なくそこから二人の様子を時間があればみるようになっていった。

別段、何かを意識したわけではなく、ただ、本当にただ何となくだった。

俺が入っていった、何をするでなく時間をつぶしていても、こちらに露ほどの関心もよこさない透子は、見事にふてぶてしく、俺は自分の背景によほどの自信があるのかと、内心嫌悪していた。

そんなある日、お嬢が久々の発作をおこした。

ひどく暴れて自分までひどく傷つけていく。

透子は初めてみるそれに驚愕し、何とか落ち着かせようと必死に声をかけたり、抱きしめて落ち着かそうとしていた。

俺は仕方がない、とばかりにゆっくり立ち上がりお嬢の傍まで行くとした。

ところが透子は、自分の腕を自分で噛みさこうとするお嬢に当たり前のように自分の腕を代わりに押し付け噛ませはじめた。

二の腕から滴る血を気にすることもなく、お嬢を抱きしめ微笑む透子は、この俺が生まれて初めてみる、それはどこか歪さはらんだ、そのくせ半端ない色気のある凄艶な微笑みだった。

俺はごくりと息をのみ、初めて「女」を、生きている女の存在を感じた瞬間だった。

俺はお嬢が食い破る透子の腕をお嬢もろとも抱き込みながら、その流れる血に唇をよせた。

じつと透子を穴が開くんじやないかというほど激しく見つめながら。理屈でも何でもなく、俺が俺として女という存在に、透子という女の甘い地獄に堕ちた瞬間だった。

それから俺は透子がいれば、帰るその瞬間までそばにいて、発情期の雄のように透子を視線で求め続けた。

はじめは石ころみたいに思われていた俺が、透子が面白半分で足をそこらへんの犬と遊ぶように差し出すようになった時、俺は、この俺がだ、生まれて初めて歓喜に震えた。

透子に溺れる甘い甘い時間と、それ以上の苦しみを俺を襲った。

これが心というものなのかと、絶望と歓喜のうちに俺は知った。

やがて百のキスが千のキスになり、もっともっとと求め続けているうちに、俺に向ける透子の温度が変わってきた。

この幸せのうちに死ぬのもいとわれない、そう思う俺に透子は「ダメだ。」という。

「もっと、もっと一緒に過ごすのよ。物語はハッピーエンドじゃないよ。」

透子の望みならば、と俺は身も心も透子に狂いながら、甘い絶望に身をおいた。

「待て。」

その言葉に従う俺はここ何日か会えない透子を思い、今にも大声をあげて飛び出していきそうだった。

そこに一本の電話が来た。

高津組長からだった。

「なあ、俺の透子に会いたいなあ。」と。

俺は「会いたい。」そう答えた。

お互い目の前にいずとも、ひどい声色だったろう。

すでにお互い人ではなくなっている。

なあ、高津さん、あんたも苦しいのかい？



お互い半端ねえな。

行けばただじゃすまないのは百も承知だ。

そこで見た透子はクルクル表情も変わって年頃の娘にみえた。

だけど、ほら、俺の透子は、こんな顔をする。

俺が背後から透子を抱きしめると、前にいる男どもが一斉に人間の皮をはいで、獣中の獣の顔にかわった。

そして、この俺も同じ顔をしているに違いない。

第83話 対峙(前書き)

無謀にも、あと2つ連載はじめてしまって、何はともあれ終盤です。

### 第83話 対峙

その離れの庭にある水琴窟は、綺麗な澄んだ高音で、私の耳を楽しませてくれた。

実際その部屋の空気は人外どもの放つ空気でひどく息苦しいのだから、私が水琴窟の音色を楽しんだっていいわよね。

私が他人事のように外の庭を眺めていると、ガンちゃんの今まで聞いたことのないような声がした。

「透子！その男からはなれてこっちに来て。」

私は無視して藤堂さんのひざにもたれたまま上座にいる面々に目をやる。

キョーちゃんは、ひどく顔色悪いし、テイちゃんは、まばたきもせず藤堂さんをにらみつけているし、ガンちゃんはこれだ。

レイちゃんはめったに感情をあらわさないその瞳に、あらわないらだちを映している。

そして、ヨウちゃんは、表情など抜け落ちた見知らぬ人のようだった。

いいもの、いいんだもの。

私は何も変わらないものが欲しい。

人の感情ならなおさらの事。

変わるものなら、いらぬ。

チィちゃんは、あのチィちゃんは変わらないで共にいてくれる。

半分正気で半分壊れてるチィちゃん。

私もどこか壊れてるから一緒だね。

みんなみくんないらぬ。

ねえ、そうでしょ。

私が藤堂さんを見上げると、表面の男達と対峙している、ひどく怖い激しいその気配を和らげ、わたしを見て、優しく微笑む。

私はまた水琴窟の音色を耳で追いながら、あがる罵声や恫喝の声、藤堂さんの私の手を決して放さないと皆に向かってあげる声を聞きながら、うっとりとした。

チィちゃんを迎えにやったという、ヨウちゃんの声が耳に入る。

私は愛しいチィちゃんがくるのを、嬉しくてクスクス笑った。

この部屋の空気に場違いな笑い声をあげる私に、またしてもガンちゃん、こちらに来て！と言ってきた。

私は嫌！と答えた。



第84話

戸惑い(前書き)

ヨウちゃん視点。

パソコンの部屋のクーラーが壊れました。  
逃げます。

## 第84話

## 戸惑い

俺達は、いや俺は何をしていた。

目の前で、他の男に甘える透子に、自分がこれほど衝撃を受けるとは思わなかった。

俺達さえいれば、そう思っていた。

何も入り込む隙間などありはしなかった。

ところがどうだ！

ああ、目の前が暗くなる、昔、遠い昔、兄弟姉妹で潰しあいをしたあの頃の自分が目を覚ましてきたのがわかる。

なあ、透子、お前のそれは、何なんだ。

その男に対するお前の感情は……。

他の連中を見た。

俺と同じように、暗く昏い男達を見た。

ああ、どうしてやろうか！

その男は既にすべてを捨ててここにきている。

当たり前だ。

俺達を敵にして、はい、それでは、と返すわけがない事を知っている。

そもそも元凶のソウは、その敏感さで、とうに雲隠れしている。

電波が届かない地域での活動を理由に。

聞いてあきれ、最新の衛星機器を持ち歩いていたはずだ。

俺は再び透子をみつめた。

透子はその男のひざに甘える様子に、きりきりとまるで心臓に杭を、それも先のとがってない杭を打たれたかのように痛む。

ああ、限界だ。

俺がゆらりと立ち上がった時、誰かの声がした。



第85話

慟哭（前書き）

陽一視点？

## 第85話 慟哭

その唸るような低くその癖、今まで聞いたことのない哀しみ溢れる、どこか人間とは思えない声が聞こえてきた。

思わずゆらりと立ち上がりかけていた俺でさえ、振り向いた声の主は高津だった。

高津はこぶしをにぎりしめたまま、畳に頭をつけて、哀しみ、絶望、全てをあらわす声をあげていた。

その声を聞いて、それは生き物としての原初の何かをゆさぶる声、人が出すとは思えない声を聞いた俺達は、自分が、自分たちもまた、涙を流していることに気が付いた。

俺は立ち上がったまま動けなくなり、赤子の時分は仕方なくしても、涙などあくびで出すくらいで、この自分の人生には無縁だと思っていたものが、高津の慟哭といえるそれを聞いて流れるのを不思議に感じていた。

宍倉も自分の頬にさわり、その手が濡れるのを不思議そうにして、そのあと、すぐ、くしゃくしゃの顔になって子供のように泣き出した。

礼司もまた、俺と同様、茫然として涙を静かに流していたし、恭弥は頭を抱えたまま肩を震わせていた。

ああ、本当に俺達にとって透子は唯一なんだと、現在まわらぬ頭でそう思い、胸の痛みは更にもかが増していく。

痛い、痛い、何もかもが痛い。

そしてこの空気を吸うという単純な作業でさえ、とても苦しい。

思わず胸をかきむしると、下からこぶしを叩きつけているせいで、血だらけの高津と目があった。

いまだその喉からは慟哭のうめき声が聞こえるが、その血走った眼は俺に問うてきた。

「死にたい」と。

他の連中も俺を見ていた。

ああ、よかろう、その前に、この憎い男を俺達の前から叩き出して、その存在のいつたりともこの世に残してなどやるものか。

俺は透子を見た。

愛しい愛しい女を。

お前は俺達以外にはいらぬ、なあ、そうだろう？

俺達にもお前だけ。

ひどくシンプルな事だ。

それが、そのシンプルな愛が認められないというのなら、俺達でそのシンプルさを守らなければならない。

シンプルだけど、とてもとても深淵な底なしの愛を。

2度と邪魔な不純物がまじりあわないように、俺達の手でこの愛を守ろう。

大丈夫だ、透子。

俺たちがお前を苦しめるわけがないだろう？

優しくやさしく、お前を殺してあげるから、怖い思いはさせるまでもなく、一瞬で。

俺達もすぐに逝く。

悪いが俺達は地獄いき決定だ。

覚悟はいいか、お前の魂を、俺達でがんじがらめにして、共に地獄に連れて行くから。

もし神や仏が邪魔するならば、俺達は神や仏でさえ潰してやる。

離すものか！

死んでもはなしてなどやらない、なあシンプルでわかりやすいだろう、透子。

俺達の空気が変わった事に気づいた不純物が、顔色を変えて透子を逃がそうと動く。

それに体が自然に動いて奴を殺そうとした時、透子の声でした。

「ねえ、何で？何で泣いてるの？」

そう愛しい女の震える声が聞こえた。

## 第86話 すれ違い

私は突然、ひどく哀しい声を上げる、聞いている私でさえ、たえられないような声をあげるガンちゃんを見た。

そして、畳をかきむしる鬼気迫るそれに息をのむ。

能面のようにみたことのない表情になったヨウちゃんは立ち上がったきり動かない。

そしてテイちゃんは子供ののように、大声で泣き出していた。

どうして？そう思った私はヨウちゃんも涙を静かに流しているのを見た。

私は大人が泣くのなんて見たことはない。

バカな学園の子なんか泣くのなんてしょっちゅうだけど、私はその涙を嫌悪でしか感じなかった。

こんなに哀しそうに泣くのなんて知らない、こちらもこんなに苦しくなる泣き声なんて知らない。

保護者ズを驚きでみつめていると、私の王様が私を一度ぎゅっと抱きしめて、やはり見た事のない怖い顔になって、私の耳にそっと囁いた。

「逃げろ。」と一言。

私を背後に押しやる王様の先に見えたヨウちゃんの目は、こんな目なんて見た事ないくらい、熱くて、その癖、震えがくるくらい冷えたものだった。

何故か胸がぎゅうつとなつて、私まで泣きそうになった。

私は考えるまもなく聞いていた。

「何で泣いてるの?」と。

そう言った私をヨウちゃんは不思議そうに見て、そのあと唇をふるわせたまま下を向いた。

その時、ひどく張りつめた声が割って入ってきた。

「なあ、俺を、俺達を捨てるのか?」

そう言ってひどく激しい目でキョーちゃんが私に聞いてきた。

「捨てる?何いってんの?」

私は本当にわからなくてキョーちゃんに答えた。

「ふざけんな!」

そう言ってキョーちゃんは怒鳴り、初めて怒鳴られた私はびくつと思わず体を震わせてしまった。

そこへ、王様が懇願するように、「早く逃げろ。」と更に私を背後にやるうとする。

キョーちゃんが、そんな王様にぶっころしてやる！と叫び、瞬間で立ち上がりなぐりかかってきた。

王様はそのこぶしを腕でブロックし、そのまま二人で激しい殴り合いになった。

私は何が何やらわからなくて、とりあえずキョーちゃんたちにやめてもらいたくて、止めに入ろうとしたけど、いつの間にか傍に来たレイちゃんに体を抱きしめられて阻止された。

「透子、透子、」それだけ繰り返すレイちゃんに、止めて、2人を止めてよ！と私はお願いするけど、レイちゃんはどこかうつろな視線のまま、私に話しかけてくる。

「透子、イグアスの滝に一度連れて行きたいと思っていたんだよ。だけどみんな過保護でね、あんな虫や未知のウイルスがうようよの所、絶対ダメだと反対されてね。」

「ほんと、やつぱり連れて行けばよかったなあ。虹が、虹がね、あれが虹なんて思えないくらいすごくてね。」

クスクス笑うレイちゃんはどこか遠くを見ているようで、私の話なんか聞いてはいず、今その話し？ってくらい、わけのわからない話をしつづける。

私はテイちゃんやガンちゃんに頼もうと思って彼らを見ると、視線だけでも殺せそうなほど戦う二人をみていた。

ヨウちゃんはヨウちゃんで、うつすらその唇に不可解な笑みを浮か



べたままこちらを静かに見ていた。

もう何なのよ！

2人の、荒事の得意な男の、なぐり合う重いこぶしの音を聞きながら、私は切れた、久しぶりに切れた、泣きたいのはこっちだ！

「もう、何なのよ！キヨーちゃんやめてよ！」

私はレイちゃんをふりきり、キヨーちゃんに抱きついて必死に止めた。

キヨーちゃんは抱きついた私に、その表情を一変させ、

「なあ、俺が嫌いになったのか？邪魔か？透子には俺はいらないのか？」

と暗い顔と声で問いかけてきた。

こんな、こんなキヨーちゃんの声なんてきいたことない。

2人ともどんどんボロボロになっていく。

私は自分が泣きだしたのがわかった。

「何よ、何なのよ！みんなして、わかんないよ！」

「あなた達には、私じゃなくてもいいんじゃない！私じゃなくてもいい癖に！」

私はキヨーちゃんを無視して、王様の胸に飛び込む。

私を抱き締める王様の目が、何故か悲しげだ。

どうしたの？私はその顔に手をかけようとした時、キヨーちゃんの、ガンちゃんの、みんなの叫び声が聞こえた。

「俺には透子だけだ！」と。

それぞれが叫ぶ声が聞こえる。

私はきつ！と振り向くと、

「うそつき！あなた達には新しい赤ちゃんがいるじゃない！私じゃなくていいんじゃない！」

私は自分で自分の言った言葉に驚いた。

えっ？私、何を言った？

新しい赤ちゃんは、みんなも私との子だって喜んでいて、ユキちゃんなんか、もう生まれるまで、いや、そのあともつきつきり宣言だし。

もう、本当に生まれる前から、こんなじゃ生まれてから大変そうだと、そう思って笑っていたはずが、私いま何て怒鳴った？

私でなくてもいい……。

ああ、そうか、私はうちの保護者ズに私以外の大事なものが許せな

かつたんだ。

はは、何だ、バカみたい。

私は王様に、キョーちゃんとやりあってボロボロに少しなった王様に強い力でしがみつく。

嫌、いや、全てが嫌。

王様には、チイちゃんには私だけだよね、お願いギョツとして。

しがみつく私に王様はまたあの悲しそうな顔で、私を優しく抱きしめてくれる。

そこにヨウちゃんの声が出た。

電話をかけているらしい。

「ユキ、処分しろ！」

ただ一言、その言葉が私の耳に聞こえた。

第87話 雨ふって・・・

え？処分？何の話？そう聞き耳をたてる私に王様が言った。

「透子」と一言。

そうして私を抱き締めると、もう一度あの悲しい顔で笑って、私の頬を撫でた。

そして、私をヨウちゃんに向き合わせるように、今度は反対に前に押し出す。

私がいぶかしげにしていると、

「透子、言わなければわからない事は確かにある。どんな仲の中にも、悲しいことに、言葉が言葉として、そこに込められた心でさえ、お互い理解できなくなることがある。」

「俺は小さい頃、施設の奴と何度か教会って奴にいかされた事がある。」

「そこで教会の牧師が、バベルの塔、という話しをした。神が人間の行為を罰するために、言葉を乱したってという話しだった。」

「俺は大きくなるにつれて、人というのは厄介だと知った。同じ言葉で話しても、全然通じないやつがいる。ああ、これが、俺はそう思った。」

「お互いをわかりあうには、波長が合ってうまくいってるうちはい

いが、いつかどんな仲にもズレがでてくる、多かれ少なかれ、な。」

「だから、ちゃんと話せ。俺としては言いたくないが、な。」

「透子、怖がるな、大丈夫だ。俺はいる。何があっても俺はいる。その男が処分、といってるのは、よくはわからないが、お前が嫌だといった子供のことだろう。わけのわからん話だが、ちゃんと話さなくていいのか？」

そう王様が言ってくれた。

赤ちゃん・・・処分って。

私はヨウちゃんに飛びついて、悲鳴をあげた。

「ダメ、ダメ、止めてちょうだい。本心じゃないの！本心かもしれないけど、わかってるでしょ。」

「私はわがままなの！そうしたのはみんなでしょ！私が一番じゃない嫌にしたのは、みんななのに！」

私は支離滅裂にわめきたて、赤ちゃんころしちや嫌、そう言っ  
て子供みたいに泣いた。

私が泣いていると、いつの間にか、ガンちゃんに抱きしめられて  
いた。

それからテイちゃん、キョーちゃん。

御団子のように畳に転がってぎゅっぎゅっ状態。

そこにヨウちゃんの声が聞こえた。

「透子、俺達にはお前だけだろ？お前にも、だ。」

「白状すると、俺達は、あの俺の豈であるロンの件で、思ったんだ。またどこかから透子に手が伸びるかもしれない、それを守りきる自信はある。」

「けれど、お前の世界はどんどん広がっていく。力でお前を奪う者には、全然負けるつもりもないし、思った片鱗でも俺達にみせるものなら、生き地獄を体現してやる。」

「もし、もし、万が一にも、お前が他の人間のそばを選ぶ、そんな「もし、」を考えるだけで俺達は狂いそうになる。」

「いつのまにか、ただ慈しんでいたはずが、おかしくらい透子、お前に溺れてる。お前がいなきゃ息する事さえ苦しいんだ。だから俺達は考えた。よりお前を俺達に縛り付ける方法を。」

「わかるか？俺達の子供だ。あれはお前をより俺達に縛り付ける良い方法だと思った。後継問題も一気に片づく。」

「ところが、開けてみたらどうだ。そのせいで、お前は俺達以外を見るなんて！まったく、ユキがあれだけ夢中にあの産院にいるのも、その生まれる一人一人が、お前を離さずにすむ鎖だからだ。ユキは嬉しそうに、この鎖が、と俺達に報告してるんだぞ。」

「なんで俺達が透子以外欲しがる？お前以外、例えお前との子だとしても、あれは俺達にとって鎖である、ただそのためにある存在だ。」

お前をより強固に俺達とつなげる、な。」

「それが意味ないのなら処分する、ただそれだけの事だ。」

私は団子になったまま大声で叫んだ。

「いる！いる！私、鎖大好き。今思った、鎖、最高！」

この後、さんざん一人一人から、危ない告白を受け、何とか処分はまぬがれた、と知った時、私はこんなに疲れた時はあったかと思うほどに、へとへとになった。

結局、私がすねていただけ？いやいや、そんな恥ずかしい事認めませんとも。

私が団子状態から解放された時、そこに私の王様はいなかった。

第88話 驟雨（前書き）

海の王様こと藤堂視点



## 第88話 驟雨

俺は、黒幡日本支部長であり、黒幡総帥の唯一の身内と言われている青井陽二の持つ雰囲気、ゆらりと不気味に変わるのをみた。

本能でわかった。

こいつら透子と死ぬ気だ。

俺は俺の初めての人間としての心をくれた透子を思う。

この甘くその癖、夜も眠れないくらいの平穏とほど遠いこの心。

これが心というものなら、何と普通に生きている人間はこんなもの抱えて、はた目には普通に生きている。

何と驚嘆にあたいし、称賛にあたいすることか！

切ったはったと修羅の道を歩いてきたつもり自分より、よほどすごい。

俺は愛しい女の行く末を思う。

透子がこの男らと共に逝きたいというのなら、俺は静かに見守ろう。

だが、透子に一つもその気配はない。

ならば捨てたこの命、無事に透子を外に逃がす。

俺は透子に「逃げる。」そう言って青井から決して目をそらさずに背後にかばった。

だが、透子は何故だ、と問いただした。

その瞬間わかった。

透子の心のありようが。

ああ、この男達もお前の中にいるのか。

俺は絶望と共に、けれど、その心には今は俺もいる、と甘い痛みとともに思った。

その後の展開で、俺はあの雰囲気が消えたことがわかった。

透子が泣いている。

ああ、俺の初めての唯一。

泣くな、泣かないでくれ、お前が泣くと、胸が変な風になる。

ああ、これが泣きたくなるという感情なのか、誰も気付かれない内に、俺はそつと涙をぬぐった。

俺は透子に言い聞かせていた。

俺がいなくなつた後の為に。

団子状になつた男達は俺にすつと視線をよこし、去ね、と視線で言

った。

今の俺にできる事は、とても簡単だった。

俺は青井さんにすつと頭を下げて、なぐり合ったせいで痛む腹を手でおさえ、料亭を静かに出た。

事務所に帰って、お嬢の部屋に急いでいく。

お嬢は俺を待っていた。

半分まともな時のお嬢だった。

お嬢は決してそれを透子には見せなかったし、悟らせなかった。

「私の透子ちゃんは笑ってる？」

そうベッドに腰をかけ、その骨ばかりのガリガリの足をぶらぶらさせて俺に聞いた。

「はい、笑っているでしょう。」

「良かったわ。ねえ、痛い？」

俺に聞いてくるので、「ええ、ひどく。」と俺は答えた。

殴り合いをしている途中で、あの男らは気付いていた。

だから早く去れ、と目で言われた。

お嬢はピヨンと飛びおりと、殴り合いでボロボロになった俺のスーツの上着を開けて、ワイシャツ越しに俺の腹を押す。

俺が息をつめると、

「おんなじね。ママが流した血の色だわ。」

そう言っただけで自分の掌についた血を眺める。

「どっちにするか、相談しようと思ったんだけど、決めたわ。私ね。」

そう言っただけで痩せすぎて、目が大きく飛び出たように見える顔をほころばせる。

「お好きなように。透子が、透子が少しでも苦しまないように、哀しまないようには、これしかないですから。」

俺とお嬢は、透子の言う、この海の底の部屋をゆっくり見合わす。

「ここは私達だけの部屋よ。誰にもおかせはしないわ。」

「ええ、俺も同感です。ここには俺とお嬢と、透子だけの愛しい部屋です。」

「誰にも、誰にも邪魔はさせないわ！」

お嬢が初めてみるようなキラキラした目で虚空をにらむ。

「ええ、邪魔など、俺達以外の異物などいません。」

2人で見つめあって笑う。

それを第3者が見たならば、その鬼気迫る様子に髪の毛を逆立てるほどおののかせただろう。

しかし二人は歌うように言う。

「この海の底は綺麗ね。幸せだわ。」

「ええ、これが幸せ、って奴なんですネ。」

そろそろかすんできた目で、もう一度この海の底の部屋を見渡す。

愛しい透子の声が聞こえる。

．．．．ここって、海の王様と人魚姫と、悪い魔女の為の部屋ね。  
．

ああ、そうだ、俺達だけの愛しい魔女よ。

現生では、俺は力ではあの男達にかなわなかった。

例え透子が何を言っても、透子に入り込んだ俺達を許すなんて思っ  
ちやいない。

いずれ、ほとぼりが冷めた頃に待っているのは、事故死か病死か。

俺達は唯一の透子を悲しませるのは嫌だったし、愛しさあまって、なんて事で透子に何かあるのが、その可能性だけが恐ろしかった。

対価は透子への許し、それを思っただけ俺は出かける前に、昔の武士の懇願の一つでもある陰腹を切った。

4、5時間は持つくらいに、腹を横にかっさばいて、嚴重にさらしをまいて出た。

けれどあの殴り合いで思いの外ダメージが深まったみたいだ。

お嬢を俺の手で、と思っただけ気がはっていたが、お嬢がやることにしたと言っていた。

俺はかすむ目で透子を思い浮かべる。

不思議な事に、本当にここは昏い深海の海の底になったみたいだ。

体が重い。

けれど目に映るこの部屋は昏い青い海の中みたいで、本当に綺麗だ。

ああ、俺達の魔女は現生のまま。

だけどこの海の底で俺とお嬢で、ゆっくりゆっくり待つとしよう。

昏い幽冥の中、お前を待って、お前が来たのなら、今度は2度と離れたらしない、放すものか。

愛してる、愛してる、こんな簡単な言葉のなんと素晴らしいことか。

あの男とは、男達とは今度は負けはしない。

ああ、透子、ここでこの海の底でお前を待つのは、何と甘い事か。

「愛してる。」

藤堂がかすかな声で「愛してる」と言っただけで死んだ。

私は藤堂の頭を撫でてやった。

そうしてから用意していた包丁でめったざしにし、その致命傷を隠す。

この包丁は藤堂がここで陰腹を切っていたもの。

私は時々、藤堂がいうまともなお嬢になると、たまらなく苦しくて苦しくて、色のないその世界が怖くて怖くて、本当につらかった。

そこに透子ちゃんがあらわれた。

私にはこの子もまた、私と同じまともじゃないコだとわかった。

初めは勝手にしてればいい、と思った。

いつからだろう？ああ、あの時紙風船で遊んだ時だ。

あの紙風船だけ、はじめてまともな色がついた状態で見えた。

その鮮やかな色にめまいを覚えた。

白黒のみの私の世界に、はじめて色を持ち込んだ透子ちゃん。

それからは透子ちゃんの触るものにもみ色が見えた。

あやしくからまる透子ちゃんと藤堂、私はその藤堂の背中一面に掘られている極彩色の入れ墨の虎に喜び、私に触れる透子ちゃんの洋服の色に感嘆した。

けれど、それもままならないらしい。

力関係で、1000に一つも透子ちゃんといられる未来はないらしい。

きっとそのうち殺されると藤堂に淡々と説明を受けて、死ぬのは今さらどうでもいいけど、透子ちゃんが泣くのは嫌だ、と答えた。

透子ちゃんをなるべく苦しませないように消えるには、これが一番いい、となった。

万が一にも透子ちゃんに墨が及ばぬように。

本当は場合によっては、藤堂は透子ちゃんを何とか場をだまして連れてくると言っていた。



最悪連れてこれない場合、先に二人で逝くかもしれない、とも。

藤堂一人で帰ってきて、透子ちゃんは笑っている、そう言った。

ならばいい、笑っているのならいい。

私は視界の隅でうごめく、床から見える手だけウネウネ動くものや、黒いかたまりなどに目をやる。

そしてまた、血だらけの藤堂の周囲も。

藤堂の周りは真っ黒の闇の塊のよう。

さすが藤堂だ。

藤堂には言った事はないが、私は異形の姿を物心ついたところからみていた。

それとも、私は元々おかしかったのか？

それでもいい、現に自分は見ている、それでいい。

私もまた自分に刃をおしつける。

幽冥の世では、思いこそが力と思うのも一興。

私と藤堂でこの部屋を守ろう、私達だけの部屋を。

そうして力をたくわえて、今度こそいつか……。

私は最後、透子ちゃん泣かないでね、と思いながら意識がとだえた。

またあそば……。

## 第89話 おいてきぼり

その報告をガンちゃんから聞いた時、私は対戦ゲーム中だった。

自分のあやつるモバイルスーツが攻撃を受け沈むのを他人事のように見ていた。

さつきいなくなった王様が、本当にいなくなっちゃった。

チイちゃん、なんで？

なんで私がない時に、2人で泡になっちゃうの？

私はそれを聞いた時、それ以外、不思議に何の感情も浮かばなかった。

現実には思えなかった。

「黒竜会の娘が、若頭を殺して死んだ。」

たったそれだけ聞かされたそれに、私は曖昧な表情しか返せなかった。

自分の前を何かが通り過ぎた、くらしいの感覚。

大型テレビの画面はそのままうるさい音をまきちらしていた。

私はその日泣かなかった。

それから3日後、密葬も終えた黒竜会の事務所に私はガンちゃんと言ウちゃんに連れられてきた。

私には必要だと、皆が言う。

落ち着いているわよ、私。

そう言えば皆が首を振る。

「むかつくから、あいつらの気配を捨てて来い！」と言う。

出迎えた顔なじみになりつつあった組員はガンちゃんたちには距離を取っていたが、私には痛ましげな視線を送ってくる。

私と王様は、はたから見ても、ラブラブだったから。

事務所はがらんどろだった。

黒竜会のかなめの不在というのはこういうことなんだろう。

私はひっそりと用意されたであろう遺影には目をむけず、いつものようにチイちゃんの部屋に向かった。

チイちゃんの部屋は手つかずだそうだ。

理由は目をそらせて教えてくれないし、私がいくのを初めて止めよ

うとしたけれど、私を止められる人間は誰もいない。

私はそつといつものようにチイちゃんの部屋に入った。

昏い昏い海の底の部屋。

いつもと違って空調ではごまかせない血の匂いのする部屋。

ベッドにそつと腰かける。

誰もいない。

人魚姫も王様も。

私はそこで初めて気が付いた。

2人はいないのだと。

ベッドに顔を伏せて、はじめて一筋涙がこぼれた。

そのあとは狂ったように涙が流れた。

いない、いない、いない。

いつものように、後ろからそつと抱きしめ、熱い腕で抱きしめる王様がこない。

楽しそうにくつついてくるチイちゃんがない。

私の二人がない！

私はベッドを叩いて、唇をかみしめ、それでも出てくる嗚咽をこらえきれず漏らした。

何で！何で！何で！

その時ドアをがちゃがちゃと鳴らす音が聞こえた。

嫌だ、入ってこないで！

ここは私と王様と人魚姫だけの場所。

私がドアに向かって怒鳴ると同時に携帯が鳴る。

ヨウちゃんからだ。

「ドアをあけてくれ。傍にいさせてくれ！」

そう言うヨウちゃんに、私は、

「もう少しだけ、ここにいさせて。お願いだから。」

とかすれた声で答えた。

ドアをガチャガチャ言う音はしなくなった。

きっとドアの外で心配しているに違いない保護者ズを思う。

私は欲張りで、だから王様たちも欲しかった。

本当に欲しかった。

私だって馬鹿じゃない。

うちの保護者ズが私の初めて心から望んだ王様と人魚姫とうまくいくななんて思っちゃいなかった。

けれど、私の奥底には私でも制御できない何かがいる。

もし破滅に向かうとしたら、自分も一緒だと思っていた。

けれど私を置いて言った2人。

うつろに下をみると、そこだけ黒々とみえる場所がある。

私はのろのろとじゅうたんのその場所まで行って手を触れた。

ごわごわするその黒い場所は、王様の死んだ場所だと何故かわかった。

私はそこに顔を伏せ、そつとその場所に舌で触れた。

何の味もしない。

私がそこに伏せてまた泣いていると、首筋に熱い感触がした。

懐かしい王様の唇。

足元にはチイちゃんの感触。

思わず目を開け体をおこす。

けれどそこには私の望んだ姿はなかった。

私が愛したといえる初めての人。

私が壊した愛しい人。

誰にも邪魔されずに、私は狂ったように泣いて喚いて、また泣いた。

誰にもその思いを邪魔されなくなかった。

例え私の保護者であれ。

そして、最後に私は微笑んだ。

貴方たちは、これで本当に本当に私だけの二人になったんだと、突然ストンと理解したから。

またくるね、そう言って私は部屋を出た。

部屋を出た私が真つ先に、この事務所をこのままそっくり欲しがったのは言うまでもない。

私はぽっかり空いた穴がふさがったのがわかった。

私だけの二人がちゃんといるから。



私以外いないと言った2人が。

第90話 心地良い場所（前書き）

ここで第1部最終話になります。

第2部は少しだけ時間が飛ぶ予定です。

## 第90話 心地良い場所

私のいつも何か足りないと訴える怪物が咆哮をやめた。

それは、まるで自分のオイタを知っているかのように。

それとも王様と人魚姫を呑みこんで、充足して微睡んでいるのだからか。

あれから数日たった。

あの日帰ってから、私はお風呂にわしゃわしゃと入れられ、ヨウちゃんに半端じゃない強さで体中を洗われた。

そこにみんなが加わり、何だろ？ シリアスモードはどこか吹っ飛んでいくくらい、わあわあ騒いで。

ユキちゃんの顔には濃いクマができていて、ガンちゃんたら無精ひげだし。

キョーちゃんたらいつ松葉づえとったの？

そんな感じに私はわあわあ騒ぎながらも、みんなにもゴメンと心の中であやまった。

テイちゃんは・・・別。

だって、テイちゃんたら、テイちゃんたら・・・。

みんなでお風呂場でぎゃあぎゃあして、み〜んないろいろな事呑みこんで、それをあえて、お風呂場で騒ぐ事で暗黙の了解で昇華しあって、泣く代わりに笑って笑い合って、みんなとの絆確かめ合っていたのに、あるうことか、この乙女が口にするのもあれな、あの器官をもつこりとさせちゃて……。

みんなにフルぼっこされたテイちゃんを、これっぽっちも同情なんてしなかったのは言っておこうと思う。

その夜、顔中を腫らしたテイちゃんをいじりつつ、酒飲み会を行った。

私に鎖をかけたいという彼らに、私は特大のおねだりをした。

私以外見ちゃダメ、鎖はバッチコイ！と。

少しでも隙があるのなら、私はまたさまよふのだから。

この隙には、王様と人魚姫だけがいい。

だからこの隙を広げさせるな、と。

わがまま、そんなのどうでもいい。

私の飢えはこのままおさまるのだろうか？

隙にいる王様がうつそりと笑い、私に口づける。

チィちゃんがそばに控える気配がする。

そうね、あなたたちがいれば隙は満たされる。

ならば私はこの世界で、この保護者ズにくるまれて今はいよう。

ここはこんなに心地良い。

ヨウちゃんが私をトロリと濡れた目でみる。

ガンちゃんが今にも喰いつきそうに私を見る。

ユキちゃんがまるで迷子になった子供みたいに私を見る。

キョーちゃんが蕩ける瞳で私を見る。

レイちゃんが冷えたその癖熱い瞳で私をみる。

テイちゃんは……うん、早くその顔の腫れ引くよう祈るよ。

私はその男達の視線をこの身に受けて、それがさも当たり前だと笑う。

その私の微笑みを受けて、この極上の男達がなおさらそれをきつくする。

ああ、それでいい。

それこそが自分の望みとばかりに、私の指先に、足先に無数のキスの雨をグラス片手に浴びせてくる男達。

私はゆったりと笑いながら、隙で悔しがる私の王様に流し目を送る。

今宵の月は美しいだろう、と思いながら。

## 第2章 1 闘う者達(前書き)

某オンラインゲームにのめりこむ昨今。

更新はゆっくりになりそうです。

## 第2章 1 闘う者達

「ただ今より第81期生新入生歓迎式典を行います。」

進行役のカメリア会の副を務める委員長の凜とした声が響く。

しわぶき一つ聞こえない張りつめた空気。

揃いの薄いグレーの制服、丸襟のブラウスの白、各学年を示す赤、紺、緑のリボantai。

壇上の脇の控えからそれらをそつと見下ろして、透子は満足の吐息をついた。

この学園の入学の競争率は、今や専門の対策書が書店に並び、塾の冠の一つに、この学園の名前が上がるほどの人気になっている。

中等部までは3クラスまでだが、高等部からは外部入学生をとる為、一気に7クラスに増える。

勿論、中等部の成績次第では、昔と違って高等部に入学できるとは限らなくなった。

たった2年でこの学園はこれほどに変貌を遂げ、その中心である黒ユリ会、今やカメリアメンバーズでもあるそれに、学園側は実質牛耳られており、ソウの代わりにきた学園長もまた傀儡であった。

そのトップである透子は自信と希望にあふれた新入生の顔をさつと見渡し、その顔にある野心を隠そうともしない強い眼差しを持つ新



入生の数が昨年より更に多い事に満足して、吐息をついたのだった。

淡々とカメラリア会主催の新入生歓迎会は進んでいく。

学園長の挨拶や、改めての担任団の発表など。

やがてその淡々とした空気が、徐々に熱いものにかわっていく。

カメラリア会の紹介が近くなるにつけ、それが気のせいではない事が、この構内にいる学園側の経営陣や教師たちにも、その当事者である生徒達にも感じられた。

委員長が、「それではカメラリアメンバーズの紹介に移らせて頂きます。」

そう言った時、熱い空気がざわりと壇上に動いた。

2年生のカメラリア会のリーダーから2年のカメラリアメンバー5名が一人一人紹介されていく。

最後に2年リーダーが挨拶をする、誰あろう、あの山田さんだ。

あの、おどおど娘がねえ、と私は感慨深くみつめた。

例の腹黒のメガネ補佐、名前は、え〜と・・・高宮か、あの人頑張ってるみたいだね。

山田さんは自信に満ちた声音で2年を代表して挨拶を堂々としていく。

人にはみえない指をぎゅつと一瞬無意識に握りしめたのはご愛嬌だ。

そして再び委員長が3年のカメラリメンバーの紹介に入る。

すると今までとは比べ物にならないくらいの熱い圧力が一斉に壇上に注がれた。

より一層の沈黙に支配される講堂は、くらくらするほどの熱視線で、それは一種の威圧さともいえる迫力だ。

さすが3年のカメラリアはそれを歯牙にもかけず・・・、うん、成長したと、神経が太くなつたと褒めるところ？

何にしても綺麗にそれらの視線をバツサバツサと切り捨てて、優雅に頭を下げる君らを見て、お母さんは嬉しいよとしみじみした。

最後に代表である私が呼ばれる。

実は入学式に私は出席しなかった。

保護者も許されるそれに、余分な人間が何の伝手でか潜り込んでくるか知らぬし、何故か事前の参加確認で兄弟の参加数がべらぼうに高いやらで、うちの保護者ズが声を揃えて反対した。

「出るな！」と。

私もギラギラとした父兄の皆さんに会いたいわけもなく、見事入学式はさぼらせていただきました。

うん、委員長の顔怖かったけどね、「一回貸しですね。」とほんわ

か笑ったあの顔、ほんわかなの怖いつて、見事進化した女狐ぶりに改めて脱帽しつつ、めんどくさがらず入学式出た方が良かったかな、と一瞬後悔しましたけどね。

あれから、何も言っていない委員長、不気味です。

私が登場すると、グワツと圧力が最大限に押し寄せてきた。

私はゆっくり、腰を優雅におり、頭を下げる2年、3年のカメラアメンバーズの前をしっかりと歩くと、壇上に立った。

私がかすかに頭を振ると同時に、またまた綺麗にメンバーズが姿勢をもとに戻す。

軍隊真つ青の統制ぶり、うん、綺麗だから許すけど。

綺麗は正義。

「みなさんごきげんよう。そして我が聖桜学園高等部にご入学の皆さんおめでとう。私がカメラア会の代表をさせて頂いている斉木透子です。」

「もう一つの黒ユリ会の代表でもある私からの言葉は、只一つ。」

「自分の手の中にあるものは、自分の意志以外取りこぼすなかれ！です。」

「我が会の人間である以上、何であれ上をめざしてください。どんな小さな事であれ、その上を。」

「幸い皆さんには、しつかりした土台があります。その土台の先に見えるものを手にしてくれる事を祈ります。」

「原始女性は太陽であった。私も心からそう思います。自分の意志以外で、ゆがめられる時、奪われる時、その時こそ、この会が本来の力を発揮します。」

「新たな仲間を祝福します。ようこそ我が聖桜学園高等部へ。共に歩んでいきましょう。」

壇上に立つ透子を見て、新入生たちは、ただ一人のその存在に講堂にいる人間全てが呑みこまれるのをリアルに感じ、生まれてはじめて、その存在への興奮の鳥肌をたてていた。

自分の中にあつたのさえも知らないこの感情、「自分のもの」、「正当な自分のもの」、それぞれがそれぞれに熱い何かに浸食されたように、めまぐるしいその思いに溺れていく。

初めから野心をその目に宿していた人間の、その焰のような感情は更に熱く強固になっていく。

在校生は、それこそ望みとばかりに、コムスメとは思えない笑みをその口に描く。

透子はそれをまた満足気に眺めて、カメラリア会全員で頭を下げ、退場した。

委員長が私をあきれたようにみて、

「弱肉強食って、面倒なのよ。知ってる？」

そう言っって首をふりふり、こちらをじとっを見てきたので、私は知らんふりをした。

今日はお寿司が食べたい、とユキちゃんにメールしながら、私のせい？違うよねえ、と思っって、興奮冷めやらぬ講堂を振り返った。

## 第2章 第2話 1年カメラア選

このカメラア館の2階は私の個室がある。

最悪な事に、この2階はさらなるリフォームがされ、入口には、あの倉庫入りしていたガンちゃんからはく製が鎮座している。

ん？大丈夫、あの旗とかいろんなものだけは死守したから、キョーちゃんには悪いけど。

そうして、このはく製、思わぬ所で活躍している。

たとえば今みたいな時に。

この私にアポイントを取ったとはいえ、初めて踏み入れたこの代表室に入ったとたん、このはく製が真っ先に出迎えてくれたものだから、勢いこんできたものの1年の総意とか抜かすこの子ら新入生の出足をきれいにくじいてくれた。

さすがガンちゃん、意味ないところで、意味なく活躍する。

「それで？、自己紹介はいらさないわ。既に報告は受けているから。」

「1年の総意？とやらを聞かせてもらえるかしら？」

私はゆつたりとデスクにひじを乗せ掌を組んでその上に首をのせ、下から彼女達を感情を見せない眼差しで見つめた。

しばしの沈黙ののち、一人の気の強そうな子が緊張しながら話しを

はじめる。

「じぎげん……」

挨拶をはじめようとしたりその子を、はじめて見せる容赦ないきつい目線で口を閉ざさせた。

それに思わず黙るその子に、バカではないようねえ、と私は思いながら、

「無駄な話しをそのまま続けるといふのなら、出口はそちらよ。」

そう言って、ドアに目線をやる。

「ち、違います。申し訳ありませんでした。」

そうして、その子は一度呼吸を整えると、

「私たちは、この度の1年代表のカメリア選の結果について異議があり、僭越ながら意見を申し上げにまいりました。」

私が続けて、と促すと、それはそれは流暢に立て板に水、とばかりに話しを続けた。

今回1年の代表に選ばれた黒岩さんについて、自分たちは納得いかない、と。

黒岩静香という子がこの度の1年代表に昨日の選挙で選ばれた。

ただし、次点の子とはわずかの差ではあったのは確かだ。

そしてその次点の子は、家柄、人柄、どれをとっても、勿論成績も申し分のない子であつたらしい。

彼女らの話しを聞く分には、だが。

選挙当日の欠席者が8名ほどいて、どうやらその子たちも次点の子に、というらしく、その票を入れれば逆転のはず、ともいう。

勿論自分たちもそのような事がまかり通るとは思っていない。

けれどどうしても、次点の子、竹林凜子さんの素晴らしさを私に知って欲しかった、そう最後には涙をこぼして力説する彼女ら。

ふん、やってらんないわ。

自分たちが話しているうちに、自分たちのお花畑にいつちやつた彼女達を一瞬冷たく見下しながら、それを毛ほどにも感じさせずに、私にはっこりとほほ笑んで、

「あなた方が、こうしてわざわざここに来るくらい素晴らしい方なのでしょね。」

そう嫌味を込めて言っているのに、ぱあっと明るい顔になり、彼女らは嬉しそうに帰っていった。

彼女らが部屋を出るのを待って、私は委員長を見る。



委員長はあなたが悪い！みたいな目で私を見ている。

ええ、何で、これって弱肉強食バンザイの私の話しに関係ないよねえ！

私と委員長はじいじと見つめあって、お互い目をそらせば、なんか負ける気がして、しばしやりあってしたが、そこに庶務の子の一人のあきれたような声で、

「はい、はい。早速ですがこれをお読み下さい。」

っていう合いの手が入り、1年の総意だと言った、人望を集める1年のアイドル竹林さんの報告書を幹部たちと回し読みした。

「ふ、ふ、旧財閥系の末っ子ねえ。」

その報告書には、確かにそれだけの人望を集める、家柄も気にしないお嬢様の人となりで報告されていた。

私と委員長、そして庶務達で顔を合わせて、ついで

「明日の昼食はカフェテリアに。」

と、お互い言う事はかぶってしまったが、さすがに私の子たちだけある。

考える事は同じだったらしい。

うん、お母さんは嬉しいよ、と生暖かい目で皆を見たんだけど、そ

れに対して冷たい視線が幾つも帰ってきた。

いわく、「私は明日やることがあったんですよね。」とか、「書類がたまっているのに、カフェテリアくんだけまで……」とか……。

……どこで私育て方間違えたんだろう？

反抗期？反抗期なのか？あのキラキラしい憧憬の眼差しはどこにいったのさ。

まあいい、私はこのツーカーの雰囲気が好きだから。

家に帰る迎えの車でも私は機嫌よかった。

## 第2章 第3話 相変わらずの人達

私ที่บ้านに帰ろうとしたら、ちょうどレイちゃんも帰ってくるというので、駐車場で少しレイちゃんの車を待っていた。

スーッと高級外車が音もなく傍に寄り、助手席から私のお気に入り「やつほの榊さん」ができる秘書然として、レイちゃんのいる方のドアを開けるため降りてきた。

私がかわいく手を振るのに、全然リアクションをおこさず綺麗に無視。

どうよ！これぞやつほだわ。

一度私の怒りに触れ左遷されたと言つのに、ぜんぜん変わらない！

おもしろいつしょ。

同じように1時期左遷された榊の代わりをした小出さんが頭を下げ、レイちゃんが降りるのを待っているんだけど、こっちは私のニコヤカに手を振る姿を見て、もう真っ青、それはそれで失礼よね。

このデコボコ秘書室長と副室長、うん、相変わらずいいわあ。

機嫌がいい私は、レイちゃんが降りてくるのに、そのまま突進した。

レイちゃんは、それはそれは優しい笑顔で私を大事そうに受け止め、抱きしめると、私にキスの雨をそこかしこに降らせる。

「レイちゃん、お帰り〜。」

私はそう言いながら、レイちゃんに甘えて密着した。

手に持ったままだった学生カバンが邪魔なので、やつほの柎に向けて器用に放り投げる。

柎の頭を下げていた肩にちょうど当たったカバンを、柎は一度私をいまいましそうに睨みつけてからその落ちたカバンを見た。

ナイスコントロールだ！私！そう思って柎を得意げに見ると、柎は一度自分のカバンの当たった場所をわざとらしく手で払い、次にゴミを拾うように嫌そうに私のカバンを拾った。

何て失礼な！私のカバンを持ちたいと言う輩がどれだけいるか知っているのか、そう思いつつ私が柎を憤然と見ていると、あらら、レイちゃんてば、超不機嫌になっちゃった。

そりゃあ、海外出張からやっと帰ったばかりの感動のハグの最中、私の意識は柎にいつちゃったからね。

だって、面白くてあきないんだもん、柎さんいじり。

知くらないつと、これも私のせいじゃないよね。

レイちゃんが振り返り、忌々しそうに柎さんを冷たく見すえる。

小出さんは青いの通り越して真っ白だ。

これで仕事はバリバリだというんだから、わからないもんだ。

うん、榊さんは相変わらず、このバカ娘って感じで私をにらんでいる。

いやあ、私ってば王道って大好きかも、変わらぬ王道、ビバ王道だ！

そう思っていると、レイちゃんが私を見つめて、私の顔を手で挟んで自分に向けさせる。

そうしてゆつくりと私の頬に自分の頬を摺り寄せながら、

「ただいま。とても寂しかったよ。透子。」

そう言って後ろで灰になった1名とぶてぶてしい1名を無視して、私を腕に抱いて抱え上げる。

私もそれに甘えて思い切り顔をレイちゃんの肩に押しつけて、

「お帰り。」と言った。

レイちゃんが甘やかした目で続きを促すので、チュツとレイちゃんの唇にキスを一つ、そして2つ。

レイちゃんがそれだけで震える吐息を零すので、私は首に回した腕の一つをはずし、レイちゃんの頭を私の方へとたぐりよせる。

私の胸元に顔を寄せてレイちゃんは、またしても私をぎゅっと強く抱きしめ吐息を漏らす。

2人して、久しぶりにその心地よい空気を味わっていたのに、ちよ

うど仕事に出かけるらしいテイちゃんが玄関先から出てきて、

「あゝ、ずっちい！透子に甘やかされてる！俺は？俺も！」

という大きな声に私とレイちゃんはお互いをみつめながら小さく笑った。

## 第2章 第4話 相変わらずの人達？

ずるい、ずるいと連呼するテイちゃんに、はい、はい、と言って頬にキスしてそのまま送り出す私。

テイちゃんは、何か温度差を感じるだのブツブツ文句を言っていたが、

「頑張ってお仕事いつてきて。」

の私の言葉ともう一度そつと送るキスに、急に仕事モードの大人の男になった。

その妖しいと紙一重の爛れた色気を全開にダダもれさせて、レイちゃんに抱かれたままの私をレイちゃんごと抱きしめて、レイちゃんにそれはもう氷のような視線に貫かれながらも、露ほども気にせず、

「行ってくる。」

と私の耳元にそつと囁く。

たった一言なんだけど、その声の甘さと、そのありえないほどの半端ない色気ってば、これぞビフォー・アフターって感じで、やる気モードのテイちゃんはすさまじいくらいだ。

これじゃあテイちゃんに狂って破滅する男や女が腐るほどいるって、嘘じゃないかも。

でもねえ、テイちゃん、残念だけど、本当に残念なんだけど無理、ごめんねえ、私には効かないよ、それ。

私はヒラヒラと早くいけとばかりに手を振ると、せつかくの仕事モードがあっさりと崩れ、

「透子お〜。」

と情けないへタレ大型わんこに逆戻りした。

レイちゃんにもさっさといけとばかりに追い払われながら、テイちゃんは、

「頑張つて今日も透子のために稼いでくんよ!」と、店の迎えの車に乗り込んでいった。

「うん、買いでねえ〜。」

と見送った私に、私をだっこしていたレイちゃんの瞳がキラんと光った気がしたのは気のせいじゃなかった。

後日、レイちゃんはテイちゃんが私に買うもの、買うもの、同じ品のそれ以上のものを私に買い与えた。

テイちゃんが、頭をかきむしってウォーと唸って落ち込んだのも無理はない。

落ち込むテイちゃんに、ヤサシイ私は、今度レイちゃんごと抱きしめるのは止めるんだよ、って教えてあげた。





## 第2章 第5話 狐とつとぎ

「聞いていらっしやいます?」

あきれたように私に問いかける委員長に、鼻で笑ってやった。

「うちから逃げ出したおバカが、他の巢をあらしてる、って事でしよ。」

私が言うと、委員長は、それはもういい笑顔で、うん、他の人間、特にこの委員長を白様と呼んで慕っている学園の子たちに見せたら、その黒さに衝撃を受けるんじゃないかというくらい、腹黒さ満開の笑顔を私によこしてきた。

今季のカメリアメンバーズは、トップの私が黒ユリ様と呼ばれているせいか、いつのまにか皆、色をつけて呼ばれるようになった。

その色名は、これから代々、その役職と共に受け継がれる事になった。

ばからしい事に、これ生徒総会で決まったんだよ。

うん、うちらその初代ってわけ。

後々の人間に恨まれそうだねえ、と私はその議案が決まった瞬間言ったら、とんでもない、と目をキラキラさせて、他のメンバーやその補佐達がむきになって否定してきけど、どこらへんがとんでもないって、この議案が全クラス共通で出された段階で、ありえないっと思うんだけど。

この子らも、うちの保護者ズも大喜びだから、何も言うまい、って私は思った。

どうよ、私も大人になったよね。

いろいろあきらめる事を知ったもの。

……あきらめる内容がって気がしなくてもないけど。一応私は常識人、私は常識人って頭の中で繰り返すのも覚えたよ。

で、話は戻すけど、自分としては記憶の彼方にある、あのおどおど娘、改め現在2年をまとめる山田さんの一連の騒動の時、この学園を去った人間が転校した先でもめごとをおこし続けているらしい。

うちに通う1年の子を通して、その学校生徒会からの陳情書がきていた。

もちろん、それは陳情書としての形態はとっていないが、その学校の創立記念祭への招待状と共に、その転校生の現状報告が何気についていたわけだ。

学園祭やこの手の誘いは数えきれないくらいあるが、姉妹校及び交流会高以外、実質無視してきた。

送ってくる側も、だめもとで送ってくるのが丸わかりで、めんどくさいにもほどがある。

それでなくても、うちのメンバーズは、個人的にはお家の事情でのパーティーが多く、それでなくとも公私とも忙しい日々を送っ

ている。

それに加えて、我が黒ユリ会とそれぞれの保護者達を交えての会合も定期的に行われている。

ゆえに、いつも無視している、もろもろの招待の一つについて、いかに在校生を通してとはいえ、委員長がその話を私に振ってくる事じたい珍しいことだ。

委員長の顔を見る。

相変わらずうさくさい笑み。

何でこの委員長が白様なんだ？この生徒は、盲目的なバカじゃないはずなのに。

白？どちらかといえば、ねずみ色じゃ・・・、私が脳内でそう思ったと同時に、

「何かおかしな事をお考え中に失礼とは思いますが・・・」

そう言いながら委員長は腕時計を指し示す。

エスパーか、こわっ！確かにもう昼休みはギリギリの時間だ。

私はその創立祭に参加をすると委員長に答えた。

ちょうどよい、気晴らしにでも出かけよう。

私は庶務から渡された、その学校の資料を腕に抱え黒ユリ館を出た。

庶務からは、もう数時間もすれば、どこぞの情報部も真つ青な、どこもかしこもマル秘の資料がどっさり届くだろう。

この子の実家のリサーチ会社は、我が黒ユリ会の親たちの援護もあって、このアジアでは一番の会社へと変貌を遂げていた。

情報は何であれ命だものね。

私は逃げていった巢までかきまわす、まだ見ぬその子を思い浮かべ微笑んだ。

脇に並ぶ委員長から、「尻尾が隠せてないですよ。」と、しれつと言われ、どこの化け物だ！自分もそうだろう！としっかり言っただった。

ところが委員長いわく自分はまだまだ猫又の領域にも達しておらず、透子様ほどの、九尾の狐レベルまでは、ととてもとても、と思いつきり謙遜された。

ねえ、これって褒められてる？褒められてる気がしないんだけど。

まあ何はともあれ、学園代表として久々のお出かけ。

心が広〜い私としては、そのまま幾つかのカメラア会のどうでもよさげな仕事を本日までにあげるように、委員長にお願いした。

うん、黒ユリ館に引き返す委員長以下の面々に、私が声を上げて笑ったのは言うまでもない。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4660q/>

---

君のままに美しく

2011年10月7日12時45分発行